

○最上の成功は失望の後に来る。
○事業を巧に始むるは半ば遂げたるなり。
○凡そ偉大なる事業にして、熱誠なくして成就せらるゝものなし。

○少年の事業に失敗する一原因は氣力を一點に集中することの缺如せるに在り。
○毎年一進歩を爲すべし。時毎に其の課業あり。日毎に其の勤勞あり。斯く小事に於て汝の進歩を造れ。

○汝は汝自身の路を開かざる可からず。汝が餓死する否とは、汝自身の努力に由ることなり。
○絶大の事業を爲すには奇術妙法あるにあらず。又大方容知を要せず。平常なる工夫に由りて得らるべく。又平凡なる資質の人にて爲し得らることなり。

○汝何事にも汝の手にて爲すべき事を看出したらんには、汝の力を盡してこれを爲すべし。
○失敗すれども屈せず進み行きて止まざる人は吾が望の深く屬する所なり。一試して功を成し、浮泛して定まらざる人に愈ること遠し。

○貧苦艱難の二者は決して人の進路を妨ぐるものにあらず。
○大丈夫の世に處する當き天下を掃除すべし。
○大丈夫は當に雄飛すべし。安んぞ能く雌伏せん。
○大仕事を傳ふる記録は大艱難大困苦を傳ふる記録に非ざるものなし。

○人生の立派な燈臺は、卑賤の生れの少年が無名の海岸に建設したものであつた。
○人の世を涉る行旅の如く然り。途に險夷あり。日に晴雨あり。畢竟避くるを得ず。只だ宜しく處に隨ひて相緩急すべし。速ならんと欲して災を取る勿れ。猶豫以つて期に後るゝ勿れ。是れ旅に處するの道、即ち世を涉るの道なり。
○思ふに、眞個の處世法とは、常に學びつゝ向上しつゝ前進しつゝ爲すを云ふに過ぎず。斯かる決心、斯かる意志を有する青年の前途や實に頼もしく、實に羨ましきものなり。目標は如何なる場合に於ても高所に置かざるべからず。是れ人生の義務にしてまた青年の務むべき精華なり源泉なり。人は生れて死するまで、學びつゝ奮勵し行くの決心なかるべからず。之れを期するに、絶大の熱血を要す。心中に神的烈火の熾えざる者は光采陸離、高尚有益の生活を送ること能はず。
○安詳は是れ處世の第一法。涵容は是れ人を待する第一法、謙遜は是れ保身の第一法、澀脱は是れ養心の第一法。
○徑路窄き處は一步を留めて人に與へて行かじめ、滋味なる時は三分を減して人に譲りて嗜ましむ。是れ世を涉るの法なり。習是編
○世に處する、寧ろ拙に傷ぶるとも、巧に傷ぶる莫かれ。
○これを知る者はこれを好むものに如かず。これを好むものはこれを樂む者に如かず。
○困苦缺乏は最良の師なり。

ピーチャー

プラトン

エマース

カーネギー

フランクリン

ロード・メルボルン

スマイルス

スマイルス

フォックス

スマイルス

後漢書

スマイルス

ワナメーカー

佐藤一齋

ミラー

心相笈

習是編

貝原益軒(慎思錄)

孔子(論語)

和蘭傳譯

○生活と闘うて得たる教育は世界最善の教育なり。

○貧苦は譬へば残酷なる女教師に似たり。然れども、其の實は最善の教師なり。

○逆境は善人に取りて光輝ある機會なり。
○艱難に優れる教育なし。
○甘んじて憂患に處するは至大の徳行なり。
○憂患は人を作り、安樂は惡魔を作る。
○憂患に生きて安樂に死す。
○艱難汝を玉にす。
○窮しては且に益、堅からんとす。青雲の志を墜さず。
○堪へ難きに堪へたるは想ひ起す毎に愉快なり。
○汝の過去の試練の記憶にて落膽せしめらるゝ勿れ。

ウエンデル・フライツプス
スマイルス
エマース
ピーコンスフィールド侯
スマイルス
英 諺
英 諺
孟子
金 言
王 勃
セネカ
トマス・ア・ケムピス

○人の歩行は轉びの連続なり。
○他山の石は玉を磨くべし。憂患の事は心を磨くべし。
○如何なる試練も若し之を迎ふる勇氣にあらば危険ならず。
○火は金を試練し、逆境は強者を試練す。
○視よ我れ汝を煉りたり。されど白銀の如くせずして、患難の爐を以て試みたり。

○艱難は無氣力の人を驚嚇し得るも、勇氣果斷の人に對しては適有益なる刺戟を與ふるのみ。
○願くば七難八苦に逢はしめ玉へ。

英 諺
中根東里
ゲーテ
セネカ
スマイルス
山中鹿之助

○人貧困を受くと雖も、何ぞ怨謗不平の語を出すを用ひんや。貧困は恰も處女の耳を刺さるゝの痛みに過ぎざるのみ。而して汝其の劍中に貴重なる寶石を掛けることを得べし。
○人困難に逢うて之と戦はざれば其の一生は甚だ易かるべし。然れども其の人の品等は必ず下劣なるべし。

試 煉

○世路の風霜は吾人の心を鍊るの境なり。世情の冷淡は、吾人の性を忍ぶの地なり。世事の傾倒は吾人の行を修むるの資なり。
○天下は一大活物にして區々たる死學問、小才子の能く辨ずる所にあらず。必ずや世間の慘風を凌ぎ、人生の酸味に飽き、世態を知り、人情を盡して然る後共に經世の要務を談すべし。吾れ後進の輩に告ぐ。よろしく身を困厄に投じ、實才を死生の際磨くべきのみ。 勝海舟
○凡そ遭ふ所の患難變故、屈辱譏謗、拂逆の事皆天の我が才を老なふ所以なり。砥礪切磋の地を非とする勿れ。君子當に之に處する所以を慮るべし。徒らに之を免れんと欲するは不可なり。 佐藤一齋
○學は自得を貴ぶ。徒らに目を以て字あるの書を読む。故に字に局まりて通透するを得ず。常に心を以て字なきの書を読むべし。乃ち洞として自得するあらん。 佐藤一齋(言志錄)

○大器は晩成す。
○自己の過失より學ぶことを知らざる人は、最良の教師を其生活より斥くものなり。

ゲーテ
老子
ヘンリーワード・ピーチャー

○天の將に大任を此の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦め、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓し、其の身を空乏にし、行其の爲す所に拂亂す。心を動かし、性を忍び、其の能くせざる所を曾益する所以なり。

孟子

○學は當きに水を習ふが如くなるべし。之れを淺處に習うて後深きに向ひ、没溺死せんと欲するもの數次、方に始めて功を見る。苦しみの淵を擱れて淺處を離れ得ざれば、身水にあるも遂に數尺の水を遊泳する能はず。

莊田珠菴

○勞作的性質を十分に訓練することは、吾人の目的とする一大事なり。既に此の性質にして十分養成せられんか、人生の競争は比較的容易なるべし。吾人は反復また反復すべし。勤勞あれば従つて容易あるべし。極めて簡易なる技術と雖も、勤勞に依らずしては成就せず。勤勞は如何なる困難なる事と雖も、之を成就する力なり。

スマイルス

經驗

○羹に懲けたる者は、蓋を吹く。

楚辭

○やけどした兒は火を恐れる。

古語

○失策なく生きる者はさほど賢き者に非ず。

佛語

○經驗は偉大なる精神的醫師なり。

カーライル

○盤根錯節に遇はずんば、何を以てか利器を分たん。

漢書

○手に萬鈞を提げて、後に多力見はれ、難に處し、患を踐みて後に貞勇出づ。

劉子新論

○三たび臂を折りて良醫となる。

孔叢子

○經驗は最良の教師なり。

ヘーゲル

○經驗は非常時に於ても平和に於ても吾人唯一の教師なり。

ランドル

○經驗は高價なる學校なり。されど愚人は他に於て學ばず。

フランクリン

○耳之を聞くは目之を見るに如かず。目之を見るは、足之を踐むに如かず。

說苑

○百聞は一見に如かず。

漢書

○聞かざれば之を聞くに若かず。之を開けば之を見るに如かず。

荀子

○經驗は馬鹿をも賢くする。

英語

○身自ら經驗したる後ならては、眞理を含める語の意義を悟らざること多し。

ミル

○經驗は愚人にも教ふ。若し經驗に逢ふも猶習知せざる人は甚しき愚人なり。

英語

○頭は新しき事物を學ぶ。されど心は常に古き經驗を行ふ。故に吾人の生涯は人類が世の始めより生活したる方法の新形式に外ならざるなり。

ビーチャー

○知識は唯經驗のみより來る。

カーライル

○經驗は學問の母。

英語

○學問なき經驗は經驗なき學問に勝る。

英語

○經驗のないのは口先の智慧。

英語

○經驗は教ふ。

羅何俚語

○經驗は空想の大なる挫折者なり。

タミル俚語

○經驗を有する人を信任せよ。

ヴアーヂル

○ことによりて得らるべし。

スマイルス

旅行

○旅行は眞正なる知識の大なる根源なり。ビーコンスフィールド侯

英語

○遠く旅する人は多く知る。

邦語

○百聞一見に勝る。

邦語

○一人の目撃者は百人の傳聞者に優る。

プロータス

○旅行は智をして益、智に愚をして益、愚ならしむ。

英語

○全世界を知りて己れを知らざる者あり。

ラ・フォンテーヌ

○都も旅は憂し。

邦語

○旅は憂いものつらいもの。

邦語

○旅行は忍耐を教ふ。

ビーコンスフィールド侯

○旅行は他國の徳によりて自國の徳を正す。

英語

○旅行は態度を一層溫和ならしむ。

希臘俚語

○旅は道連、世は情け。

邦語

○旅行は若き人に於ては教育の一部分たり。老いたる人に於ては經驗の一部分たり。其の國語に未だ學び入らざる前に、先づ其の國に旅行するは學校へ往くなり。旅行に非ず。

ベーコン

○勤勞は徳行の本なり。

カーライル

○必要に應じて働き且つ己の誠意を盡くす者は、他の怠惰の者の決して知らざる無数の徳を備ふるに至る。

キングスレー

○人は働いてゐる時が一番美しい。

西語

業勢・實勢

○勤勞は徳行の本なり。

カーライル

○必要に應じて働き且つ己の誠意を盡くす者は、他の怠惰の者の決して知らざる無数の徳を備ふるに至る。

キングスレー

○人は働いてゐる時が一番美しい。

西語

○書讀にて學ばんよりは行ひて知れ。

英語

○書を以て御する者は馬の情を盡くさず。

戰國策

○愚者も經驗より事を知る。

ヘジオット

○巧妙は經驗から。

英語

○海の事は舟人に問へ。山の事は山人に問へ。

邦語

○耕は當に奴に問ふべく、織は當に婢に問ふべし。

宋書

○女の智は婦に如くもの莫く男の智は夫に如くもの莫し。

國語

○兼工開牛の尾を誤りて牧童に笑はる。

太平記

○老犬は無闇に吠えぬ。

伊太利俚語

○經驗の一荆棘に警告の全荒原の値あり。

ローウエル

○前車の覆るは後車の戒。

說苑

○落ちた後で高みを恐れる。

邦語

○經驗は愚者の師にして理論は賢者の師なり。

獨語

○經驗は智慧の父にして、記憶は其の母なり。

英語

○あらゆる天候に遇うて耐久し、且つ變色せざる唯一信仰は確信を以て織られ、經驗といふ強き媒染劑を以て飾られたるものなり。

ローウエル

○一度行かぬは馬鹿。二度行く馬鹿。

邦語

○鯛も比良目も食ふた者が知る。

邦語

○艱難を嘗めざる人は世界の只一面を見たる人なり。故に其の他面を知らざるなり。

セネカ

○余が發明は概して恒久忍耐の勞働の後始めて尋ね出したるものにして、明かに一物に向つて無数の經驗を積みし結果なり。

エヂソン

○實用の才能を養ひ長ずることは他なし。特に觀察を強め、經驗を積み

業は勤むるに精しく嬉むに荒む。
 業務は之を追ふべし。業務に追はるゝこと勿れ。 フランクリン
 我等は働くことによりて名匠となる。 羅旬俚諺
 唯一事の爲に全心を傾倒するも決して十分ならず。 ホレーヌ
 忍びて修徳し勉強せよ。 リヴィ
 勉強せよ。この中に學生の有し得べき一切の美德を含むものなれば。 カール
 業は勤むるに精しく嬉むに荒む。

熟練

〔熟練と勤勞には何物も賣られる。 ヒニム
 〔熟練は力を凌駕す。 佛 諺
 〔熟練は如何なる困難にも打勝つ。 佛 諺
 〔熟練は手藝上に於ける經驗と智能と熱情との綜合なり。 ラスキ
 ン

五 例話

一 勝安芳の勉學

勝安芳は今より凡そ百年前江戸に生まる。資性超達にして英邁幕末の政務を補佐して功績著しく、殊に明治維新に際し朝暮の間に奔走して獻替する所多かりき。

安芳十六歳の時、家督を相續せしが、家道振はず生計困難を極めたり。然れども胸中鬱勃たる勉學の志は毫も之が爲に撓むことなかりき。安芳思へらく、「我が國舊來の兵衛は今の世に其の用少し。すべからく西洋式の兵學を學びて我軍事を改革すべきなり。」とされど當時舶來の兵書なほ極めて少く、常に其の得難きを歎じむたりき。或時市中

一 製本屋の小僧

英京ロンドンの真中といへば如何にも繁華な綺麗な街のやうに聞えるが、こゝは其裏長屋ともいふべき所、むさくるしい家にアラデーと稱する鍛冶屋が住んでゐた。

夫婦とも至つて實直で、熱心に稼業に働むけれども、兎角健康のすぐれない瘦腕に、子供四人といふので、生活の困難は言ふも愚か、三度の食事さへも充分攝ることが出来なかつた。その三番目の息子ミカエル・アラデーは後年、物理学の大家としてまた電氣學の泰斗として世界を稱益したところの者である。ミカエルは一七九一年ニユイングトンに生れ、僅に小學教育を了へた許りの十三歳の時、ある書店の奉公人になつて、新聞の配達に従事した。彼は後年大家になつた時、「私は嘗て、新聞配達人をした事がありますから、今でも其の様な少年を見ると同情に堪へません」と語つたことがある。彼は冷靜なる理學者ではなかつた、實に血あり涙ある慈愛の人だつた。その母を思ひその兄弟を愛する情も深かつた。彼は配達人となつた翌年、更に七年の年季で、ある製本屋の弟子となつた。それは製本の仕方を習つたり、販賣の方法を覚えたりするためだつた。彼は此處で奉公人として嘗むべき一切の辛苦を味はつたが、堅忍不拔なる彼は少しも厭はなかつた。併も偶然本屋に奉公したのが他の商店に奉公するよりも讀書が出来る故、天の御導きに依るものであると喜んだ。

二 理學者アラデー

彼は間がな隙がな讀書した。製本しながらその本に讀み耽つて仕事を忘れることもあつた。主人は「おい、仕様がないな。店の仕事を忘れちゃ不可ないよ。そんなに讀

諸子は此の話を聴きて如何に思ふぞ。安芳が國家有用の材となりたるは天性非凡の才を備へたる上に刻苦勉學せしによるなり。かの才を待みて學業を怠り、又は薄志弱行の爲に學業を廢する者の如きは、決して事を成就し得る人にあらざるなり。今や修學の便、昔日の比にあらざ。諸子は志を勵まし寸陰を惜しみて學問に勉強すべきにあらざや。

安芳夙に蘭學を修め、西洋の兵衛に通ぜん志ししも、當時印行の辭書稀にして従つて蘭和對譯の辭書一部の價六十兩を稱へたりき。小身の士人は容易に之を求むべくもあらず。されど安芳は如何にもして之を得んと百方苦心して辛うじて蘭醫赤城某が秘藏の書を、一箇年十兩の謝料にて借受くることを得たり。それより晝夜之が謄寫に従事し、漸くにして一部を寫し終りしも、謝料及び用紙等の費用を辨する能はず。更に一部を寫して之を賣り、其の費用に充てたり。安芳が謄寫せる辭書は大冊數卷に及び、其の卷末に左の如き手記あり。其の刻苦勉學の狀以て察すべし。

(吉本襄撰海舟先生水川清話に據る)

弘化四丁末秋業に就き、翌仲秋二日終業。予此の時、貧骨に到り。夏夜無虧冬夜無衾、唯日夜机に倚りて眠る。加之大母病氣に在り。諸妹幼弱不解事自から縁を破り柱を割て炊ぐ。困難到于愛。又感激を生じ、一歳中二部の謄寫成る。其の一部は他に鬻ぎ其の諸費を辨ず。嗚呼此の後の學業、其の成否の如き不可知不可期也。

(尋常小學修身書卷五教師用)

みたけれや夜業を早く切上げてお讀みな」と叱つても見たが、感心もして、勉強の時間を與へて呉れた。彼は朋輩が雑談したり、遊んだりしてゐる間に、孜孜として讀書した。その好むところは理化學の書物だつたのである。

そして大英百科全集の裝釘を命ぜられた時の如きは奮闘しながら之に従事して、電氣に關する諸項目の如きは非常の興味を以て讀み耽つたのである。これより彼は更に進んで、學びし事を實驗して見たくなつた。けれども薄給の小僧のことなれば、器械を買入れる資金とては無く、いろ／＼苦心の末、極めて僅少の費用を以て、自ら簡單なる器械を製作し、それに要する藥品をも調ふことが出来た。この幼稚なる實驗は、如何ばかり彼の獨習せるところを開發し、斯學に對する熱心を助長せしめたか解らない。彼の朋輩は、

「君そんなことは廢せよ。鍛冶屋や大工みたいな眞似してお金を遣つて勿體ない。それよりか着物でも造へたら良いだらうに」

「え、僕は着物よりも芝居よりも、此方が面白いんですもの……」

と言つて止めなかつた。その頃のことである。彼はある日、物理學自宅教授の廣告を見た。その月謝は二圓である。彼の好學心は其廣告に囚はれた。然れども小僧の身として二圓は大金である。ところが幸にも父の稼業を繼いで鍛冶屋をしてゐる兄が其情を酌んで、豊でもない中から其月謝を貢ぐことにした。彼は此上もなく喜んだ。夜仕事を終へてから、其教授を受け、教へられたところは叮嚀に筆記し、裝釘はお手のものなれば夫を綺麗に製本して喜んだ。

二 理學者たらんとす

店の主人もミカエルの篤學に感心し、屢々來客に向つて「弊店に面白い小僧が居ります、……それが學問が好きで御座います。な、私共にはよく解りませんが、物理學は如何の、電氣學が斯うのつて計り夢中になつてゐます」

と語つて讚めた。此事を聞いた客の一人にダンスといふ者があつて、「それは感心なことだ。やらして見たらきつと物になるでせう、……では如何です、近々ローヤル、インスチテューションでサー・ハンフレイ・デヴィーの講演がありますから是非聴かしては、たしか四回續く筈です」

と主人に勧めた。デヴィーは當時の大家だつた。主人も店の大事なお客の勤めでもあることとて、ミカエルを聴講に行かした。唯僅に四回の講演なれど、これは彼に取りて新紀元を展いたもの暗がりより遂に光明に出た程の利益をもたらした。

彼は遂に考へた。自分はどうしても理學を以て世に立ちたい、これを専心研究するためならばどんな賤しい勞働をしても構はない、何とか今の仕事よりもつと勉強の出来る方法がないものか、その時彼は二十一歳、一八二二年だつた。故に彼は熱考の末、ローヤル、インスチテューションの會頭バンクス氏に書を送つて、自分の志を述べ、同氏の學僕なり小使なりに使つて戴きたいと願つた。けれども不幸にして何等の返事も來なかつた。恐らくバンクス氏は無名の少年と侮つて齒牙に留めなかつたものであらう。

ミカエルの年季は同年を以て満ちた。彼は製本所を去つて他に爲し得る自由が與へられた。今は一刻も猶豫すべきでない、遂に意を決し

て直接にサー・デヴィーに手紙を認め、且つ同氏より聴きたる講演の筆記を添へて己が志望を述べた。

デヴィーは、貧兒より身を起せる學者である。故にこの篤學の貧兒に對しても同情篤く、早速返事を呉れた。彼は胸を躍かしつゝ、封を切つた。その手紙の文に

「貴君が理學に志するは誠に感心に堪へないが、理學といふ君主は最も殘酷なる者で、過激なる勞役を強ひて併も酬ゆるところ甚だ薄きものであります。この暴君に仕へて名を擧げ富をなさん事は蓋し容易のことではありません、此點篤と御熱考あれ。そして追つて時機の來るのを待ちなさい。……私は少しの間旅行いたしますがまた歸つてから御相談ませう。」

といふことが書いてあつた。ミカエルは當時の大家より返事を受けしこと、しかも一縷の望のその中に閃きを感じた事とて大なる獎勵を受けた。そして理學は如何に暴戾なる君主なるにせよ、彼の之に向ふ精神は少しも減じなかつたのである。

その後、彼は從來の店を去つて他の製本屋に轉じた。それは十分の餘暇を與へられる約束だつたからである。ところが其の主人は仲々狡猾で、却つて苛酷に彼を使ふので、實に堪えられぬ苦痛を感じた。そして或夜の事、快々として不快なる寢に就かんとした。

ところが激しく戸を叩くものがある。出て見れば立派なる馬車がある。正装した御者がゐる。そして

「ミカエル・フアラデー君は此家にゐらつしやいますか」

といふ。彼は驚きの目をみはりつゝ「え、ミカエルは僕です」

御者は叮嚀に「私はデヴィーの使者です。此の手紙をお届け申しま

す」

といひ乍ら茫然たる彼を残して、輪響と共に夜陰に消えた。ミカエルは寢室に入つて見下せば、デヴィー氏は明朝面會したい故御來訪あれとの書面、さていよいよ採用されることやら、それとも斷念せよと諭さるゝものやら文書には書いてない、嬉しいやうでもあり、恐ろしいやうでもあり、その夜は碌々眠れない。夢はデヴィー氏の邊を駆け廻つてゐる。翌朝飛ぶが如くデヴィー氏を訪れた。

デヴィー氏は懇ろに彼を迎へて、研究室に雇入れ、器具の手入れや、實驗の用意や後始末の雑務をせしめ度いが如何かといふのであつた。その手當としては同所の最上階にある二室を與へ、一週一磅四志を給與するとの事。これが爲には製本屋を廢めて衣食しなければならぬから、俸給としては無論多いものではない。けれども日常大家の講演を耳にし完備せる實驗を目にし得る事故、彼は熱慮の必要なく即座に承知した。時に一八一三年三月だつた。若し彼にして金錢の爲に此の好機を逸したらんには、生涯その志を伸ぶることが出来なかつたであらう。幸にして彼は金錢以外の物を望んで、デヴィー氏の知遇を得た。これ彼に取りて最も重大なる出世の階梯だつた。デヴィー氏は後年、この事を人に語りて「予が種々なる發見中、最も大なるものはフアラデーの如き偉人を發見した事である」と言つた。併し乍ら其當時に於ては氏と雖も未だ、ミカエルの偉人を知るに由なかつたのであらう。

斯くして彼は益々研究を進め得る地位を得たので、日夜孜孜として研學し、其の上達實に著しく、流石のデヴィー氏も舌を捲いて驚いた。扱て七ヶ月の後、デヴィー氏夫妻は大陸旅行を企て、その執事となりて同行せん事を促した。彼は喜んでこれに従ひ、時としては奴僕

を採らしめらるゝ事あれど、これらを甘んじて佛蘭西より瑞西に、それより伊太利に至り、獨逸に涉り、一年有半の間その國々の大學者に會見し、美術風光を賞し、知識を深くし見聞を廣くした。

三 理學者生活

漫遊より歸國して間もなく、彼は助手に擧げられ、年俸百磅を受くる身となつて、デヴィー氏の研究を助け、彼が鑛坑の安全燈を發明したるが如きも、彼の助力が大に與つたものである。斯くの如くにして、彼の知識も技術も大に進み、倫敦理學協會に於て六回に涉りて元素の化合力に就いて講演した。これは彼が數百回試みたる講演中の初陣だつたのである。

彼は助手として七年長足の進歩をなし、英國學界に一大理學者として認めらるゝに至つた。この時年齢漸く三十一歳の青年である。その翌年淑徳高きサラ・バーナード嬢と結婚し、その内助を得て益々研究に努力した。

爾來二十年間、研究に研究を重ね決して小成に安んずることをしなかつた。而して講演に論文に發表するところの豊富なる知識が雄辯と共に滾々として流露し、學界に貢獻し、國家を裨益するところ多く、皇婚アルバート親王の如きも之れに傾聴し、賞讃せられて止まなかつた。

而して種々なる發見の中、彼の名を萬世に朽ちざらしむるものは電氣學に關するもので、第十九世紀後半に於て、斯くまで電氣學の發達し、その應用を擴大せしめしものは、實に彼の恩澤である。大宰相グラッドストーンは彼を賞して「氏の電氣に關する數多の發見は古今東西の發見中最も大なるもの一つである」と言つた。斯くの如く彼の

功績は世界に喧傳せられ、各國の大學より大博士の稱號を贈られ、未だ五十歳ならずして、世界第一の理學者と稱せられた。

四 晩年

彼は五十歳になつた時、俄に記憶力衰へ、一時は再び學界の霸を握ることが出来ないと危ぶまれた事がある。蓋しこれは過去に於ける數十年の苦闘によりて起りしものであらう。故に夫人は彼を強ひて瑞西に赴かしめ、風光明媚なる山地に靜養すること四年大に恢復を見たる故再び研究を始めて止まなかつた。併し六十四歳にしていよいよ衰頹を感じる様になつた。

然れども彼は尙活動をつゞけ、學界の講演にまた英國政府の爲に學術上の顧問として努力した。グイクトリヤ女皇は彼に陪餐を賜はり、アルバート親王は瀟洒な邸宅を賜はつた。その他ナポレオン第三世は彼に高貴なる勳章を授け、佛國の大博覽會は大名誉賞牌を寄贈した。斯くの如き賞牌、稱號等殆ど數ふるに際なき程だつた。

此名譽ある學界の大偉人は一八六七年八月二十五日、書齋の椅子に坐したるまゝ、睡るが如く死んだ。時に年七十六。彼は生涯研究と努力との外に餘念なく、名を望まず利を食らず。唯その天職のために活きた。されば、時間の貴重なる事を思ひて社交界に顔出しすることさへ稀であつた。而して少時より自ら警めて「時間を浪費する勿れ。無益の人又無益の事件に關係して、之によりて時間を充費する勿れ」と言つたが果して彼の生涯は其格言を實現したのである。而して仕事に倦怠を感じることもあれば聖書を讀みまたはシエクスピリア・マコーリー等の名文を高誦して精神を慰めた。

また屋々出て、教會の講壇に現はれて日曜日の説教を試みることもあつた。彼は平素信仰厚く「理學を究むれば究むる程、いよいよ神の全知全能なることを感ぜざるを得ない」と言つた。また或時、母親の涙を試験管に入れて分析し、そして學生に教へて曰ふのに

「諸君の見らるゝ通り母親の涙も科學的に解剖すれば、唯僅かの水分と鹽分とである。けれども諸君よ、慈母の頬を流るゝあの涙には此水と鹽との外に化學も分析し得ざる尊い深い愛情の籠つてゐる事を知らなければならぬ」と。

彼は物質界の知識と共に敏感なる形而上の知識に富み宗教的意識に深かつた。而して斯ばかりの大家となるも常に謙讓にして毫も誇ることもなく貧困なる人々を忘れなかつた。されば平素遺言して「予は貧乏な鍛冶屋の息子だつた故、貴族の葬らるゝウエスト・ミンスター寺院に埋めらるゝことを望まない。平民の墓地に平民と共に眠りたい。その石碑も亦小さき物にして」と語つた。家人はその遺言に従ひ、さゝやかなる大理石に其名と生死の年月日のみ刻んで建てた。

(偉人物語)

三 幕末蘭學者の苦學

福澤諭吉翁は、我が國新文明の恩人として慶應義塾の創立者として普く知られた明治年間の一偉人であつたが、少壯、大阪の緒方塾にゐた時のその苦學は今の人の想像に及ばないものがあつた。福翁自傳は、具さにそれを語つてゐる。

始めて塾に入門した者は、何も知らぬ。何も知らぬ者に、何うして教へるか、といふと、其の時江戸で翻刻された和蘭の文典が二冊あつた。一をガランマチカといひ、一をセインタキスといふ。初學者の者は、先づ其のガランマチカを教へ、素讀を授ける傍、講釋をもして聞かせる。之を一冊讀み了らると、セインタキスを又其通りにして教へる。如何やら斯うやら、二冊の文典が解せるやうになつた所で、會讀をさせる。會讀といふことは、生徒が十人なら十人、十五人なら十五人に、會頭が一人あつて、其の會讀するのを聞いてゐて、出来不出来に依つて、白玉を付けたリ、黒玉を付けたリするといふ趣向で、そこで文典二冊の素讀も濟めば講釋も濟み、會讀も出来るやうになると、夫れから以上は、自身自力の研究に任せることにして、會讀本の不審は一字一句も他人に質問するを許さず、又質問を試みるやうな卑劣者もない。

果然、緒方塾の修學法は所謂自力教育だつたのである。塾生の苦しんだことは想ひやられる。が、より多くの苦しみは書物の乏しいことに在つた。又曰く

緒方の塾の藏書といふものは、物理書と醫書と、その二種類の外は何もない。それも、取集めて僅かに十部に足らず、固より和蘭から舶來の原書であるが、一種類唯一部に限つてあるから、文典以上の生徒になれば、如何しても其の原書を寫さなくてはならぬ。銘々に寫して、其の寫本を以て、毎月六回位會讀するのであるが、之を寫すに、十人なら十人一緒に寫すわけに行かないから誰が先に寫すかといふことは、籤で定めるので、云々

一々教科書を寫し取る。今から考へると嘘のやうであるが、當時洋學を學ぶ者は、すべて斯うして苦しんだものである。而も尙その上に、これを寫す紙に苦しみ、ペンに苦しみ、インキに苦しんだ、即ち紙は、日本紙に糝水を引いて用ひ、ペンは鯉の釣り道具とかいふ鳥の羽の短く切つたのを買つて来て、これを削つて鴉筆を作り、インキは、墨を磨つたまゝ、壺の中へ入れて置いたものだといふ。

四村上英俊

佛蘭語研究の始祖、醫家また實驗化學に造詣深し。下野國那須郡佐久山の人、名は義茂、字棟梁、茂亭と號す。幼名を貞介といふ。英俊は通稱なり。晩年また松翁と稱す。文化八年四月八日を以て生る。父名は木仙通稱を松園といふ。醫を業となす。尾島氏を娶り三男三女を擧ぐ。英俊はその長子なり。文政七年松園と俱に江戸に徙り京橋柳町に居る。松園嘗て英俊に謂つて曰く、吾汝を携へて居を徙したるは孟母三遷の教に倣ひ汝をして成らしめんと欲するなり。汝必ず吾意を空しくする勿れと。英俊深く此言を銘し是より唐津藩の儒大野鏡湖（東馬と稱す）に従ひて漢學を修め篠山藩の醫足立無涯（長橋と稱す）に従ひて醫を學ぶ。十六歳の時一夜詩五十首を賦し十七歳の時忠孝不兩全の論文を書き大いに鏡湖の稱讚を得たり。十八歳の時津山藩の醫宇田川榕庵に従ひて蘭書を學ぶ。天保四年八月松園歿す。同十二年信州松代に往きて醫を業とす。弘化元年松代藩に仕ふ。英俊嘗て蘭書を閲しベルセリウスの著書あるを知り之を讀まんを欲す。偶々其の佛文化學論を得たり。友人佐久間象山佛文を習讀することを勸む。是に於て嘉

益を發明して是を書に著はす。故に其他の國に比すれば有用の善書最も多し。然れども

皇朝に於て佛蘭西書を讀む者あることを聞かず。誠に隔籍の思を爲せり。是に由て。余憤然として志を立て、佛蘭西書を讀まんを欲す。自ら以爲らく。資性淺薄なりと雖も學んで倦まずんば、必ず其書を讀み得べしと。嘉永元年五月初佛蘭西文典を取りて之を閲すること五閱月聊か文法を知る。故に更に別爾攝律私の著書を取りて之を閲するに一行をも讀むこと能はず。遂に語書に因りて語を度索して指意を探り。晨夜專意積精すること茲に十有六月にして竊く讀み得ることを得たり。然れども此が爲に尙痛を患ふるに至れり。其困苦言以て説く可からず。筆以て書す可からず。是れ乃ち余が此書に對譯を爲すの所以なり。後進若し佛蘭西書に志ありて學ばんと欲し、此書に因りて其語に通達せば、其書を讀む豈難からんや。余が盡思極神する所以は師授を得ず。且つ和解の語書の有らざるを以てなり。故に余資の淺薄を省せず。此書を作りて少く後進の勞苦を省かんと欲す。若し同志の後進此書に因りて佛蘭西書を讀み得て國家の裨益を發明せば誠に余が本意と謂ふべし。

元治元年五月

茂亭 村上英俊識

五 油繪描法の發明者フアン・アイク

油繪描法の發明家として推され繪畫史上の一大明星として千載に輝いてゐるフランダールのフアン・アイクは千三百九十年に幾多の美術家を出した風光明媚のマースアイクに生れてから五十歳前後にゲント市に來たまでの事蹟が殆ど史料に遺つてゐない。隨つて何人に畫法を學

永元年五月初めて自ら佛書を習讀し師授を待たず辭書に頼り十六個月を閲し遂に讀み得たり。嘉永四年また江戸に來り深川小松町の松代邸に居る。同六年、三語便覽を著はす。當時大いに世に用ひられる。此書佛蘭語の語を集む。再版の時に至り、蘭語を改めて獨逸語となせり。安政二年五方通語を著はす。同四年佛蘭西詞林を著して藩主に呈す。藩主之を幕府に獻ぜり。同五年幕府擢んで蕃書調所教授に任じまた翻譯掛を命ず。其の餘暇蕃所調所の爲に佛蘭西詞林を増補す。殆ど五千葉の辭書となれり。其の力を辭書編輯に費すこと前後十餘年なりといふ。元治元年佛語明要を著はす。慶應三年佛蘭西タクツクを譯し世に公にす。此年致仕し明治元年の春深川猿江町に退隱し更に家塾を開き子弟に教授し傍ら著譯に従事し其の家塾を達理堂と號す。從學者の者極めて多し。同十年家塾を鎖し教授を止む。後居を本所林町に移しまた豊島郡王子村に移す。同十五年東京學士會院の會員に選ばる。同十八年八月佛蘭西大統領より勳章を贈與せらる。これ本邦に佛蘭西學を創開したる偉功を賞するなり。我が政府より之を受領佩用することを允許せらる。同十九年佛學會の創立に際し贊を擲ちて其の事業助をく。同二十年居を北豊島郡金杉村に移す。同二十三年金杉の僑居に歿す。年八十翠松院義山英俊居士と諡す。青山墓地に葬る。宮内省より夙に佛蘭西學研究の道を刻苦勵精後進を教授し著譯に従事し教育上に裨益を與へたることを誇からざるにつき特旨を以て祭料金參百圓を下賜せらる。

佛語明要凡例

(大日本人名辭書)

佛蘭西は歐羅巴洲に於て最も大國なり。生民ありてより以來。聖賢選に興り。世々又聰明賢知の士出でて各其材力を竭し、國家の爲に裨

び如何なる道筋を経て其後今日まで世界に普及してゐる此油繪描法の空前の大發明をなしたかは何人も闡明し得るものが無く存として迷宮の内に葬られてゐる。併しアイク以前に繪具に油を混せて粗末な繪を壁や石面に描く術は既に知られてゐた。又アイク自身も薄い瑛瑛を畫面に用ひて色彩を不變にする在來の術は學んでゐたらしい。

フランダールは言ふまでもなく今日の白耳義に屬しアイクの産地も同じく白耳義に屬しマース河畔の和蘭境に近い都會である。アイクの生時にフランダールのゲントは全歐洲の商工業の中心であつた。中世紀に於て十字軍以來伊太利のヴェニスが東西兩洋の貿易の中心となつて其の商業は繁昌を極め、ヴェニスの商人といへば富豪の別名である位であつた。其後商業の中心が漸次北歐に移り今日のベルギーのイーブルが先づ繁昌し次にそれがブリュージュに移り、其の次にゲントに移つた。ゲント市は當時の富豪の集まる所で其の物質生活は華美を極めたと言はれてゐる。又之等の富豪の宗教上の信心から寺院を壯麗にする爲に巨額の金を寄附する人も多し所から自然に美術の發達を促し後世に美術の名作を遺した事も争はれぬ。

アイク以前の北歐の繪畫は極めて幼稚で繪畫史上に特記すべきものは無いと言つても宜しい。唯基督教の北漸に伴つて聖書の挿畫と頭字裝飾の術が南歐から傳はつてゐた。又寺院の建築に伴つて祭壇の裝飾には畫家が最も意匠を凝らしたのである。之等以外には獨立した繪畫の見るべきものはなかつた。アイクは兄弟二人共畫家で兄はフーベルト弟はヤンで兄より二十四歳年少であつた。アイクの傑作は今日尙ゲント市のサン・パウオン寺院に遺つてゐる。此繪については幾多の挿話が殘つてゐるが世界繪畫史を飾る生きた記

念品であり珍寶である。此傑作には弟のヤンも協力したやうである。

フーベルトの作はブリージュ其他にまだ少し遺つてゐる。

アイクは繪畫史上には油繪の大發明をなしたと共に鮮明細緻自然に

法り恰も實物を見るが如き獨特の魅力あるフランダーの新派を開いた

此寫實的現向は當時フランダーの實業の影響と見て大差なから

う。當時の伊太利のフラ・アンゼリコが高遠な理想にあらがれて純潔

な精神生活を浮世離れした僧庵に送つた心境が其儘彼の謹嚴清楚な畫

風に現はれてゐるのに對照して見れば極めて明白である。

アイクの畫面に表はれた神も聖者も當時の華美を盡した服裝をして

ゐるのはアンゼリコの聖者の質素なのとよい對照である。

アイク以前にはフランダーから程遠からぬケルン市が美術の中心で

あつた。其の作品は多少今日にも遺つてゐる。アイクは多分ケルンで

繪畫を學んだのだらうと想像されてゐる。其後伊太利に旅行して油繪

以前の壁畫などを研究したものであらうと想像されてゐる。併し之等

想像には何等正確な根據はないのである。

寂しかつた繪畫史上にアイクが忽然として北歐に現はれた事は恰も

我國で富士山が一夜の中に出現したといふ傳説のやうなものである。

經歷由來が少しも分らない精巧緻密な油繪描法が拙劣粗笨を極めた

繪畫界に不意に現はれ出て荒涼たる沙漠中に俄に百花爛漫の美觀を呈

した様であるが、而もそれが全くアイクの功績であることに、何

人も疑ふことは出来ない。油繪描法發明の名譽は何人も之をアイクに

歸せねばならぬ。アイクが此の精巧な油繪描法を完成するまでに苦心

慘憺の研究を積んだことは固より想像するに難くない。或時アイクが

油繪を日光で乾かさうとして畫面に猛烈を生じて久しい努力が全然水

よりて其悟性の眼を開き、理性を働かしむるに至らん。偏見と習慣と

に陥らば生徒は汝等の働を空しうするものを其内に保つことあら

じ。彼は久しからずして彼等の手の下にいと賢き人たらん。初は何事

をもなさずとも、汝等教育上人を驚かす程の事をなし出でん。」

今世に行はるゝ手段と正しく反對の方へ進まば殆ど誤なからん。世

の父母及び教師の目的は小兒より小兒を造るに非ず。學者を造るにあ

り。故に叱りつ矯めつ、責めつ、威しつ、甘やかし、約束しつ、教へ

つ、さては又理性に訴へて談論をなしつ、日も足らざるものの如く、

少しも其時を失ふことなし。然れども汝等は之に優ることを爲すべし。

合理的なれ。然れどもゆめゆめ生徒と理を論ずる勿れ、殊に彼をして

其好まぬものをめてしむる勿れ。いかにとなれば、常に其心に適はざ

るものを強ひて道理を添ふるは小兒をして道理を厭はしめ、且つ未だ

之を曉る能はざる心をして豫め之を輕むせしむる途なればなり。只其

身體、其機關、感官及び體力を練習せしめよ。其心靈をばなるべく遅

くまで働かざらしめよ。意見の價値を判斷する悟性の未だ足らざる間

は諸の意見を彼に知らず勿れ。」

「汝等熱心に過ぐる教師達よ。簡單なれ。慮あれ。ひかへ目にせよ。

他人の正しからぬ動作を防ぐ時の外は急ぎて自ら動作する勿れ。吾が

幾度となく繰返して常に新しきを覺ゆる言は是なり。曰く。なし得ら

るべくば善良なる教授を遠げよ。恐らくは悪しきもの來らん、抑、此

地球は初め自然が人間の樂園にとて造りたる所にしあれば、ゆめゆめ

善惡の知識を罪なき者に與ふるを慎しめ。之は誘惑者の業ぞかし。小

兒の前に來る實例に小兒の教へらるゝを防ぐ能はずば此實例をして只

最も宜しき印象を其心に與へしむるやう心懸くべし。」

泡に歸したといふ逸話は如實に其の苦心の一端を物語つてゐる。アイクの發明の経路や其の苦心談は今日之を知る途がない。併し學ぶべき師匠もなく問ふべき先輩もなく苦悶の結果此の大發明を完成し此の術に熟達したことは自己教育と獨創發明との模範と言はねばならぬ。

六

備考

一 ルソーの名著エミール中より

「教授をなすに當りて、吾等は、學問を街ふ癖ある爲に小兒の自修するが遙かに宜しき事をも小兒に教へ、又吾等ならでは教ふる事能はざることなほざりにす。乳母假令おろそかなればとて成長の後、歩む能はざる小兒もなかるべきに苦しみて小兒に歩みを教ふるは、こよなく愚なる事ならずや。なか／＼其の教へ方の悪しかりし爲に身を終るまで歩み振りの憐むべき者も抑も幾何ぞ。」

「生徒を只口にて教ふる勿れ、彼は只經驗によりて教へらるべきなり。又如何なる罰をも加ふる勿れ。彼は過の何たるを知らず。彼をして汝等の報を乞はしむる勿れ。彼は汝等を怒らす途を知らず。其行には道德の法則の意識なきが故に道德上の惡をなす能はず。責むるにも叱るにも當らず。初の教育は消極的なるべし。これは德義又は眞理を教ふるに非ず。心情を罪業に染まざらしめ且つ悟性を害ふ所の誤を防ぐにあり。汝等教育につきて自ら何事をもなさず、又他人をしてそれを爲さしめざりし時にも生徒十二歳になりて其の右の手と左の手の別をなす能はずとも、強く健かにだに育ちてあらば、汝等が最初の教に

「彼は自ら學ばざるべからず。己の理性を用ひて他人を頼まず如何となれば偏見を丸呑にせざる者は權威に抑へらるべからざればなり。況んや、人自ら其誤をなし出づるは甚だしくして、多くは他人より得ざるべし。此引續きたる練習によりて力強くなることは、恰も身體が勞働と努力によりて強くなるが如し。加之、只管、實力を伴ひて進歩する便益あり。身體も心も其支へ能ふ重さより重き物を運ぶ能はず。記憶せらるゝ事物は先づ悟性にふさはしかるべし。然かありてこそ悟性は之を記憶の中より取出して己の物とするなれ。曉られざる事物を以て矢鱈に記憶を煩はす時は、永く吾等の物となるべき果實を失ふ恐あり。」

エミールは知識少し。然れども其の持てる知識は己のものなり。彼にはなま知りと言ふことなし。彼が知れる僅かばかりの事柄は最も肝要のものなり。彼未だ知らずして他日知り得る事甚多し。他人に知られて、彼には知られざるべき事更に多し。猶其外に誰にも知らるまじき事限りなく多かり。彼に普通の心あり。これ其識見に就きて言ふに非ず。識見を得る能力に就きて言ふなり。其心公平機敏にして何事をも爲すに堪ふ。モンテニスの言へりし如く、未だ教へられずともとにかくに教へられるべき心なり。彼其の爲す事毎につきて「何の實益ありや」と言ふ事を探り出し其信ずる事毎に「何故」と言ふ事を探り出すを知らば、吾事足りなん。繰返して言はば吾目的は彼に學問を教ふるに非ず。其需要に應じて之を得べき術を得させ、事物の眞の價値を見積らしめ、何物よりも眞理を愛せしむるにあり。吾徐るに此途よりぞ進む。然れども無益の歩みをなさず。後戻りする必要なし。」

ニ スマイルスの自修論

古來最良なる教師は、自修の重要を認むるに最も早くして、生徒を勵ますに、自己の能力の活動的使用に依りて知識を獲得すべきを以てせし人々なりき、彼等は口授よりは訓練に重きを置き、己の從事せる仕事に生徒をして與からしめんとせり。かくして教授を以て知識の斷片の受動的受容よりは遙に高きものとせり。是れ實にアーノルド博士の依りて以て働きたし精神なり。彼は其生徒に自身に頼り、自身の活動的努力にて其能力を啓發すべきを教へ、彼自身は唯生徒を指導獎勵するを役とせり。彼は曰ひぬ「余はオックスフォード大學に少年を送りて奢侈の生活をなさしめ、便益を利用して自己の爲を計るなからしむるよりは寧ろヴァンデイクランド(譯者註南太平洋中のタズメニア島の古名)に之を送りて自ら衣食の爲に働かしめん」と。又或時彼は曰ひぬ「人其天性劣るとも、正直、眞實、熱心に之を涵養せば、神之を助け給ふ。若し眞に衰むべき一事地上にありとせば、此神の明智こそそれならぬ」と。斯くの如き性格を有する生徒について、彼、言ひしことあり「余は、此生徒に對し帽を脱して敬禮せん」と。レールハムに於て比較的遲鈍なる生徒を教へ居りし際、アーノルドは、稍々激して其生徒にも言ひしに、生徒はアーノルドの顔を見上げて曰ひたり「何故に先生は怒りても言ひ給ふか、實に我は出来るだけ努め居るなり」と。多年の後、アーノルドは其子等に居常恒に此話を語り、尙附言して曰く「余は一生中、此時程感ぜしことなし、かの生徒の顔附と言葉とは、余決して忘れしことなし」と。勞働するものは、高き智的修養を得る能はずと云ふこと決してなし。

是れ上述する所の諸人が、卑賤より起りて文藝科學に大名を得しに依りて明かに知るべし。適度の勞作は、人間の體格に健全にして補益あり。勉學が心を教育するが如く、勞作は肉體を教育す。されば閑散に過ぎざらん爲に各人の勞作あり、又勞作の間に餘暇あるは、社會の最善なる状態なり。上流社會の勞作の要なき人々すらも、多くは抑ゆべからざる本能を満足せしめんため(中には退屈を免れんためのもあり)勞作せざるべからざるものなり。或は英蘭の田舎に狐狩りに行くものあり。或は蘇格蘭の丘陵の間に松鴉狩りに行くものあり。又多數は瑞西の山岳に登攀せんとて本國を出づ。各學校に短艇あり、競走あり、クリケットあり、其他の競技あるは、皆此必要より出づ。青年は此處に於て心身の力を健全に涵養す。傳ふるもの曰く、ウエリントン公爵はイートン中學にて少年時代を過せしものなるが晩年に及び、或時少年がイートン中學の運動場にて遊戯に耽り居るを見て、語るらく「オータローの戦に勝を得し所以のもの此處にあり」と。ダニエル・マルサスは、大學にある其子に、大に勤勉して知識を修得すべきことを勧めたり。然れども彼は又心の全活動力を保ち、智的快樂を享くる最良法として男性的遊戯をなすべき由を命じたり、マルサスは曰ひぬ「如何なる知識の種類も、如何なる天然、藝術の知得も、御身の心を喜ばし、又強むるものなり。余はクリケットが亦御身の腕と脚とに依りて同事をなすを喜ぶ。余は御身が身體の運動に於て優るを喜ぶ。而して余は思ふ、心的快樂の半以上、心的快樂の最良部分は人が立ち居るとき最も多く受くるものなり」と。然れども活動勞作の尙重要なる事は、大神學者ジェレミー、テラー之を語りぬ。彼は曰ふ「怠惰を避けよ、而して汝の時間を忙劇有用なる業務に残らず

用ひよ。如何となれば精神に用事なく、身體を用ふるなき空虚の所に、肉慾は直に侵入するものなり。安樂、壯健、怠惰の人に於て、誘惑せられて、貞淑なりしはなし。されども凡ての用務の中、身體の勞働は最も有益にして、惡魔を逐ひ出すに最も效あり」と。

人生に於ける實際的成功が身體の健康に由ること、世人の想像以上なり。ホドソン(譯者註、印度にありし英の勇將)英國の一人友人に書き送りて曰く「余は信ず、余若し印度にて成功せしとせば(物的に言はじ)それは健全なる健康に由れり」と。如何なる職業に於ても、勞作を續くる能力は必ず身體の健康に依ること大なり。されば智的勞働の一原因として、身體に注意をなすこと必要なり。青年學生の間に屢々不安心、不愉快、無活動、空想に陥る傾向あり。爲に現實生活を輕侮し、人間の平坦路を厭ふに至る。此傾向を英にてはバイロニズム(バイロン主義)、獨にてはヴェルテルリズム(ヴェルテル主義)と呼ぶ。此傾向の起るもの、思ふに身體運動の閑却に因るならん。博士チャニング(譯者註十九世紀、米國の神學者・著述家)また同一傾向の米國に生ずるを見、評して曰く「我國の青年にして、絶望の學校に生成するもの多きに過ぐ」と。此青年病の唯一の療法は、身體の運動にあり、活動にあり、勞作にあり、身體的業務にあり。(スマイルス自助論)

三 職業と自己教育

「人は誰でも一生自分で教育せねばならぬ一人の生徒をもつてゐる」と、ロイド・エイベリがいつたやうに、我等はどんな境遇にあらうと、いつまでも自分で自分を教育して行かねばならぬ。とりわけ早く學校を出て實際生活に入らねばならぬものには殊に自己教育が最も必要で

ある。世には職務に就くともはや教育などは不要に歸するやうに考へるものもあるが、その實は、職務も學校と同じく、常に多くの問題を課して、人の能力や心掛を、試験するものであるから、これに従事するものは、やはり今までどほりに周到に注意して、その勉強を續けて行かねばならぬ。

始めて職務に就くものまづ第一に心得ておなければならぬことは、どんなに低い職業でも、一旦これに就いた以上は、十分満足して決して不平をいはないで、全力を盡して人一倍よい成績を挙げようと努めることである。職務に於ては學校に於てより一層多く勤惰によつて人を評價するものである。そして、およそ成功には最後の十五分間も大切であるが、最初の十五分間も同じく大切である。十五分間だけ人に先だつて出勤し、十五分間だけ人に後れて退出して勞を吝しまねば、必ず當事者の信用を博する。優劣の分れるところには、微かに一線が引かれてあるばかりであるから、これに氣づかぬものが多い。それゆゑ、多くの人の中で特に他に認められようと思ふなら、人目に立たぬことまでよく注意せねばならぬ。一旦職業に就いて多少の收入を得るやうになると、忽ち學校當時の勉強を忘れるやうでは到底將來の立身出世は望まれぬ。

勤勉といひ勉強といふのは、たゞ本を讀んだり筆を執つたりすることばかりでなく、また、必ずしも机に向つて仕事をする時だけに限つたこととなく、常住不斷そのことについて考をめぐらすことである。何か變つたことが起つてから、始めて考へるやうでは迅速に仕事を運んで行くことはむづかしい。世に敏腕家といはれる人は、その天分にもよるけれども、多くは平生から仕事のためによく用意してゐるも

のである。ドイツの屬僚などは、關係の法規に精通してゐるばかりでなく、必要な人の住居の番地や電話の番號までもよく諳記してゐるほどであるから、どんな質問にでも苟もそれが己の職務に關するかぎり即答の出來ぬことはない。どんなに身は多忙であつても、心掛きへあるなら、車中でも枕上でも相當に考へることが出來るはずである。職務が忙しいから勉強が出來ぬといふのは、つまり勉強の意味を誤解してゐるからである。

次にまた、職務に關する研究を怠らぬことが大いに必要である。實地の職務に従事すると、忽ち今までの學問を忘れてしまふやうでは、たとひ高い職務に就いても、永くその位置を保つことはむづかしい。且働き且學ぶといふことは、一見職務に費すべき能力を他に分けるやうであるけれども、その實は學ぶことが職務に關する研究であるなら、やがてその研究を最も有効に職務の上に應用するやうになるものである。己の職務に關する知識・技能が豊富になると、自然に職務の改善も行はれる。そして職務には高下大小の差はあつても、元は全體の一部であるから、よく一部を理解すると、必ず全體をも理解することが出来る。そこで、かうして識見を廣めて行くと、次第に低い位置から高い位置に進んでも、よくその責任に堪へることが出来る。たゞ與へられた仕事を機械的に繰返してゐるからこそ、終生人に使はれる位置に甘んぜねばならぬのである。西洋では、昔から、卑賤の身分から多く偉大な人物が出たが、これらの人物は皆且働且學んだ人である。これは工場の實地生活から出た大發明者や、とりわけ近頃多く大統領や大臣などに推される政治家などの經驗を見ると、よくわかるであらう。

最後に職務に従事する人に最も必要なものは人格である。しかるに、人格の養成については學校はたゞその準備をなすだけであるから、その完成は實際の經驗に俟たねばならぬ。いろ／＼性行の異なる同僚との交際や煩瑣な事務の處理や、他人との應對・取引などについて、どんな心得が必要であるか、また意外な困難に逢つた時、これをどう切抜けるべきであるかなどといふやうな事、書籍からも教師からも十分に學ぶことは出來ぬ。たゞ事に當つて自得する外はない。とりわけ己の人格についての自信などは、多少の試験を受けた上であらねば、決して成立つものではない。己だけ心の中ではりつばな理想を描いてゐても、幾度もこれを實行して見ねば人格にはならぬ。かやうな點から考へると、高い教育を受けることが出來ないで、早くから實地の生活に入つた人でも、いつまでも自己教育を怠らぬなら、必ずしも身の不幸を歎くには及ばぬ。まして人格の向上はやがて位置の向上となるから我等はよくその境遇を利用して、人格の養成に努めねばならぬ。

湯原元一著(實業修身教本卷五)

四 徳川家康遺訓

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し。急ぐべからず。不由を常と思へば不足なく、心に望起らば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。勝つ事はかり知りて負くる事を知らざれば、害其の身に至る。己を責めて人を責めるな。及ばざるは過ぎたるより勝れり。

五 室鳩巢の自誓十ヶ條

- 一、おきてにをぢよ。火にをぢよ。分別なきものにをぢよ。恩を忘る事なかれ。
- 一、欲と色と酒とをかたきと知るべし。
- 一、朝寝すべからず。咄の長座すべからず。
- 一、小なる事は分別せよ。大なる事は驚くべからず。
- 一、九分にたらず、十分にこぼるゝと知るべし。
- 一、分別は堪忍にあるべしと知るべし。

七 三浦梅園の戲示學徒

- 一、學問は飯と心得べし。腹にあくが爲なり。かけ物などの様に人に見せんずる爲にはあらず。
- 一、書物は金かしの帳のやうなもの也。金なき人のもたらむは濫紙ぶむほどの用にこそ。
- 一、學文は臭き菜の様なり。とくと臭味を去らざれば用ひがたし。少し書を読めば少し學者臭し。餘計書を読めば餘計學者臭し。こまきものなり。
- 一、文學を芥のやうにおもふべからず。上に浮きたがる程に下地の水も今はのまれず。
- 一、學文は置き所によりて善悪わかる。臍の下よし。鼻の先悪し。
- 一、學文は輕業のやうにするがよし。輕業は人を目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり。
- 一、衣裳美しくかざり、人にすかれんとするは賣女なり。人の見る時所體をなし、人に譽められんとするは歌舞戲のものなり。今の學者

- 一、毎朝卯の前後に起くべし。
- 一、毎夜子の前後にす臥すべし。
- 一、賓客或は疾病及び避け難き事を除きては、一日も懈怠すべからず。
- 一、毎朝案に對して、先づ衣帯を整へよ。乃ち一たび坐し了らば、事故あるにあらざれば妄動すべからず。
- 一、案に對するの間、意念將に生ぜんとすれば、正念を呼び起し、痛く之を懲し、暫時も忽にすべからず。
- 一、妄語すべからず。下人といへども、無益の言を接すべからず。
- 一、飲食は須らく飢渴に充つべし。節を過ごすべからず。また不時に食飲すべからず。
- 一、雑念は善惡を問はず、最も讀書に害あり。戰々兢々。豫め之を防ぐべし。
- 一、讀書の時に志意を凝定し、急速なるべからず。又心目を明張し、蹉過すべからず。
- 一、畢竟己の職分を盡くして、以て一生を終ふるに過ぎざれば、則ち修行の間に功利の念あるべからず。
- 右の條、心肝に銘じて之を操守せんと欲す。一に天の照覽にあり。敢て昭かに百神の靈に告ぐ。

六 徳川光圀の壁書

- 一、苦はたのしみの種、樂は苦の種と知るべし。
- 一、主人と親とは無理なる者と思へ、下人はたらぬものと知るべし。
- 一、子ほど親を思へ。子なきものは身にたくらべるちかき手本と知るべし。

はどうかやら此眞似する様なり。
一、恭のうち様は、いつにても、先をとればまけぬものと、我も知れり。とかく道理はのみこみよし。わざのきかぬは笑止なり。
一、足の皮はあつきがよし。面の皮は薄きがよし。人諸共に小賢しく口きけど、行は女童に見限らる。さる故面の皮あつくなり、足の皮薄くなり、株ふむこと多し。よく心得てつゝしむべし。

第十課 妻の任務(女子修身書)

一 要領

家庭の主婦としての妻の任務を教へるのが本課の要領である。相愛相敬によつて貞操を完うすべきことは既に巻四に於て述べたから本課は主として内助の功を述べる。

二 注意

- (一) 家事の整理は主婦第一の任務である。家庭に於ける物質生活の方面に就きては主婦は相當の教養を要するがこれより大切な家庭精神生活の中心人物となるには殊更に一層の修養と努力とを要する。
- (二) 家事を整理して夫に内顧の憂なからしめるだけでは内助の功はまだ十分とは言へない。文化の進んだ今日では夫の事業を理解し出来る限り直接之を補助するやうにありたい。
- (三) 感化激勵には内助以上の價値がある。
- (四) 理想の妻たるには女子の修養は極めて大切である。

三 設問

- 一 家事の整理は價値の少いものでせうか。
- 一 家事の整理は容易く出来ると思ひますか。
- 一 一家團圓の中心には誰がなるべきですか。
- 一 昔時妻が夫の事業を構はなかつたのは何の爲ですか。
- 一 妻の感化激勵にはどんな意味がありますか。
- 一 理想の妻にはどんな資格が必要ですか。

四 訓言

妻・貞操・貞婦・淑徳

○家庭生活を特色的ならしめ將來に於ける人々の幸福の基礎を形成するものは獨り貞操の能くする所のものなり。
エレンケイ
○貞操は女子に取りて最も美麗なる裝飾なり。
獨 誌
○貞女兩夫に見えず。
曾我物語
○婦人は貞を以て行と爲す者なり。
穀梁傳
○烈女は二夫を更へず。
史 記
○貞操は只一の無價の財寶にして之を得んと欲せば皇后も市人の妻と競争せざる可からず。
シルレル
○貞節は正義の姉妹なり。
英 誌
○女若し固き貞操觀を有ち居らば其の持參金は十分なり。プラウダス
ホレーヌ
○不貞の妻は一家の破滅なり。
羅何俚誌
○貞婦は最も眞正なる、最も愛情ある朋友なり。
サウキジ

○貞操なる細君は良人をして純潔秀美なる愉快を感ぜしむ。彼女の容貌は最も美麗なる花園の如く、彼女の精神は最も有益なる書籍の如し。

カウレー

○男子の能辯は婦人の沈黙ほど人を動かさない。

ミシュレー

○完全なる婦人は注意と慰めと命令とを與ふべく氣高く資質づけられ、其の精神は靜かなれども、而かも天使の光の如きものを以て輝く。

ワーツワース

○如何なる裝飾も優しい婦人の顔のやうに室内を美ならしめる物はない。

ジョージ・エリオット

○貞婦若し良人を指揮せんと思はば其の秘訣は只一あり。即ち從順是れなり。

英 誌

○女子を傲慢ならしむるものは其の美貌なり。女子を稱讃せしむるものは其の德行なり。女子を端麗ならしむるものは其の禮容なり。

シニークスピア

○女の心はやはらかなるなんよき。

源氏物語

○婦人の最も肝要な性質は温和である。

西 誌

○婦人は人に従ふものなり。幼は父兄に従ひ嫁しては夫に従ひ、夫死しては子に従ふ。

禮 記

○女の道を辨へ知りて昔より今に至りて書物に有る貞女賢女の鏡と言はれし人の身の行狀を能く見覺え聞きならひて學びたまふべし。

女要大成小倉菴(教草身持鑑)

○品勝れたるが故に貴からず。心正しきを以て貴しとす。容美はしきが故に貴からず。才あるを以て貴しとす。眉目かたちは衰へあり。貞女の名は朽ることなし。

女實語教

同上

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

女實語教

女大學

邦 誌

家を出てざるを女の道とす。
○幼き時は親に従ひ、嫁入しては夫に従ひ、老いては子に随ふべし。女
是れ女の三従なり。 女實語教
○婦人に三従の道あり。凡そ婦人は柔和にして人に従ふを道とす。我が心
に任せて行ふべからず。故に三従の道といふ事あり。是亦女子に教ふべ
し。父の家に在りては、父に従ひ、夫の家にきては夫に従ひ、夫死して
は子に従ふを三従といふ。三の従ふなり。幼より身を終るまで我が儘に
事を行ふべからず。必ず人に従ひてなすべし。

貝原益軒(和俗童子訓)

○婦人に七去とて悪しき事七あり。一にても有れば夫より逐ひ去らるゝ
理なり。故に是を七去と云ふ。これ古の法なり。女子に教へきかすべし
一に父母に隨はざるを去る。二に子なれば去る。三に淫なれば去る。
四に嫉めば去る。五に惡疾あれば去る。六に多き言なれば去る。七に竊
盗すれば去る。

同上

○女に四行あり。一に婦徳といひ、二に婦言といひ、三に婦容といひ、
四に婦功といふ。夫れ婦徳と云ふは、必ずしも才明絶異ならず。婦言
は必ずしも辨口利辭ならず。婦容は必ずしも顔色美麗ならず。婦功は必
ずしも技巧人に過ぎず。幽閑貞靜節を守りて整齊己を行つて恥あり、動
靜法ある。これを婦徳といふ。辭を擇びて説き、惡語を遣はず、時あつ
て然して後言ひ、人に厭はれず。これ婦言といふ。塵穢を盥洗し、服飾
鮮潔沐浴時を以てし、身垢辱せず。これを婦容といふ。心は紡績に專に
して戲笑を好まず、酒食を潔齋して以て賓客に供す。これを婦功といふ
四者女人の大節にして、乏無すべからざるものなり。曹大家(女説)

女大學

賢婦・家政・内助・幸福

○人恒に言あり。曰く天下國家と。天下の本は國にあり。國の本は家
あり、家の本は身にあり。 孟子

○大功を天下に建つる者は必ず先づ閭門の内に修む。大名を萬世に垂る
る者は必ず先づ纖微の事に行ふ。 陸賈(新論)

○賢婦は家道を昌ならしめ、愚婦は自ら其の家名を辱かしむ。

○其の國を治めんと欲するものは先づ其の家を齊ふ。

○婦人喫を好み坐を好めば男子寒を忍び餓を受く。

○出婦の郷曲に嫁するは良婦なり。

○謹慎なる人は節儉なる妻を選ぶ。

○破産は臺所の隅より。

○生計の必要は老婦を疾走せしむ。

○よき宗教の爲に心を致し、夫のよき仕事を助長することは婦人の最も
大なる美點なり。

○勉強信心なる賢婦人は家の精神なり。

○家貧なれば良妻を思ひ、國亂るれば良相を思ふ。

○處女の良否は厨房に於て見るべく、舞踏室に於てすべからず。

○婦は家の由りて盛衰する所なり。

○家を營むの女、惟れ儉惟れ勤。勤むれば則ち家起り、懶なれば則ち家
傾き、儉なれば則ち家富み奢なれば則ち家貧し。凡そ女子たるもの、因
循なるべからず。一生の計は惟だ勤にあり。一年の計は惟だ春にあり、

ミルトン

ソーン

史記

丁抹俚諺

司馬光

また彼女を賞讃して曰ふ。世に賢婦多けれども、彼女に優る者なしと。
かの寵愛を頼むべからずして美人薄命なり。唯だ神を敬畏する女子は祝
せられん。彼女の勞作に酬えよ。其の功績は廣く世に表彰せられん。

○家を治むるに四の教あり。一に家業を勤めて生業をさむ。二には儉
約にして財用を足す。三にはつしみて我が身をたもつ。四には恕にし
て人を愛す。是れ王凝が語なり。恕は我が心にて人の心をおしはかりて
人の好む事はほどこし、きらふことは施さず。凡そ家を治むる人は皆此
の四を守るべし。

○家を治むるに、男女の別正しく、内外の防を厳しくすべし。混亂なら
しむべからず。男女の別なく、家法正しからざれば、子弟のともがら、
禮儀なく、風俗みだりにして淫行多く、家風を汚し罪に陥る。子弟を許
して淫邪に赴かしむべからず。

○親戚の間も只使を以て音信を通ずべし。

○婦女は生れつき陰柔にして智なく、多くは姦邪なり。正道に隨ひ難し。
奴僕を習はしめしめて義理に遷り難し。共に愚にして道を諭し難し。
故に道理を以て其の過を一々正さんとせば怨み叛き不順にして家道和睦
し難かるべし。只常に家法を正しくし禮を以て相對せば自ら僻事少なか
るべし。

○婦人の自然なる職務は家政及び育児なり。此の二つの職務は個人及び
公衆の幸福及び安寧を進むるに於て、決して男子の職務に譲らず。善く
家を治めんとするには男子の執る種々の職務に比し寧ろ多くの熟練技術

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

貝原益軒(家道訓)

一日の計は惟だ寅にあり。箕を奉し帚を擁し、灰塵を濯掃し、邊邊掃除
し、潔清幽清、眼前爽利、家宅光明なり。穢汚をして門就を傷くるあら
しむるなかれ。田を耕し種を下し、辛勤を怨むなかれ。羹を炊き飲を造
り、饋送頻々にして、遲慢して工程を誤るあらしむるなかれ。糖を積み
屑を聚め、華性を頤養し、呼び歸し放ち去り、機點搜尋し、失落して四
隣を擾亂せしむるなかれ。夫に錢米あれば、收拾經營し、夫に酒物あれ
ば、存積留停し賓を迎へ客を待ち、偷み侵すべからず。大富は命に由
り、小富は勤に由る。禾麻菽麥、棧を成し、困を成し、油鹽椒蒜、菴麩
に粧ひ盛り、猪雞鷄鴨、隊を成し群を成す。四時八節、營々を免れ得。
酒饗食饌、各々餘盈あり。夫婦福を享け、懽欣々たらん。

宋若照(女論語)

○賢婦の價は眞珠よりも貴し。誰か彼女に遇ふことを得んや。その夫は
深く彼女に信頼し、その所得に乏しきことなし。賢婦は終生その夫の爲
に善を爲して惡を爲さず。彼女は羊毛と麻とを求め、喜びて手づから働く
なり。遠地より安價なる糧を運ぶこと猶ほ商船の如し。朝は未明より起
きてその家人に食を整へ、婢女にその日の仕事を授く。田畑を擇んで
之を購ひ、その貯蓄によりて葡萄園を作る。腰には徳力を帯して其の腕
を強うす。商品の利益を費ひ、夜は燈下に業を勵む。手を捲糸竿に伸べ
指に紡錘を執る。貧者に同情して窮者を慰撫す。彼女は家族のために暖
衣雨雪を恐れず。手づから寝衣を製し紫の帛を繞ふ。その夫は公庭に坐
して衆人に名望あり。彼女はまた麻衣を作りて賣り、帯を織りては商人
の手に渡す。徳力と榮譽とは賢婦の衣なり。賢婦には杞憂なし。彼女口
を啓けば智慧を述べ、舌は親切の道に充てり。賢婦は家事に周旋して、
自ら徒食せず。彼女の兒等は集りて彼女を幸福なる母と呼ぶ。その夫も

貝原益軒(家道訓)

を要するものなり。
○良妻と健康とは人間最上の財産なり。
○良妻は良き親に優る。
○唯一人の妻を得て始めて眞の快樂を發見するを得たり。

パウルゼン

英 諺

聖 書

同 上

シエークスピア

ゲーテ

ナポレオン

和蘭俚諺

○良妻は之を神に求めよ。彼女は天の最美なる賜なればなり。タツパ
○謹慎なる妻は神の賜なり。
○謹慎なる婦人は賢明なる男子と名譽の階級を均しくす。
○良妻は良夫を作る。
○敏捷なる妻は遅鈍なる良人を作る。
○己が嬾逸と良妻とは黄金と眞珠との價値あり。
○美婦は目を娛ましめ良婦は心を娛ましむ。
○夫よく贏くれば妻よく紡ぐ。
○善き宗教の爲に心を致し夫の善き仕事を助長することは婦人の最も大なる美點なり。
○子供のない家はがらんとしてゐるが、善のない人の心もこれと同様。
○婦容と云ふは容貌の美を謂ふにあらず。いかやうに嬾娟妖冶なりとも志賢ならざれば、却つて其の美色より禍を引出すものなり。楠氏家訓
○婦人が其の美服を誇るは孔雀が其の翼を張るに均し。
○人前で汚れた衣服を洗ふ勿れ。
○賢き夫人はその夫の財なり。
○夫に才智あり妻に忍耐力あるは家内安全の基なり。
○妻は少年の戀人、中年の伴侶、老年の養護者なり。

ヒトバテザ

英 諺

西 諺

英 諺

西 諺

英 諺

英 諺

英 諺

英 諺

英 諺

○貧賤の交は忘るべからず。精練の妻は堂より下さず。
○出たがる女房は追ひ出せぬ。
○悪妻は亭主を國より追ひ出す。
○爭論は妻の持參金なり。
○亭主は女房次第。
○隣にやれば良妻なり。
○眞の良妻は老いる程よし。
○女家を支配すればガラス窓曇る。
○牝雞の晨するは是れ家の索くるなり。
○牝雞却つて牡雞より其の聲を高くするは是れ家の凶事なり。
○妻は花嫁よりも貴し。
○良馬は決して蹉跌せず。良妻は決して不平を鳴さず。
○馬は狭い廐から出たがる。女は狭い家から出たがる。
○沈黙せる婦人は喋がしき婦人よりも常に讚美せらる。
○婦を教ふるは初來に於てす。
○悪妻は亭主の怒り。
○悪妻は六十年の不作。
○妻悪しければ夫を覆没す。
○一生の患は性惡の妻。
○一生の得は良い女房持つた人。
○肥える爲には妻に出て行つて貰はねばならぬ。
○家に女房なきは梁の無きと同じ。
○妻奢侈なれば夫榮ゆる能はず。

禮 記

英 諺

獨 諺

オウイド

希臘俚諺

西班牙俚諺

ヘブライ俚諺

獨 諺

書 經

英 諺

リットルトン卿

英 諺

獨 諺

獨 諺

羅何俚諺

漢 諺

丁抹俚諺

邦 諺

獨 諺

同 上

英 諺

邦 諺

英 諺

英 諺

英 諺

○娘としてダイアモンドでも妻としてガラスとなる。
○妻は夫の最善若しくは最惡の家財なり。
○妻は男子に取つて最大の幸運か最大の惡運である。
○良き妻を持つる者は、如何なる災害にも堪へ得ざることなし。

英 諺

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

同 上

感化・激勵・和氣・慰藉・同情

○妻の過失は夫の罪なり。
○妻罪を犯さば夫もたゞてはすまぬ。

西班牙俚諺
ヘルデル
伊太利俚諺

○良妻は良夫を作る。
○亭主は女房次第。

英 諺
希臘俚諺

○敏捷なる妻は遲鈍なる夫を作る。
○婦人の純愛によりて淨められ、その勇氣によりて勵まされ、その智慧によりて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生涯を送りしことなし。

シエークスピア
ラスキン
白虎通

○妻は夫を諫むるを得る者、夫婦は榮恥之れを共にす。
○夫惡事あれば、勧め諫めて諍々たり。愚婦の禍を惹きて身に臨むを學ぶなかれ。

○子が英國政府の爲に十分なる力を致し得たるは家庭に於て、愛妻の予を慰藉するに全力を盡したるが故なり。大聲長時間の討論の後、身心の締の如くに疲れ果てて議場より歸宅する時も、一度門に入れば沙漠は過ぎて清泉に達したる思ありき。此の如くして毎朝家を出づるや予は全く新しき力に充たさるゝを常とせり。

○貞操なる婦人は其の夫を制するに柔順を以てす。

ウイリヤム・グラッドストーン
サイラス

○情ある言葉は心の醫者なり。
○圓滿完備の婦人は氣高き用意を以て諫め、慰め命合す。ワーツワース
○有徳なる婦人の助言を輕んずる勿れ。ジョージ・チャブマン
○高尚なる男子は婦人の忠言によりて一層高尚に導かる。ゲーテ

○人は啓發し鼓舞する感化力を要す。
○眞の感化は隠れたる感化なり。
○人の心に影響せんとすることは、心より出づるものならざるべからず。

ゲーテ
ルナン

○人間に感化を及ぼさんと欲せば先づ自ら人間とならざるべからず。
○和氣群を致す。
○和氣容好の聲は人を動かす。而して和氣之に應ず。粗厲孟眞の聲は人を動かす。而して怒氣之に應ず。劉向(說苑)
○柔和なる答は憤恨をとどめ、厲しき言葉は怒を激す。聖 書
○或る語は太陽の光線の如くなれども、或る語は尖鐵の如く、又蛇の噛むが如し、諫語の人の心に刺すること甚だ深きが如く、温言の喜を與ふること測るべからず。ジョン・ラボツク
○疾風怒時には禽鳥も威々たり。霽日光風には草木も欣々たり。見るべし。天地一日も和氣無かるべからず。人心一日も喜神無かるべからず。菜根譚
○夫れ夫婦たる者は義以て和親し、恩以て好合す。楚徒航に行はるれば何の義か之れ存せん。譚訶似に宣ふれば、何の恩か之れ有らん。後漢書(烈女傳)
○不幸なる人々が不運の際に仲間を有つことは慰めなり。羅何俚諺
○情ある言葉は心の醫者なり。西 諺
○圓滿完備の婦人は氣高き用意を以て諫め、慰め命合す。ワーツワース
○有徳なる婦人の助言を輕んずる勿れ。ジョージ・チャブマン
○高尚なる男子は婦人の忠言によりて一層高尚に導かる。ゲーテ

○夫れ夫婦たる者は義以て和親し、恩以て好合す。楚徒航に行はるれば何の義か之れ存せん。譚訶似に宣ふれば、何の恩か之れ有らん。後漢書(烈女傳)

○不幸なる人々が不運の際に仲間を有つことは慰めなり。羅何俚諺

○情ある言葉は心の醫者なり。西 諺

○圓滿完備の婦人は氣高き用意を以て諫め、慰め命合す。ワーツワース

○有徳なる婦人の助言を輕んずる勿れ。ジョージ・チャブマン

○高尚なる男子は婦人の忠言によりて一層高尚に導かる。ゲーテ

○情ある言葉は心の醫者なり。西 諺

○圓滿完備の婦人は氣高き用意を以て諫め、慰め命合す。ワーツワース

○有徳なる婦人の助言を輕んずる勿れ。ジョージ・チャブマン

○高尚なる男子は婦人の忠言によりて一層高尚に導かる。ゲーテ

婦人は單に男子の配偶者たるのみならず、亦精神上の伴侶とならねばならぬ。

女子は、良人の心魂となる。これを妻と云ふ。

婦人の感化力はあらゆる精神力に缺く可からざる補綴なり。そは中世紀が甚だ潤澤に實證せるが如し。

女子は不幸者の天使と言はる。能く弱者を助け、失敗者を勵まし、苦しめる者を慰むるを以てなり。

苦痛悲哀交々來りて我が眉目を劈くに當りて、我を助くる天使は只一の汝(美婦人)あるのみ。

熱帯の太陽の下にも、兩極の寒冷の地にも婦人あれば、亦必ず幸福あり。

兄弟よ。人若し誘惑せられて過つことありとも、汝等は靈に導かる者なれば、己も亦誘惑せらるべきを思ひて、柔和なる精神を以て之を改善せしめよ。汝等互の荷を負へ。然らば基督の律法を全うすべし。

眞に談話の一技術たるを解するもの少し。一家族の心より結合し、心より同情せんとするには、唯だ愛情と善良なる意志とを要するのみならず、併せて互に心中を顯はし、顯はさしむる術と力を要す。人若し吾れを樂しめずんば、吾れより人を樂ましむることを努めよ。

若し人の缺點を擧ぐべき必要あるときは、少くとも之を親切に言ふべし。殊に兒童に對して然りとす。何となれば、兒童の小さき搖籃の成人の星空よりも曇り易ければなり。曾て聞く、畫家ルーベンスは一筆を以て笑顏の兒童を泣顔に變ぜしむるを得べしと。非難は私かにし、賞讃は公

出所不明

スマイルス

スコット

ムーア

保羅(聖書)

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

ジョン・ラボツク

争ふことあるべし。福澤諭吉(新女大學)
夫が戸外の經營に失敗して貧窮に沈むが如きは、是れは夫婦共の不幸にして双方の間に一點の苦情あるべからず。一沈一浮共に苦樂を同じうす可しと雖も、其の夫の品行修まらずして内に妻を飼ひ外に花柳に戯れ敢て獸行を恣にして内を顧みざるが如きは對等の配偶者を侮辱し虐待するの罪にして斷じて許すべからず。内君たる者は死力を盡して之を争ふべし。(中略)苟も内を治むる内君にして夫の不行跡を制止すること能はざるは、自身固有の權利を放棄して、其の天職を空しうする者なりと云はるゝも辯解の辭はある可からず。福澤諭吉(新女大學)
男子はその罪と共に此の世の火の試煉を潜り抜ける迄は、妻の美質を知らず。即ち彼女が如何に尊ぶべき奉仕の天使なるかを知らざるなり。ワシントン・アーヴィング
法律制度の如何に拘らず、妻が夫より優れたる人格を有する家庭にありては彼女が常に支配すべし。ノヴィコー
幸に好伴侶を得たる者は深く其の幸福を感謝し、自己を向上するによりて此幸福を失はざることを勉むべく、不幸にして悪き伴侶を有する人は徒らに運命を咎めずして、能く其の分を守り、之によりて自己を進歩せしめんことを圖るべし。スタインタール

五 例話

一 英國の經濟學者ミルの妻

英國のジョン・スチュアート・ミルも、その妻の助に藉りて、學業を成就せり。その著書中、自由の理といへる書などなれば、その妻の力によりて成れりとぞ、されど此の書の稿を脱せし時は、その妻既に身ま

にすること亦是れ一個の好原則なり。凡そ私かに言ひ聞かすことは自ら善き方に聞き取られ、親切上より來ると感ぜられ、實際の效力さるに多かるべし。これと同時に公に賞讃するは一層人心を感動せしめ、其の報は又一層大なるべし。ジョン・ラボツク
親切にして同情ある舉動は驚くべきことを爲すべし。古諺に曰く。舉動は人を作ると。實にや多くの人は舉動に於て成り、又之によりて敗る。ジョン・ラボツク
言語の秘密は同情の秘密なり。其の十分なる魔力は柔和なる人にのみ可能なり。ラスキン
純正の愛は同情にあり。同情のなき愛は自利に過ぎず。自利の人は人欲にして同情は慈愛なり。シヨベンハウエル
優しき言葉は邪慢なる心に打勝つ。英 諺
優しき言葉、靜なる言葉は結局最も強き言葉なり。此等は最も信服せしめ、抑壓し、征服す。グラツデン

快活なる妻は一生を樂しくす。西 諺
夫妻同居して妻たる者が夫に對して、誠を盡す可きは云ふまでもなき事にて、兩者一身同體共に苦樂を共にするの契約は生命を賭して背く可からずと雖も、元來兩者の身の有様を云へば家事經營に内外の別こそあれ、相互に尊卑の階級あるにあらざれば、一切萬事對等の心得を以て自ら屈す可からず。又他をして屈伏せしむべからず。即ち結婚の契約より生じたる各自の權利あるが故なり。婦人は柔順を貴ぶと云ふ。固より女性の本色にして大に男子に異なり又異ならざるを得ず。我輩の飽くまでも勸告する所にして、女徳の根本、唯一の本領なりと雖も、其の柔順とは言語舉動の柔順にして卑屈盲従の意味に非ず、大節に臨んでは夫の所業に

二 蘇格蘭の哲學者ハミルトンの妻

エデンブルグ大學校の論理學性理學の教師ハミルトンが妻も、亦よく夫を助けてその職を全うせしめぬ。ハミルトン五十六歳のとき、中風の症に罹り、起居進退こゝろに任せず、かくて後は、その妻常に夫の手となり、目となり、こゝろともなりて、萬その用をなせり。故に夫と思想を共にし、書を著し、書を校し、その口述するところを記すなど、何事によらず爲しうべきほどの事はこれに従事して、夫の助とならざることをなし。かくてこそハミルトンが、絶大の著作をば世にあらはしたれ。ハミルトンは、天性放恣にして、事に従ふに甚だ亂雜にて法度なかりしに妻よくその不足を補ひて、秩序を守らしめ、他人の侮を來さざりき。そはある時、ハミルトン、人と學事の競争をなし、後選ばれて學師となりしが、敵手のかたより、ハミルトンは虚にして實なしといふ惡言をうけたり、此時その妻百方力をつくして、其しからざるを辯じ、選舉人の誤らざるを證明し、さて夫の爲に講義の材料を書し、毎夜これをよみ易きやうに淨書し、翌朝夫の用に供ふるなどこれを助けて怠る事なかりしかば、ハミルトン後には講説の名家と稱せられ、歐羅巴洲中の當時の大家と仰がれたり。(婦女鑑)

三 英國の彫刻家フラックスマンの妻

アーン・フラックスマンは、二十二歳にて、ジョン・フラックスマンに嫁し、能くその夫を助けて、遂に良工の名をあらはさしめき。夫のジョン、後にはアーンが補佐を得て、名高き彫像師となれり。始アーンを娶りし頃は、いと貧しくして、生計にも苦しむ程なりしかど、アーンは柔順にして、才藝人に絶れ、佛蘭西、伊太利、及希臘等諸國の語に通じ、技術文學の嗜好さへありければ、よく家政を修め、夫の彫刻の材料なる畫圖を調じ、往復の書信を裁する等、夫をして家事を顧みて、爲に其業を怠るの念慮を生ぜしめず、故に夫ジョンは専らわが業に心をこめ、その妻を娶れるは、修業の妨げならで、却てわが業を賛ぐるものなりとおもへり。さるを一日ジョシュア・レーノルズといふ者、ジョンに向ひて謂ひけるは、汝この頃妻を迎へたりと聞けり、果してその如くならば、汝が業はこゝに止まりて、技術の名家たる事能はざるべしといへば、家に歸りてアーンにこの事を告げ、更めて謂ひけるは、レーノルズは、予を耻かしめしが如くなれども、こは却りて己の業を遂げしむるの志を興さしめたるものなり。己れ常に以爲く今の世に卓れたる技術家とならんには、早かれ晩かれ、一度は伊太利に遊歴して學ばざれば能はぬ事なり、とおもへば、今よりその覺悟にて、一層節儉を勤め、旅費を貯蓄して、この志を遂げ、而して婚姻は實に人の志業に妨あらざるのみならず、却て補益あるものたる事を入に示し、かのレーノルズが言に報いんとおもへりといへばアーンは喜て夫の果決の速かなるを賞讃し、夫妻心を一にして、私に旅費を貯蓄し、五年を待たずして、準備全く整ひしかば、共に伊太利に詣りて

同心一致し、居る事三十八年にて遂にその目的を達しけり。此間アーンは常に夫の傍に在りて、之を補佐し、夫の名誉を博するを以て己の幸福とおもひ、ジョンも深く之を信愛してその功を謝しけり。さるを不幸にもアーンは、一千八百二十年に、夫に先ちて病死しければ、ジョンが歎き一方ならず。これより精神頓に衰へて、後六年を経て身まかりぬ。
(婦女鑑)

四 フーベルの妻と蜂の研究

瑞西の博物學者フーベルといふ人は十七歳の時から盲目となつて、見る事が出来ぬ。そこでその妻の助に依つて、金・石・草・木・鳥獸などの學問に熟達した。
その妻は、初め、夫の苦心を緩うして、その心を慰めるため、農業を助けてゐたが、後には全く専門家となつてしまつて妻の目はやがて夫の眼であり、妻の頭は即ち夫の頭となつた。そのためフーベルは耳に聽いて感ずるのみにて、よく他の博物學者と同じ様に研究を続けることが出来た。そこで彼は人に語つて
「自分は、再び目が見えるやうになつたら、かへつて煩はしくてならぬだらう」と言つた。

このフーベルの蜂に關する論著は前人未發の説に富み、讀者の等しくその細密明晰なる研究に驚くところであるが、その脱稿に二十五年の星霜を費したことを知る人はあるが、その著者が盲目であつて、而かもそのかげに隠れたる妻の助あることを知る人は蓋し少からう。
小原國芳著(眞人の生活)

五 英國の電氣學者フアラデイの妻

フアラデイ夫婦は、終身幸福安寧にして、いと睦まじかりしかば、その名いと高かりき。フアラデイが妻は、常にその夫を扶けて、これを喜ばしめ、力を添へてその心を安んじけり。さればフアラデイが日記の中に誌して、婚娶は福祉光榮を享るの根源にて、その他の事すべてこれに及ばずといへり。果して配偶四十六年の久しきを經るも、其愛情常に新にして、前後一日の如く、その言に背かざりき。(婦女鑑)
フアラデイは製本屋の小僧から身を起して世界の電氣學に偉大の貢獻をなした有名な理學者である。
(著者註)

六 マルコニーの妻

或る人がマルコニーに問ふた。
「あなたは、まだ御年も御若いのに、どうしてあんなに、ドシ／＼立派な世界的の發明が出来るのですか」と。
マルコニーは、
「さうですなア、何故か分りませぬが、たゞ私は三度々々の食事が、非常においしいのです。それで實に氣持がよくて、非常によく物が考へられます」と。
と。宜なる哉。マルコニーの奥さんは、三度々々の食事を祈をもつて料理して居られたと。
小原國芳著(眞人の生活)

七 米國大統領マチソン夫人

ドルレー・ペーンは、北亞米利加の人デニームス・マチソンの夫人

なり。一千八百九年、夫マチソン合衆國の大統領に選ばれ、前後八年の間その高位に在りしが、そのころは國中最も多事にて、外には英國との戦争あり、内には黨派の軋轢ありて互に仇敵の如く、政府に抵抗すること頗る劇しく、此間に處するは實に至難なりといふべし。さるをその夫人の温顔優柔なるにより、各派反對の首領も、この夫人の前に在りては、不平の念慮忽ち解け、顔色怡々として相親しみ、宛かも氷雪の太陽におけるが如くなりければ、マチソンの人望を得たるは、全くその夫人の徳に因れり。マチソンは言寡く威望ある人なれば、人これを畏敬するに止まれるも、夫人は極めて強記にして、ひとたび見聞したる人は其姓名聲色を記憶して、忘るゝことなし。故に重ねてその人に逢へば、たちまちその義にあへるをりをおもひいでて、之に應答するが故に、人皆特殊の愛敬をうくるものとおもひて、倍々尊敬するの念慮を厚うせり。マチソン大統領の任期も満ちて後、故郷ヴォルチニヤに歸り、モントビラルといへる、いと壯宏なる家に住みけり。此時尙ほ老母ありけるが、身體は稍衰へしも氣力熾んにして、常に書をよみて、之を楽しみけり。ある時、人に語りて曰く、われおひたれど、今尙ほ無事に苦しむことなし。多くの書籍文章は、われをして多忙ならしむ。又わが身の幸福なるは、兩眼未だ瞑まらずして、一日の中には多くの書を見るを以て、またなき樂しみとす。此他の事はわらはが婦の介抱に依れり、されば今となりては、わが婦をば、やがて、わが母とおもへりとぞかたりける。このひと言にても、夫人の孝貞にして溫柔なりしを知るに足れり。さればある人の言に、夫人は容儀秀麗にして、人を動かすに足るも、尙之に勝りて、人を感動せしむる者あり、そは其姑に事するの狀、心切にして愛敬すべきの行儀あることな

り、とぞかたりける。マヂソンも亦老いて後人に語りけるは、わがド
ルレーとの結婚は、終身われを最大幸福に導びきたりといへり。夫人
一千八百四十九年の八月に身まかりぬ。その喪に會するものと多か
りしとぞ。
(婦人鑑)

八 賢妻キューリー(化学家の大黒柱)

女流寧馨兒、ワルソーといへば、今は露國西部の大都會なれども、
嘗て露國獨三強國の爲めに、劣敗の恨みを吞んで、空しく亡國の數に
入りつるポーランドの首府たりしなり。其ワルソーに今を距る四十餘
年前(昭和十一年より六十九年前)即ち一八六七年に、いと珍らしき女
子は生れたり。父は同市第一流の學校に教鞭を執る、物理學教授のエ
ム・スクロード・スキーンとして篤實なる理科の研究者なり。

少時の境遇 少女は幼時少時を父の實驗室に費しつ、少しく生長し
ては、白の前掛もて頭も足も包みつ、片手に筆を握りて、或は父の書物
の塵を拂ひ、或は取亂れたる器械を片付け、或は又父の働を見物した
りけり。年齢の加はるに隨ひ、科學に對する興味もおのづと深くなり
ゆき、父が堅忍不拔の研究に同情を寄せて、わが手に適ふ所の事は何
くれとなく之を助け、又己れには極めて些少と見ゆるものも、父には
極めて重大なるを見て轉た俗界と趣の異なる所を驚嘆しつゝありし
が、頓て父の片腕ともなり、其研究に缺き難き人物となりぬ。

學者の資格 今にはや、科學者第一の資格なる、我を忘れて耐久備
ず、面倒なる研究に熱中するの精神も備はり、又第二の資格ともいふべ
き緻密なる思想も、又何物も輕んぜざる注意も備はり來り、日々父が
實驗の結果を見るの外、又何等の楽しみもなきが如く、實にこれ父が

立派なる高弟なりしなり。

學校生涯 終に少女はワルソーの女子大學に入學し、其教授の助手
となりしが、同窓の學生皆「女教授」と稱名して、大に之を敬愛した
り。後巴里に來り、尙も熱心に學業を勵みしかば、貧困は則ち貧困な
れども、學識は大に進み、間もなく高等の研究を終り、「物理數學の準
學士」といふ學位を受くるに至れり。

好評噴々「女教授」や精力横溢研究目を重ねて、更に情氣を生ぜ
ず、如何なる面倒も敢て與みし難しとせず、精緻其極に達するも毫も
意に介せず、眞理の探究に全身全力を投じて、又他を顧みず、之を以
て之を教へし者は、皆悉く其精神を嘆賞し、必ずや他日大に報を受く
ることあるべしと、多大の望を其將來に屬したり。

理想の結婚 已にして「女教授」は結婚したり。世には結婚の曠衣を
脱すると共に、一切の希望と精神を放棄し、忽然平凡化する者少なから
ず、之を教へし教師をして、轉たその囑望の過大にして先見の明なか
りしを恥ぢしむるもの比々皆然り。されど「女教授」は他く違ふも「女教
授」なり、其良人と撰びし者は全く己が嗜好に同情を寄する一心同體
の名士なり。名はキューリーといひ、巴里市の物理化學の教授にして、
夙に篤學の名ある者、篤學の士に篤學の女互に其精神に感激して、茲
に理想の結婚は成立したり。之をか容貌に婚し財産に婚し名譽に婚
するものと比し來れば、其徑庭果して如何ぞや。

婚後の研究 琴瑟茲に相和して、夫婦が研究の精神は益々燃えつ細
大悉く之を分ちて、其間に些の區別を見ず唯夫は妻に比すれば遙に想
像力の旺盛なるに、妻は又堅忍不拔の徳を備へ、兩々互に其缺點を補
ひたり。

發明の野心 此頃教授ベツケレルは、ユラニウムといへる電氣を傳
導する元素を發明せしが、其光輝頗る盛にして、大に學術界の注目を
惹けり。キューリー夫人は以爲らく、ユラニウムよりも尙盛んなる光
輝を發するもの、必らず宇宙に存すべしと、かくて夫妻力を合せて、之
が發明に苦心すること多年、此間夫人は曾て一回も交際場裡に姿を現
はさず、全く實驗室に籠籠り、只管天然を敵として其秘密を釣り出す
ことに汲々たり。塵埃は山の如く器具は算を亂し、奮闘の光景轉々慘
澹、良人は顔色蒼然として日夜妻を助ければ、妻は又熱心掩まず、金
屬の試験に眼を晒したり。

大發明 一八九九年十一月、多年の勤勞は終に報はれて、特にボヘ
ミヤの鐵山に存する瀝青ウランと稱する礦物より、一種の化學鹽を抽
出するを得たり。此鹽はユラニウムの發光の性質を悉く備へ、而も其
光輝の強烈なるユラニウムの二百萬倍に及び、之に近接する物體は、
皆其能力を分與せらるゝなり。夫人曰く、「ハイ室内の空氣も、實驗者
の衣服も、皆悉く發光しますよ」と、嗚呼始めてこの赫灼の新らしき光
輝に接せし時の夫婦の喜びは、果して如何ぞや。その茲に至る迄の困
難の多大なりし丈、其喜びの多大なりしは固より言を俟たざるなり。

夫妻の共働 此研究の間に於ては、夫婦は恰もアダムとイブの如く、
互に互を唯一の杖と頼み、又他に人なく社會なきものの如く、全然一
心同體的の働をなしたりしかば、此大發明の榮譽は、正しく夫妻共有
のものなりしなり。されど良人は此功勞を妻に歸し、妻は又此名譽を
良人に譲り、相争うて下らず、緻密なる觀察眼を以て、其實驗せる金
屬中に、未知の礦物の發光力に富めるものあるを看破せし者は、夫人
なりしなり。又頻りに實驗の歩を進め、此推定の確實なるを確證する

の勞を取りし者は良人なり。嗚呼此學術界近代の一大發明は夫人なく
しては見る能はざると同時に、良人なくしては又見る能はざるなり。

家庭 夫人は一見學者然として、佛語も強き外國訛りを以て之を語
り、何事にも一心不亂となる傾向ありて、一種他の魂を迷はすの力あ
り、夫婦の間に九歳の女兒あり、其活潑にして無邪氣なる言動は、大
に両親の喜びを買ひ一陣の春風は常に此邊より動いて、其家庭を温め
ぬ。

名譽 一九〇三年夫婦はノベル賞金八千磅を受けたり、ノベル賞金
とは十九世紀に於ける瑞典の化學の大家アルフレッド・ノーベルが、學
術獎勵の爲め、其遺産千七百五十萬圓の利子を使用することを定めし
ものにして、毎年科學と文學と世界の平和とに最も功勞ありし者が、
其分配に與かるなり。夫人は其後セヴルスの學校の教授となり、今も
尙日々良人と共に實驗室に籠籠り、嗚呼これ文學界に於ける英のプ
ラオニング夫婦と好一對の理想の夫婦なるよ。

良妻の資格 「人の妻たらんものは、よく夫を慰めて内を顧みる煩ひ
なく、外に向ひて働き得るやうなすべし」これ良妻は則ち良妻ならん
も、尙昔風の良妻にはあらざるか、「妻にありたきは、夫の業を夫のみ
の業と思はて、夫の業やがて我業なりと、常に思ひこみてあらん心が
けなり、固より夫の畫筆執る傍にありて、夫の海を描けるに船を描き
添へ、夫の弓引く後に立ちて夫の弦持つ手を曳けといふにはあらず。

唯夫の業をよそ事のやうに思ひ居らざれといふ事なり。」これ儘に前者
に一步を進めたる良妻ならんも、此二十世紀の活動世界に於ける理想
の良妻は尙之よりも一步を進みて夫の海を描けるに船を描き添へ、夫
の弓引く後に立ちて夫の弦持つ手を曳く」所の、智徳兼備の女子なる

やも知るべからず。

實例 現に此種の良妻、歐米に於ては近年大に増加の傾向あり。今其實例一二を擧げて參考に供せんに誠に英國學士會院の會長子爵ウイリアム・ハギンスの夫人を見よ、彼女が學術研究の精神は、婚後益々旺盛を來し、日夜共に與に觀察し試験し比較し攝影し終に天文物理學の新學問を開き、其良人をして成功の月桂冠を戴かしむると同時に、己れも亦不朽の著作を後世に遺したり。又阿弗利加の探検者子爵ベिकाの夫人を見よ。彼女は良人と共に暗黒大陸の沼澤を跋渉し、終にナイル河水源の發見者たる名譽を夫と共に分ちたり。余は固よりかゝる突飛の行動を我國妙齡の女子に勧誘するものに非ず、唯世界の潮流に鑑みて聊か賣卜者流の口吻を眞似るのみ。或は又我東洋の女子は一種特別の發展を遂げて世界に模範を示すべきか。果して然らば、これ又世界に一大貢獻をなすものとして、余は大杯を擧ぐるに躊躇せざるなり。

(近世名婦傳)

九 木村長門守の妻

木村長門守の妻女は眞野氏である。夫長門守身に重任を負うて出征した時が年漸くにして十八であつた。然るに流石は武士の腹から生まれただけあつて、夫に別るゝ時もさしたる女々しき振舞が無きのみならず、出征の陣中へも時々音信せしも、皆一として戀愛的な女々しい聲言はなく、たゞ邦君の爲また家門の爲、恥を残さぬやう、日本男子、否、武士の面目を汚さぬやうにありたいと夫を勵ます切言のみであつた。今其の一端を掲げるならば次の如くである。

一樹の蔭、一河の流れ、是れ他生の縁と承り候にこそ。そもおとゝ

「柿の木はどうした。柿の木は！」と慌てて妻に訊ねた。すると妻は両手をついて、

「私が今日切り倒してしまひました。」

「何ッ！ 切り倒したと……私が日頃いかに彼の木を大切にしておつたかを知つてみたであらうに……」

「さあ、さればこそ切り倒したので御座ります。能く御考へ遊ばしませ。貴郎はいつも秋になると、學ぶべき學問は餘他にして、柿の木のことのみ心にかけて居らるゝては御座いませぬか。されば、いつそ彼の木を無きものにさへすれば、貴郎の心は奪はれず、學問に精をお出しなさる事が出来ようと、實は此の柿の木が怨めしうて、斯くは切り倒して御座います。」

作左衛門は、兩腕を組んだまゝ凝つと妻の話を聞いてゐたが、話し終ると、

「あゝ私が悪かつた。成程汝の言ふ通りぢや。今後は及ぶ限りの精を出して勉學するであらう。」

と大いに悔悟して、其の後は専心學に勵んで、遂に斯界の大學者となるを得たと云ふ。

(修養全集)

十一 梅田雲濱とその妻

勤王の士梅田雲濱は、想ひをたゞ王事にのみ傾けてゐたので、家の内は文字通り赤貧洗ふが如き苦境にあつた。ところが或日、西郷隆盛が訪ねて來たので、雲濱は非常に喜び、

「珍客ぢや、御馳走せい。」

せの頃よりして借老の枕をなして、只影の形に添ふが如く思ひ參らせ候、此頃承り候へば此世限りの御催のよし。かげ乍ら嬉しくまゐらせ候。唐の項王とやらむは、世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名殘を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別れを歎くとやら。されば世に望み窮きたる妻が身にてはせめて御身御存生の中に最後を致し、死出の道とやらむにて奉待上候。必々秀頼公多事海山の鴻恩御忘却なき様頼み上まいらせ候あらゝめて度かしく

秋山悟庵編著(精神修養訓話)

十 怨の柿の木(高橋作左衛門の妻)

高橋作左衛門は、幼少の頃から極めて學問を好み、麻田剛立に就いて天文曆學を學び、寛政年間には曆學界の一人者となつたが、それまでは大阪定番の同心を勤めて居た程の輕身であつた。

彼の家に一本の柿の木があつた。秋になると枝も撓む程に實を結ぶので、作左衛門は其れを無上の樂みにして、いつでも秋になると、我が研究の天文學は餘他にして、柿の木に夢中になつてゐた。

或秋の事であつた。例年の通りに柿の實は幾千といふ程なつてゐた。或日作左衛門は役所からの歸途、心中柿の實の事など思ひ浮べながら歸宅して見ると、こはそも如何に、柿の木が見えない。作左衛門の驚きは一通りでない。矢庭に家へ飛び込みざま

と妻に命じた。もとよりそれ程の餘裕もあるべき筈はないのだが、どうしたのか、暫くすると妻女は、立派に酒肴を調へて賓客を歡待した。

やがて陶然と酔がまはると、南州は雲濱に向ひ、

「時に御主人、御令閨は大層琴がお上手と聞き及んでゐるが、是非一向拜聴させて戴きたいものだ。」

と所望した。妻女は再三辭退したが、聞き入れぬ。はては酔つてゐるので雲濱まで言葉添へるので、妻女も致し方なく、

「ては未熟ながらお聴きに入れますが決して私の弾きます所を御覽遊ばされませぬ。」

と堅く念を押してから、熱燗の酒を三四本持つて來て置いて引退がつた。

小半時も過ぎると、隣り座敷の引き廻はされた屏風の蔭で、妙なる琴の調べが始まつた。雲濱はふと

「どうして弾く所を見ては、いけないぞ、と言つたのだらう」と不思議に思つて覗いて見ると、妻女は下橋袴一枚で琴の前に端然と坐つて、琴をかなでてゐるのであつた。

やがて客が歸ると、妻女は夫に向ひ、

「なぜ貴君は男子でありながら、約束をお破りなされたのです。女の身であのやうな所を見られますのは、この上もない恥辱、それで堅くお断り申しあげたのに。」

と嚴然としてなじつた。これには雲濱も一言もなかつた。

「いや、俺が悪かつた。雲濱一生の失策ぢや。」

と平身低頭して詫び入つた。それは妻女は酒肴を調へる爲に、最初琴

を入質したのだが、強つて琴を所望されて致し方なく、一帳羅の着てゐる着物を身ぐるみ脱ぎ、琴と入れかへたのが一目で判つたからであつた。
(美談逸話集)

十二 名優芝翫の妻

名優中村芝翫の妻おみちは仲の町尾張屋五兵衛の娘であつたが芝翫が貧乏して裏長家住ひをしてゐた頃、大火事に會つた事がある。

「それ火事だ」といふので、芝翫は「さあ俺は金を持つて逃げるから、お前は目星しいものを持つて出ると叫んだ。何の貧乏人の裏家住ひ、金など一文もあらう筈はないのだが、夫に貧乏の苦を掛けまいと、日頃念じてゐたおみちは、

「さあこれを持つて行つて下さい」と重い包みを渡した。火事がやんでから、芝翫はその包を

「さあ、この金はお前に預ける。」と言つて妻に渡した。おみちはどこまでも金包のやうにして、それを受取つたが、何條知らん、それは砥石を風呂敷に包んだ、ニセ金であつたのだ。

火事騒ぎの最中にすら、夫に貧を知らずまいとして、只管藝道の鍛錬を心掛けさせた名優の妻の苦心と氣轉、涙ぐましい貞烈ぶりではあつたのだ。
(美談逸話集)

六 備考

一 婦人の力

一 英國の有名な文豪カーライルがスコットランドの田舎に引きこもつて、十年を費してこしらへあげたサター・レサータスの原稿を携へてロンドンにのぼり、有名な雑誌社を歴訪してそれを出版させようとしたけれども、どこでも一向に顧みてくれませんでした。流石のカーライルも失望落膽し、つくづく自分の不遇を歎じ、すごくとスコットランドへ引きかへしました。カーライル夫人はカーライルの著作にある天才のひらめきを指摘して、勵まし慰め、ほんたうにカーライルにとつて天下唯一人の眞の知己として田舎生活の淋しさわびしさ、貧しさに耐へつゝ、遂にカーライルをしてイギリスばかりでなく世界に名を成さしめるやうになりました。

二 ジョン・スチュワート・ミルにしても、若しその夫人の内助の功がなかつたならば、その著述の大部分は熱の無い知識の骸骨みやうなものになつたかも知れません。

サア、ダブリュー・ハミルトンの夫人も亦内助の功の多かつた人で、エヂンバラ大學の教授の椅子のあいたとき、ハミルトンは多くの候補者を超えてその職につきましたが、考に耽りすぎて、考へたことを纏めるのに無性でした。偶々講義の原稿などをこしらへても書き放して甚だ不整頓でした。それを夫人は非常な努力でまとめてゆきました。そのためハミルトンの哲学上の深遠な考が立派な論文となりました。ハミルトンの天才は夫人の補助と刺戟によつて當時世界第一流の哲學者たる地位を占めるやうになつたのです。もしこの夫人が無か

つたならば、彼は不遇な村學究ぐらゐで終つたかも知れません。
三 アメリカ合衆國最初の大統領ワシントンの母は、其の子が世界の人々から仰がれる榮譽の地位に昇つたのちも、相變らず元の田舎に住み、農家の一婦人として仕事をしてゐました。この平凡な謙虛な天真な生活のうちからこそワシントンのやうな、功名富貴を超越した偉大な人が生れたのです。

アメリカの文豪ウエズデル・ホームズがいひました。「頭の女は、情操の女ほど人を満足させません。白薔薇は紅薔薇ほど人を喜ばしません。」と。

四 詩聖といはれるワーヅワースも亦、その妹メリーの温い心の力によつてその天才を發揮することが出来たのです。ワーヅワースはスコットランドの貧乏人の子でしたから詩作どころでなく、實業に身を投じて産を起さうとしたのですが、その妹のメリーが兄の天才を認め、貧乏世帯は私が引受けますからというて、景色で名高いスコットランドの美しい湖のほとりに小さな家を借りつけ、兄妹はそこに寂しい住居をして天然と親しみました。この妹の心盡しがワーヅワースを遂に詩聖にしたのです。

五 わが國でも、光明皇后が宗教の世界に偉大な光をかゞやかされたのを始として、和氣清麻呂の姉の廣虫が、藤原仲麻呂の罪に連坐した死刑囚の恩赦を乞ひ、貧民の棄兒を養育し、弟を勵まして道鏡の非望を挫いたことや、紫式部が、文學の世界に不朽の功績をのこした上に、その人格の感化を後の世まで遺してゐることや、それから松下禪尼の儉徳と袈裟御前の貞烈とが鎌倉時代の婦人の鑑となつてゐることや、山内一豊の夫人の忠實と機智、細川忠興の夫人の貞節、眞田信之

二 夫妻の和合

の夫人の深慮などが織田・豊臣時代の婦人の面目を再現してゐることや、赤穂四十七士の母や妻が徳川時代の婦人の日本魂を遺憾なく發露してゐることや、野村望東尼、蓮月尼、村岡局、税所敦子、瓜生岩子などが幕末から明治へかけての日本婦人の長所を發揮してゐることなどは、私達に日本婦人の眞の力を説明してくれるものです。

六 支那でも四千年間には立派な婦人がたくさん出てゐますが、そのうち、明の太祖の皇后馬氏は、儉素で、謙讓で、婦徳が高く、秦漢以來第一と稱せられたほどです。また明の鄭成功の母は、肥前平戸の田川氏から出た人で、鄭芝龍に嫁して、成功を生んだのです。明が亡び鄭氏の一族が清の軍勢に圍まれたとき、節を守つて貞烈な最後を遂げました。小西重直、大石和太郎共著(最新女子修身書)

女子、他に嫁するは、己れの家を去りて夫の家に入るものなるを以て、夫の家を我が家と心得るを我國の風となす。かくて、夫婦一心同體となり、老人をいたはり子孫を養育し、能く家業に盡さば、家自ら榮え、之に反すれば、家必ず衰ふべし、されば、夫婦の道は和合より大なるはなし。勅語にも「夫婦相和シ」と諭し給へり。
夫婦和合の本は、純粹にして雅りなき親愛にあり。妻たる者、眞に一毫の隔てなく、一點の偽を存せざる眞實を捧げて、夫と喜憂を分かち夫と苦樂を共にする誠あらば、夫は必ず其の志を喜び、其の妻を愛護して變ることなかるべし。されど、親愛には常に尊敬を伴ふを要す。親愛の結果は、とかく狎れんとする傾を有す。若し狎るゝに過ぐるときは、互に輕侮の念を生じ、遂に不和を招くにも至るべし。夫は家長

にして、家族保護の中心なれば、妻は其の長上たる地位を尊び、常に己れの言動・動作を慎み、苟も禮意を失はざるやう心掛くべし。是やがて、夫より尊敬を受くる所以なり。敬と愛と兼ね備はり、情と義と並び至りて、夫婦の和始めて完し。

夫婦特質の差異は先づ其の職分に現はる。夫の外に働き、婦の内を治むるは、單に古來の慣習に過ぎざるが如くなれども、實は男女の性情・體質より生じたる當然の結果なり。されば、主婦たるものは能くその一家を治め、子女を養ひ、常に其の夫をして内顧の憂なからしめざるべからず。これ實に人性自然の道に適ふものにして、古語に「夫婦別あり」といへる本義にも合せるものなり。

夫婦は人格としては同一なれども、其の地位を異にせり。「夫唱婦隨」は古より常道とせる所なり。されば妻たるものは、常に從順の美德を守り、夫をして家長たるの實を擧げしむべし。若し夫に信ぜられずて萬事を任せらるゝに至るとも、夫を敬ひ、父老を尊び、決して驕慢の心を起すことなくひたすら家運の隆昌を以て念とせざるべからず。婦人の奥ゆかしさは、實に斯かる所にありと知るべし。

夫婦の縁は愛情によりてつながら、愛情の根柢は相互の貞操に依りて保たる。蓋し愛情の純潔なるは、愛情の他に移らざるを示す所以なり。この故に貞操は、夫婦間に存する一切道德の基礎なりといふも過言にあらず。従つて、男女によつて其の輕重を分つべき道理あることなし。されど我が國の組織は、家族制を基礎とし、特に血統を重んずべき國なるが故に、妻たるものの貞操は、家・國に對して、一層重要な意義を有することを知らざるべからず。これ我が國が古來女子の貞操を嚴肅にせる所以なり。されば、女子たるものは、其の純潔を保

つが爲に、終生全力を注がざるべからず、特に處女の純潔は身命にも換へ難き寶玉にして、あらゆる婦徳の源泉たるものなり。若し處女にして其の純潔を失はば、玉にして疵あるが如く、全くその價値を失ふものなれば、身を完うする覺悟なかるべからず。

三 内助の道

妻たるもの、又主婦として能く内助の務を完くせんには、先づ其の夫の性質・境遇と、地位・職業とを理解して、深く之に同情し、其の興味に同化して、夫を慰安し、内能く家政を整へ、子女を養育して、夫をして内顧の憂なからしむるを以て第一となし、尙進んでは、夫の事業に助力し、其の足らざるを補ひ、及ばざるを助け、過失あらば之を諫め、失敗あらば之を勵ますに至らざるべからず。要するに、良妻たるものは、主婦として、家政を整ふると共に、夫に對しては、常に懇篤なる同伴者、親切なる慰安者、忠實なる補助者たらんことを期せざるべからず。

家道訓に曰く、「家を能く保つと保たざるとは、夫の徳・不徳のみによらず、又妻の行の善惡によるものなり。古人『家貧うして良妻を思ふ。』と云ひけんも宜なり。夫は外を治め、妻は内を治むるが職分なり。夫能く勤儉なれども、妻若し放逸にして、怠りて勉めず、奢りて

吉田靜致著(女學校用修身教科書卷四)

儉約ならざれば、家を保つこと難し。」と實に一家の内政を整理し、子女を養育し、夫をして全力を其の業務に専ららしむるは、主婦として最も重要な務なり。伊藤仁齋の妻は、貧困の間に能く家事を整へ、數人の子女を養育して、夫をして其の研究に専心ならしめ、又其の五子をして各々知名の學者たるを得しめたり。誠に後世主婦たるものの好模範にあらずや。

人の天分・習性は様々なれば、夫たる人の性格にも長所あると共に又短所あるを免れざるべし。妻たるものは、如何なる場合に於ても、能く夫を理解し、夫に同情して、常に誠實なる友となり、生涯の苦樂を分たざるべからず。

若し夫の計畫する事業に失敗多く、動もすれば意氣沮喪せんとするが如き場合に於ては、妻たるものは、一層力を内助に盡し、夫の疲れたる精神を慰め、元氣を鼓舞して、困難に打ち克たしめざるべからず。

かの貝原益軒の夫人及び、ダーウキンの夫人が、能く家政を整ふる外、常に夫を慰めて其の研究を助け、共に其の夫をして、一代の學者たる名譽を膺はしめ、幾多の名著を後世に遺さしむるに至りたるが如きは誠に妻たるものの龜鑑と謂ふべし。之に反して、ギリシヤの聖人ソクラテスの妻は、常に良人の無能を罵り、一家の貧困をかこちて終り、磁器の發明家パリスの妻は、夫の熱狂と貧苦とを怒り、遂に良人を捨てて去れり。かくの如きは、皆其の夫を理解すること能はざりしものにして、妻としての恥之より大なるはなし。

要するに、人の境遇如何は其の盡せる最善の外に、時として免れ難き運命にも由れば、女子結婚の後は、誠意夫を助けて、家運の繁榮を

圖り、卑劣の心を起さず、未練の振舞をなさず、吉凶禍福も其の來るがまゝに甘受し、再び夫家の闕を出でざる覺悟あるを要す。「人事を盡して天命を俟つ」とは、女子の一生に取りて、大切な一教訓なりとすべし。

(吉田靜致著女學校用修身教科書)

家屋のことを俗に家船又は家臺船と謂ふ。面白き俗言なり。家をば實に船と心得べし。主人は船頭なり、一家の者は皆乗合なり、世の中は大海なり。然る時はこの家船に事あるも、又世の大海に事あるも、皆遁れざることにして、船頭は勿論、この家船に乗り合ひたる者は、一心協力この船を維持すべし。さて、この家船を維持するは、楫の取りやうと、船に穴のあかぬやうにするとの二つが専務なり。

この二つによく氣をつくれれば、家船の維持疑ひなし。然るに、楫の取りやうにも心を用ひず、家船の底に穴があきても、これを塞がんとせず、主人は働かずして酒を飲み、妻は遊藝を樂み、棹は碁・將棋に耽り、二男は詩を作り、歌を詠み、安閑として歲月を送り、終に家船をして沈没するに至らしむ。歎息の至りならずや。たとひ、大穴ならざるとも、少しにても穴があきたらば、乗合一同速かに力を盡して穴を塞ぎ、朝夕ともに穴のあかざるやうに、よく心を用ふべし。これ乗合の者の肝要の心得なり。然るに、既に大穴あきて、尙これを塞がんとせず、各々が己が心のまゝに、安閑と暮して居て、「誰か塞いでくれさうなもの」と、待つて居てすむべきや。助け船のみ頼みにして居てすむべきや。船中の乗合一同、身命をも抛ちて働かずばあるべからざる時ならずや。

二宮尊徳(二宮翁夜話)

四 理想の妻

一、夫婦が相愛するのは當然のことであり、また重要なことであるが更にこれに敬を加へなければ、夫婦の和を永續させることが出来ぬ。また同棲年を重ねて、遭逢百端の間に於ては、自然に感情が衝突したり、意見が齟齬したりすることがある。しかも、妻は常に洋たる雅量で以て、夫の過失、缺陷をも恕する所がなければならぬ。かやうにして、理想の妻は、愛・敬・恕の三つを重んずるやうになるのである。

二、理想の妻は、その赤心から溢れ出る温情に由つて、夫の最良の伴侶となり、且つ最善の理解者、慰安者となるべきであると同時に、家庭の内に、少しの不安、疑惑、不和、憂慮をもあらせない。これがために、理想の妻は、多くの美點と強い感化力を具へて居る。

三、彼女は何よりも先づ強壯且つ快活である。必ずしも美貌ではないが愛嬌に富んで居る。身體、衣服は清潔であり、風采は楚楚としてしかも活氣に満ちて居る。その音聲の耳ざはりも良く、高低緩急その宜しきに叶つた話しぶりは人を引きつける。子供達は固より、家人、傭人に對しても、彼女は叱咤とか怒號とかいふ言葉をも知らない風である。争は彼女の最も忌む所のもので、他人の過失は決して洗ひ立てない。その上、優雅な禮儀作法は彼女に氣品を興へる。これに由つて、彼女は夫の前にも不躑躅な態度を見せない。舅、姑との折合をつけるのが上手で、親類や世間との交際にも相當の情誼を忘れない。

四、彼女は貧富、順逆のあらゆる境遇に一身を順應させることが出来る。如何なる悲運にも沮喪することがなく、絶望することがなく、或は夫と子との愛に生き、或は趣味に生き、或は信仰に生きて、終

子供の讀み物に注意し、また科學の趣味があつて、傍から觀て居ると、うるさきな子供の質問にも、調べるものは調べて、痒い所に手の届くやうに説明を與へ、決して逃げたり、ごまかしたりしない。和洋の音楽を聴く耳もあれば、和洋の繪畫を見る眼もあり、暇にはそれらをやつて見ようとの心掛もある。彼女の夫は夕食の卓上に、新聞の主要な記事について、彼女と語り合ふのを日々の楽しみとする。彼女は新聞、雜誌の選擇を誤らないだけでなく、修養のために讀書をも怠らない。

八、子供以外の家族の人々に對しても、彼女はやはり母である。故に、夫の日常に關しても、常に母のやうな注意を拂ふ。夫の職業に對する理解も十分にあり、死ど其の助手として働き得るだけの才幹をも具へて居る。夫が何事にか激昂し、もしくは落膽した場合に、愛と智と勇とを以て百方これを慰藉し、中正の道に、又は希望の前に、再び夫を伴うて出る。理想の妻の美點と感化と光輝とは、凡そ此の如きものである。 下田次郎著(女子修身書卷四)

五 女子と家庭生活

現代は女子の生活に種々の變化を興へた。しかし、家庭生活に於ける女子の貴重な任務に就いては何等根本的變化はあり得ない。勿論家庭生活の様式は時代と共に變るであらう。文化施設の普及と女子の合理的の發達とによりて、家庭生活が能率的に改善せられ、家庭婦人の時間的餘裕も多くなり、その餘裕を以て社會的生活に用ひるに至れば、男子は外に女子は内にといふ昔の鐵則がその文字通りにのみは行はれなくなる。殊に女子が職業に従事することが多くなれば家庭生活

始心の平靜を失ふことがない。彼女の前には、不幸は間もなく幸福に轉ずる。微笑は彼女の面を去らず、嘗て一回も讒面を見られたことがない。彼女は喜ばせ易くて、怒らせ難い。よく滑稽、諧謔を理解する所などは、如何にも常識の發達して居ることを思はせる。

五、彼女は決して利己的でない。如何なる種類の快樂でも、夫や子と分けることの出来ないものは、決して追求しない。化粧さへも夫のためにするとの心持を失はない。夫への奉仕、獻身とあれば、何物をも惜しむ所がない。とはいへ、彼女は人格の人である。その自覺のある點、理想を有する點、責任を重んずる點、學識、常識を兼ね具へた點、どちらから言つても人格者であることを認めずには居られない。従つて、その人格を蔑視するやうなことは、何人にも、その夫にさへも許さない。貞操については、固より過去に於て些の汚點もなく、婚後に於ても一度の誤解を受けたこともない。すべて夫に對して内證、秘密といふものが少しもなく、従つて表裏のありやうもない。

六、彼女は經濟の觀念が明確で、家政の執り方が甚だ合理的である。決して無駄な買物をせず、夫の知らない負債など拵へたことがない。少しも勞働を厭はず、子供の着物は勿論、大人のものでも、不斷着はなるべく自分の手で縫ふやうにする。流行の衣裳が買へないからとて不平はいはないが、皆の喜ぶ物は適度に買つてやりたいたいと思つて、勤儉に油斷がない。料理も勿論巧者で、喜んで食べる家族の喜を自分の喜とする。時間を惜しみ、物を粗末にせず、利用に巧みて廢物を出す事が少く、働く時は顔をも手足をも黒くして働く。

七、彼女は如何にも所帯一方に没頭して居るやうであるが、それでも

に就いて昔の女子の知らなかつた考慮の増加して來るの已むを得ない。況んや、女子が男子に隷屬する意味に於て家庭勞務に服することには現代の自覺がこれを許さなくなるであらう。しかし家庭といふ平和な生活の實際的管理者として、殊にわが子の養育教育といふ最も建設的な仕事の當事者として、女子が占むべき家庭への大任務は一點の變化も一毫の減却するところもないのである。すなはち、男子は外に女子は内にといふことは、外形的には變つても、その生活意識の内面的意味に於て、恐らく永久に變りない生活原則であらう。いひ換へれば家庭生活はその最も本質的な部分に於て、いつまでも女子の特質を緊要とするのであり、又、女子は家庭の主婦たり母たることに於て、その天賦の特質を常に最もよく完成し得るのである。

女子と家庭生活とのこの必須的關係に就いての昔の女子にはなんらの問題もなかつたのである。それが近來に於てなんとなく問題となり來つたのは何故であらうか。その理由と見られるものが四つある。第一は女子がその個性的發展を許されるに至つて、非個性的な家庭生活を無意味に感じ來たこと。第二は女子が社會生活に進出するに至つて、その廣い活動の興味に比して家庭生活を狭く且つ單調に感じ來たこと。第三は從來女子のせつかくの家庭生活が非自覺的であつたために、一種の屈從感と倦怠感とに飽き足らなくなつたこと。第四は現代生活の興奮性と享樂性が地味な家庭生活を厭はしめるやうになつたことであるまいか。この中第四の理由を除いては、現代生活のよき意味に於て、一應無理からぬところもないではない。殊に第三の理由は女子としての貴重な家庭的任務が、餘りにもたゞ傳統的になり隨つて盲目的に機械的に行はれてゐた風があるために、そこに一切を自覺の上に

置かうとする現代の女子をして満足させ得ないものがあつたのであらう。しかしこれを以て、女子と家庭生活との心須的關係を否定する理由には少しもならない。第一と第二とは新生活との間に正しい調和が講ぜられ、ばよいのである。第三は新しい觀念によつて舊き生活を認識し直せばよいのである。すなはち、これらを假りに理由らしく擧げて見ればよいのである。すなはち、これを假りに理由らしく擧げて見たのは、女子の現代化の過渡期にある昏迷と惑亂とを事實に於て見ただけであつて、なんら本質性を認め得られるものではない。假りに今日多少の衝突と矛盾が起り来るにしても、それは新しく考へ直すことによつて積極的に解決せられ得ることのみである。

家庭に於ける女子の責務が非個性的なのは事實である。特に個性に基づき、特殊の天分によつてのみ出来るといふことではない。よき主婦たりよき母たるものが、藝術家たり科學者たる如く、自己の天才を發揮する譯ではない。しかし、性別の比較に於ては特有の天賦である。すなはち、個性的ではないが性差の差であるといひ得る。殊にその任務を自覺してこれを完全に發揮するためには、家政、家事の學理に於ても技能に於ても、いくらかも深い研究の知識問題があり、工夫があつて、昔の如く單なる傳習的勞役に留まるものではない。又、家庭生活が社會生活に比して狭いのも事實であるが、それは單に活動の對象と範圍に於て量的に狭いといふだけで、愛する家族のために盡すことが、なんでも狭いのであらう。社會に對する活動とは本質的に異なつてゐるものを廣い狭いと比較することが誤りである。殊にそれを單調なりといふは社會生活に於ける多様と變化とに較べていふだけで、わが家庭のためにする日々のごとがなんでも單調に感ぜられるのであらう。

う。すなはち、狭いといふのも單調なりと感ずるのも、仕事としてのみ考へるからであつて、家庭生活そのものの特有性を基礎として考へてゐないのである。但し、この點は家庭生活の體驗に於て初めてよく會得されることであつて、學生時代には或は理解が困難であるかも知れない。しかし、よき家庭人たるの喜と誇りとが、決して舊き女性觀に基づくものでなく、現代の自覺の上に、昔よりも一層深い意識を以て築かれ得るものであることを忘れないやうにしたい。随つて、女子と家庭生活の必須的關係に就いて、妄りに現代の一方觀に走つてこれを輕視したり、況んや抛擲したりする如き考へをもつことのないやうにしなければならぬ。 倉橋惣三著(女子修身卷五)

第十一課 時代思想の變遷

一 要領

各時代には夫れ、特有の時代思想があり絶えず變遷推移するといふ理を説いて思想問題を會得する一端とするのが本課の要領である。

二 注意

(一) 個人の思想に變化があるやうに時代思想にも變遷がある。萬物は「流轉す」といふは古代希臘哲學者ヘラクライトスの標語であり、「時は萬事を改新す」といふ近世哲學の父と呼ばれる英人ベーコンの語である。歐洲大戰は世界に思想の大動搖を來し、我が國には思想問題を起してゐる。

(二) 思想界には通例急進思想と保守思想とが兩々相對抗してゐるが其結果は長短相補つて其の中正を得れば穩健な思想の發達進歩を來す。

(三) 時代思想變遷推移の根柢には終始一貫して生活安定と幸福増進といふ人道の要求が流動してゐる。

(四) 我が國に波及した現代思想も、今日まで既に幾多の變遷を見てゐる。最初デモクラシーに始まり社會主義を経て文化思想に及び最近には民族本來の面目に歸り日本精神の高潮を見てゐる。

三 設問

- 一 時代思想又は時代精神とは何を指すか。
- 一 時代思想が急激に變るときはどんな時か。
- 一 最近の思想の大動搖は何によつて起つたか。
- 一 老人許り集まれば思想の傾向はどうなるか。
- 一 青年の思想許りて社會が健全に發達するか。
- 一 老人と青年には思想上どんな長所短所があるか。
- 一 思想の新舊は直ちに善惡の標準になるか。
- 一 時代思想の變遷には何か終始一貫の根柢があるか。
- 一 歐洲大戰勃發後に俄かに思想問題が起つたのは何の爲か。
- 一 思想問題が起つてから勞働者が俄かに勢力を得たのは何の爲か。
- 一 青年學生が左傾思想に加擔することは穩健中正と言へるか。

四 訓言

時代・時

○時代は饒舌となり或はまた啞となる。

ゲーテ

○過ぎし時代は七つの封印ある書籍なり。時代精神と稱するは下層にあれど、時代を反映するは、上流の精神なり。 ゲーテ

○人は其の欲望が満たされざるや、直ちに時代の惡しきを懇ふ。 ローリー

○同時代の人々は其の眞價よりも寧ろ其の人を解し、後代の人々は其の人よりも寧ろ其の眞價を知る。 コルトン

○果を齎らざる時代は名聲にも價せず。 ヤング

○凡てを變化せしむる時は又人の氣風をも變化せしむ。 故に各時代には其の時代の嗜好、精神及び風習あり。 佛

○時代が違へば違つた人物が出来る。 獨

○時は萬事を改新す。 ベーコン

○時は經驗を積める醫者の如し。治療は緩なるも確實なり。 佛

○時は最良の忠告者なり。 英

○時は大發見者なり。 英

○汝はノアの船から出て來りしに相違なし。(時代後れ) 英

○清閑は凡ての思想の自然の住家なり。 佛

○不忍容は思想上の我利なり。 英

○時勢に従へ。 獨

○進まざる者は地歩を失ふ。 羅

○時代に先んずる人は不幸なり。 佛

○上り道の峻險なるは當然なり。勇奮すべし。 佛

○藝術が古代の世界に有せし地位は、即ち科學が近代の世界に有するものなり。 佛

○黃金時代は黃金が世を支配せざりし時代なり。 マルネジア

チスレリー
マルネジア

○盲目的傳説が從來我等の背後に置き來りし黄金時代は、實は我等の前方にあり。
○黄金時代は既に過ぎ去りぬ。たゞ美人のみが之を引き戻す力を有す。
○汝の世紀と共に生きよ。されどその作物たる勿れ。却つて汝の同時代人等の爲に彼等の喝采するものを生産せず、たゞ彼等の要するものを生産せよ。

思想

○不斷の想ひは無意識に言葉となりて溢れ出づ。
○善き思想は大なる恵福なり。
○偉大なる思想は必ず心より發す。
○人格の種を蒔かずして何ぞ思想の收穫を期待すべけんや。

バイロン
ボフエー
佛 誌

○精神はたゞ一つの思想より知るを得。

ソロー

○賢者の思想は内に歩み愚者の思想は外に歩む。

スウェーデンボルグ

○思想せざる人にして未だ嘗て賢明なるはなし。

英 誌

○一旦目覺めたる思想は再び眠ることなし。

ジョンソン

○思想は人間を奴隸状態より自由に釋放す。

カーライル

○思想は随力より遙かに強し。

エマースン

○思想は自由なり。

ソフォクレス

○思想は常に吾人の頭使に従はず。吾人はその來るを待たざるべからず。

シエークスピア

○執れ、思想も一度は詩なりき。

シヨベンハウエル
エマースン

○思想は其の實效が試みられざる間は夢に過ぎず。シエークスピア
○發見したる思想は所有したるもの以上なり。
○質素の生活。高遠の思想。
○森の木影深き邊、山鳩の水啜る甘き流の岸の日光の中にのみ思想は見出さるべし。
○願望は思想の親なり。
○人は考へる。神は導く。
○思想を神に向くる者は、自から敢て思ふ所の水平線以下に沈降せざるべし。
○實際家は良心を有すること稀なり。而して思想する人のみ之を有す。
○一々の善き思想又は行爲は暗き世界を次第に太陽に近づく。
○思想はあらゆる辯説よりも深く、感情は有ゆる思想よりも深し。
○思想は阿片の如し我等を全く目覺ましなから酔はしむ。
○思想は風、知識は帆、而して人間は船なり。
○實際に處せられたる大思想は大事業となる。
○世界を動かさんと欲する者は先づ自ら動くべし。
○天下の事は須らく是れ第一等の計畫を取るべし。斷じて第二等の手段に出づる勿れ。
○宇宙は神の思想なり。
○正邪を區別するは思想なり。然り。思想のみ之を能くす。人間の行爲と欲望とを向上し若しくば墮落せしむるも思想なり。然り。思想のみ之

ヤング
英 誌
ゼエフエリース
獨 誌
ゲーテ

ホキツテイヤ

克蘭チ

アマール

ヘーヤ

ハズリツト

ソクラテス

横井小楠

シルレル

を能くす。

變遷・推移

デヨージ・モーア

○萬物は流轉す。

ヘラクライトス

○總てのものは變化す。而して我等自身も此等に伴ひて變化す。

オヴイド

○嘗て惡なりし事も今では時好となつてゐる。

ボルボニアス

○如何なる確立宗教も嘗ては邪宗なりき。

セネカ

○人々の榮枯は木の葉のそれに似たり。

バツカル

○青春の花は美しけれども時日と共に萎む。たゞ才能の齡のみは決して死滅することなし。

ホーマー

○推移する萬物はたゞ譬喩に過ぎず。

ゲーテ

○いづれの推移も危機にして、危機は疾患を豫備す。

ゲーテ

○滄海變じて桑田となる。

獨 誌

○昨日の淵は今日の瀬となる。

漢 誌

○移り變るは浮世の習ひ。

古今集

○高岸は谷となり、深谷は陵となる。

邦 誌

○物換り星移りて幾度の秋ぞ。

詩 經

流行

○時代が變れば流行も變る。
○新奇を追ふは人の常なり。

佛 誌
ピリテ

○流行は世界の偉大なる支配者なり。

フイールドイニング

○流行は専横なる獨裁なり。

ホランド

○流行の大部分は唯富者の虚飾なるのみ。

ロツク

○流行の變化は工業が富者の虚榮心に課する税金なり。

シヨユフオール

○流行は一種の奉り上げられたる下品なり。

ダーレー

○流行は女性なので従つて氣紛れを起す。

ウエーベル

○無趣味な流行は怖ろしきものなり。

ゲーテ

○流行は人間よりも餘計に衣裳を着古す。

シエークスピア

○流行物は廢り物。

邦 誌

○流行眼病なら病眼でもよい。

邦 誌

○流行の半纏着ない者は馬鹿。

邦 誌

○流行は常に俗惡より逃げ去り乍ら、追付かれんことを恐るゝ優美の風俗なるが、この二者は甚だ遠ざかり居らず。

ハズリツト
リズリツト

新

○吾人の新思想は古き心を動かしたり。

デヨージ・メレヂス

○新しきもの善からず。善きもの新しからず。

フオツクス

○新しい物は皆美しく見える。

英 誌

○目新しき物は美しい。

佛 誌

○長く忘れられてゐた物ほど新しいものはない。

獨 誌

○日の下には新しきものなし。

聖 書

○新しい幕はきれいに掃ける。古 諺
 ○新しい君主に新しい法律。古 諺
 ○新しいが。邦 諺
 ○新しい醫者と新しい墓地に行くな。邦 諺
 ○女房と壘は新しいがよい。邦 諺
 ○衣は新なるに若くはなく、人は故きに若くはなし。晏 子
 ○家雞を輕じ、野雉を愛す。法 青苑
 ○大方、何も珍らしく有り難き物は善からぬ人のもて興ずるものなり。徒 然 草
 ○千年の間にも、尙ほ起らざるものが、瞬時に起ることあり。英 諺

舊

○古き習慣に深き意義あり。シルレル
 ○我等が古を尙ぶは古きを賞するにあらず。自然なりしものを愛づるなり。エマースン
 ○古き木は燃すべく古き本は讀むべく、古き酒は飲むべく古き友は共に語るべし。アルフオンゾ
 ○故きを温ねて新しきを知る。孔子(論語)
 ○今を疑ふ者は之を古に察し、來を知らざる者は之を往に視る。管子
 ○頭は新しき事物を尊ぶ。されど心は常に古き經驗を行ふ。故に吾人の生涯は人類が世の始より生活したる方法の新形式に外ならざるなり。ピーチャ

青年・意氣・輕率

英 諺

○老年は尊敬すべし。英 諺
 ○老年はそれ自身に於て悲しむべきものに非ず。若し我等完成されたる仕事を我等の後に遺す時は老年は感謝すべきものなり。カーライル
 ○老いた樹は曲げられない。獨 諺
 ○老牛は未だ嘗て憤であつた事がないと思ひがちである。英 諺
 ○老人の不幸の一つは其の過去を共樂し得る相手を見出し能はざることなり。ジョンソン
 ○老年は死の脅威を以て青年の快樂を禁ずる暴君なり。ラ・ロツシ・フーコー
 ○老年は重荷なり。英 諺
 ○人は何程老いても尙ほ一年生きられると思ふ。英 諺
 ○老人は忘れ、青年は知らず。英 諺
 ○麒麟も老いては驚馬に如かず。邦 諺
 ○老齡こそ青年の嚮導たれ。兩者相倚り相合して初めて幸福なり。ゲーテ
 ○老人は相談相手によく、青年は競争に用ひるによし。英 諺
 ○老齡には養生と品格とを第一とせる地味なる服装が似合ふ如く、青年には華美にして陽氣なる衣裳が似合ふ。シエークスピア
 ○精神の大なる疾病は老羸にあり。此の恐るべき魔と闘はんには努力によつて精神の活躍を續け又人事と不斷の接續を保つべし。佛 諺
 ○老者は容貌よりは精神に鐵鑿の生ぜざらんことを期せよ。佛 諺
 ○老年者は段々生活の重みに耐えて艱苦と辛勞とを以て世を過し來り、今や其の艱苦によりて徳の報酬たる名譽を得たり。佛 諺

○青年は希望に生き老人は記憶に生く。佛 諺
 ○信じ易き青年時代に於ては人は、己が力量を多大なりと想像すれば失意の老齡に至つては甚だ然らず。ドレーパー
 ○青年が世事を學ぶは長上よりならずして同輩よりなり。ゴールドスミス
 ○青年は月に架橋せんとて、又はアワ好くは地上に宮殿を建てんとて材料を蒐集す。されど結局中年に至り、此等の材料にて木造小舎を建つるに決す。ソロー
 ○世界は我と共に眞に始まり、萬物皆わが爲に存在すと、これ各人が青年時代に信ずる所なり。ゲーテ
 ○心なき子は親の故郷を語る。邦 諺
 ○輕忽の頭に蠅がたかる。同 上
 ○青年に酒は火に火を加ふるなり。英 諺
 ○人は下劣墮落の風には染み易し。ジュヴエナール
 ○青年の怒は燃ゆる藁の如く忽にして消ゆ。老人の怒は熱鐵の如し。バイロン
 ○青年の痴行は、老後後悔の種なり。英 諺
 ○青年の弱點は歡樂に際して、激越するにあり。若し此の際大に警省を加ふるに非ざれば歡喜は去り快樂は彼の有に非ざるべし。佛 諺
 ○若者に分別があり老人に氣力があるならば。佛 諺

老年・固陋・老練

○老年別けて尊敬に價ひすべき老年は大なる權威を有し、それは青年の總ての快樂に優る價値あり。シセロ

急進・過激・極端・過度

○長命の人は必ずしも年長者にあらず。生活を最も味ひし者にして、長者と稱すべきなり。佛 諺
 ○過ぎたるは及ばざるに如かず。英 諺
 ○足らぬは餘るよりよし。邦 諺
 ○凡ての過激は不道德に發展す。羅何古諺
 ○過度は劍よりも多く殺す。同 上
 ○總ての不徳は常に斷崖の上に立ちあり。ジュヴエナール
 ○過激なる極端は持續せず。カーライル
 ○何事をも過激に爲さざること、これ價値ある處世法なり。カシタス
 ○動物人類は最も過度に陥る傾向を有す。佛 諺
 ○健全なる行動は常に勢力の均衡にして、總て過激は危険なり。過度の善事は過度の極悪事よりも社會的影響上却つて危険なること多し。ブラツキ
 ○中庸の埒を越ゆることは、萬事不安定の基礎を有す。セネカ
 ○總てのことは過激に至る。いかなる善美性も若し混和せられずんば有害なり。而して危険を斷崖に驅進せんが爲に自然は各人の特性を過度ならしむ。エマースン
 ○過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し。孔子論語
 ○歡樂極りて哀情多し。漢武帝
 ○酒極まれば則ち亂れ、樂極れば則ち悲し。史 記

○水至りて清めば則ち魚なく人至りて察なれば則ち徒なし。

東方朔

○山の峭しき者は崩れ、澤の満つる者は溢る。

素青

○極端なる法律は屢極端なる不法なり。

ターレンス

○兩極端は相會す。

古諺

○大徳は無徳に似たり。

邦諺

○我等の感覺は何事にまれ極端なるものを許容せず。過多の音響は吾人を混迷せしめ、過多の光は吾人を眩暈せしむ。

パスカル

中庸・中正・適度・穩健

○偏ならざる之を中と謂ふ。易らざる之を庸と謂ふ。中は天下の正道なり。庸は天下の定理なり。

中庸

○君子は中庸し、小人は中庸に反す。君子の中庸や君子にして時に中ず。

中庸

○小人の中庸に反するや、小人にして忌憚無きなり。

中庸

○中庸の徳たる其れ至れるかな。民能くする鮮きこと久し。

中庸

孔子(論語)

○回の人たるや、中庸を擇び、一善を得れば則ち拳々服膺して而して之を失はず。

中庸

○中行を得て之に與せずんば必ずや狂狷。狂者は進んで取り、狷者は爲さざる所あり。

中庸

○善徳とは兩端の間の中央の義なり。

アリストテレス

○中間を行かば最も安全ならん。

オウイッド

○眞中の路は確かなる路なり。

獨諺

○中位は最も安固なり。

格言

○汝若し彼を非とせば彼も亦汝を非とせん。其の中間を取るに非ざんば、是れ即ち苦みなり。

雜阿含經

○中庸は萬徳の眞珠の鎖を繋ぐ絹糸なり。

トマス・フラー

○中庸は智慧とは不可離の良伴侶なれど、天才とは一面識なき仲なり。

コルトン

○中庸は宜し。されど中庸それ自身のみにては徳にならず。リツケルト

ボーブ

○最初に新しい事を試みる人にも亦最後に古いことを片付ける人にもなるな。

ゲーテ

○適度は純幸福の泉なり。

セネカ

○適度に用ふる品物は永持す。

獨諺

○智慧も多過ぎれば愚に返る。

同上

○謙遜も過ぐれば高慢となる。

伊太利俚諺

○餘り高く昇るものは墜落に近づく。

伊太利俚諺

○凡そ物毎に度と云ふ事あり。飲を炊も料理をするも皆宜しき程こそ肝要なれ。我が方法も又同じ。世話をやかねば行はれざるは勿論なれども、世話も焼き過ぎると、又人に厭はれ、如何にして宜しきか分らず。

二宮尊徳

先づ捨て置くべしなど、云ふに至るものなり。古人の句に「咲き過ぎて是れさへいやし梅の花」とあり。云ひ得て妙なり。百年過ぎたるは及ばざるに劣れり。心得べき事なり。

佛道歌宗賢書

○仁に過ぐれば弱くなる。義に過ぐれば固くなる。禮に過ぐれば諂となる。智に過ぐれば嘘をつく。信に過ぐれば損をする。

佛道歌宗賢書

○凡そ萬事過不及なく、よき程なるは中なり。是即ち道のある所なり。過不及ありて、よき程ならざれば、善事なりとても遂にかなはず。

具原益軒(大和俗調)

○天の覆ふ所、人の履む所、忠より大なるは莫し。忠は中なり。至公にして私なし。天私無くして、四時行はれ、地私無くして、萬物生る。人私無くして、享貞す。忠は其の心を一にするの謂なり。國を爲むるの本、何ぞ忠に由ること莫からん。忠は能く君臣を同じくし、社稷を安んじて、天地を感ぜしめ、神明を動かす。而るを況んや、人に於てをや。

○中正は治の本なり。

管子

調和・協調

○調和のみ我等を強く大にす。不調和は總てを滅ぼす。ゲルレルト

羅何俚諺

○調和を回復するは紛争を作るよりも難し。

ルナン

○神は世界を調和せしめ永遠ならしむる度量衡なり。

クラーク

○種々雑多は調和の條件なり。

五 備考

一時代精神

或時代に於ける、一般的、心的傾向を指していふ。これを時代的、制約のもとに於ける、社會意識と見ること出来よう。即ち、その時代の一般人心を支配し、若しくはそれに共通して、その時代の一般傾向を規定する一つの社會意識が、いふところの時代精神であつて、かの國民精神又は民族精神が國民的又は民族別的事情に於て形作られた一つの社會意識として、その國民又は民族一般を支配するの相對するものである。しかしながら、各々の時代について、その時代精神を科學的に把握することは必ずしも容易でない。普通に或時代の時代精

神として語られてゐるものは多くは常識的であるけれども、各々の時代がその前後の時代とは異なつた文化的内容を、しかも統一的に形作つて行くところを見れば、その時代の支配的原理としての時代精神の存在を否定し去る譯には行かない。(社會科學辭典)

二 思想善導

政府、教育者乃至國粹主義者等が、社會主義的、改造主義的諸思想の侵入及び傳播を阻止せんが爲めに唱ふる標語である。その意圖するところは、國民一般の思想を、國家的見地より見て堅實なる方向に善導して、所謂惡思想に感染せざらしめんとするにある。その目的は、素より我國體の維持と現制度の擁護發達とに存する。而して、その手段として選ばれるところは、畢竟國家主義的の徹底であつて、初等、中等教育は勿論、高等教育に至る、教育の方針を堅實なる國民的精神の養成と惡化思想の撲滅とに置いてゐる。先づ、初等、中等教育に於ては教材を殆んど全く國民道徳の涵養に資するもののみを探り、教師の思想的取締を嚴にし、高等教育に於ては、學生の自由研究に干渉し、所謂赤化教授を逐ひ、特に思想善導費を國庫の豫算中に設けて學生の思想取締に當つてゐる。この外、又特に廣義の國民教育に留意し、學校外に在る一般青年の爲に青年訓練所を設けて、軍事的教練と思想的訓育とに當り、尙諸種の出版物映畫等、甚だしきは歌謡(浪花節)によつて迄、一般國民の思想的善導、即ち國粹主義の鼓吹に努めてゐる。以上は主として政府及び教育者の企てることであるが、この外、愛國主義者微温的民主主義者等によつても、それらの見地から思想善導は高唱せられ、言論其他の手段によつて、所謂思想國難の

防止が企てられてゐる。

三 急進主義

(社會科學辭典)

社會經營の理想を實現せんとするに當り、現在社會の制度・慣習等に對し何等の顧慮を拂ふことなく、只管その實現を急ぐものをいふ。これは多くは、社會が保守に傾き制度・慣習等の壓迫甚だしきに至つた場合に起るものであつて、新しき理想を實現せんが爲に古き一切を破壊しようとする點に於て、破壊主義と呼ばれることもある。しかしながら如何なる急進主義的思想に對しても、これに十分な發表の自由を保障することは、聰明なる社會の態度でなければならぬ。よしんばこれらの思想に幾多の誤謬があるとしても、現制度に對立して新しき原理。理想を掲げる以上、現制度の弊を矯正せんとする點に於て教ふるところ多かるべきが故である。思想に對しては思想を以て戦へといふのが、急進主義的思想に對する良策とせられてゐる。

四 保守主義

(社會科學辭典)

急進主義に對立する思想傾向。急進主義が現状打破を目標とし、たえず新へ〜と進むに反して、保守主義は現狀維持を目的とし、傳統的な歴史、慣習社會組織を守つてこれを破壊せしめず、むしろそれらものに光輝と矜持とを感じ、急進主義が新なる故に新を愛するに對し、保守主義は古きが故に古きを愛するといふ思想傾向である。保守主義が更に極端に赴くと反動主義となる。これは急進主義が極端になると過激主義といはれるのと好一對である。保守主義が社會に發生するのは、一つには人間の本性が平和と安易と現狀維持とをたえず欲し

てゐるためでもあるが、社會的にいへば一定の社會にはつねに支配階級があるといふことであつて、支配階級は社會の經濟的、政治的、文化的權力を握つてゐるから、握つてゐる權力は決して之を失はうとはしない。そこで現狀維持が當面の目的となり、おのづから保守主義となる。社會のいかなる階級もその階級が支配的位置に居らず、それ故に權力を握つてゐない限り急進的に行動し易いけれど、一度支配的位置につくや否や保守主義となる。嘗て最も革命的であつたブルジョアジーの現態を見れば思ひ半にすぎるものがあらう。

(社會科學辭典)

五 傳 統

廣狹様々の意味に用ひられる言葉である。その最も廣い定義によれば、或一民族に屬してゐて、時代から時代へと傳へられるすべての觀念、習性、及び慣習の總體を意味する。この場合、これらのものゝ作用が生物學的な遺傳の作用と酷似してゐるところから、別に社會的遺傳と同じく、人々の行爲を形作り、行動を定め、又特に連續の原理として、過去の業績を傳へるのである。この意味に於て、國民性を造就する本質的な因子は、この傳統である、しかし人によつては、この傳統の意義を更に狭く解することもある。例へば、或一社會の歴史的精神又は理想を表示する觀念又は行動様式だと定義するものなどはそれである。これによれば、慣習の如きは、傳統のうちから除外せられる。具體的な實例を以て示せば、我國に於ける祖先崇拜、武俠的精神、廉恥心等の觀念及びそれを外的に表現せる行動様式の如きは、その二三である。

(社會科學辭典)

六 支配階級

社會階級の上位にあつて、政治的社會的實權を掌握し、従つて他の諸階級を支配する階級をいふ。封建時代に於ける貴族、領主の階級、産業的資本主義時代に於ける資本家階級、産業的社會主義時代に於ける労働者階級(ロシアに既にこの例あり)などは、即ち之である。

(社會科學辭典)

七 デモクラシー

Democracy 民主主義、民主政治、民主制、民衆政などと譯されてゐる。その意義は古代的のそれと近代乃至現代的のそれとによつて異なる。古代ギリシャに於てはデモクラシーとは一般に政治組織の一種であつて、プラトンによれば、多數者の支配するもの、アリストテレスに於ては多數者が一社會の最高支配權即ち主權を把握してその私益のために政權を行使するものと看做された。而してその多數者とは貴族並びに有産者に比して多數な貧窮の自由民を指し、奴隸及び被征服民を含まなかつた。近代的意味に於てのデモクラシーはこれに反し、一般に、一社會を構成する全民衆の意志によつて行はるゝ政治及び政治組織を意味し、リンカーンの「全人民による、全人民のための全人民の政治」またはルソーの「普遍意志による社會統制」がそれであると看做されてゐる。而してその理論とするところは、一社會の構成員は人格的に總て平等であり、従つてその社會の支配經營即ち政治に平等に參與すべきものといふに在る。その實質は、普通選舉と多數決主義に基く議會政治であるから、従つて結局に於て近代的意味に於てのデ

モクラシーとは形式上の多數者が全民衆の名に於て強力的支配權を把握する政治及び政治組織を指稱すると言ひ得る。かゝる意味に於てのデモクラシーは、大體、一七七六年のアメリカ合衆國の獨立宣言及び一七九一年のフランス人權宣言にその端を發し、その理論はブルジョアが貴族から政權を奪ふための旗印となつたが、今やそれは労働階級がブルジョアから政權を奪ふ旗印の一となりつゝある。しかし、共產主義者等はこのデモクラシーをブルジョア・デモクラシーと呼び、それはプロレタリアに政治的自由を與へるも、經濟的自由を與へぬから、労働者の解放とはならず、實際に於ては資本家階級の專制政治に外ならぬと見る。尙ほ最近に於ては、デモクラシーなる語は單に政治形式または政治組織の一種を指すのみならず、その理論から抽出して社會生活の各方面に於て總ての民衆に自己發現の地位と機會とを平等に與ふべしとする理想及びかかる理想に基く社會的諸組織又は制度をもデモクラシーと稱し、産業上、經濟上、及倫理上等に於て夫々デモクラシーが唱へられてゐる。

(社會科學辭典)

八 社會主義

社會主義といふ言葉はごく近代の術語で一八三二年サン・シモン主義の雜誌「地球」にジョン・シエールが始めて使用し續いてルソー・レイボールが使ひならつたのに始る。しかし社會主義的思想は古くギリシャにも中世にも存在しプラトンの「共和國」に現れた思想や中世紀の宗教團體の共產思想は明に社會主義的であつた。たゞ近代的社會主義はその前提に於て經濟的プロレタリアートを豫想してゐるので、これは産業革命以後のことである。社會主義の本質は人によつて一定

しないが、ごく粗い表現が許されるならば、土地、資本その他一切の生産手段の私有を廢し、國家や自治體やギルド、協同組合のやうなもの、社會的、所有の形式に移し、社會が生産手段の管理、統制に當るといふ主張で、階級もなく、剩餘價値の發生もなく、搾取するものも搾取されるものもない世界の實現がその理想である。かゝる世界を實現するために、人間の正義、平等、博愛の精神を根據として意志的、人爲的につり上げようとするのが空想社會主義であり、議會を通じて一歩一歩實現して行かうとするのが社會民主主義又は修正派社會主義、プロレタリア獨裁の一段階を経てこの社會に到達しようといふのがマルクス・レーニン主義又は共產主義である。

(社會科學辭典)

九 無政府主義

Anarchism アナーキズムはギリシヤ語 anarchia から出た語で、これは政府或は權力の無用を意味する。即ち無政府主義は個人を支配する權力を否定して、社會的にも經濟的にも個人を絶対自由の境涯に置かうとする政治理論である。無政府主義は、説く人唱へられる時代によつて、いろ／＼主張を異にしてゐるが、思想の根本核となるものは徹底的な自由の要求であつて、これは社會主義が平等の理想を追跡するのと好對照をなしてゐる。無政府主義は東洋では既に老莊の哲學に發し、ギリシヤではストア派の始祖ツエノーの思想に見えてゐるが、近代的にはウイリアム・ゴドウィン、マクス・スチルネル、ブルードン等がその祖とされてゐる。ゴドウィンやスチルネルの思想は個人主義的色彩が強いので之を個人主義的無政府主義といつてブルードンやバクーニン等の社會的(又は無產的)無政府主義と區別してゐる。バク

十 學生運動

即ち學生の社會運動、社會科學研究會を中心とする運動を指す。歐洲大戰以後の社會的動搖は、中等程度以上、就中、大學、高等專門諸學校の學生生活に三つの大なる影響を與へた。一つは、是等學生の經濟的根源たる中産階級家庭的急速なる没落乃至窮迫である。そのために、中産階級の學生は過去の坊ちゃん式學生生活から無產學生の境遇に置かれた。二つは、歐洲大戰以後、急速に目立つに至つた知識階級の生活低下と失業の激増である。加之、最近高等諸學校入學

難の緩和策としての諸學校増設は、一層この傾向を加速的にした。これが、學生生活には卒業生の一大就職難となつて表はれた。三つには、歐洲大戰以後、殊にロシア革命其他の國內國外に於ける社會運動の擡頭に刺戟された思想運動である。社會問題研究、社會科學研究熱は急速に擡頭した。かくして、學生生活は次第に社會化されると共に、學生中にも、社會運動に参加し更にこの社會運動を學生生活の間にも浸潤せしめんとする運動が全国的に勢力を占めるに至つた。

【歴史】 歐洲戰後一時我國の思想界を風靡した、デモクラシー運動(大正八年頃)は、先づ大學生に自由解放の氣風を吹き込んだ。次いで社會主義運動がデモクラシー運動に代るに従つて、學生の思想傾向も大なる刺戟を受けた。かくて大正九年の森戸事件に端を發した大學に於ける思想壓迫以來、學生中には社會主義研究會乃至思想團體に加盟する者が各地に生じ、それが次第に學生間に勢力を張つて、大正十一年末には、全國の大學、高等學校、專門學校等に存在する學生の社會科學研究會、社會問題研究會、社會思想研究會等と名づくる團體は、一大連絡組織なる全國學生聯合會(後大正十三年には全國學生社會科學聯合會と改稱す)を組織するに至つた。この聯合會は、學生間に於ける社會科學の普及並に學生の社會科學研究の自由獲得、學生による學校、學校自治の確立等をその目標とし、社會運動の一翼として發展した。其後、文部省當局並に學校當局は、この學生運動に對して取締を嚴にし、學生社會科學研究會を中心とする運動と衝突して、學校騒動をも見た所があつた。大正十三年以來、次第に學校當局による壓迫干渉が加はり、高等學校、專門學校に於ける研究會は解散を命ぜられ、次いで大正十五年には、京都帝國大學學生を中心とする學生社會科學

檢舉事件あり(之を學生共產黨檢舉事件ともいふ)、次いで昭和三年三月十五日の日本共產黨檢舉事件にも連坐する學生百餘名に上り、之を機會に東京帝大新人會を始め、全部の團體は學校當局より解散を命ぜられた。今日迄の學生運動で世間的に著名なるものは、大正十二年五月の早大軍研事件(早大文科同盟なる社會科學研究會と軍事研究會なる學生の團體との流血的衝突)、大阪市電ストライキに於ける學生の裏切り反對運動(同十二年)、軍教反對運動(同十三年)、學生自由擁護同盟の運動(昭和三年以來)、各地に於ける學生自治要求の學校ストライキ等である。

(社會科學辭典)

十一 三・一五事件(共產黨事件)

秘密結社、共產黨檢舉事件を指す。我國に於ては、共產黨は從來治安警察法其他により結社を禁壓せられたが、特に治安維持法の制定(大正十四年)以來かゝる結社は嚴刑を以て、更に昭和三年以來は極刑を以て臨まれるに至つた。しかし、かゝる禁壓方針にも拘らず、共產黨運動は地下運動として進展し、度々檢舉を見て居る。第一回共產黨事件は大正十二年五月五日の檢舉によつて始まり大正十三年一月に終つた。關係者は堺利彦、山川均、猪俣津南雄等三十名であつた。調書によつて見るに、日本共產黨は大正十一年十二月に組織され、勞農獨裁の社會を實現すべく活動せんとしたのが發覺、翌年五月五日一齊檢舉を見るに至つたといふ。大正十三年二月豫審終結と共に治安警察法違反として起訴され、大正十四年四月、山川均を除く被告何れも有罪と判決された。其前後、曉民會を中心とする曉民共產事件、群馬縣下に於ける群馬共產黨事件の如き共產黨檢舉事件があつた。また大正十四

年には京都帝國大學學生社會科學研究會を中心とする學生共產黨事件と稱するものがあつた。しかし此等は何れも共產黨結社問題には無關係とされた。第二回は昭和三年三月十五日の全國一齊的檢擧で、所謂「三・一五事件」と呼ばれるものである。之は大正十五年末より昭和二年初めに互り、日本共產黨が再組織せられ、舊労働農民黨、舊評議會、舊無産青年同盟（何れも三・一五事件の結果、同年四月十日に解散を命ぜられた）の中心分子並に知識階級分子に勢力を扶植しつゝあつたが、昭和三年二月の國會總選舉直後、關係者の殆ど全部が檢擧せられ、其數全國に互り二百餘名の多數に上つた。此事件被告は治安維持法により起訴せらるべき者相當多數に上り、第一回共產黨事件よりも世人の耳目を衝動せしめた。

十二 四・一〇事件

昭和三年四月十日の所謂左翼三團體（労働農民黨、日本労働組合評議會、全日本無産青年同盟）解散を指す。これより先き三・一五事件を以て呼ばれる日本共產黨檢擧があり、次いで四月十日を以て、上記三團體は、「日本共產黨と血が通つて居る」との理由を以て、内務大臣より、治安警察法第八條第二項により、結社禁止を命ぜられたのである。

十三 治安警察法

明治三十三年三月十日法律第三六號を以て制定せられ、其後、大正十一年四月法律第五九號を以て一部改正（婦人の政治的集會を禁止したる第五條の修正）せられ、次いで、大正十五年四月法律第五八號改

正（労働者の罷業及び團結を禁歴したる第十七條の削除）を経て今日に至つて居る。この法律は全文三十二條（内削除三ヶ條）より成り、國家及び公共團體に對する危険を防止し、安寧秩序を保持する目的を以て、結社、集會、演説、多衆運動、屋外運動、同盟罷業等の如き、公安を害する虞ある行動を取締るための諸種の規定を其内容とするものである。例へば社會運動團體に屢々加へられる結社禁止（同法第八條第二項）、集會の解散（同第一項）、辯士中止（第十條）の如きは何れもこの法律の適用による。併しながらこの法律は今日の社會運動の正常なる發展を阻害するとの非難もある。婦人の政治集會参加を禁止する第五條の規定、労働組合及び労働争議を禁歴した第十七條の規定の如きは、婦人参政權運動及び労働運動の據頭と共に削除されたが、婦人、軍人等の政黨加入の自由は、今尙この法律によつて禁止されて居る。治警」と略稱する。

十四 治安維持法

大正十四年四月、第五十議會に於て、當時の所謂「護憲三派内閣」の手により、普通選舉法の制定と共に制定せられ（大正十四年四月二十二日法律第四六號）、同年五月十二日より施行せられた法律である。全文七ヶ條より成り、國體の變革又は私有財産制度の否認を目的とする結社、協議、並にその煽動に對する嚴罰を以てその法の内容として居る。これより先き、大正十二年二月に當時の政友會内閣は過激社會運動取締法案を提出したが、輿論は却つてかゝる法案の施行を以て社會運動を悪化せしめるものなりとして反對し、ために審議未了となつた。その後も、かゝる法案制定の試みは繰り返され、第一次共產黨事

件發表に次いで、第五十議會に於いて、治安維持法として實現せられた。當時この法律は無産階級運動彈壓法令なりとして非難されたが、政府は「治安維持法釋義」なるものを發表して、特に共產主義運動に對する禁歴を目的とすることを強調した。處罰としては、當初「十年以下の懲役又は禁錮」を以て臨んで居たが、第二次共產黨事件以後、昭和三年六月十九日發布にかゝる緊急勅令を以て、死刑又は無期懲役を以て臨むことに改められ、第五十六議會に於て同年三月五日、事後承諾案の通過を見るに至つた。「治維法」と略稱する。（社會科學辭典）

十五 暴力行為取締法

大正十五年四月法律第六十條、「暴力行為等處罰に關する法律」を俗に「暴力行為取締法」又は「暴力行為等處罰法」と謂ふ。團體若くは多衆を背景として威力を用ひ又は暴力を用ひて暴行、脅迫毀棄、而會強要、強談威迫等の暴力行為を敢てし、並にかゝる暴力行為を援助利用する行為に對する特別の處罰を規定するもので、在來の刑法、警察犯處罰令等に對しては特別法の關係に立ち其特徴は、（一）從來かゝる暴力行為を親告罪としたのを非親告罪として檢擧を自由ならしめ、（二）其刑を特に重くし、（三）かゝる暴力行為の利用者に對する罰則を設けたる點にある。此法規は當時治安警察法第十七條の撤廢と同時に行使はれ、同條に代つて労働争議、小作争議、水平運動等を壓迫するものなりとして非難され、政府は所謂暴力團の取締りを目的とするに外ならないと辯明した。

（社會科學辭典）

第十一課 母の天職（女子修身書）

一 要領

母の天職の尊き所以を説いて女子の自尊心を起さしめるのが本課の要領である。

二 注意

- (一) 我が國の如く血統を重んずる家族主義の國では子は殊に尊いものである。
- (二) 育児は特に母に與へられた尊い天職であり特權である。如何なる犠牲をも惜まぬ母性愛はこの天職を果す爲に與へられてゐる。
- (三) 家庭教育は母の重大な任務である。
- (四) 文化社會では女子には母たる用意が必要である。
- (五) 母性愛は女子の特性の精髓である。
- (六) 理想の母は理想的人格者でなければならぬ。

三 設問

- 一 日本では何故に子寶を尊ぶのでせうか。
- 一 母性愛は何の爲に女子に賦與されてゐると思ひますか。
- 一 母は家庭教育者としてどんな任務を有つてゐますか。
- 一 文明人の母にはどんな用意が必要ですか。
- 一 女子の特性は何から起つて來てゐますか。
- 一 理想の母にはどんな資格が必要ですか。

○親の子を思ふこと人倫に限らず。燒野の雉子、夜の鶴、梁の燕も、皆子故にこそ物思へ。

諸曲(唐船)

○親は千里を行けども、子を忘れぬぞ識なる。

諸曲(木賊)

○天地間不可解の事多し。而も母の心は創造物中の大作なり。

佛 諺

○子供が小さい時は母の膝の上に乗つてゐるが、大きくなると母の心の上に乗る。

獨 諺

○我等の母は我等の精神に熱を與へ、父は光を與ふ。ジャンポール

獨 諺

○人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道はまどひぬるかな。

藤原兼輔

○おのが子を恵む心を法とせば學ばずとも道に至らん。二宮尊徳

讀人不知

○餌を運ぶ親の情の羽音には目を明けぬ子も口をあくなり。

佛 諺

○我が母は我に敬虔と仁愛とを教へ、又常に悪行を制するのみならず、悪念をすらも戒めんことを我に教へたり。我は又母よりして、富者の奢侈とは全く異なる淡泊の飲食に甘んずるやう教へられたり。

佛 諺

○母の慈恩は我が一劫の間世間に住まりて説くとも、説き盡し難し。十月の苦痛は生兒の一瞥を以て忘れ、音楽を聴くが如く樂しきなり。子は母の胸臆に寝むり左右の膝を以て遊履の所とす。母の胸臆より甘露の泉を出して長養ふ。其の恩徳は天に聳ゆる山岳も及ばず大海も尙淺し。

佛 諺

○天地の間に不可解の事多し。而して母の心は創造物中の大作なり。

佛 諺

○上帝は各所に在ること能はず。故に母を作れり。

ワラリス

○母の愛は最善の愛。神の愛は最高の愛。

獨 諺

○母の涙滴は子の不平を洗滌す。

アレキサンダー

○婦人は感情のために左右せられ易く、好悪の念最も切なれば、人の母たるものは、須らく猛省して、子女の間に愛憎の差を生ぜざること勉めざるべからず。

ブラツキ

○母山羊が飛越ゆれば子山羊も飛び越ゆ。

西 諺

○人は其の母の造り爲せるがまゝなり。

エマース

○母は子供の鑄型。

佛 諺

○母の心は子女の教室なり。

ビーチャ

○孟母は機を断ちて其の子を訓へき。

ヘルバルト

○一人の良母は百人の教師に値す。

シャミソ

○母のみ愛と幸福との何物なるかを知る。

邦 諺

○二親揃うて育てた子は貧乏でも長者の暮し。

邦 諺

○片親なきは肩すぼる。

邦 諺

○親は無くとも子は育つ。

邦 諺

胎 教

○父は天、母は地、天は施し地は生ず。骨氣は父に像り、性氣は母に象る。上古賢明の女娠むことあれば胎教の方必ず慎しむ。故に母儀は父訓より先にして、慈教は義方より嚴なり。

王節婦(女範)

○人五常の理を受けて生まる。而して性習あり。善に感ずれば即ち善、惡に感ずれば即ち惡、胎養にありと雖も豈教なからんや。古者婦人子を娠めば寝るに側せず、坐するに邊せず。立つに跛ならず。邪味は食は

ず。左道を履まず。割正しからざれば食はず。席正しからざれば坐せず。目に惡色を見ず。耳に淫聲を聴かず。口放言を出さず。手に邪器を執らず。夜は則ち經書を誦し、朝は則ち禮樂を誦す。其の子を生むや、形容端正にして才徳人に過ぐ。其の胎教此の如し。

陳遵の妻鄭氏(女孝經)

○仁齋翁の妻娠の時毎夜々々先生孝經并に經聖賢傳の佳書を読み、之を誦し聞かせ給ひしとかや、されば生れし子、東涯先生にして、博識の君子、世以て知る所なり。此胎教も、是れも人の語りしを感じて記す。

秦武仰聞書

○太任は文王の母、摯の任氏の中女なり。王季娶りて妃となす。太任の性端一誠莊これ徳これ行ふ。其の文王を娠めるに及びて、目惡色を視ず、耳淫聲を聴かず。口放言を出さず。文王を生みて、而して明聖、太任之を教ふるに一を以てすれば百を識る。卒に周の宗となる。君子太任は能く胎教を爲すと謂ふ。

小學内篇

○名香を焚燒し、口に詩書古今の箴誡を誦し、居處を簡靜にして、割正しからざれば食はず、席正しからざれば座せず、琴瑟を弾じ、心神を調へ、情性を和し、嗜好を節し、庶事を清淨にせば子を生みて皆長壽、忠孝、仁義、聰慧にして疾なし。こは蓋し文王教を胎せるものなり。

丹波元堅(女科廣要)

○人は教によらざれば、よき人とならず。その教幼少の時にあるをよしとす。たゞ幼少の時のみならず胎内にある時よりの教あり。未だ生まれも出てざる子に教ありとはいかに。それ人の子、胎内にありては、母と一氣なり。母の心のさまを子の心にうつし、母の身のはたらきを子の身にうつす。されば懐胎のうち、母の心よこしまなく、すなほなれば、生

林 子 平

○腹は借物と云ふが借物にあらず。萬代の寶なり。懐妊の時は神の氏子が我が胎内に居ると思ふて大切にせよ。

金光教理解

○女子は純潔なるべきも、男子は純潔なるを要せずとは、是れ一方に高き標準を定め、他方には低くして勝手なる標準を設くるものにして、この大なる恐るべき誤解のために、社會は嘗て悲惨なる結果に苦しみ、今猶苦しみつゝあり。信實にして純潔なる男子と信實にして純潔なる女子と結婚し、兩々相重じ、相愛し、相敬する時こゝに始めて眞の家庭の基礎を築かるべきなり。かゝる家庭に生れ且つ養育せられたる兒女は幸福な

○子が可愛くば棒を喰はせよ。子が憎くば、よきものを着せて、美食を食はせよ。之を痴愛といふ。
太公望
○凡そ小兒を育てるに、義方の訓をなすべし。姑息の愛をなすべからず。怠るをゆるす事なかれ。氣隨をゆるし、私慾を長ずべからず。

貝原益軒
○幼き時の教は事しげくすべからず。事しげくして煩勞なれば、學問を疎んずるものなり。むづかしくして其の氣を屈すべからず。年數と性質と應ぜざる事を、しひて責むべからず。年數に隨ひ應じて教ふべし。

同 上
○およそ小兒を教育するに始めて食初、ものいひ扱人の面を見て悦び怒る色を知る程より常にたえまなく教ふれば、ややおとなしくなりて誠むることなく易し。故に小兒は早く教ふべし。
同 上
○子生れて聲を同じうし、長じて俗を異にす。教への之をして然らしむなり。

荀 子
○習慣は幼時になるものを以て最も完全のものとする。之をこれ教育といふ。教育は幼時の習慣なり。
ベニコ
○兒童は決して之を他人の手に委ぬべからず。
ルツ
○家庭よ、汝は道德上の學校なり。
ペスタロツチ
○家庭よ、さらば汝は純手たる自然的教育の起源なり。

ベスタロツチ
○教育は元來家庭に於て爲すべきものなれば、人の兩親ほど最も自然にして且つ最も好適なる教育者はあらず。
ヘルバルト
○父は子の爲に隠し子は父の爲に隠す。直きこと其の中にあり。
孔子(論語)

り。君に事ふるの公事に非ず。これ天に事ふるの職分なり。
○子を教育するは如何に訓誨、褒責、譴賞を加ふと雖も、父母の習慣悪しく、その所爲正しからざる時は竟にその益なし。ポールジャネー

○徳に順ひて子を教へ言を擇びて以て子を教ふ。
國 語
○眞正の家庭的教育は眞正の教育を受けたる母に非ざれば、之を爲すこと能はず。
ジョノツト
○婦人は感情の爲に左右せられ易く好悪の念最も切なれば、人の母たる者は須らく猛省して、子女の間に愛情の差を生ぜざることに勉めざるべからず。
ブラツキ

○父母は數多の子女を一樣平等に愛するを最も緊要とす。ブラツキ
○子に教ふるに科學を以てせよ。然らず彼の生涯は有用ならん。彼に教ふるに宗教を以てせよ。然らば彼の死は幸福ならん。ペスタロツチ
○子を養ひて教へざるは父の過ちなり。教へて導くことの嚴ならざるは師の怠りなり。父教へ、師嚴にして學問の事なきは子の罪なり。

司馬溫公
○孟母は機を斷ちて其の子を訓へき。
○余が少時夙に受けたる最初の命令にして父忠言なりしは、常に我が良心の職分なりと告ぐる所の事を爲し、其の結果は神に委ぬべき一事是なりき。余は此の親より得たる教訓の記憶を携へて墳墓に入るべし。而して余は其の實行を期す。余は以來之を遺奉せり。今に及んで余は其の繁榮と富に至るの途なきを悟れり。故に余は余の子に向ひても、此の途を指示して之に進ましめんと欲す。

アースキン
○子供を助くるは人類を助くるなり。人類を助くるには、子供の時に助くる程有效なるはなし。
ブルツクス

英 諺
○父の德行は子の爲に最上の遺物なり。
邦 諺
○親に似ぬ子は鬼子。
邦 諺
○親の意見と茄子の花は千に一つの仇もなし。

山鹿素行
○吾の子弟に於ける薄く誨へて功を待つ。自から厚からずして、彼を責むること重し。身正しからずして、彼の正しからんことを欲す。子弟の化せざるもの身の責薄ければなり。
向井滄洲
○子弟を教育するには宜しく我が躬これに先んずべし。徳以て經となし。才以て緯となす。二のもの居敬に始まる。

大 學
○其の家教ふべからずして、能く人を教ふる者は之れなし。
國 語
○徳に順ひて子を教へ、言を擇びて以て子を教へ、師保を擇びて以て子を相く。
白居易
○田有れども耕さざれば倉粟虚し。書あれども、教へざれば子孫愚なり。

英 諺
○其の子を教育せざる人は、猶ほ盜賊を養育するが如し。
孟子
○子志あれどもその父、これを教へざるは子を棄つるなり。
柳屯田
○誠に草木を愛する者はこれを能く培養し、誠に兒女を愛するものは之を能く教育す。

孟子
○父母其の子を養ひて教へざるは、是れ其の子を愛せざるなり。教ふと雖も嚴ならざるは是亦其の子を愛せざるなり。
ヘフディング
○よく子弟を教育するは一家の私事にあらず。これ君に事ふるの公事なり。

讀人不知
○子供を六歳まで我が手元に教育すれば、後は誰が携へて行くとも厭はず。
フランシスザビエー
○嬌めるなら若木のうち。
邦 諺
○老木は曲らぬ。
邦 諺
○子供は黄金を打つ槌で打て。
伊太利俚諺
○鞭一本に菓子二つ。
丁抹俚諺
○愛しても其の悪を知り憎みても其の善を知る。
佛 諺
○深く愛する者は嚴しく罰す。
佛 諺
○打たれても親の杖。
九州の諺
○可愛がられた伯母より叩き出された親。
邦 諺
○小兒は教へ殺せ。馬は飼ひ殺せ。
古 諺
○鞭を惜めば子を害ふ。
孔子家語
○鞭朴の子は父の教に従はず。
真 德
○添木して直ぐに育てよ稚櫻。
嵐 雪
○勉めよと親もあたらぬ炬燵かな。
西 諺
○蟹に眞直に歩むことを教ふるは無効なり。
讀人不知
○横に行く蟹が教へた蟹の子に直ぐに這へとは無理な親蟹。

西 諺
○鳴く聲のよきもあしきも親鳥の教によるぞ鯨の聲。
西 諺
○雛鳥は親鳥の歌ふ通りに學ぶ。
西 諺
○君は尊しと雖も白を以て黒となせば臣聽くこと能はず。親は親しと雖

も、黒を以て白となせば、從ふこと能はず。

○父は照る母は涙の半より同じなまに育つ撫子。

○一人の良母は百人の教師に値す。

○聖人の父にも悪魔の子あり。

○榮譽は父より生じ慰籍は母より來る。

○善く歌ふ者は、人をして其の聲を繼がしめ。善く教ふる者は、人をして其の志を繼がしむ。

○女子の徳育には相當の書もあるべし。父母長者の物語もあるべしと雖も、書籍讀むよりも、物語聞くよりも、更に手近くして有力なる教は父母の行狀にあり。徳教は耳より入らずして、目より入るとは我輩の常に唱ふる所にして、之を等閑にす可からず。父母の品行方正にして其の思想高尚なれば、自ら家風の美を發し、子女の徳義は教へずとも、自然に美なるべし。左れば、父母たる者の身を慎しみ家を治むるは獨り自分の利益のみに非ず。子孫の爲に遁る可からざる義務なりと知るべし。

禮記

呂氏春秋

讀人不知

ヘルバルト

伊太利俚諺

和蘭俚諺

禮記

蘇格蘭俚諺

西

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

○我が家は世界中の最も幸福なる場所なり」との感情を子女の心裏に懐かしむるは、某老紳士の策略なりき。予は此の甘美なる感情を以て父が與へ得べき最上の恩賜ならんと思考するなり。

○我が母は我に敬虔と仁愛とを教へ、又常に悪行を制するのみならず、悪念すらも戒めんことを我に教へたり。我は又母よりして、富者の奢侈と全く異なる淡泊の飲食に甘んずるやう教へられたり。

○女の重大なる職分は子女の教育にあり。子女の賢きも愚なるも、善きも悪きも、之に由ること多し。而して子女教育の要道は母の正しき行を以て、之を感化するにあり。

○憎まれ子世に憚かる。

○憎まれ子世に出づる。

○憎まれ子頭堅し。

○惡草は長ずること早し。

○惡しき教は教へざるに若かず。

○若い嘘つきは年を取ると盜人。

○小兒に一の嘘を供せんよりも、寧ろ千の眞理に無智ならしむべし。

○甘やかされた娘はだらしない妻となる。

○母のいとし子は腰抜け英雄。

○親の慾目。親に目なし。

○鼻は己の子を最も善なりと思ふ。

○隣の子は最も惡戯な子である。

○親馬鹿子馬鹿。

○盜人を捕へて見れば我が子なり。

○子持になると啞が物を言ふ。

五 例話

一 孟母

鄒の孟軻の母は孟母とよべり。その家、墓所に近かりければ、孟子いとをさなきほどにて、かりそめのたはむれにも埋葬のさまども見ながらひて、そがまねをぞしける。孟母之を見て子を教ふる者の居るべき

邦

川

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

邦

獨

英

るればなり。今汝みづから禮によらずして、禮を人に讓むるは、あるまじきことならずや。といましめければ孟子身のあやまちを謝して其妻をとどめけり。されば孟母を稱して、よく禮を知りて、人に母たるの道にあきらかなりといへり。

(婦女鑑)

二 魯季文伯の母敬姜

魯國の季敬姜は、莒の女にて戴己とよべり。魯の大夫公父穆伯が妻にて、文伯が母なり。博達にして禮を知れり。穆伯はやう身まかりて後、文伯いでて學び、年經て家にかへれり。母の敬姜これを見るに、文伯に従ふところの友人らが、文伯に接するさまいと嚴かにして父兄に事ふるが如く、文伯はなほだ倨傲にして、自得の色あり。敬姜、文伯をよびていましめけるは、昔武王朝より罷りて、絲絲の斷れたるを結ばしめんと左右を顧みるに、近く侍する人の中にはこれをむすばしむべきものあらねば、自らこれをむすび給ひき。かく尊敬すべき人にかまじはりし故に、能く王道をなせり。桓公は坐友三人、諫臣五人、日ごとにそのあやまちをあげて論ずるもの三十人、あたり近く侍りし故に、能く霸業をなせり。周公は一たび食して三たび嘔を吐き、一たび食して三たび髪を握るといふごとく、みづから顧りみて政をつとめ、又賢をとりて窮閭隘巷にいたり、道をきき、教をうくるもの、七十餘人の多きに及ぶ。故によく周室を保てり。古の聖賢とよばるゝ人すら猶かくのごとく、その友とするところ皆おのれにまされるものなり。さてこそ知らず、日毎に益あることとおほかるべけれ。今汝年わかしく位ひくくして、そのともとしあそぶものは、みなおのれにしかざるものなり。これを益友といふべからず。とことわりをつくしていさめ

所ならずとて、家を移して市街に住みけり。孟子又あきなひの業を見ならひて、そがさまどもしければ、こゝをもさりてこたびは、學校のかたはらに移りけるに、孟子俎豆をつらね、揖讓進退のさまども見ならひて、いと殊勝なりしかば、孟母はじめて居處をこゝに定めけりとなん。孟子なほいとけなかりしほど、家をいてて學問しけるに、いまだ成業にいたらずして、家にかへりしとき、をりしも孟母機をかりてありけるが、その學び得しさまどもを問ひければ、孟子もとのまゝなるを答へけり。孟母やがて起ちて起ちて刀をとり、おりかけたる機をなにかばより斷ちしかば、孟子愕きてそのゆゑををひしに、孟母曰く、汝今學を廢して家に歸るは、今この機を斷つにことならず。汝きかずや、君子は學んで名を立て、問ひて知を廣む、故に居れば即ち安く、動けば即ち害に遠ざかるといへり。今汝學問を廢す。これ終身斷役を免れずして、禍を求むるなりといへば、孟子深く愧ぢ懼れ、且夕つとめはげみて怠らず、子思を師として學びければ、つひに名を成すに至れり既にして孟子妻をむかへ、ある時室に入らんとせしに、その妻祖きてうちくつろぎたる狀なるを、こゝろよからぬ事におもひ、内に入らてそのまゝすざければ、妻、孟母に辭していひけるは、夫婦の道は私室あづからずときけり、今妾竊かに室にありて、うちくつろぎ被れをやすめ侍りしに、わが夫これを見てさりたまへり。これ夫婦の道にあらざ。さればいとまたまはりて、父母の家に歸り侍らむといふに、孟母これをききて、やがて孟子をよびさとしけるは、禮に將に門にいらむとする時は、先そのあるところを問ふ。敬をいたすゆゑなり。將に堂に上らむとする時は、必まづ聲をあぐ、人を戒むるなり。まさに戸にいらむとするときは、かならず下を視る、人の過を見んことをおそ

ければ、文伯その過を謝して、みづから悔いあらため、それよりのち
は師としつかふべき人、または賢才の友をえらびてまじはりけり。か
かりければ、その友情かしらに雪をいたぐほどの長者なれば、文伯
かたちをたじし、親から賛をとりてうやまひける。敬慕これを見て汝
が學なるにちかしとてよろこべりとぞ。かくて文伯魯の丞相となりて
後朝より退りて母に見ゆるに續してありければ、文伯恭しくいひけるや
う。今身不肖なれども魯に相としつかふるを、その母にして猶紡績を
事としたまふはつかはしからじ、おそらくはおのれにして、母につ
かふるの道をかきことありや。と問ひければ、敬慕嘆きていふやう。
魯國亡ぶるにちからんか。かゝる不肖の吾子にして、官にをらしむ
るはあやふきことなり。汝きかずや。いにしへの聖王賢主にして、民
ををさむるものは瘠土をえらびてこれにおき、民をして力を勞せし
め、しかしてこれを用ゐられき。このゆゑに長へに天下に王たること
を得たり。それ民は勞すれば善を思ひ逸すれば善を忘る。沃土の民は
材あらず。淫すればなり。瘠土の民は義にむかふ。勞すればなり。君
子はこゝろを勞し、小人は力を勞すといへるは、先王のをしへなり。
上天子より下庶人に至るまで、誰か敢て心に淫して、その務を怠らざ
るものあらむ。今われ寡にして汝も亦下位にあり。朝夕汝々としてつ
とむるも、猶先人の業を失はんことをおそる。況や怠惰あらばいかな
る罪を蒙らんもしるべからず。この故に汝つねにつとめて怠らざらむ
ことを冀ふ。ざるをみづからおどりてつゝしまざらば、おそらくは穆
伯が嗣を絶つに至るべし。といたくいしましめとしけり。孔子この事
を傳へききて、その門弟子に語りきかせ、いたく賞讃せられしとぞ。

(婦女鑑)

三 楚の將子發の母

楚の將子發、秦の國を攻めける時、糧食つきて兵卒うゑに苦しみし
かば使を本國に遣して、糧食の輸送をこひ、あはせて母の安否をとほ
しめけり。子發が母使にあひて、士卒のありさまをとふに、使者いは
く、糧食乏しうして梁粟をくらふことあたはず、かづゝ藜麥などを
わかちくらひ、うゑをしのぐまでなりといふ。又將軍子發といふに、
こたふるやう、將軍は朝夕牙豚黍粟を食してかはることなしといふ。
かくて後、子發秦を破り、功をあらはして、本國にかへりければ、み
な人その勳功をほめ、しりけるに、家にかへれば、その母門をとち
て内にいれず。人をして數めしめて曰く、汝きかずや、越王勾踐の吳
を伐ちしとき、ある人酔酒一器を餓れりしに、王、人をして江の上流
に注がしめ、士卒をしてその流をのましめしに、酒氣あるべくもあら
ねども士卒その恩に感じて、勇氣ひごるに倍し、一囊の糗糧をうるも、
軍士にわかちあたへて、おのづからその和を來せり。今汝兵に將とし
て、敵國を征するにあたり、士卒をしてうゑにくるしましめ、自ら梁
肉にあくの理あらんや、詩にいはずや、好樂無荒、良士休々。言こ
ころは和を失はざるなり。汝卒をして死地に陥らしめ、自らその上に
康樂せり。今僥倖にして勝をうといへども、その道にあらず。されば
汝はわが子にあらず。吾門にいることなかれと云へば、子發大におそ
れてその過を謝し、母の怒を宥めて後、家にいることを得しとなむ。
子發が母の如きはよく子に教ふるものといふべし。

(婦女鑑)

四 齊の田稷の母

田稷子は、齊國の丞相なり。ある時其下づかさより黄金百錠といふ

をうけてこれをその母に遣れり。母曰く、汝丞相となりてわづかに三
年にすぎず、さればその得るところの祿はいまだかばかりの多きに至
らじ。これを下に受くるにあらずば、ほかに得るところあるべからず
といふに、稷子實を以てつけしかば、母曰く、吾聞く士は身を修め行
を潔くし、苟も得ることをせず。情を竭し實を盡して詐偽を行なは
ず。非義の事を心に計らず。非理の利は家にいれず。言行一の如く、
情貌相副ふといへり。今君主、官を設け祿を厚くして、以て汝を待ち
たまふ。宜く言行を顧みて以て君恩に報ずべし。それ人の臣としてそ
の君に事ふるは、猶人の子として其父に事ふるが如く、力を盡し能を
竭し、忠信にして欺かず、務めて忠を效すにあり。死を輕んじて命を
奉じ、廉潔公正なるべし。凡そかくのごとくならば功成り名遂げて患
を遺すことなからん。今汝これに叛きて忠に遠ざかり、人の臣として
君に忠あらざるは、これ人の子としての孝あらざるなり。不義の財は
吾有にあらず、不孝の子は吾子にあらず、されば家といひむべきにあ
らず。いづかたへもたさるべし。とことわりあきらかにせしかば、
稷子ふかく慙おそれ、やがてその金をもとの主にかへし、罪を宣王に
自首して、刑につかんことをこへりしに、王その母の義を重んずるの
あつきを賞し、遂に稷子が罪を宥めて、もとの相位に復し、公金若干
をその母にたまはれり。

(婦女鑑)

五 晉の陶侃の母

陶侃が母の湛氏といへるは、豫章といふところの新金の生れなり。
侃が父の丹、素と貧賤なりしかば、湛氏毎に紡績に従事してこれを資
けけり。侃生れて志いやしからず、有爲の才ありければ、友をえらび

て、交りあそばしめき。年猶少きころ潯陽縣といふところの吏と爲りて、
漁の事どもを監察せり。あるとき一柑の酢を母の許に遣りしに母の湛
氏その官物なるを知り、書をそへてかへしつかはし、侃を責めて曰く、
汝吏となりて官物を掠め、これをおくるは、はなはだあるまじき事
にて、たいに喜びおほはぬのみならず、わが愛を増すものなり。とい
くいましめとしけり。初め侃が貧賤なりし時、鄱陽と云ふ所より、
孝廉范逵といふ友人、來りて宿したるに、をりふし冬の頃にて寒きは
なはだしく、雪いと深く積りけるを、湛氏みづから臥すところのあた
らしき薦を斷ちて、范逵が馬にくはせ、密かに髪を截りてこれを隣家
に賣り、その價にて食物を調じ、こゝろよくもてなしけり。後に范逵
この事を傳へききてその志の切なるに感じ、侃が人に絶れたるも實に
此母なればこそ、この子をうみたれ、と深く賞讃せしが、果して侃は
竟に功名をあらはして、當時その聞えたかかりき。

(婦女鑑 宮内省藏版)

六 宋の二程の母

宋の二程子の母、侯氏は、程大中公の妻なり。舅姑に事へて孝順
に、夫に遇するに貞操なり。夫程大中は家を行むるにいと嚴肅なりし
かど、かりにも敬禮を察らず、ものごとに謹ふかく、夫の命を稟けて
後にあらざれば、いさゝかの事もわたくしには計らはず。これにより
て家内いとむつまじくをさまりけり。もし婢僕などに過失あるとき
は、懇に教へさとし、將來を戒めてかりにも過激の辭を發せず、また
小兒の事につれて、これをむちうつ事あれば、制し戒めていはく、か
れ等卑賤の者なれども、等しく人なれば、之をうちきざつくるはある

まじきことなりとて、これをとゞめ、わが子に過あるときは、厳しくこれをせめこらし、事によりては夫につけて必其過を俊めしめけり。さて常にいひけるは、およそ人の子の父におとれるは皆その母の過にて、おほかたは母たるもの姑息の愛に溺れて、子の過を蔽ひかくし、父をしてしらしむるゆゑ、つひに過を改むるの期なきにより、とぞかたりける。かくのごとくいとかしこき母なりければ、兒子みな人に絶れて、つねに飲食衣服の美惡をいとせず、一ち學問をつとめけるにより、後みな大儒の名をなせり。明道先生、伊川先生といへるはすなはちこれなり。宋の代に名高き學者は、多くはこの門下よりいでたりとぞ。

七ゲ一テの母

(婦女鑑)

獨逸の名高き詩人ゲーテが母は、資性寛仁大度にして、常に喜色面にあらはれ、眞に人に母たるの徳を備へたり。かゝりければ、ゲーテを教ふるにその宜に適ひて、よく濟世の實事に意を用ひ、その身經歷練磨の效をうつして、これに教へしかば、ゲーテも亦わが得し業をば母の功業なりとぞいひし。ある旅客この母に面會して、ものがたりして後、人に謂りけるは、いまゲーテが母にあひて、始めてゲーテがかく大家となる由縁をばしれりとぞいひける。ゲーテまた孝心いと深くして、常に母の恩惠をおもひ、人にもかたりけるが、ある時フランクフルトといふ所に至りて、先年母とまじはりてなかりし人々を尋ねもとめて、懇にいたはり、厚くこれにむくいしといふ。

(婦女鑑)

八 放蕩の子と母の慈愛

田舎に相應に暮す百姓がござりましたが、夫婦の中に男の子一人なるが可愛さの餘は、牛が子を舐る様にあいだてなう育て上げられし。そこで其の子が次第に横着者に成り、馬の尾を抜いたり、牛の鼻をくすべたり、近所の子達を假初にも叩いたり泣かせたりわやくの中に成人して、たうとう手に餘る不孝者。

小力はある、大酒は呑む、小博奕は打ち覺える。いつか神事相撲を取り覺え、假初にも喧嘩口論女郎買やら妾狂やら。會、親達が見ると、大聲を揚げて張込みを喰はせ、此方業が放蕩者ぢやの不孝者ぢやのと、其の不孝者は誰が頼んで生んだのぢや。己は生んで貰うて迷惑してゐる。それ程放蕩者が嫌ひなら、元の所へ納めて貰はう。さうすると己も助かるなどと滅法な口返答。親達も詮方なく、其の身は銘銘年を寄る。息子は次第にいきりをる。可愛いと仕様がなにとて、勘當も得せず、氣隨氣儘をさせて置くと、愈々圖にのり、彼處では投げたの此處は腕を捻折つたのと荒々しい大喧嘩。其の度毎に親達はいふに及ばず、親類縁者の胸板に釘打つ様な、恐ろしい惡黨者がござりました。是れはこれ腹の内から此の様な腕白者がでなければ、己が、己が、増長して心を取失うた計りで此の様な難作者。何と放心は恐ろしい事ぢやござりませぬか、勿論親類縁者から親達へ勘當せいと度々催促はするけれども、何分一人子の事なり、けふは勘當あすは義絶と、口では云へども勘當もせず、徒らに年月が立つて、かの横着者が廿六歳に成りました。次第に悪行は募る。後々は親類縁者へ何の様な難儀掛けようやら、怖氣が立つたもの故、一同に評定して親達へ云うてやるに

は、急に勘當をさつしやれぬと親類中各方と義絶を致さねば成りませぬ。あの息子をあの儘にして置かれると、親類は申すに及ばず、村中へもどんな難儀がかゝらうや知れぬ。御夫婦には恨はなけれども、而々家が大事でござるに依つて、義絶を願ひませうか、勘當をさつしやるか有無の返事が聞きたいと云うてよこした。そこで親達も詮方つき、子故に親類義絶になつては先祖へもすまぬ事、さらば今夜みな寄合をして下され、相談の上願書を認めませう。勿論親類中、何れ御連印下されねばならぬ。御苦勞ながら印形御持參にて、暮早々より御寄り下されいと返答しられた。さてかの野良息子は、此の目近所村で博奕を打つて居りました、折から村の友達が来て今夜貴様を勘當すると親類が參會するげな。何ほ貴様の様な者でも、勘當しられたら定めて難儀をするであらうと。半分聞かずに大聲あげて、何ぢや今夜おれが家で勘當の評定か。こいつ、面白い事が出来てきた。全體親父や母者の吼え面が、此年頃見ともなうて、氣色が悪うて、耐へられたものぢやない。勘當を受けたら一本立ち、唐へ飛ばうが天竺へ宿替せうが、誰が點の打人がない。此の様な有難い事はないぞ、さらば、今夜評定の席へ乗込んで、何で己を勘當するのぢやと、一番團十郎を踏んで揺りかけた。五十兩や七十兩の退代は巾着へ入れた様なものぢや。其の金持つて京か大阪へ出て、見せ付や始めたら面白い事であらう。どうぞ今夜首尾よう山の當るやうに前祝に一盃せうと、同じ仲間の惡鬼達と茶碗酒の大酒宴。日の暮前に泥のやうに酔うた所で、さらば此の勢に内へいんで一勝負はつて来よう、大脇差をばつこみ、我が居村へ歸つた時分は丁度初夜前、大方今時分は親類共が寄り集り、無い智惠の底ふるうて評定として居るであらう。其の所へ躍り込んで大だげにだ

けたならば、百兩位は擱めるであらうと、すでに我が家へ歸らうとしたが、屹と思案し親類寄つてゐる中へ己が顔を見せたらば、皆俯いて居るであらう。其の中で大聲あげるも、何とやら拍子がない。己が事を惡様に云うて居る、其の圖にのり躍り込まぬと坐付が悪い。こいつは一番思案を仕替へて、裏の簾から座敷の縁先へ廻り、一家の奴等が評定を立聞きしたら、定めて己が惡そくを店卸するであらう。其の拍子に戸障子蹴破り、大雷鳴と出掛けたら、拍子が合つて面白いと一人思案し、雪路を脱いで腰に挟み、尻引からけて、裏の簾から切戸を越え、縁先へ廻つて見れば果して内にはひそ〜と評定の最中。兩戸の隙から覗いて見れば、親類縁者が草座に直り、而々願書に判を捺してゐる。その願書が兩親の前へ来ると、かの息子之を見て、さあこゝが勝負ぢや。親父が判をしやるを合圖に、この戸を蹴破つて飛込まうと、居合腰に成つて息を詰めて覗いてゐる。何と人も恐ろしい心に成れば成るものではござりませぬか。孟子の人の性は善なりと仰せられたるに、微塵も違ひござりませぬども、其の習性となるときは、此の様な恐ろしい惡黨者が出来まする。此のとき孔子孟子が千日道を御説きなされたとして、立返りさうな勢ぢやない。かう堅まつた惡人は無間地獄の釜焦といふものぢや。たとひ釋迦如來が元服して土佐をどり召されても、中々性根の付きさうな事ではないが、不思議に此の野良息子が惡心を醸して大孝行の人になるといふ、是れから成佛の段でござります。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな。かの親達夫婦の前に勘當の願書が廻つてくると、母親は大聲をあげて泣き出す親爺は齒も無き齒莖を喰ひしばつて差し俯いて居らるゝ。や

がて曇つた聲で、お婆印形を取つてござれ。母親は返事も出でかね泣く泣く筆筒の抽出から、革財布に入つた印形を親爺の前に置くと、彼の野良息子は兩戸の外から息を詰めて窺うてゐる。其の内にござれと財布の紐を解き、印形を取り出し、肉をつけて既に判を捺さうとする時、母親が其の手に縋つて、先づ待つて下されと云ふ。親爺は此の期に及んで親類中が見て居らるゝ、未練な事云はして云へども聞かず。まあ私がいふ事を聞いて下され。尤もあの不幸者に此家を譲つたら、三年たぬ中に草を生すてござらう。それが悪いと云うて、天にも地にも只一人の子を勘當したら跡へ代りを貰はねばならぬ。其の貰ふた養子が實體で、こちら夫婦に孝行をし、家も相續してくれればよけれども、どうも確に養子は孝行など定まつたことござるまい。もし其の養子が不心得で、家を野原にせうやら、此方等のやうな肩の悪い夫婦なれば、それ程も知れぬてはござらぬか。同じ子故に潰す身代なら、忤の爲に家を失ひ馴染んだ村を立退いて夫婦袖乞になるとも、我が子の尻から附いて歩いたら、私は本望に思ひます、五十年以來一生に一度の願ひ何卒聞き入れて勘當を止めて下され。子故に乞食をすると思へば恨にも思ひませぬと聲をあげて泣く。云はるゝ。親類もこれを聞いて一同に顔を見合せ、親爺が何と云はるゝぞとまもりつめて見ておれば親爺は何思ふたか、印形を財布へ入れ、手はやに財布の紐を締めてかの願書を親類のまへに差戻し、さて、一家中へ對して面目ない事てござれども、今婆が云ふ所道理に思ひます故、向後忤は勘當は致しませぬ。斯う云へば、其の心で育てた者ゆゑあの様な不孝者が出来たと定めて御前方が笑はつしやうが、笑はれても苦しうござらぬ。勿論あの忤を勘當せねば、此の家が潰れる事は、物の三

年待ちはすまい我が子故に先祖代々の家を野原にするのは、先祖へ對して済まぬといふ事も能う合點して居ります。又勘當せねば御前方と不付合になり親類義絶も合點でござる。必定此方が村を立退く時無心合力でも云はうかと、其の用心の義絶であらうが、必ず案じて下さるな。世間の義理も先祖への不孝も親類の義絶も顧みぬのは子が可愛いばかり。其の子の尻から乞食して歩く事なれば、此方等夫婦が本望といふもの。決して御前方へ無心合力は云ひませぬ。はて何で死ぬるも一生ぢや、可愛い子の爲に大道に倒死、並木の肥料になるのも好んですれば恨とは存せぬ程に早々お前方も内へ引取つて下され、翌日から物も云ひませぬぞ。子故なら何といはれても構ひはござらぬと、同じく大聲をあげて男泣に泣かるゝと母親も勘當せぬと聞いて是れも嬉泣に泣く。親類縁者は餘りの事に呆れ果て返答もせず、夫婦の顔を打眺めて居るばかり。何と親の子に迷ふ哀れな心を御推察なさりませ。此の親の大慈悲の光明が彼の不孝者の腸へ浸み渡ると、有難いものぢや。さしも恐ろしい鬼の様な横着者も五體を縮んで締めらるゝ様に覺え、何といふ事は知らねども、胸先へ涙が突かけ、聲をあげて泣かれもせず、かます袖を口に咬んで大地に倒れて、締め泣に泣てゐる。圓位上人の歌に、
何事のおはしますか知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ
能う詠んだ歌でござります。此の時の野良息子が親をかたじけな

慈大悲の光明で腸を貫かれ、自然と息子の持前の光明が誘はれて輝き出すと、氣隨氣儘の村雲は何くへやら消え失せて、眞實底から親の慈悲が有難う成つて来る。さて彼の息子は直さま座敷へ駆込み、親達へ訃言せんとは思ふたが、待て暫し、此の儘駆込みたらば、親類縁者も驚き、如何なる事を仕出かすぞと親達の御心遣ひであらう。何知らぬ顔にて表口から座敷へ出て、親類に付いて訃言せんと一決して忍び足に裏より表へ廻り、塵と雪踏の音高く、暖拂と共に座敷へ通れば、親類は大いに驚き、親達は憎い我が子の顔を見て夫婦とも泣いてござると、かの息子も何もいはずに差俯いて泣いてゐる。良ありて親類中へさて是迄は勘當々々と度々聞きましたれども、さのみ辛いとも存ぜなんだが、今夜の寄合と承はり、どうした事やら頻りに心細う覺えまする何分、是迄は重々の無調法、此の上は屹度改めまするに依つて、今夜の勘當暫く御用捨を下されと、例にない頭を擧へ擦りつけて頼む。此の時親類中は親達が手強い返答し、その座白けて立つにも立たれず拍子のない折柄、此の息子が一言に是れ幸と一同に口を揃へ、今夜の所は待つてやつて下されと訃言する。親達は本心に立返らいてさへ勘當はせぬ心、まして今の一言聞いて、只嬉泣に泣いてゐらるゝ。親類もこれを機に、随分孝行にさつしやれと云ひ捨て、其の夜の評定は止みました。是れから彼の息子殿が手の裏を返す様に孝行人になり、兩親に事へる有様實に小兒の父母を慕ふが如く、是迄の悪行は形跡もなく消え失せました。此事世間に取沙汰が高うなり、半年たぬ内に御地頭様の御耳に入り、遂に御目がねを以て大庄屋役を彼の息子に仰せ付けられました。是れでかの息子の孝行の所業御推察なされませ。さて其の後三年ばかり立つて、母親が大病、末期にかの息子殿を呼ん

で云はるゝには、いつぞや勘當の評定の節より、何と想うたか志が改まり、此の上もなく孝行にしてくれぬ。もし其の時に其方の心が改まらず、其の中に己が死んだならば、地獄へ行かうより外はない。今は其方が孝行にしてくれぬ。何も思ふ事がない故、今死んだら極樂へ行くと違ひはない。ナリや己を佛にしてくれぬは皆其方が孝行の故ぢやと手を合せて拜みながら臨終をせられたと申す事ぢや。(鳩翁道話)
九 吉田松陰の母
瀧子は吉田松陰の母なり。二十歳にして杉百合之助に嫁したり。これよりさき萩の城下に大火あり。杉家も全焼の厄にあひて、悉く家財を失ひしかば、城東松木村に移りて他人の家に寄寓せり。後百合之助は此の地にさゝやかなる茅屋を構へて、瀧子を娶りたりしが、當時未だ役につかず、家祿のみにては生計を支へ難かりしかば、農業を營みて一家細き煙を立てたりされば瀧子は夫と共に野に出て耕作に勵み或は山に入りて薪を探りなどして慣れざる仕事に努め、又家事一切を引受けて毫も勞苦を厭はざりき。松陰等の生まるゝに及んで、子女の教養に力を盡し、なほ傍ら耕作の勞に服し、自ら馬を飼ふ等具に辛酸を嘗めたり。
かゝる間にありて、瀧子は常に心を用ひて年老いたる姑に事へ、三度の食事は常に暖なるものをすゝめ、衣服は柔かきものを着せ、裁縫する時は姑の傍に侍りながら、其の好む話等して慰めたり。又姑に妹ありて其の嫁せし家甚だ衰へたるため來りてかゝり人となり居たりしが、或年ふと病にかゝり日を追ひて病勢つものり久しく起臥さへ自由ならざりき。瀧子は耕作に勤勞し、三人の子女を養育しながら健氣にも

服藥・食事は勿論、何事にも心を盡して介抱せしかば、姑は瀧子の親切を喜び涙を流して感謝したり。近隣の人々も瀧子の行を見て歎賞せざる者なかりき。

後、百合之助藩の吏員に擢用せらるゝや、長女を伴ひて城内に寓し、松陰兄弟を家に留めて學業に勵ましむ。瀧子は夫の留守を預りて、家政を整へ二子の教育に心を盡したり。かく瀧子は百合之助貧窮の時に嫁して、よく夫を助け勤儉力行せしかば、次第に家運を挽回し、又子女の教育宜しきを得たりければ、皆心掛よき人となれり。

中にも松陰は人物も優れ勤王の志厚く、少壯にして國事に奔走し屢困厄に遇ひたりしが、瀧子はよく之を勵まして尊王愛國の大義に盡さしめたり。松陰の松下村塾を開くや、瀧子は多くの門人を我が子の如くに愛し、自ら親切に衣食の世話までなしたりしかば、門人等は後年に至るまで瀧子の徳を稱したり。又當時天下の志士密かに松陰を訪ひ来るもの多かりしが、瀧子は常に厚く之を遇したり。

女子は人の妻となりて夫を助け一家の世話をなすものなり。さればよく夫に事へて貞節を守り、舅姑を大切に孝道を全らし、子女を教養してよく母たるの道を盡すべし。家政を整ふるは妻たるもの重大なる務なれば、深く之に意を用ひて夫をして内顧の憂なからしむべし。又夫の業務を助けて家運の繁榮を圖ることも妻たる者の心掛くべきことなり。瀧子の如きは洵に主婦たる者の鑑といふべし。

(尋常小學修身書卷五教師用)

十 甘南備の楠

一、第十九世紀の自然科学界に大天才チャールズ・ダーウキンを送

り出したダーウインの家系からは、その外に超凡級の人々を澤山に出してゐます。又第十八世紀の世界音楽界に大天才ヨハン・セバスチャン・バッハを産み出したバッハ家からは、この人をはじめ其の子四人とも皆天才者として現はれました。のみならずその子孫になほ超凡級の名手を澤山に出してゐるのです。また我が國の美術史上で狩野家は探幽のやうな天才をはじめ、多くの天才者超凡級の人々を出して居ます。私達はこれ等の事を思ひ浮べるとともに、我が國民性を白熱化せしめて人類に潜める忠義性を最高善と最上美にまで發揮せしめた大天才大楠公を夫として多くの天才者、超凡級者を多數に出した南庇庵玉山蒲圃大禪定尼を思ひ起さずには居られません。夫人の生家は充分には分りませんが、南河内の互利、觀心寺の過去帳とその近邊の言傳によりますと、夫人の終焉の地である甘南備の郷から谷一つを東南にへだてた矢佐利の住人、南江備前守正忠の妹で名を久子といふ説が確實らしいのです。

二、夫人は嘉元二年に生れ、元享三年に二十歳で大楠公に嫁ぎました。そのころ夫は水分に住んでゐました。

それから三年目の正中二年に小楠公が生まれました。更に三年目に次男正時、また三年目に三男正儀、四年目に四男正秀、五年目に五男正平、六年目の建武二年に六男朝成を挙げました。夫人の苦勞は正秀の生れた元弘元年から始まりました。それは後醍醐天皇が笠置山へ行幸になつて、正成を召された時です。正成は水分の館を焼きすてて決心を示しました。夫人や子供は觀心寺へ送られて、僅かに悪逆な北條の毒手から逃れる事が出来たのでせう。小楠公はまだ七つ八つぐらゐてその下になほ二人の男の子をかゝへてゐたのです。大楠公からの清い

強い血と夫人の心盡しとが相俟つて、あの小楠公そのほかの天才者を徐々に育て上げられたのでした。

三、元弘二年、大楠公が千早城に鬼神のやうにあらはれて、北條の大軍をなやまし、それに勵まされて諸所に官軍が起り賊軍を掃蕩し六波羅、鎌倉を平げて建武中興が出来ました。その時の夫人や小楠公等の感激は天才者の心情をかくむのに、どれほどの力があつたこととせう。建武二年には足利尊氏が叛いて建武中興がやぶれ、ついで尊氏が京都に攻め上り、大楠公は他の勤王の諸將と共にこれを破りました。同じ年の五月に足利が九州の大軍をかり集めて海陸から攻め上つたとき、大楠公の必勝の獻策は用ひられないうで、遂に正成は湊川に討死しました。觀心寺の境内にはその首塚が遺つてゐます。また湊川神社にある位牌には弟正季、南江正忠等十六人の名前がのつてゐます。この絶大な刺戟は小楠公以下五人の遺子の生命のうちに痛烈な衝激を與へたこととせう。

四、官軍の勢が振はなかつたので、この年の十二月に後醍醐天皇は吉野山へ行幸になりました。その時に警護の大任を仰せつかつたのはまだ年端もゆかぬ正行でした。天皇はそれから四年目に崩御になり、後村上天皇が御即位になりました。その時小楠公は十五歳弟正時は十二歳でしたが二人は二千の味方を集める事が出来ました。この楠公一族が吉野朝廷の一番の力でありました。

興國五年、小楠公が二十歳の時、紀州の須田黨を痛撃し、河内の八尾の城を攻め譽田の森で賊軍を粉碎しました。この頃小楠公は母や弟たちと一緒に、南河内の東條の城に住んでゐたのでした。正平二年、正行の末の弟三人はまだ幼弱でしたが、正行は次弟正時と共に北河内

の平野で高師直の大攻撃軍六萬の兵に向ふて陣をききました。三番目の正儀が東條の城を留守居しました。大楠公夫人はその後見をしてゐるのでした。四條畷の激戦は正行・正時以下一族の天才者たちに永久不死の死を與へました。

五、夫人は四男正秀、五男正平、六男朝成と順々に成人してゆくのを待つて、東條からは遠くもない甘南備郷峰の山のほとりに觀音堂を立て、草の庵を結んで同向三昧に入りました。現に楠庇庵のある處がそれだといひます。觀心寺から山越をすれば八町ばかりです。富田林驛からは一里です。庵の中には十一面觀音と、楠家代々の位牌十四基とを祀つてあります。夫人は正平十九年七月十七日六十一歳でなくなりました。三男正儀の手で吉野朝廷と足利義詮と和議をはじめたるときでした。夫人がなくなつて六百年。私達は人間性の中で最も光明ある焔の眞只中には忠義性の燃えあがつてゐることを、世界に示してくれる甘南備の木立の母樹に禮讃することを惜しまないでせう。

小西重直、大石和太郎共著(女子修身書上級用)

十一 小袖會我

建久四年五月、征夷大將軍源頼朝卿、富士の裾野に遊獵の催ありて、東八箇國の侍ども皆御供に參る中に、河津三郎祐泰が遺兒曾我十郎祐成同じき五郎時致兄弟共に出立つ。此二人今は頼朝の家人にもあらねば、奉公を挺んづべき筈も無けれど、かく出立つは父祐泰の鑿工藤左衛門尉祐經を討たんの下心あればなり。然るに弟時致は豫て母の勘氣を蒙り居たれば兄の祐成執成して赦免を請ひ、青天白日の身となして共に本望を達せんと思ひ、富士野に赴くに先ち講第の家の子團三

郎鬼王を伴ひ主従四人曾我の里なる母の許に立越えぬ。途すがら狩場の様など想ひ遣り神勢勢猛くして我等が手の下に討つことはむつかしとも又と得難き機なればともかくにも狙ひ寄りて見んものをと、心中に勇みをなして行く程にやがて母の許に着きたり。

祈成弟を門外に待たせ置き、己一人先づ入りて案内を請ふに、母の家に行使はるゝ春日といふ女房出て来りかねん、主人の申付に十郎殿参られたらば内に通せ、五郎殿ならば取り次ぐなど仰ありと云ふ。祈成は某只一人参りたりと申せとて急ぎ母に對面を求む。母は此方へと我が居間に通らせ、祈成を見て

母「あら珍らしや十郎殿。何所への序にて此くは立寄らせ給ふぞ。母が爲に懇との御出にはよもあらじ。

十郎「久しく参らず候へば御機嫌を伺ひたく、又今度富士野の御狩に出立つ儀にて候へば……」

母「さればこそ参られつれ。御狩に出づる序にて候はずや」とて常は我を訪はぬ無情を怨み貌にはもてなせども、其裡には自ら親心の情愛も籠りて、やがて笑ひつ語りつする聲は門外に洩れ開ゆるに時致は羨ましくは思ひながら、勘當家りたる身は内に入りかねて、物の隙より母の姿を覗ふものから、古歌に「よそにのみ見てや止みなん葛城や高間の山の峰の白雲」とある、其の白雲を眺むる如くにて近寄りかねる苦しさ。もとより母も一つなり傳乳母も同じ手にて育てられしに、今は兄のみ母の寵愛を受けて懇なる待遇に預り狩場への出立を祝ひて酒盃を下さると思し。そも此身は何たる因果ぞやとて悲しみ嘆く。祈成其時戸外に出て来り。

「母上の御機嫌いみじければ、内に入り春日の執成を頼み給へ。」

時致は参るまじと争ふを、強て引連れ母の許に行き。

「こゝに申入れたき事の候。我等兄弟が父を工藤に討たせし世に際無く、祈成が身の便無さ申すにも及び候はねば、せめては御勘氣蒙りたる時致御赦免を請ひ申し、兄弟打連れて、御狩に出でばやと存じ候ふ處に、時致が事を申さば、祈成も共に御勘當と承り、餘の事とあさましく存じ候。つら／＼案じ見るに、母上には此祈成をも誠には深くも思ひ給はぬよ。其仔細は、たとひ、時致出家にならんと申出でたりとも、祈成には郎等も無く、而も大望ある身なれば、弟なる汝等までも兄を見捨つるか、と御叱ありて止め給はんこそ、眞個の慈悲とは申すべけれ。さは無くて時致が法師にならぬを御憤懣にて、御勘當とは情無く候はずや。縱令時致仰に従ひて出家仕り候ひぬとも、我等兄弟親の讐を窺ふと聞えは隠無ければ、寺の同宿たちも我等を誹謗して、あれを見よ、河津が子どもは敵を怖れての出家にて、心からの入道には非ずなど言はんには姿こそは墨染の衣を纏へ、心は願志の心止む時無くて罪業の積り行かん事却つて俗にてあるよりも甚しく候ひなん。又時致は箱根寺に在りし間に法華經一部讀み覺え常は之を讀誦して母上の現當二世を祈り又毎日六萬遍を念佛して父河津殿に向せりと承る。かやうに他念なき時致の此三年御不興蒙ること心得難く候。餘りに久しく御顔を拜せねば御懐しくもあり又一つには狩場への門出にて候へば御暇乞の爲といふやうもあり。此といひ彼といひ一方ならぬ思にてこそ是まで参りたれ。治まれる御代とは申し乍ら狩場などには心の起ちたる人々の間に不慮の争あるものなり。其の上我等は狩場につきて兎例あり。祖父(伊東祐親入道)は伊豆の奥野の狩座より病づきて歸り給ひて程なく亡せ、父は同じ狩場への出立とあらば御心に懸け給

と云へば時致危ぶみて直ぐには入らんとせぬを祈成もどかしがり、何事も自分に任せて急ぎ内に入るべしと云ふ。時致さらばとて進みて中門の所に行き、春日を呼びて時致母に向顔の爲に来れる由言ふに、春日事むつかしと思ひてか返辭もせず顔をも出さず。時致怒める聲にて呼ぶこと再三に及ぶ程に春日やう／＼に起ちて母に五郎殿御入にて候と云へば

母「不思議や、祈成は唯今参りぬ。今一人の子九上禪師は寺に在り。此二人の外に子とは無きに、時致といふは何者ぞ。や、思ひ出したり。箱根の寺に在りし箱王といふ放心者か。其者ならば母が申付を聴かざりしによりて勘當せしに、是までの推參心得ず。猶かさねて勘當たること、伊豆の三島明神、富士箱根権現も照覽あれ。

と詞鋭く言放ちて、内外を隔つる部遣戸を閉切り、簾几帳をも下せば、時致今は母の姿を垣間見る便をも失ひ、悵然として打嘆くばかりなり。

先刻より外に在りて弟の首尾如何にと待ちたりける祈成は、時も移りぬ、さては奥に入ることを得つるかとして中門の方を見遣れば、時致は猶其所に佇みあるにぞ、様子は如何に、此方に來よと應く。時致悄然として出て来り、兄の尋ぬるに答へて、母上の御機嫌以ての外に宜しからず、猶かさねての勘當と仰渡されたりと云ふ。

さて母は尚も怒を収めず、春日を喚出して、時致が事を申さんに於て祈成とも勘當ぞと言へば、春日は兄弟の立てる處に來て其趣を通ず。祈成、春日に對ひて長りぬと申せと云ひて還し、さて時致に對ひ、思ふ旨あり、此度は一所に參じて申すべしといへど、前に懸りたる

はるべきに如何候ぞ、御心強きにも程こそあれ。かくても時致の御勘氣解けしとなれば此儘あらん益なきに、御暇申候はん。と泣きながら起き上り、兄弟齊しく去らんとす。母道理に責められ聲を揚げて女房たちも呼び、あれ留め給へ。今は時致の勘當赦すにであるぞ。とて、其身もつゞきて追蒐かけたれば、兄弟は嬉し泣きに泣きつゝ伏し轉ぶに、見る人々も袂を絞りけり。

十二 山地元治の母容堂を感せしむ

和田萬吉著(論曲物語)

十郎「いかに時致近く来りて、此年月の御物語致し候へ。と親子の間を執成し、望叶ひし嬉きの餘り祈成は瓶子を持つて酌に立ち母が體にとて送れる小袖を被て兄弟相舞せしが、袖を騎す間にも密かに目を合せ、今日を限りの親子の契と思へば涙も出て止まらねど、止め難きは狩場へ出立ちの時刻此上は連參やせんと飽かぬ名残を惜しみつゝ暇乞して富士の裾野に向ひけり。

山地元治の母は性豪邁にして賢婦の名高し。元治の江戸に在り山内容堂公に奉仕せし時、在郷の母病に罹りしを聞き、憂苦措く能はず、郷里の親戚に書簡を送りて其容態を尋ね、且つ重症にもあらば速かに歸國せんとの意を通じ置けり。後日母より書簡來りたれば元治は急ぎ披き見たるに其文意は「今汝が其地に在るは君公に仕ふるが爲なり。母の事は、私事のみ。然るに公務をも顧みず、私事の爲輕忽にも君側を離れんとは如何なる意ぞ」と甚く叱責せる文なり。元治は一讀して

感泣に咽び、三四讀して尙ほ手より離す能はざりき。時偶々友人某元治の室に入り來り其顔色の只ならざるを見、訝りて之を問ひしに、元治は其實狀を語りしかば、某も頗る感動して之を容堂公に言上せり。容堂公乃ち元治を召して曰く「汝が母より送り來りし書面を余に視せよ」と。元治「是れ只母の一私書のみ。願くは御免しあらん事を」とて辭したれども、公聽かず、強いて其の書面を見て嘆じて曰く「是れ眞に武士の母たる者の龜鑑なり。余未だ斯の如き賢母を觀ず。願くは此の書簡を余に與へよ。余記念として、永く之を秘藏せん」と。元治之を諾す。公珍奇なる一個の酒盃を取出して曰く「汝の母に與へん」とて之を元治に授けたりとぞ。(小原國芳著 眞人の生活)

十三 ワシントンの母

ワシントンの母は、實に堅固な人格の人であつた。だから、ワシントンは母に就いて斯う言つてゐる。「母は一個の権力を有し、その子の長じて、最も著名なる人となりし後まで、尙ほ之を保持し居たり。我は汝の母なり、我は汝に生命を與へ、汝の年齢と智力とが、猶ほ案内者を要するの時、其の歩行を導きたる案内者なり。親としての愛情は、汝等の愛を求め、又親としての権力は汝等の従順を求む。汝等が成功と名譽の何たるを問はず、神に次ぎては、皆之を母に歸すべきものなり。是れ我が母の思へる所のものの如し」と。此の尊敬すべき母が、此の世を去るまで、ワシントンは常に其の意志に従ひ、忠實なる尊敬と愛情とを以て之に仕へてゐた。だから後の歴史家も詩人もワシントンの人格と經歷とを決するのに其の重大なる

感化を此の母に歸しないものはない。(小原國芳著 眞人の生活)

十四 リンカーンの母

人は何によりて成るか、家系もよからん、境遇もよからん。併し夫等は無くとも可なり。或は無い方がよいかも知れない。母の愛あれば十分だ。孟母の例はそれである。單に孟子のみでない。少くとも我々に何物かを遺して呉れた人々の背後には母の愛なきものは無いと言つてもよい。聖アウガスチンに母モニカあるは有名な話である。我がリンカーンにも亦母の慈愛の眼あるを忘れてはならない。彼が米國の一移民の子孫として生れた。家系としては何もない。境遇か。之れ米國の荒寥たる自然である。彼の靈性智性には喜ぶべき境遇では無かつた。移住民の生活の甚しきはその事情を知らない者には少しも解し難い。僅かに北海道あたりの移住民によつてそれを窺はるゝのである。父は正直な而かも剛膽な人であつた。移住民によく見る型の人であらう。思ひ切りがよくて、色々と心を轉ぜしむる人であつた。而かも文盲である。一家の生活以外には心を向くる餘裕がなかつた。勿論其の子女をして賢人學者政治家とせん野心は思ひつかない。人は丈夫で田野を耕せば足れりと思つて居た。周囲の人も皆同様である。併し母ナシは天より與へられた唯一の賜たる愛情を以てその美しい眼を以てリンカーンを育くんだ。決してそれは樂な生活にありて人々が理想的にせんと空想して居る様な場合ではない。壁なき丸木小屋に枯葉を床として安ませながら溢るゝ許りに注いだ愛は深く、彼の胸の底に刻まれて生涯の清き泉となりて彼の性格を形作つた。彼の傳記に現はるゝ美しい行爲は此の泉より自然の溢である。そして暇ある毎に唯一

の書籍たる聖書を讀み聞かせ、又知れる限りの話を語つた。それが如何に彼の研究心を育くんだであらう。不幸にして彼の母は彼の九歳の時に病にて別れたのである。その臨終にナンシーは彼の頭に手を置いて父と姉に孝行せよ。隣人を慈しみ神を畏れよと遺言した。

併しリンカーンに於て今一つ忘れてはならないことは第二の母サラである。母には先夫の三子ありて急に彼は多くの兄弟を有するに至りたるが、此のサラの愛と理解とはリンカーンをして彼あるを得しめた。一家を改善すると共に彼の垢を洗ひ髪を梳り清らかな衣服を着せ、實子と選ぶ所なく愛した。而して彼の學を好む性質を知りて夫の反對をなだめて彼に讀書を教へ又食ふに困る中より無理して迄も自分の勞働を倍加して迄もその地方に始めて出來た巡回學校に通はした。彼と母との間は眞の一致を爲して一生變ることなく、一度も母の言葉に逆はず、又母もいやな顔一つせず、實に美しき生活であつた。枯野にも森林にも温かき愛情は流れた。サラも後年人に告げて「アブラハムの大量なる心と自分の小やかなる心とは不思議な程善く結び合ひ愛情の濃やかなる間柄であつた」と言つてゐる。

鯨坂國芳著(修身教授の實際)

十五 ラファエルの眼

諸君は、イタリーの畫聖ラファエルの描いたマドンナの肖像を知つてゐるであらう。一體マドンナのやうな婦人は實際この世の中にあるのだらうか。恐らくゐないであらう。それではどうしてラファエルにあゝいふ肖像が描けたのか、彼は自らあの畫の思ひ出を物語つたことがある。彼は大勢の母親を觀察して、到る處に或る一種の美を發見し、

それを蜂が蜜を集めるやうに悉く寄せ集めてこの一幅の名畫の裡に統一したのであるといふ。であるから、マドンナの高貴と純潔はラファエルがいゝ加減な空想で捏ね上げたものでなく、現實生活の實物から觀察し、採集したものである。マドンナの神の如き純潔に匹敵する婦人は此の世にはゐない。けれども、我が子の顔を覗く母親の顔付の裡には、神聖な神に近い或物が表はれる。多くの人々は病氣や勞苦にやつれ、勞働者のやうな無骨な手や粗野な容貌をし、貧困や疲勞の爲に激し易くなつてゐる母親を見てゐるので、その中に隠れた美を知らぬものが多い。母親たちの頭に燦く神聖な後光が眼に這入らないものである。大藝術家は普通人の眼の届かない所を見る。ラファエルがそのやうな大藝術家であつた。諸君が單に美しい繪を觀るだけでは教へられる所は小さい。あらゆる事象を自ら進んで更に微細に觀察すべきことを教へてくれることがラファエルの最も美しい贈物である。マドンナの畫像に接した後、諸君が從來とは全く別な眼で我が母を見るに相違なからう。夕方嬰兒のベツドを覗いたり、弟や妹を抱き締めて顔を見る時、又諸君の病を看護する時、さういふ時の母の様子を注意して見給へ。それでも頭から後光が射してゐないであらうか。ほん物の後光がさしてゐない。しかし、さういふ瞬間には彼母が徹頭徹尾己心を脱却することによつて、其の顔面に天女のやうな崇高な表情が溢り溢れる。人は自己を思ふ念が薄くなればなる程、その容貌は愈々天上界の氣を帯びて來る。だから人はよく「母は天使である」といふのである。世間には天使らしい母親が澤山居る。又まことに優しいよい母親であるが、克己心の弱いために、直ちに激せられて愛子にひどく當るも

のも多い。ラファエルはこの事實を見聞した。否、彼はあらゆるそれらの事實を通じて崇高なるものを認めたのであつた。けれども夜毎日毎幾千萬とも知れぬ母親が、眠れる我が子の顔に移す溢るゝばかりの慈愛を回想する時、彼の心には母親の壯嚴さが一杯で、その他の不完全な部分は視界を去つてしまふ位、偉大に思はれるのであつた。諸君の中で我が母を神聖視し、如何なる場合にも憤み深く愛情こめて接する人があれば、その人はすなはち神の恵を受けた藝術家である。なぜならば、その人の眼はあらゆる現世的な不完全を透して、母親の神聖と偉大とを認めるからである。二六時中我が母に對して温雅であり紳士的であつて、母を女王の如く見る人は、「ラファエルの眼」を持つ人である。その人には母の壯嚴な本體が見えるのである。

私はしばしば子供が成人するに従つて、次第に母親に對して粗暴不遜となるのを見る。そしてその人を非難すると「それは母の所爲である。母は何につけ口喧しく小言をいひ、粗暴不遜の態度を示すからだ」と返答をする。しかし、何故母の訶罵は募り、神經は過敏になつたか。諸君が僅か一晩より寝られないだけでもどれほど神經が昂ぶり不機嫌になるか、考へて見給へ。諸君の爲に犠牲にした睡眠を回復する爲に母は、丸一年間晝夜寝通しに寝ることが必要なのである。

小原國芳著(眞人の生活)

十六 母の愛は強し

オーガスチンは、怠け者で大酒呑で、その上放蕩もすれば亂暴も働く、箸にも棒にもかゝらぬ不良少年であつた。或日、例の如く泥のやうに酔つて、夜更けてから我が家に歸つて來

ると、未だ寝ずに待つてゐた母のモニカが、餘りに荒んだわが子の行狀を悲しみ、オーガスチンに縋りついて、「どうか改心してくれ。」と泣いて哀訴した。がそんなことに耳をかすオーガスチンではなかつた。「うるさい。そんな説教なんか、聞き飽きてらあ。退け、退かないか。」と酒のせむもあつたのであらう。無法にも泥靴のまゝ母を蹴飛ばした。モニカは何も言はないで、手で顔を蓋うたまゝ自分の部屋へ歸つて行つた。

オーガスチン程の不良でも、流石に人の子である。自分の仕打の亂暴過ぎたのにも氣が咎めるし、母の様子も何となく氣がよりのであつたので、そつと後をつけて、母の部屋の外まで忍んで行き、扉の鍵の穴から中を覗いて見た。

「天にまします神様。どうか不慮なわが子オーガスチンの心を改めさせて下さいませ。オーガスチンさへ生れ變つたやうな立派な青年になりさへすれば、この身はどのやうな苦みを受けようとも厭ひませぬ。假令其の爲、この身の命を召されても苦しいございませぬから、どうかオーガスチンの亂行をお止め下さいませやうに……」

鍵の穴から覗いてゐたオーガスチンの眼には、いつか涙が光つてゐた。(あんな酷い仕打をした自分を恨む風もなく……)さう思ふとオーガスチンは、母の限りない慈愛がひし／＼と身に沁みだした。つひに耐りかねてオーガスチンは扉をあけて中へ飛び込んだ。そして母の膝に縋

りつきながら

「お母さん、私が悪うございました。今日限り心を改めます。どうぞ今迄のことはお許し下さい」といつて泣き崩れた。

大宗教家としても、大學者としても有名な羅馬法王セント・オーガスチンこそは、母の愛によつて更生した當年の不良青年オーガスチン其の人であつた。(美談逸話集)

六

備考

一 子女の教養

父母の子女を愛するは、人情の自然に出づ。諺にも「焼野のきぎす夜の鶴。」と云ひ、又、古人が「破る子のなくて障子の寒さかな。」と歌へるが如き、親子の情の如何に濃やかなるかを知らしむるに足らん。父母にして子女を愛護せざる者なし。されど、唯愛護するのみにて教養を怠り又教養すとも、其の道を誤るが如きことあらば、却つて子女の不幸となり、親たるの道を傷ふべし。古語にも「父母慈なりとも、教へざる時は其の子を敗らん。」と戒めたり。親たる者の第一の務は、子女を教養して善良なる人たらしむるにあり。

元來、子女は父母の私すべきものにあらざ。祖先の志を繼ぎて、家の繁榮を圖り、家名の維持・發揚にあづかるべきものなり。忠良の臣民となりて、國家の富強を圖り國威の宣揚に努むべきものなり。而して、子女の賢愚・良否は、主として、教養の如何に由る。故に其の教養の道を失ふときは常に子女及び父母の不幸たるのみに止まらず、や

がて家を破り國を損ふにも至るべし。されば、父母たるものは、己れの子女を以て國家の寶と思ひ、深く意を用ひて其の教養に努むるを要す。

父母の施すべき教養には、學校教育及び家庭教育の二方面あり。學校教育は尋常小學校に於ける義務教育より始まる。父母たるものは、己れの資財の許す限り、其の子女の健康・性能に應じて、進んで適度の學校教育を受けしめ、忠良・有爲の國民たらしめざるべからず。

されど、學校に於て授くる所は、主として知識及び技能にして、道德の教育に於ては、到底家庭教育の力に及ばず。何となれば、道德は實行に依りて得たる習慣に基づけばなり。然るに世には子女を學校に託したる以上は、一切の教育に對して、己れの責任を忘るゝ者なきにあらず。誤れるの甚だしきものと謂ふべし。概して、家庭教育の中心となるものは母なり。古來、英雄・偉人の子必ずしも俊英ならざれども、英雄・偉人には多く賢母あるを常とす。されば、母たるものは、能く其の責任を自覺し、綿密なる注意を以て子女を善に導かざるべからず。世に、「善良なる國民を作らんと欲せば、先づ善良なる母を作れ。」と云へるもの、誠に故ありといふべし。

子女の躰方は寛嚴宜しきを得るを要す。子女の最も陥り易き惡徳は我儘なり。而して我儘の心は諸惡の本となるものなれば、幼時より嚴格に之を戒めて、假借せざるを可とす。されど、又妄りに子女を呵責して自由を拘束し、活動を制限するも宜しからず。子女の天眞にして無邪氣なる活動は、なるべく之を自由ならしめ、以て其の天性の發展を遂げしむべし。實に強健なる身體も、有爲の精神も、かゝる間より生ずるものなり。然るに、教育なき母又は祖母は多く目前の愛に溺れ

て、成長後のことを思はず、ために子女の品性を賦ふことあり。古來「祖母様育ちは三文安い。」と刺り、又「其の子を見て、其の母の賢愚を知る。」とも云へり。子女の一言一行は、母の鏡け方の鏡ぞかし。

子女を善良ならしめんに、長上たる者、先づ自ら善行・美風を示して、之を感化するを上策となす。子女は天性模倣を好む者なれば、父母の一言・一行は、知らず識らず、其の言行・思想・感情に影響するものなり。之を感化といふ。故に母は、日常其の言行を正しくし、家内の風儀を善良にし、子女の接する環境をして清淨潔白ならしむるやう心掛くべきなり。能く其の子女を教養して、有爲善良の人たらしむる基を養ひ得ば、母たる者の家國に貢献すること、實に大なりと謂ふべし。

明治天皇御製

たらちねの庭の教はせばけれど

ひろき世に立つともとはなれ

吉田静致著(女學校用修身教科書)

二 男子の勢と女子の勢

男子も女子も共に人たり國民たる點に於ては異なることなし。されば男子と女子とによりて、人としてまた國民として行ふべき道に差別なきは當然のことといふべし。例へば人としては勉勵して知能を磨き、信義を以て人と交り、誠實を以て事にあたるが如き、國民としては常に國憲を重んじ國法に遵ひ國運の發展に盡すが如き、孰れも男子と女子とを問はず何人も力むべき所なり。然るに國家を防衛し、産業に従事しなどして國家の繁榮を圖るは概ね男子の務にして、女子は之

を顧みるの要なしと考ふるは大いに誤れり。女子もまた時代の進運に伴ひ、己が境遇と能力とによりては相應なる職業に従事するを要すべく、萬一男子の出征するが如き場合には、出來得る限り其の業務上の缺陷を補充して、國勢の維持に努めざるべからず。又品行を慎み、子女を養育するが如きはいづれも女子の事にして男子の關する所にあらずとするもまた大いに誤れり。男子も同じく品行を慎みて風俗の振興を圖るの責あり。子女の教養につきても、其の根本に於ては男子が常に方針を立つるを要するなり。

かく人として又國民として男子も女子も其の行ふべき道は同じけれど、更に進みて考ふれば同じき道を行ふにも、男子と女子とにて其のなすべき實際の務の自ら異なるものあり。男子と女子とは生まれながらにして身體に於ても性質に於ても相違せり。概ね男子は剛毅果斷なべく、女子は溫和貞淑なるべき特徴あり。されば或は官吏となり、或は軍人となり、或は産業に従事して、大にしては國家社會を維持し、小にしては一家を保護するが如きは、女子も關係すれども、主として男子の力に俟たざるべからず。然るに家政を治めて家庭の和樂を圖り、子女を養育して將來の國民を健全ならしむるが如きは、男子も關係すれども、女子の手に依らざるべからず。

諸子の父母が家庭に於て日々實際になせることを見よ。一としてかかる男子の務と女子の務との主要なるものにあらざるはなし。諸子の父は家長として諸子等家族を率ひ、常に之を愛撫激勵し、己が所得を以て一家の生活を支持し、また世を益すべき何等かの職業に従事して倦むことなし。諸子の母は主婦として何事につけても父の助となり、家政を整へて一家の生活を安易ならしめ、又諸子を哺育撫養して、其

の心身を健全に發育せしめんがため日夜苦心せり。諸子の今日あるは實に父母の力によるなり。

男子と女子とがよく調和を保ち各其の務を果せば、家も益々繁榮し國も益々隆昌に赴くべし。(尋常小學修身書卷六教師用)

三 母としての女子

一、女子が始めて自分の嬰兒を抱く時は、その生涯に取つて至大の意義を有する時である。苦惱は胸から去り、慈しみ、喜び、望み、はた高い決心は、その心に湧いて、嘗て覺えぬ尊い生活を感じるであらう。かうして母の手が愛兒の爲に美しい衣を縫つて居る間に、母の精神は愛兒の人格の基礎を築いて居るのである。

二、嬰兒の衣は程なく桁、丈が合はなくなつて、取換へられる時は來るが、母の精神の感化は長へに取換へられることがない。春風秋雨幾年の後に、母は自分の性質が、寸分の差異なく、愛兒の生活に繰返されるのを見て、或時は喜悅に胸を躍らせ、また或時は暗愁に心を閉ぢられるであらう。かうした母の喜悅と暗愁との反面は、即ち、その子の幸福と不幸とに外ならないのである。

三、子の幸福のため第一に望ましいのは、美しい家庭であつて、美しい家屋ではない。これは忘れてはならない眞理である。或貧しい家族が生計に追はれて、東の村へ、西の町へと、轉々漂浪して居る間に、圖らずも遺産として小さい古屋を得た。その時、母は怡々として、「私達は今日家屋を得たから、益々家庭を美しくしよう。」といつた。信實で純潔な男子と、信實で純潔な女子とが結婚して、雙々相愛し相敬する時に、眞の家庭は作り上げられる。かやうな美しい空氣の

中に生ひ立つて行く子は、幸福な子である。この立派な父と母とを持つ子であつて、始めて其の圓滿な發達が遂げ得られるからである。

四、私達は屢々、薄幸な幾多の少年少女を見たことがある。彼等は父母、特に母の愛情に浴し得なかつた爲に、その發育は妨げられ、その性質は枉げられて、宛も雨露と日光とを受け得なかつた日蔭の植物のやうになつて了つたのである。野の荆棘も、これを花園に移し植ゑて、培養その宜しきを得れば、遂には美しい薔薇とならうものを。

五、「白がねもこがねも玉もなにせんに、まさされる寶子にしかめやも。」と詠じた萬葉歌人の意も、貴婦人達が珠玉、錦繡を喜んで居る中に、獨り「我に愛兒あるを見よ。」と誇つたローマの賢夫人の心も、共に子の尊さを思つたのである。眞に子を尊いものにするためからいつても、母が格段の努力を子の教養に注がなければならぬことは明らかである。

六、現代の母には、慈愛と勇氣と聰明と周到とを要する。兒童は模倣性に富み、感受性が強いから、母の言行は如何に微細なもので、すべて模範として暗示として兒童に受取られ、その印象は成長の後までも保留される。故に、母は一言一行の末までも慎まなければならぬ。

七、現代の母はひとわたり家庭教育の方法に通じなければならぬ。家事や教育について學ぶのも、多くはこれがためである。體育、徳育、知育の方法は多岐多端であり、また知識の外に經驗を要することもあるが、子を持つまでにも、相當の研究をして置かなければならぬ。大學に、「未だ子を養ふことを學びて後に嫁する者はあらず。」とあるのは、愛の力の偉大であつて、母は其の力に由つて、豫備

の知識はなくても、児童の保育に差支を生じないとの意味ではあるが、今日の眼から見れば、それは愛の力を高調するあまり、育兒に關する知識について十分考慮されてゐないやうに思はれる。

八、固より慈愛は母の第一の要件である。凡そ教育上最も大切なものは児童の理解であるが、その理解は慈愛から來る時に、最も廣く、最も深く、最も正しい。併し、優生學の原理、遺傳の法則、胎教、育兒法、児童衛生學、児童、青年の心理學、家庭教育法などの極めて進歩した今日では、此等の學問を修めることが、眞に慈愛を徹底させることになるのである。故に、例へば、實際母となつた人が、それらの何れかに屬する新刊の書物を一冊讀んで見ただけでも、如何に極度の慈愛を以てしても、到底發見し得ない種々の有用な方法があることを知るであらう。

九、故に、母親は博大な慈愛を有する上に、此等の新知識について廣く學ぶ所がなければならぬ。家庭教育の實際は眞に千變萬化で、如何に修養を積んだ者でも、到底すべての場合に處して過のないことは期し難い。母は嬰兒の要求を察すると共に、少年、青年の心狀を解しなければならぬ。兄弟姉妹の個性を見分けて、その各々に適應するやうな教養を與へなければならぬ。威嚴と恩愛とが併び行はれて、躰け方が寛嚴その宜しきを得るやうにしなければならぬ。抱くにも、寝させるにも、叱るにも、褒めるにも、遊ばせるにも、勉強させるにも、一切學問の命ずる所に從はなければならぬ。經驗も學問と相俟つて、眞に合理的な經驗となるのである。

一〇、無限の愛に兼ねるのに、多方面の知識、經驗と周到な智慮とを以てするのが、即ち現代に於ける眞の賢母である。これに由つて、

児童の身體、徳性及び智能の完全な發達は期し得られる。そこに児童の最大の幸福が存するのである。かの愛兒の教養を傭人に任せる母の如きは、その生得の特權、最善最美の天恵を放棄する者に外ならぬ。その子を輕蔑する女子は、一方に執る業務が、博愛的動機に發すると私慾的動機に發するとを問はず、畢竟過失を行ふものであることを免れぬ。女子最高の任務は實に理想の母であることにあるのである。

搖籃を動かす手は、世界を動かす手なり。
母心は往々盲目、未熟、無法なることあり。故に母心は神聖にして過失なき力なりとの感情的見解を棄ててこれに教養を與へざるべからず。
母は活ける最も神聖なるものなり。

四 母

家庭に於ける女子の積極的意義は母に於て最も格段に發揮される。知識に於て、技能に於て、或は社會的識見に於ても、女子は男以下でないやうに、またそれ以上でもない。たい母たることに於て、女子特有の貴き存在となる。子として蒙る恩に父母素より別はないが、その一途なる親ごころの濃やかさ、切なさに於て母の心は無二絶對である。その姿の神々しさは禮讚の言葉に盡せない。女子はその「母」になれるのである。これを女子の最高の幸福といはずしてよからうか。

母が我が子を愛するは當り前であり自然であるといふ。勿論特に修養工夫の結果ではない。しかし、母の愛の如く眞實なる愛、母の自己犠牲の如く純一なる犠牲は、人間修徳の極致として何人も理想とする

下田次郎著(女子新修身書卷四)

エレンケイ
コレリツヂ

西 諺

といふのである。しかも容易に到達し得られ難く、これに達すれば神に肖るときへいはれる。自分の心の最高理想化を希ふものは、一日たりともさういふ境地にありたいと思ふ。それが母に於て得られるのである。昔の人は女子に煩惱が多いといつた。私達はその眞否を知らないしかし一切をわが子にかけて、凡べてをわが子のために希ひ、わが子の外何ものをも思はない母の心は、少くも人間的なものの上至高の無上道である。その對象がわが子なるが故になほこれを煩惱といふならば、これをこそ煩惱即菩薩といふべきであらう。女は弱し然れども母は強しといはれるのもこの絶對の心境をいふのであらう。母となることはわが子の親となることのみならず、人間道のこの最高理想を身に體し得ることである。女子としてこの位望ましいことが他にあらうか。

しかも母たる幸福は至純の愛を體驗味し得るのみに止まらない。絶對の權限と責任とを以てわが子の養育と教育とに當ることが出来るのである。その苦心も亦素より最大である。しかし、かくの如く一心を籠めて人が人を教養し得る愉快が何處にあらう。樹を培ふことも愉快である。玉を磨くことも愉快である。しかし、人を教養大成し得ることは、それらの愉快と比較にもならぬ大なる愉快である。その樹を托せられて有るのである。その玉を授けられて有るのである。否、わがものとして有してゐるのである。これがためにあらゆる力を傾注することを許されてゐるのである。母たることも人生の事業に當ることだとすれば、これほど愉快を滿喫し得る事業が他にあらうか。但し、それも亦わが子だけのことでないか、狭く限られた範圍内のことでないかといふ人があるかも知れない。實際その通りである。社會を

對象とする場合の如く廣く、人の前に掲げ擡げられるものではない。しかし、名匠が繪を描き彫刻をするに於ても一世一代といふことが多し。否恐らく一枚の繪、一基の像、いづれもその心を以てこれに傾注されないのである。たゞその一つに全心全力を打ち込んで少しも惜しまないのである。多量の生産は機械のすることである。人の手の眞實な對象も亦常に一つである。量でなく一心である。そこにすべての製作の貴きがある。母の製作の貴きも亦それである。人間には皆大望がある。その大望に大きな二つの種類があつて、結果の大を希ふものと過程の善を期するものとある。前者は功名心となり、功績の輝かしさをこれ求める。社會に立つて各種の成功を遂げんとする大望は功名心のみではないがそれを交へ易い。隨つて名譽が主となり、これを得れば得々として止まるところを知らぬ。しかもこれと全く反對の大望がある。結果に於て派手に誇らんとするのではなく、眞實と忠實とを以て自己の生涯を他のために獻げんことを希ふ望みである。俗にはゆる大望とは一つでないが、これを固き心願とするはすなはち大望に他ならぬ。母とはこの第二の種類の望を満足せしめるものである。わが子のために、善き母たらんことをこれ專一に希ふのである。これによつて利を得んがためでもなく、名を博せんがためでもない。いはばどれだけわが子のために犠牲になり得るかに於て自ら満足せんとするのみである。世にかくの如き貴き大望が他にあらうか。母たるも亦人生最高の大望ともいふべきである。

倉橋惣三著(女子修身卷五)

五 女子の本領

母性愛

女子が戦場にあつて男子をもしのぐ武勇をあらはしたのは昔のことだが、學問や藝術などでその名を揚げたものは、古今を通じてその人に乏しくない。しかも、今日では、諸種の事業のために少からず貢獻してゐるものがすこぶる多い。それなら、今日女子の位置が次第に向上するのは、専らそのためであるかといふと、さうではない。今日はいふまでもなく、男尊女卑の甚しかつた時代でも、家庭に於ての母の位置は、必ずしも父のそれに劣るところはなかつた。否、家族の敬愛の中心は、父よりもむしろ母にあつたといふことが出来る。ゲーテの言に、「一人の兒を抱きあげてゐる母ほど、いちらしく見えるものはない。また大勢の子供にとりまかれてゐる母ほど、尊く見えるものはない。」とあるが、こんな思想は實際に於ては我が國にも昔からあつた。親の恩を詠むのに、多くは「たらちね」といふ枕詞を用ひる例はよくこの思想をいひあらしたものであらう。まして家族の敬愛は、純眞そのものであり、虚偽を交へることがないから、これほど身に受けて心地のよいものはない。だから、たゞ女子が社會に於て男子とともに權利榮譽を分けることができぬことだけを見て、すぐさま女子は世人に輕視されてゐると思ふのは大きな誤解である。

それなら、女子が敬愛を得るのはそも／＼何故だらうか。私達はよくこの點に思を致さねばならぬ。スタンレー・ホールといふアメリカ合衆國の心理學者は、私はキリスト教徒のマリア崇拜を羨しく思ふ。私達は唯一人でも、かつて博士たちを拜跪させた聖母は、當時の天文學を心得てゐたらうか、または自分で讀み書きができただらうかを問はうとしたことはない。聖母を見ると、人の母となるのには、藝術

家・演説家・教授家・技師などになるよりも、より多く人格が完全で、また神聖でなければならぬことがよくわかる。」といつてゐる。これは、女子の世人に敬愛されるのは、その學識や技能についてではない、その女子としてのすぐれた人格についてであるといふ意味である。そして、これは誰でも自分の母を敬愛する心持を省みると、必ずうなづくことができるだらう。

またラファエルといふ昔のイタリーの大畫家の手になつた聖母の像は、よく崇高純潔な母性愛をまがき出し、これを見るものをして覺えず頭を下げさせるほどの名畫だといはれてゐるが、さてこの像はどうしてできたかといふに、ラファエル自身のいふところによると、彼は久しい間多くの母を觀察し、とりわけそのよいところだけを集め、それに彼自身の獨得の技巧を如へて、遂にこの名畫をかきあげたといふことである。それなればこそ、世の實際には、この像のやうな完全な母はないにしても、よく見ると、どの母、否、どの女子にでも、多少は聖母の面影が存してゐるのである。そして、これはとりわけ女子に惠まれた天與の賜である。私達が男子に對して獨立することが出来るのは、實にこの賜を守つて失はぬからである。よく容し、よく忍び、よく調和し、またよく鎮める母性愛の力がないと、たとひ學問や事業の上では男子に劣らぬ成績を擧げて、女子としての獨立を失つたといはねばならぬ。まして單に學問や事業の上ではかり男子と對等にならうとしても、女子はとて男子の敵ではないから、いつまでも男子の下風に立たねばならぬ。

昔、支那に班昭といふ女の學者があつて、「女誡」といふ本を著し、その中に、「女に四行あり、一を婦徳といひ、二を婦言といひ、三を

婦容といひ、四を婦功といふ。」といつて、婦徳を第一においた。そして婦徳については、「婦徳とは必ずしも才明絶異ならず、幽閑・貞靜・守節・整齊、己を行つて恥あり、動靜法あり、これを婦徳といふ。」と説き、更に、「この四者は女子の大節、缺くべからざるものなり。然れども、これを爲すは甚だ易し。たゞ心を存するに在るのみ。古人言ふあり、『仁遠からんや、我仁をすれば、こゝに仁至る。』と。これこれを謂ふなり。」といつて、その人の心一つでこの四行が養はれる次第を述べた。今からおよそ千年も前の人の意見だから、もとより今日に適應せぬ點も少くないが、その婦徳について説いたところは、例へば、ベスタロツチが、「女子の教育はこれをして内心の靜けさを得しむるにあり。」といつたのと同じ意味で、その精神は今日でもやはり私達にとつてのよい教訓である。

女子の能力は、學問・事業のどの方面に向つても、まだ大いに伸ばさねばならぬ。また伸ばさうと思ふと、十分伸ばされるだけの餘地はあるけれども、そのために女子の本領を失はぬやうに注意せねばならぬ。女子が今日のやうな發展の程度に甘んぜず、學問や事業にも大いに成功するものが多く出るのは、もとより望ましいことではあるが、それにもまして一層望ましいことは、一般の女子がその特有の天性をます／＼深く涵養し、まづその本領を全うして、社會のためにも、國

湯原元一著(女子修身訓卷四)

家庭教育振興ニ關スル件

北海道・廳・府・縣

國運ノ隆替風教ノ振否ハ固ヨリ學校教育並社會教育ニ負フ所大ナリト雖之カ根蒂ヲナスモノハ實ニ家庭教育タリ蓋シ家庭ハ心身育成人格涵養ノ苗圃ニシテ其ノ風尙ハ直チニ子女ノ性行ヲ支配ス維新以來教育益々興リ文運彌々隆ナルヲ至セリト雖モ今日動モスレハ放縱ニ流レ詭激ニ傾カントスル風アルハ家庭教育ノ不振之カ重要原因ヲナスモノニシテ國民ノ深ク省慮スヘキ所ナリ 顧ルニ往時我カ國民ハ概シテ家風ノ顯揚ヲ旨トシテ庭訓ヲ敷キ家庭ハ實ニ修養ノ道場タルノ觀ヲ呈セリ然ルニ學校教育ノ勃興ト共ニ世上一般教育ヲ以テ學校ニ一任シ家庭ハ其ノ責ニ與ラサルカ如キ情勢ヲ馴致セリ現時ニ於テ屢々忌ムヘキ事相ヲ見ル洵ニ故ナキニアラサルナリ此ノ時ニ方リ我カ邦固有ノ美風ヲ振起シテ家庭教育ノ本義ヲ發揚シ更ニ文化ノ進運ニ適應シテ家庭生活ノ改善ヲ圖ルハ實ニ教化ヲ醇厚ニスル所以ナルノミナラス又實ニ國運ヲ伸張スルノ要訣タルヲ疑ハス

家庭教育ハ固ヨリ父母共ニ其ノ責ニ任スヘキモノナリト雖モ特ニ婦人ノ責任重且大ナルモノアリ從ツテ斯教育ノ振興ハ先ツ婦人團體ノ奮勵ヲ促シ之ヲ通シテ一般婦人ノ自覺ヲ喚起スルヲ主眼トス之カ實際的施設ニ關シテハ別ニ示ス所アルヘキモ地方長官ハ右ノ趣旨ヲ體シ今後一層斯教育ノ振興ヲ圖リ各種教育施設ト相俟チ我カ國民教育ヲ大成スルニ於テ萬遺憾ナキヲ期スヘシ

昭和五年十二月二十三日

文部大臣 田中隆三

六 家庭教育の振興

一 文部省訓令第十八號

二 文部次官通牒
昭和五年十二月二十三日
府縣知事殿

文部次官

家庭教育振興ニ關スル件依命通牒

今般家庭教育振興ニ關シ文部大臣ヨリ訓令アリタルトコロ右ハ家庭教育ノ本旨ヲ明カニスルト共ニ其ノ普及充實ヲ圖ルノ趣旨ニ有之カ策勵方ニ就テハ教育教化ニ關係アル諸機關並團體特ニ婦人團體ノ活動ヲ促ス要アリ其ノ實際施設ニ至リテハ地方ノ實情ニ稽ヘ左記事項御留意ノ上適切ナル御措置相成度此段依命通牒ス

記

- 一、教育機關ノ活動ニ就テハ學校ニ於ケル保護者會父兄會母姉會並同窓會等ヲ中心トシテ家庭教育ノ指導ニ關シ夫々適切ナル具體的方法ヲ講セシムルコト
- 二、社會教化ニ關係アル諸團體ヲシテ家庭教育振興ニ關スル施設ヲ講セシムルコト
- 三、婦人團體ノ普及ヲ獎勵シ之ヲシテ家庭教育指導ノ中心機關タラシムルコト
- 尙婦人團體ノ設置ニ關シテハ左ノ事項御留意相成度
- 一、婦人團體ノ設置
 - 婦人團體(母ノ會、婦人會、主婦會、母姉會並同窓會)ハ土地ノ情況ヲ參酌シ市町村又ハ部落ヲ單位トシ若ハ學校ヲ中心トシテ之ヲ設置シ必要ニ應シ聯合ヲ組織スルコト
- 二、團體ノ事業
 - イ、婦人ノ智識ヲ涵養スルト共ニ公共生活ニ心須ナル教養ヲ與フル

一生を支配すべき健康、徳性、知識、才能が植ゑつけられ、培はれま
す。幼少の時は尙更のこと、長じて學校教育を受くるに至りまして
も、其の眞理に變りはありません。家庭の風尙如何が子女の將來に重
大な關係を有することは、孟母の例を引くまでもなく、幾多の事實が
之を教へて居ります。若し愛が諸徳の本であるならば、愛によつて成
立つ家庭は、凡ゆる道徳の根帯、一切教育の源泉と言ふべきでありま
す。然るに此の本を差はずしていづこに人生の窮まりなき生長發達が
ありませう。此の意味に於て私共は家庭の風尙を重んずるが故に、更
に、家庭教育の重大性を認め、之が振興を圖らんとするものでありま
す。

現時我邦は思想國難、經濟國難に直面して居ると稱せられて居りま
す。知らず何が故の國難でありませう。靜かに其の原因を探る時に、
私共には家庭教育の萎微不振といふことが直に胸を衝いて參ります。
教育を學校にのみ一任して顧みざる家庭、因襲に囚はれて何等合理的
生活を營まざる家庭、其處から思想國難、經濟國難が胎胎するのでは
ありませんまいか。此の間に對して何人も否と答ふることは出来まいと
思ひます。故に此の缺陷を救ふことが現在に於ける日本國民特に日本
婦人の重大なる任務であると信じます。まして往時我邦に於ては世界
に比類なき家庭教育が行はれて居た事實に顧みて、家庭を修養の道場
となし、創造の殿堂となし、斯くて健全有爲なる國民を養成し、豊富
無限の經濟力を發揮するは日本婦人の肩上に繋る一大責務と謂はねば
なりません。

此の責任を果す爲には、所在各地の婦人團體の奮勵と努力とを望ま
ねばなりません。併せて必要なのは、全國的の連絡機關でありま

コト
ロ、家庭ニ於ケル子女ノ看護教養等ニ就テ實際ノ指導ヲ施スコト
ハ、家庭生活ノ改善趣味ノ向上ヲ期スルト共ニ良風美俗ノ維持發達
ヲ圖ルコト
ニ、教育教化並ニ社會事業等關係アル諸機關ト密接ナル連繫ヲ保チ
家庭教育ノ振興ニ努ムルコト

七 大日本聯合婦人會規則(抄)

(昭和五年十二月二十三日)

- 第一條 本會ハ大日本聯合婦人會ト稱シ事務所ヲ文部省構内ニ置ク
- 第二條 本會ハ全國婦人團體相互ノ聯絡提携ヲ圖リ其ノ進歩發達ヲ促シ特ニ家庭教育ノ振興ヲ期スルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ本會ニ加盟セル道府縣並各植民地聯合婦人團體ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第四條 本會ハ第二條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ
 - (一) 婦人ノ修養、家庭教育並家庭生活ニ關スル調査研究
 - (二) 圖書及雜誌ノ刊行
 - (三) 大會、協議會、講習會、講演會並展覽會等ノ開催
 - (四) 講師及指導者ノ派遣並紹介
 - (五) 家庭教育ニ關スル相談所ノ設置
 - (六) 家庭教育並家庭生活優良必需品ノ紹介
 - (七) 其他必要ト認ムル事業

八 大日本聯合婦人會宣言

家庭は心身育成の苗圃、人格涵養の道場でありまして其處には人の

す。今日婦人團體の活動目覺しきものあるに拘らず、唯一つ聯絡の上
に缺陷のあるのは、團體發達の爲寔に遺憾至極の事でありまして、若
し今日のまゝで推移するならば將來如何程の活動を續けても、舉國的
運動を起し、充分なる成果を收めることは困難と存じます。私共は之
を遺憾とするの餘り、茲に奮然起つて、大日本聯合婦人會を組織する
ことに致しました。是れ時勢の促す所、又國家の要求する所でありま
す。其の目的とする所は、家庭をして眞に心身育成、人格涵養の壇場
たらしめんが爲、家庭教育の振興を圖り、各種教育機關と相俟つて、
國民教育を大成し、以て國運の進展に資せんとするに外ならないので
あります。今や文運日に隆して教化却て衰へ、人智月に進みて世道往
往にして廢らんとするの秋あるの秋に方り、我邦固有の美風に基き、
更に科學の力による家庭生活を確立するは、一に家庭教育の振興に須
たねばなりません。乃ち大日本聯合婦人會は弘く同志の翼賛を求め、
其の眞摯熱誠なる協力に頼り、之が目的を達成せむことを期するもの
であります。

九 大日本聯合婦人會事業計畫概要

大日本聯合婦人會ハ全國婦人團體ノ連絡提携並之カ進歩發達ヲ圖リ
特ニ家庭教育ノ振興ヲ期スル爲左ノ事業ヲ行フ

- 一、家庭教育指導者ノ養成
- 二、家庭教育ニ關係アル機關ノ勸奨並聯絡
- (イ) 母ノ會・主婦會並婦人會等社會教育的機關ノ聯絡勸奨
- (ロ) 保護者會・母姉會並同窓會等學校ヲ中心トスル機關ノ聯絡勸
奨

- (七) 教化團體ノ聯絡
- 三、家庭教育振興ニ關スル事業
 - (イ) 家庭教育振興資料ノ調査研究
 - (ロ) 家庭教育資料ノ刊行頒布
 - (ハ) 母ノ講座開設
 - (ニ) 家庭教育講演會並ニ講習會ノ開催
 - (ホ) 繪本・玩具・學用品並ニ家庭讀物ノ改善
 - (ヘ) 教育映畫ノ改善
- 四、家庭教育ニ關スル社會的施設ノ助成經營
 - (イ) 家庭教育相談所ノ設置經營
 - (ロ) 乳幼児健康相談所ノ設置經營
 - (ハ) 學生相談所ノ設置經營
 - (ニ) 託兒所幼稚園日曜學校なども會並ニ兒童遊園等ノ加成聯絡
- 五、家庭ニ於ケル健全ナル環境ノ建設關スル事業
 - (イ) 家庭ニ於ケル精神生活ノ向上ニ關スル事項
 - (ロ) 家庭生活ノ改善ニ關スル調査研究
 - (ハ) 國産品愛用ニ關スル事項
 - (ニ) 家庭ニ於ケル優良必需品ノ紹介斡旋
- 六、社會教化ニ關スル施設並ニ表彰
 - (イ) 良風美俗ノ維持作振
 - (ロ) 家庭生活ヲ基本トスル公共生活訓練ノ強調
 - (ハ) 家庭教育功勞者並ニ優良團體ノ表彰

第十二課 現代思想の功過と思想問題

一 要領

現代の思想の功過に就いて穩健中正の批判を下し思想問題に對する青年の心得を示すのが本課の要領である。

二 注意

- (一) 現代思想の基調は個人の生活を安定にし人類全體の幸福を増進しようとする共存共榮の要求であつて其の功績は自由平等の觀念を基礎として正義人道の思想を普及した所にある。
- (二) 現代思想の弊害は極端に走つた惡自由惡平等の思想から生じた不眞面目な世相である。
- (三) 我等の祖先はよく外來思想を消化して國運の發展を遂げてゐるから現代の日本人はよく中正を守り思想問題に關して祖先を辱しめてはならぬ。

三 設問

- 一 大正十四年我が國に普通選舉を採用したのは何の力によるか。
- 一 女子に男子と同様に教育の機會均等を與へることは何の思想に基づくか。
- 一 汽車に三等特急を作り又は三等座席を改善するのは何の主義に基づくか。

- 一 百貨店がマーケットを設け日用品の廉賣に力を注ぐのは何の爲か。
- 一 現代思想の功績は主として如何なる所に存するか。
- 一 現代思想の弊害は如何なる所に存するか。
- 一 日本國民の祖先は外來思想に對して如何なる態度を執つたか。
- 一 我が國民の現代思想に對して執るべき態度は如何にすべきか。
- 一 我が國民精神や國民道徳一時の過劇思想によつて根柢から動搖するであらうか。
- 一 支那や露西亞・獨逸などが革命になつたからとて日本にも同じやうに革命が起らねばならぬ理由があるか。
- 一 我が金匱無缺の國體を完うする道は何か。

四 訓言

正義人道・四海同胞・仁義・仁愛

- 人間は人道以上に氣高きものを發見し得ず。
ラスキン
- 彼等も自分と同じく人である。
トルストイ
- 凡そ他人爲さんとすることは先づ自ら己にその如くなるべし。
トルストイ
- 四海は兄弟なり。凡そ宇内の生民は人種の如何に關せず、宗教の異相を問はず、皆これ同胞なり。人類の義務は人と人と相愛し、國と國と相睦びて、世の昇平和を全うし、幸福を遂ぐるに在り。此の義務を名づけ人道と稱す。……そも、世界の平和を指導し、人道を擁護するは、我が日本帝國の天職なり。我が日本國民の理想なり。此の理想を實現し、此の天職を遂行するを以て、國民の本務とせんか。乃ち我が日本の國光

は宇内に發揚し、我が天皇の仁徳は萬邦に光被するに至らん。

大隈重信(國民讀本)

○地球上立國の數少なからずして、各々の宗教、言語風俗を異にすと雖も、其の國人は等しく同人類の人間なれば、之と交はるには苟くも輕重厚薄の別あるべからず。自ら尊大にして他國人を蔑視するは獨立自尊の旨に反するなり。

福澤諭吉

○正義は最強者と共にあり。
獨 諺

○腕力は正義の先きに行く。
獨 諺

○正義の支配する所には武器の必要を見ず。
佛 諺

○正義は實行に於ける眞理である。
佛 諺

○正義は人類社會に於ける神聖の綱紀である。
獨 諺

○正しき事を爲せ。而して人を恐るゝな。
佛 諺

○何人が戦ひ、何人が倒るゝも正義はとこしへに勝ちて變ることなし。
獨 諺

正義の味方に戦ふ者は假令十度百度居らるゝとも神これに勝利の桂冠を與へ賜はん。
エマースン

○戦争は人道を強むる熱燄療治なり。
ジャンポール

○若し正義にして滅びんには人は此の世に住む要なからん。
カント

○仁徳は正義を土臺としたる殿堂なり。この根柢なければ此の頂上を有する能はず。
ラスキン

○正義の愛は大多數の人々に取りては不正義を與へらるゝことに對する恐怖に外ならざるなり。
ラ・ロージ

○仁慈よりも正義が凡ての社會の基礎。
佛 諺

○輕率なる判斷は往々正義を誤る。
佛 諺

○正義も金力の引く方に傾くことが屢々ある。

英 諺

○地獄の沙汰も金次第。

邦 諺

○道徳を一にし、風格を同じうすと。是の二句は是れ天下を治むるの大規模なり。此の語は禮記に出づ。

伊藤仁齋(仁齋日札)

○凡そ何れの地たるに論なく、孤獨主義大に行はれて、人々たい自己の事のみを圖り、その思想、自己の外に及ばざる時は、その社會は殆んど成立すること能はず。

ギゾー

○公なれば則ち一、私なれば則ち萬殊、人心の同じからざるは面の如し。たゞこれ私心。

程伊川

○他の權利を尊重するを正義といふので、どんな權利でも侵害すれば、皆是を不義といふのである。即ち凡て彼の人格を成す所以のものを尊重するは正義であつて、是れ實に人に對する最初の道である。

クーザン

○自由は健全なる制限に比例して存在する。ダニエル・ウエプスター

新約書

○社會共存の道は人々權利を譲り、幸福を求むると同時に、他人の權利を尊重して、苟も犯すことなく、以て自他の獨立自尊を傷けざるに在り。

福澤諭吉

○犯すことが不義なる如く、爲さないことが、不義なることも亦、屢々である。

マークス・アウレリウス

○人は動物としては單に尋常の價値を有するもので、他の動物よりも特に貴い所あるを見ない。其の効用と價値とは、一の賣買品たるに過ぎない。けれども、人格ある者として、人は無限の價値を有する。彼はすべて他の理性ある者の尊敬を要求し、自ら此れ等の者と同等の地位を取り得る資格を有する。併し他の尊敬を要求し得る權利を有する者は、先づ

孔子(論語)

家にありても怨まるゝ無からん。

孟子

○仁は人の安宅なり。義は人の正路なり。安宅を曠しうして居らず。正路を捨てて由らず。哀しいかな。

伊藤仁齋(童子問)

○仁は心徳なり。其之を行ふ術も亦獨り己れが心を盡して以て之れを人に推すにあるのみ。則ち亦至道なり。至易なり。然れども擴めて之を充つるときは、則ち六合に彌り、萬物を貫く。是れ聖人の道なる所以なり。

中村惕齋(仁愛説)

○人に仁義あるは天に陰陽あるが如し。天に陰陽なければ、造化の理亡びて四時行はれず、萬物生せずして、天地の道立たず。人に仁義なければ心の徳ほろび、五倫の道行はれずして人道たゞず。

具原益軒(五常訓)

○世界は總て完全なり。たゞ人が悲歎を擔うて來る處のみならず。

シルレル

○世界の歴史は世界の審判なり。

シルレル

○世界は矛盾に充ち満つ。

ゲーテ

○世界は常に同一に止まる。

ゲーテ

○世界は人を賢明ならしむる大書籍なり。

ゲーテ

自ら己の資格を失墜するやうな事があつてはならぬ。カント

○死生命あり富貴天にあり。君子敬して失ふなく、人と共に恭つて禮あらば四海の内みな兄弟なり。君子何ぞ兄弟なきを患へん。

孔子(論語)

○天下の人皆同胞たり。我れ當に兄弟の相を著くべし。天下の人皆賓客たり。我れ當に主人の相を著くべし。兄弟相愛し主人相敬するなり。

張橫渠(近思錄)

○民は吾が同胞なり。

佐藤一齋

○萬物は皆大本より生すれば、四海の人悉く連れる枝なり。

中江藤樹

○汝等常に兄弟相愛の心を存すべし。又旅人を接待することを忘るゝ勿れ。或人々は斯く行ひて、知らず識らず、天使を宿したり。

新約書

○他國の人汝等の國に居留して汝等と偕に在らば、之を害すること勿れ。汝等と偕に居る他國の人をば汝等の中間に生れたる者の如くし、己の如く之を愛すべし。

新約書

○汝等相愛すること、我が汝等を愛せしが如くせよ。是れ我が訓誡なり。誰も其の友の爲に生命を棄つるより大なる愛を有する者はあらず。汝等若し我が命する所を行はゞ是れ我が友なり。

新約書

○博愛これを仁と謂ひ、行ひて宜くする之を義といふ。苟くも仁に志したる者は惡なきなり。

孔子(論語)

○樊遲仁を問ふ。子曰く。人を愛するなり。

孔子(論語)

○門を出ては大資を見るが如くにし、民を使ふには大祭を承くるが如くにし、己の欲せざる所は人に施す勿れ。邦にありても怨まるゝなく

エマースン

○世界は吾人の教育の爲に存在す。

エマースン

○世界は空にして人こそ萬事なれ。

英 諺

○世間は取りやうてどうにもなる。

英 諺

○各人の心は一つの世界なり。諸君は外に見出す世界を心内に見出す。諸君を繞る世界は諸君の中なる世界の反射鏡なり。ラヴエーター

羅何俚諺

○世間は欺かるゝことを欲す。されば世間をして欺かれしめよ。

和蘭俚諺

○世間は瞞まされるのが好きである。

セルデン

○世界は手品なくしては支配し得られず。

佛・獨諺

○世の中の半分は他の半分を笑ふ。

ロングフェロー

○世界の半分は他の半分が爲に、汗水垂らして働き呻かねばならぬ。

獨 諺

○人生は戦なり。

テレンス

○この世は戦ひにして偽善なり。此處にては各人みな唯己れのみを愛す。

ゲーテ

○我は他人の機嫌に準じて生活せざるべからず。

佛 諺

○世界は偉人なくしては濟まざれども偉人は世の煩ひなり。

ゲーテ

世界・世間・世の中・人生

○世界は總て完全なり。たゞ人が悲歎を擔うて來る處のみならず。

○世界の歴史は世界の審判なり。

○世界は矛盾に充ち満つ。

○世界は常に同一に止まる。

○世界は人を賢明ならしむる大書籍なり。

○世界は吾人の教育の爲に存在す。

○世界は空にして人こそ萬事なれ。

○世間は取りやうてどうにもなる。

○各人の心は一つの世界なり。諸君は外に見出す世界を心内に見出す。諸君を繞る世界は諸君の中なる世界の反射鏡なり。ラヴエーター

○世間は欺かるゝことを欲す。されば世間をして欺かれしめよ。

○世間は瞞まされるのが好きである。

○世界は手品なくしては支配し得られず。

○世の中の半分は他の半分を笑ふ。

○世界の半分は他の半分が爲に、汗水垂らして働き呻かねばならぬ。

○人生は戦なり。

○この世は戦ひにして偽善なり。此處にては各人みな唯己れのみを愛す。

○我は他人の機嫌に準じて生活せざるべからず。

○世界は偉人なくしては濟まざれども偉人は世の煩ひなり。

○世界は人間が老成する如く速かに進歩せず。

○世の中を賤しめるとも世が無ければ身が立たず。

○人生は短かきに過ぎれば、批評的なる覗き見や皮肉な咆哮、争論や誹謗に空費することを得ず。然かせば忽ち暗黒とならん。エマースン

○人生は永からず。されば如何に過すべきかを空しく煩慮して多くを徒費すべからず。

○世界は吾人の教育の爲に存在す。

○世界は空にして人こそ萬事なれ。

○世間は取りやうてどうにもなる。

○各人の心は一つの世界なり。諸君は外に見出す世界を心内に見出す。諸君を繞る世界は諸君の中なる世界の反射鏡なり。ラヴエーター

○世間は欺かるゝことを欲す。されば世間をして欺かれしめよ。

○世間は瞞まされるのが好きである。

○世界は手品なくしては支配し得られず。

○世の中の半分は他の半分を笑ふ。

○世界の半分は他の半分が爲に、汗水垂らして働き呻かねばならぬ。

○人生は戦なり。

○この世は戦ひにして偽善なり。此處にては各人みな唯己れのみを愛す。

○我は他人の機嫌に準じて生活せざるべからず。

○世界は偉人なくしては濟まざれども偉人は世の煩ひなり。

○世界は人間が老成する如く速かに進歩せず。

○世の中を賤しめるとも世が無ければ身が立たず。

○人生は短かきに過ぎれば、批評的なる覗き見や皮肉な咆哮、争論や誹謗に空費することを得ず。然かせば忽ち暗黒とならん。エマースン

○人生は永からず。されば如何に過すべきかを空しく煩慮して多くを徒費すべからず。

○世界は吾人の教育の爲に存在す。

○世界は空にして人こそ萬事なれ。

○世間は取りやうてどうにもなる。

○各人の心は一つの世界なり。諸君は外に見出す世界を心内に見出す。諸君を繞る世界は諸君の中なる世界の反射鏡なり。ラヴエーター

○世間は欺かるゝことを欲す。されば世間をして欺かれしめよ。

○世間は瞞まされるのが好きである。

○世界は手品なくしては支配し得られず。

○世の中の半分は他の半分を笑ふ。

○世界の半分は他の半分が爲に、汗水垂らして働き呻かねばならぬ。

○人生は戦なり。

○この世は戦ひにして偽善なり。此處にては各人みな唯己れのみを愛す。

○我は他人の機嫌に準じて生活せざるべからず。

○世界は偉人なくしては濟まざれども偉人は世の煩ひなり。

○世界は人間が老成する如く速かに進歩せず。

○世の中を賤しめるとも世が無ければ身が立たず。

○人生は短かきに過ぎれば、批評的なる覗き見や皮肉な咆哮、争論や誹謗に空費することを得ず。然かせば忽ち暗黒とならん。エマースン

○人生は永からず。されば如何に過すべきかを空しく煩慮して多くを徒費すべからず。

○人生は藝術を完成せしめ、交情を全からしむるほど永からず。
 ○人生は試験なり。この世は目的にあらず。人間の出發點なるのみ。
 ○人生は航海なり。
 ○人生は實在す。人生は眞剣なり。
 ○人生は短かき日なり。されど働く日なり。
 ○人生は享樂より享樂への旅にあらず。缺乏より缺乏への道程なり。
 ○此の世は牢獄なり。
 ○人生は主として濫用の結果吾人に荷厄介となる。
 ○何處に行きても出來上れる社會のみが住むに適せり。カーライル
 ○人生は健康に充ち満てば、死の中にさへ榮養素を見出す。
 ○我の愛してより初めて人生は楽しく、我の愛してより初めて我の生けることを知り。
 ○人生は愛にして其の生命は精神なり。
 ○人生は吾人が自他に對して今一層寛大ならんことを吾人に教ふ。
 ○人生の意義は人心中の愛を増加することにして、愛の増加は人を益々大なる幸福に導くものなり。
 ○渡る世界に鬼はない。
 ○旅は道連れ世は情。
 ○世界は廣し世はさまん。

エマーソン
 プラウニング
 ユーゴー
 ロングフェロー
 ハンナー・モーア
 ジョーンソン
 ゲーテ
 ルソー
 カーライル
 ケルネル
 ゲーテ
 ケルネル
 ゲーテ
 トルストイ
 邦 誌
 同
 同
 同

自由

○短かき浮世も善く美しき生活を爲すには十分長し。
 ○生れ故郷の奴隷より遠い他國の自由がよい。
 ○囚はれたる王たらんよりは寧ろ自由なる鳥たれ。
 ○瘦せたる自由は肥へたる徒役に勝る。
 ○人の恩を受くるは自己の自由を賣るなり。
 ○自由の一豆は、獄舎の一葉に勝る。
 ○商賣は自由を愛す。
 ○自由を失ひたる者は更に其上に失ふべきものなし。
 ○地方田園が好く耕作せらるゝは、肥沃なる爲にあらずして自由なるが故なり。
 ○曠野は自由に富めり。
 ○人は千百の不必要なるものを必要となす。爲に多くの不幸に陥り、時を空費し、世を辛く渡り、又怠惰に過す。幸福たるべき要素は三つ。曰く、健康なる身體、自由なる意志及び純潔なる心情是なり。
 ○自由と平等とは吾人の權利にして、友愛は吾人の義務なり。佛 誌
 ○自由とは他人の權利を侵食せざる範圍に於て事を爲し得る權利を云ふ。佛 誌
 ○自己に對する完全なる命令を吾人に與ふるもの外、如何なる形式の自由も有害なり。ゲーテ
 ○他の如何なる自由よりも先づ第一に良心に従つて自由に知り、考へ、信じ、且つ言ふべき自由を我に與へよ。ミルトン

シセロ
 獨 誌
 英 誌
 同
 同
 リチャードソン
 英 誌
 モンテスキュー
 ワイゾウオース
 佛 誌
 佛 誌
 佛 誌
 ゲーテ
 ミルトン

○眞の愉快は自ら己れの自由に行動し得るを云ふ。
 ○約束する時は自由であるが實行する時は束縛されてゐる。
 ○自分の鎖を嘲るものは必ずしも自由を得てゐるのではない。
 ○絶對の自由は非人間的なり。
 ○名譽を伴ひ來る囚は眞の自由なり。
 ○自由の最惡敵は放縱なり。
 ○自由は健全なる制限に比例して存在す。ダニエル・ウエプスター
 ○自由を得るは善人のみ。惡人は皆奴隷なり。ストア派金言
 ○自由は權力の濫用の爲に失はれんとするに止まらず、亦自由の濫用の爲に失はれんとす。アヂソン
 ○自由若し放肆に失するときは擅制權の其の虚に乗ずるや最も容易なり。ワシントン
 ○腐敗したる自由は奴隷の最も甚しきものなり。ゲーリッツ
 ○秩序は光明と平安と内心の自由と自己に對する自由なる命令を意味す。アマエル
 ○思想は人を奴隷の境遇より救ひて自由を得しむ。エマーソン
 ○己が自由を維持する唯一の途は、常に平然として死に就くの覺悟を有するにありとはデオゲネスの名言なり。ゲーテ
 ○我に自由を與へよ。然らずんば死を與へよ。パトリック・ヘンリー
 ○自由の棲息する所是れ我が郷里なり。フランクリン
 ○我が意思を吐露するは各自由人の權利なり。ホームー
 ○人の不幸は言論の自由を奪はるゝより大なるはなし。デモステネス

佛 誌
 獨 誌
 獨 誌
 ラヘル
 マツシンジャー
 佛 誌
 ストア派金言
 アヂソン
 ワシントン
 ゲーリッツ
 アメル
 エマーソン
 ゲーテ
 フランクリン
 ホームー
 デモステネス

○思想は自由なり。シエークスピア
 ○新に自由を得たるより生ずる弊害は之を矯正する法只一あり。何ぞや。自由是なり。マコーレー
 ○自由あらずんば決して安寧秩序あるべからず。ミルトン
 ○人民は某種の誘惑を受くるに非ざれば、決して自由を放棄することなし。パーク
 ○萬人悉く自由を愛す。而して之を壞滅するを好めるが如し。ヴォルテール
 ○自由を愛するはあらゆる人の天性なり。其の動もすれば放逸に陥ることあるも之が爲なり。エドモンド・スペンサー
 ○世襲の奴隷も自由を望まざるに非ず。然れども一撃を試むべきを知らざるなり。バイロン
 ○自由は一千の引力(迷信物)を示すも奴隷に甘んぜる人は決して之を知らず。クーバー
 ○吾人は奴隷も亦同胞なることを忘るべからず。ケトリー
 ○一日自由を失へば忽ち其の男らしき徳の半を失ふ。ホームー
 ○自由は言語なき動物も亦之を天に受く。タシタス
 ○籠鳥は半ば鳥たるの資格を失へるなり。ピーチャー
 ○人は自由を得たる後、若干の歳月を経過するに非ざれば自由を用ふる方法を知らず。マコーレー
 ○奴隷の境遇に在る者、若し聰明にして善良と爲れるを待ち始めて自由を得べしとせば、實に永久に之を得ること能はざるべし。マコーレー
 ○己れを制すること能はざる人は之を自由の人と稱することを得ず。ピタゴラス

シエークスピア
 マコーレー
 ミルトン
 パーク
 ヴォルテール
 エドモンド・スペンサー
 バイロン
 ケトリー
 ホームー
 タシタス
 ピーチャー
 マコーレー
 マコーレー
 ピタゴラス

○大害悪と同様に過大の権力は凡て遂には自滅を招く。 ハーダー
 ○慈悲が正義に味をつけてこそ地上の権力は神の権力に似寄るもの。
 ○権力が主人たる所にては正義は下僕なり。
 ○無理が通れば道理が引込む。
 ○地頭に法なし。
 ○泣く子と地頭に勝たれぬ。
 ○主と爺は無理なものと思へ。
 ○親と師匠は無理なものと思へ。
 ○御無理御尤。
 ○権力は最も説服力強き修辭學なり。
 ○大多衆が信仰する人は権力を有す。
 ○権力は初めそれを獲得したる術策を以てせば容易に持續せらる。
 ○人を殺すを欲せざる人々と雖も権力を得んことを欲す。
 ○愚賢ある者には利器を與ふべからず。
 ○平等は人道の神聖なる法則なり。
 ○四民は平等なり。そこに等差の生ずるは家柄によるに非ず。たゞ徳によるのみ。
 ○勢、天子と爲るも未だ必ずしも貴からず。窮、匹夫たるも未だ必ずしも賤しからず。貴賤の分は行の善惡にあり。

ハーダー
シエークスピア
英 諺
邦 諺
同
同
同
同
シルレル
ラウバツハ
サラスト
ジュヴェナル
淮南子
シルレル
ゲイテ
ゲイテ
ゲイテ
佛 諺
同 上
羅何古諺
英 諺
英 諺
スタテウス
カーライル
ヤング

○相手を問はずに善を爲せ。 伊太利俚諺
 ○跪拜の爲に絹の靴下は汚されず。汝の威容を捨てよ。 社會の門に入れば萬人平等なり。 ジョージ・ハーバート
 ○死は平等に我等總ての者に來り、來つて我等凡てを平等にす。 ジョン・ダン
 ○死は總ての對抗と競争に終結を齎らす。死者は我等に何等の優越を誇る能はず。我等も亦彼等に對しては勝利を得べからざるなり。 ハズリツト
 ○墓地の芝土の下に一切人類が死によりて平等化せらるゝ處あり。又他の場所あり。即ち神の教會にして、此處にては生きとし生ける人は皆平等なり。 トマス・フールド
 ○吾人は此等の眞理の自明なることを信ず。即ち總ての人は平等に作られたり。彼等は讓與する能はざる權利を造物者より惠まれたり。此の權利の中には生命、自由及び幸福の追求あり。 ゼファアソン(米合衆國獨立宣言書)
 ○愛は常に愛の最も強き紐なるべし。 レツシング
 ○戀は總ての人を均しからしむ。 羅何俚諺
 ○戀に上下の隔てなし。 邦 諺
 ○天は私覆なく、地は私載なく、日月は私照なし。 禮 記
 ○一切の諸法は體性平等なり。 月燈三昧經
 ○人は生れながらにして不平等に造られたり。されば彼等を平等なるが如く取扱ふは無駄なり。 フロウド
 ○自然は平等を認めず。その絶對法は壓服と依從なり。 ヴォグナアグ

争議

○爭議の塵埃はたゞ飛散する虚偽に外ならず。 カイライル
 ○人々は核心よりも外殼に就て争ふ。 ゲイテ
 ○如何なる争に於ても、吾人が怒れる時は、既に眞理の探究を止めて自己の利益を追求し始めたるなり。 ゲイテ
 ○乞食は定住を有たざるが故に決して家路に就かず。定見なき爭議を爲す人々もこれと同様なり。 佛 諺
 ○總ての爭議は「然り」「否」から發生する。 同 上
 ○争ひは争ひを産み、加害は等しく加害を産む。 羅何古諺
 ○一人争を欲せざらば兩人争ふ能はず。 英 諺
 ○牧人の相争ふ時狼は食を得る。 英 諺
 ○狂暴は萬事を惡導す。 英 諺
 ○騷動は常に多少狂的なり。 スタテウス
 ○反省なき魂は守り手なき大財産の如く破滅に就く。 カイライル
 ○鏡は精明なるを以て美惡自ら服す。 說 苑
 ○公は明を生じ、偏は暗を生ず。 同
 ○上明なれば下敬し、政平なれば人安し。 同
 ○中正にして私なし。 同
 ○天に私覆なく地に私載なく、日月に私照なし。 禮 記
 ○聖人の事を求むるや、まづ正義を論じ、その可否を計る。故に義なれば則ちこれを求め、不義なれば則ち止む。故に其の得る所常に身の寶となる。 管子

公正

○夫れ水は至平にして邪者も法を取り、鏡は至明にして醜者も怒ることなし。水鏡の能く物を窮めて怨なき所以の者は其の私なきを以てなり。
 ○天道親なし。常に善人に與す。 李 贄
 ○利欲の爲に動かさず、囑托の爲に屈せず。 抱朴子
 ○聖人は一視にして同仁、近きに篤くして遠きを擧ぐ。 韓 愈
 ○形在れば則ち影曲る。直ければ影正し。 列 子
 ○影は曲物の爲に直ならず。響は、清音の爲に濁らず。 淮南子
 ○大明には私照なく至公には私親なし。 張蘊古
 ○直を以て怨に報い、徳を以て徳に報ゆ。 孔子(論語)
 ○天地は一物の爲に其の時を枉げず。日月は一物の爲に其の明を晦くせず。明王は一人の爲に其の法を枉げず。 孔安國
 ○良心は公正の根元なり。 オリゲン
 ○公正の基礎は堅き信念なり。 シセロ
 ○公正を以て生活すれば往くとして安全ならざる處なし。 エビクテタス
 ○天の劍を佩する者はなる嚴なると共に聖ならざるべからず。 シエークスピア
 ○吾人は人間的ならざれば公正ならず。 ヴォグナアグ
 ○傳統とは如何に朦朧として莊嚴なるに巨殿ぞや。 カイライル
 ○人生から舊來の信仰が消え失せた時こそつまらなくなり、己れのみを信ずるやうになつた時最も氣味なし。 ウォールター・スミス

傳統

○傳統に優るもの唯一つあり。而して、それは有らゆる傳統が生れ、永遠なる原始生命なり。

○吾人が吾人の傳習の偶像を破壊し、美辭の偶像を放擲するとき、希くば、神は其の現前を吾人に照明し給はんことを。

○我が先祖のことを回顧せざる人々は子孫のことをも顧慮せず。

○吾人は祖先に對して、彼等より保管を依頼せられたる一切の權利を維持すべき責任を有し、後世に對して此の最も貴重なる遺産を破壊せしめざるの責任を有す。

ローウェル
エマーソン
パーク
ジュニウス

五 備考

一 自由と平等

一、現代思想の主なるものは、何れも自由と平等との二觀念を基調として組立てられたものであるから、これを理解し批判するには、まづ自由と平等との眞義について徹底した見解を持たなければなりません。この故に、現代思想を取扱ふに先立ち、まづ自由と平等との意義を述べます。

二、元來、自由には積極・消極二様の意義があります。積極的自由は己が本性の法則に従ふことであり、消極的自由は外的拘束を有しないこととあります。更に、それらの特殊の意義を考へると、左の數種を數へることが出来ます。

第一は、自然的自由であります。これは人の本能・衝動などに基づく欲求をそのまま充足することとあります。即ち自然的欲求の直接充足であつて、蟻・蜂などが全く本能に支配せられて動いてゐるやうに

その可否については、何ら反省するところがありません。従つて、その行爲も、生活も、往々、無規律・無秩序・勝手氣儘に流れるのであります。

第二は、身體的自由であります。これは身體の活動が他人の意志によつて拘束を受けないことであつて、即ち奴隸狀態の反對を意味します。

第三は、經濟的自由であります。所有・労働・企業などの上に何ら拘束の存せぬこととあります。もとの種の自由は、財産權を以て神聖なものとなし、これを尊重するところから生じたものであります。また、關稅なき貿易、即ち自由貿易の如きも、この種の自由に屬します。

第四は、社會的自由であります。これは人の社會生活上、己が屬する社會の秩序を亂さぬ限において、何らの制限・干渉を受けないこととあります。即ち思想・信仰・趣味・言論・著作・契約・印刷・集會・結社などの自由を有することとあります。特に君主や政府の壓制の存しないことを政治的自由といひ、己が欲する神佛を信仰し得ることを信教の自由といひ、また自己の所見を任意に發表し得ることを言論の自由といひます。

第五は、政治的自由であります。これは前に一言したやうに、君主や政府の壓制の存しないことを指すのであつて、惡政や壓制の反對であります。また、特に政治的權利を行使する上に干渉のないこと、即ち選舉權の自由行使もこれに屬します。

第六は、教育的自由であります。無智は人の性能の發展を妨げ、己を保護する力を失ひ、人を不幸に陥らしめます。故に、廣く教育の門

戸を開放して貴賤・貧富・男女の別なく、均等の機會を與へることとあります。

第七は、道德的自由であります。これは、内、己が良心に問ひ、外社會の慣習・制度・法律及び道德に問ひ、これら内外の權威の許す範圍内において、斷乎として己が信ずる所を行ふところの態度を指すし、即ち大我の要求を充足する最高の自由であります。

三、以上のものゝ自由を通觀するに、第一は取るに足らぬ自由であつて、むしろ人を不自由に陥らせませす。第二は最も單純な自由であつて、文化國では既に例外なくこれを認めてゐます。第三乃至第六は人類が不合理な拘束から免れようとして要求するものであつて、もとより當然のこととあります。更に、第一から第六までの自由は、いづれも最後の道德的自由を以てその基調となすべきものであります。

眞の意味の自由は道德的自由であります。凡そ行爲の主體たる人格はそれ自らを目的とするものであつて、他の手段となるべきものでありませぬ。即ち人格は人格のために働くべきものであります。この故に道德的自由あつてこそ、人はよく自制と公正とを以て、己が行動を選択し、己が屬する社會に奉仕し、その社會の存立と、これが各員の幸福とを害ふことなく、而も己が性能の發展を遂げることが出来るのであります。自覺的服従と道德的自由とは、固より兩立するものであります。社會の平和を維持し秩序・規律を重んずることは、これに屬する者の自由發展と、どこまでも並進するものであります。道德・法律・制度・慣習などを以て、個人の自由を束縛するものであるかのやうに誤解し、或は自然的自由を以て眞の自由と考へ、或はこの世に有り得べからざる絶對の自由を要求し、その結果、服従を拒否し、秩序を無視

し、自己の本務を抛棄し、たゞ自我を主張して己まぬが如きは、いづれも自由を求めないのでなくて、放縱を求めないのであります。

四、更に進んで、平等について考へて見ませう。

第一は、物質的平等であります。これは自他の肉體の皮相を捉へて比較の材料となし、彼我の平等を速断し去るものであります。しかし人はこれを物的に見れば、血縁の關係、職務の關係などによつて親疎・上下の差があり、健否・強弱・美醜・貧富などの差があり、また心的に見れば賢愚・正邪・勇怯・勤惰などの差の存することは明白な事實であります。

第二は、社會的平等であります。社交・集會・交通・訪問・娛樂、その他一般に人の社會生活上の機會の均等を要求し、不合理な差別待遇はこれを廢すべきであると主張するものであります。

第三は、制度的平等であります。人は物的にも心的にも差等があるが、しかし、自主獨立の一人として數へられる點においては、如何なる人も平等であります。故に、社會はその制度を設けるに際し、平等の權利、均等の機會を與へよといふのであります。更に、これを仔細に考へると、その一は法律的平等であります。法の前には何人も平等であり、富も、特權も、知識も性別も之を左右することが出来ず、法の制裁も亦平等であらねばならぬと主張するものであります。その二は政治的平等であります。これは國民の參政權は男女平等でなければならぬと主張するものであります。その三は教育的平等であります。人の知識を磨き、文化を享受する機會において、男女も、貧富も、貴賤もすべて均等なるべきことをいふのであります。その四は宗教的平等であります。世間の階級や差別を超越して、神佛の前に一切衆生の

平等を認めるの謂であります。この態度は人に奴隷を憐み、隣人は勿論敵をも愛せよと教へるのであります。

第四は、人格的平等であります。人はおのづから貴賤・貧富・賢愚・優劣・強弱・美醜の差別があります。しかし、統一ある精神の主體たる人格としては平等一如であつて、これを制限すべき何物も存しないこと主張するものであります。父と子、教師と生徒、將校と兵卒、資本家と労働者などを比較して、人間として後者が前者に劣るものでないといふのは、人を事實に即して見た人格平等観であります。而し、人格平等観は、人格の價値の平等を主張するものではありません。人格の價値は、個人の價値そのものであつて、通常、高下・大小といふ評語を以て表はします。それは主として道徳・知識・技能・信仰・趣味などの諸要素から成立つておます。この故に、事實として見た人格が平等であるからとて、その價値までも平等とするのは當つて居りません。

五、第一の平等観は、人の物心兩面の差異を認めないものであつて取るに足りません。これに反して、道徳的平等は第二・第三兩種の平等観の根本たるものであつて、極めて重要なものであります。けれど人格は自己を目的とすべきもので、人に取つて最も本質的のものであり、これを互に承認し尊重することによつて、始めて人の共同生活が成立するのであります。

要するに、人はすべてその心身の働において優劣があり、高下があります。されば、假りに社會生活の機會に平等制を立てても、その各個人の心身兩方面において差別のある以上は、すべて平等にこれに順應することは、到底、出来るものでありません。實に差別は人間の眞の姿である以上、絶對的・機械的平等の實現を主張しても結局、無意味であり、

味であります。更にいへば、人にはかかる差等があるので、社會に分業が起り、社會連帯も行はれるのであります。この故に、かの機械的な見地に立つて、人を無差別・平等であると速断し、妄りに階級制度を呪ふの餘り、これが打破を主張するが如きことは、宛も天を仰いで唾するやうなものであり、更に人をして原始社會へ復歸せしめるものであります。 深作安文著(現代女子修身卷五)

二 解放及び改造

解放は我が國近時の流行語で、自由にするといふ意味をもつイギリス語エマニシペーションを翻譯したものである。人が人として生存するには自由をもたねばならぬ。そして、自由を得るには束縛から解放されねばならぬ。近年解放を求める聲が特に盛なのはこれがためであらう。しかし、解放には善いものと悪いものとがある。良民を壓制から免れさせるのは善い解放であるが、悪人を監獄から逃すのは悪い解放である。悪事からの解放を求めるのはよいが、善事からの解放を求めるのはよくない。更に人の心についていふと、理性は解放すべきであつても、野性は解放すべきでない。要するに、自由はたい善い人と善いことに與へるべきで、悪い人と悪いことに與へるべきでない。しかし、シルレルがいつたやうに「理性ばかりが自由を欲するのでなく、野性もまたこれを欲する」から一概に解放はよいことであるとはいへぬ。今日はまだ法律上でも一層多くの自由を國民に與へる必要があらう。また風俗・習慣にも同じ意味で改廢すべきものがあらう。とりわけ世間に勢力を有する舊思想でも、今日の時代にはもはや適せぬものもあるから、これらのものから解放を求めるのは、必ずしも咎めらるべき

きことでないが、實際は名は理性の解放を求めるものでも、實は野性の解放を求めるものが少くない。現に世の一部には法律上からは勿論、道徳上から見ても、當然制限されねばならぬ個人の情慾や我儘に基づき多くの自由が、種々の理窟をつけて要求されて居るが、かやうな要素はいつになつても許容すべきでない。

元來人には絶對的自由はない。野性から理性が解放されると、人は野性に對する服従から理性に對する服従に移るまでである。しかしこの服従は任意の服従であるから、これを自由といつてよい。野性に對する服従には常に理性の反抗が伴ふから、これは眞の自由とはいはれぬ。しかるに、世にはこの眞の自由でないものを自由と誤つて、これを得るために、却つて新にその心に強い束縛を受けてゐることを覺らずにゐるものが多い。

我が國民は帝國憲法で思想の自由を保障されてゐるが、我等は果してそのために大いに自由を得てゐるであらうか。思想の自由を保障された結果、世には多くの思想が遠慮なくあらはれ、且それが頗る混亂してゐるので、多くの人は十字街頭に立つて、その辿るべき途に迷うてゐる。今日ほど、人の言動が、己の獨立判斷に基づかないで、主として周囲の情況に支配されてゐる時はない。これは誰でも己の言動の動機が何であるかを反省して見るとよくわからう。名聲と利益、この二つが殆どすべての言動の動機となつてゐる。少くともこの中の一つが伴はねば、何の仕事も榮えぬ。随つてまた、今日ほど人が人氣を取らうと努める時はない。恰もたい觀客の好評を博しようとする下、手な俳優のやうに、自分のすること、善悪よりも、世間の評判ばかりを氣にするものが多い。しかるに、眞の自由はたい純眞の動機によつて、専ら善のために、善をなすところに認められるものであるから、かやうな有様では、我が國民は自由を得たといふのはその名ばかりで、實は法律の束縛からは免れたが、道徳上では従前よりも却つて多くの野性の束縛を受けてゐるといつてよい。

舊式の道徳には非難すべき點も少くないが、その良心の存養を最高の目的としてゐるから、もしこれを十分に實行するならば、今日のいはゆる解放よりも、一層よく人の理性を解放して、これに眞の自由を與へることが出来る。世の徒にその聲を大きくして解放を叫ぶものは、まづその解放しようと思ふもの何であるかについて、大いに考慮するところがなければならぬ。さうでないといふと解放を求めて却つて束縛を得るやうな不幸を見ることを免れぬ。

改造もまた近時の新熟語で、再建するといふ意味をもつイギリス語レコンストラクションを翻譯したものである。そして、今日では、いはゆる新思想による改革改善などの意味に用ひられてゐる。それゆゑ解放を求めるものは、また必ず改造を求め、解放は手段で、改造が目的である場合が多い。随つて解放が正しくないと、改造もまた正しいものになれぬ。野性の解放によつて改造された人の言動の、百害があつて一利のないことはいふまでもない。世の改造を説くものは、まづその出發點である解放に於て、最初の一步を誤らぬやうにせねばならぬ。

世にはいつでも解放を要するものが多いやうに、また改造を要するものも少くない。文化の進歩には必ず改造が伴うてゐる。健全に發達する社會生活は、改造の連続であるとも見られる。しかし、何を改造し、どんなに改造すべきであるかについては、十分考へねばならぬ。

世界大戦の始つた當時は、關係各國では皆「考へ直さねばならぬ」といふ語が流行し、またその終了後にも同じ語が流行した。しかし、同じ語でも、前後によつてその意味がちがふ。前には軍國思想により、後には平和思想によつてすべてを改造しようと思つたのである。この一例を見ても、一時の思ひつきによつて、軽々しく物事の改造を企ててはならぬことがわかる。思ひつきは多くは時によつて變るものであるから、全くそれに支配されてはならぬ。たゞ道理にかなふ思想はいつても人を幸福にするから、かやうな思想によつて物事を改造するのはよい。我が國民の文化がいよいよ新思想に影響されて向上しつゝあることは、疑もない實事である。この影響がなかつたら、恐らく帝國憲法の發布さへもこれを見なかつたらう、しかし、いはゆる思想の中には頗る有害なものもあるから、十分これを取捨して、一概に舊物打破を以て改造であると誤解せぬやうにせねばならぬ。

たとひよい新思想によつて人心を改造しようとしても、これを急激に行つてはならぬ。人心の改造は、建物の改築の様に一時にしかも根本的に出来るものでない。人心には常に強い遺傳の力が働いてゐるから、その本體を傷つけないで、たゞこれを感化して、次第にその缺點を矯正する外はない。人は、猛烈な煽動などによつて、一時平生とは別人のやうな振舞をする事があるけれども、それは多くは感情の激昂によるものであつて人心の改造とはいへぬ。もしかやうなことまで改造であるとするなら、改造は極めて危険なものである。

我等は社會奉仕などによつて、進んでは世の中を改造する覺悟をもつてゐなければならぬが、しかし、諺にも「人を正さうと思ふなら、まづ己を正しうせよ」とあるとほり、社會改造はまづ自己改造からは

じめねばならぬ。昔、西洋に一人の賢人があつて、社會改善の事業に従事して、しかも少しもその効果の見えぬのにひどく失望してゐる人に向つて、「汝は事の本來を誤つてゐる。人に光明を與へようと思ふなら、まづ自ら光明を認めねばならぬ。社會を改善しようと思ふなら、まづ己の家を改善せねばならぬ。退いてまづ自ら光明を認めることに努め、そして己の家を變じて太陽となせ、さうすると、光と熱は必ずそこから出て、次第に社會を照し、また暖めるであらう。」と教へたので、その人は大いに悟つて、その教のやうにしたところが、始めて幾分かその志を果したといふ話がある。社會改造は容易の事業でないがしかし、カーライルが「汝が他人を改善することが出来るか否かは頗るふたしかである。しかし、汝がたしかに改善することの出来る一人がある。それは汝自身である。」といつたやうに、自己改善だけは志きへあるなら、誰にでも相當に出来る。そして、自己改善が幾分でも出来る、それだけ社會改善の助となるわけである。それゆゑ、我等は社會改造よりも、むしろ主として自己改造に努めねばならぬ。そして自己改造はすべて理性から解放し、且よくこの理性を守つて、時々風潮以外に獨立して、その要求に合ふやうに言動することである。

湯原元一著(實業修身教本卷四)

三 現代社會の諸弊とその改造

社會生活にはいつの時代でも常に多くの弊害が存してゐます。しかし、各時代の人類は理性の指導によつてその弊害を除き改造を圖りましたので、社會は概して次第に進歩しました。人類社會の貴いのは、その進歩を自然の成行に任せず、一定の目的を定めてこれに到達しよう

と、して、創造的にその發展を工夫するからであります。私達も現代社會を批判して、その弊害を除き改造を圖つて少しでも文明の創造的進歩に力を盡さなくてはなりません。

しか得られない人をいひ、窮民とは公私の救済を受けなくては生計を立てることの出来ない人をいひます。此等貧窮民の生ずる直接、間接の原因を研究して、確實な正業を與へ、無智や境遇によつて生ずる疾病を除き、家庭及び社會生活の缺陷によつて生ずる罪惡から救つて、職業に對する一般の知識を授けることは、實に當面の緊要事でありま

す。そして、眞の慈善を施し、適切な救済策を講じて、貧民・窮民を絶無にすることは、社會一般の義務であります。これと同時に、私達自身は現代社會の實務を十分に會得して或は疾病のために或は無節制のために或は經濟的恐慌のために、生活の根據を失ひ、若しくは生活に不足を來した場合に應ずるだけの準備をすることが必要であるのは

いふまでもありません。卓越を好む心と自分のために他を利用しようとする心とは人類の本性であつて、社會の進歩を促す原動力であります。その結果は克服といふことが社會上重大な問題となります。自然を克服することや、弱者を凌辱することは、私達が社會の到る處で見受ける事實であります。

自然を克服することは經濟發達の第一歩であり、同時にまた、文明進歩の第一歩であります。しかし、自然克服があまりに打算的に行はれて、自然に對する愛好・賞美の念が滅却されるのは現代の大弊害であります。文明の普及が山河の美を破壊するのを防いで、なるべく自然の景趣を保存し、刹那を愛し物質の慾に意溺する心を抑へて、悠久を愛し神祕の力を仰ぐ餘裕のある心を養ふことが必要であります。

克服は人類相互の間にも行はれて、少數者が多數民衆を凌辱する形となつて社會生活に現れます。「階級の闘争」といふ語や「力は正義な

かとして、創造的にその發展を工夫するからであります。私達も現代社會を批判して、その弊害を除き改造を圖つて少しでも文明の創造的進歩に力を盡さなくてはなりません。現代社會の理想は、各個人の人格の平等と自由とを認め、十分な活動の機會を與へて、その能力を遺憾なく發揮させ、社會生活に一致協同、相互扶助の實を擧げさせることであり、これがためには、教育を受けて知能を啓發させ、技能に熟達して自由に活動させる必要があります。随つて機會均等が問題となります。文明が發達しなかつた時代には、智能は個人の間あまり選庭がありませんでした。しかるに、世の進歩につれて、個人間の智能に著しく優劣を生じて來ました。教育機關は年々改造されますが、思ふやうにこれを利用することが出来ず、活動の舞臺は年毎に擴大されますが職を得ることはなか／＼容易ではありません。このやうな社會に處する私達は、自分の努力によつて自分を教育し、自分の勤勞により、自分の職務を遂行する自主獨立の人となることを心掛けなくてはなりません。將來に對する先見の明を持つて智能を啓發することは、個人にとつて最も大切であります。社會もまた個人の機會の均等を得させるやう工夫すべきであります。各個人間の智能の懸隔が著しくなると、その結果、社會に貧窮者が生じます。そして智能の啓發に伴つて生ずる自由活動の分野の相異と、經濟の發達に連れて生ずる私有財産制度によつて、貧富の懸隔が甚しくなると、隨つて貧窮の問題が生じて來ます。貧民とは、社會の通常の標準に照して、衣食住及び相當の娛樂を享樂するのに要する最低限度の額に近い収入か、またはそれ以下の収入

リ」といふ主張などは、皆この事實の存することを認めてゐる證據であります。人格の平等・自由といふ倫理上の理想は決して他人を凌辱することを是認しません。人を商品として取扱ふことの宜しくないこと、他の人格を手段と看做すことの不法であることはいふまでもありません。私達は出来るだけ克己節制して、同情・友愛の心情を養ひ、人道主義の要求に従つて行動するやうに努めなくてはなりません。そして、利害を一階級專屬のものとして、人類一般に共通なものとし、社會の各部に互つて猜疑と凌辱とに代へるのに相互の信任と犠牲とを以てするやうに全力を盡すべきであります。

今日多くの婦人の煩悶と悲劇との大部分は、性に關する問題に源を發してゐます。男子の誘惑に勝つことが出来ないこと、男子の放蕩または惡疾に禍されること、男子の愛情の不純によつて家庭生活が不快になること、若しくは此等の事情を見聞したまたはこれに遭遇したために結婚を忌避することなどは、單に現代ばかりでなく、未來の人類の福祉にも關する重大なる問題であります。私達はこの問題について男女を問はず、人類の理想及び倫理上の標準を固く守らなくてはなりません。そして、女子として、貞操保全のため、または人類の種の保全のため、眞に確固毅然たる氣魄を養ひ、明晰透徹な理智を磨いて、正しく身を持するとともに、男子をも監視する心掛が必要であります。特に結婚に際しては、この問題の神聖なことを考へて、あくまでも品行の疑はしい男子を拒斥すべきであります。

右の外、現代社會の弊害は、犯罪が増加し、且その手段が巧妙になること、喫烟と飲酒とが社會の風儀上・衛生上及び遺傳上に重大なる惡果を及ぼすこと、物質的文化が精神的文化を壓して奢侈贅澤が甚し

くなることなどあります。

社會政策はこのやうな物質・精神の兩方面に互る弊害を除くことをその任務とします。そして、家庭は社會の單位であり國家の基礎でありますから、社會改造の事業は先づ家庭の改造から始めなくてはなりません。随つて家庭を主宰してその成員を道徳的に向上させるべき女子の責任は頗る重大であります。實に人類の道徳的墮落を救ひ、道徳的進歩を促すことは、女子の手に委ねられてある神聖な事業であります。

藤井健治郎著(新時代女子修身書上級用)

四 思想問題に對する我等の心得

いつの時代にも、いろ／＼な主義・主張が相對峙して、世の中に争論の絶えることはないが近年ほどその種類が多様で、且その性質の危険なるものが多いことはない。歐米諸國に行はれるいろ／＼な思想はつき／＼輸入されて、はどその送迎に違のないほどである。その中には、我等の道徳觀念とも、また我等の國體とも相容れず、個人のためにも、また社會・國家のためにも、頗る危険なものが少くない。それにもかゝらず、どうかすると、それが却つて一部の青年に歡迎されるのは何故であらう。

概していふと、今日のいはゆる新思想は、個人の物質的利害に訴へて、その感官的欲望に投合する傾向が多いので、多數の人の心を動かすのに極めて都合がよい。人生の目的は享樂であるといふ説には、よほど思慮の深いもの外は、大概の青年は必ず同意するのであらう。人は自然の衝動のまま自由に生活するがよいと説くと、とりわけ青年の多數は共鳴するのであらう。世の中の財産は、これを總ての人に平

等に分配するべきものであるといひ、又は、國家の政事については國民がその實權を握るべきであるなどといふ。特に社會組織や國體について深い考をもつてゐるものを除く外、多數の國民は相當に歡迎するに相違ない。その他、すべて弱者・貧者・愚者・賤者をして、強者・富者・賢者・貴者と同一利權を得させようとする主義・主張なら、少くとも一時は必ず多數の人の心を動かして、これをその味方に引入れることが出来る。そして、今日のいはゆる新思想は、元來これまでの社會組織に反抗して起つたものであるから、多くは斯様な傾向をもつてゐる。これがそのとりわけまだ世の中の經驗に乏しい青年の間に大いに喜ばれるわけである。

極端な嚴肅主義を勵行して、人から一切の享樂を取去ることはもとより出来ることでないけれどもさうかといつて、人はたい目前の快樂を食つて、遊惰にその目を送つてもよいといふわけには行かぬ。勵精勤勉の必要なことは、今も昔も變りはない。衝動は意志の要素であるから、一概にこれを抑壓してはならぬが、もしその動くまゝに放任すると、人は禽獸に異ならぬものになつてしまふ。理性によつて衝動を規正していつてこそ、始めて人が人として發展向上することが出来る。不正の手段で富を得たり、富を獨占して他人を苦しめることは大いに排斥せねばならぬが勞働するものにも勞働せぬものにも、能のあるものにも能のないものにも、同一の富を得させようとしても、それは到底出来ることでない。たとひ出来たとしても、その結果産業が衰頽するから、つまりは自他の財産の減耗または消失となる外はない。またなるだけ多數國民の意見を集めて政事をするのが立憲政體の本旨ではあるが、多數の意見は必ずしも常に正しいとは限らぬから、往々その

ために國家を誤ることがないでもない。しかるに、我が國體では、すべての勢力の上に超越する唯一無二の主權があつて、政事上すべての問題に對して最後の決定をするから、そんな憂はない。これを思はなぬからであらう。

今日はデモクラシーの精神に基づいて、機會均等が唱へられてゐるが、機會均等とは誰にも均等に機會を與へることであつて機會を利用するとせぬとは、各人の自由であり、且これを利用して何物かを得るのは、全く各人の力量次第であつて、誰にも同じものを與へねばならぬといふ意味ではない。元來同じものを同じ取扱にし、異なつたものを異なつた取扱にするのが公正であつて、同じものを異なつた取扱にし、異なつたものを同じ取扱にするのは偏頗である。この道理を考へず、各人の能力を無視して、これを同一に取扱ふのが機會均等であると思ふのは誤である。孟子がいつたやうに「物の齊しからざるは物の性」であるから、この性に從つて、その取扱を異にして、各人をしてその居るべきところに居らせねばならぬ。財産はもとより、能力などにも餘りのあるものが、それに不足するものを補助することは必要であるが、さうかといつて、またこの有餘・不足を無理に平均しようとするそれは物の性に背くから、遂に世の中の秩序を亂し、人の不幸をもたらすやうになるものである。

新思想といつても、その本は人の心にあるから、歴史を溯つて見ると、どの思想でも、少くともその萌は必ずどこかにあつて、絶対に新しいといつてよいものは殆どない。支那の歴史には、今日のいはゆる共產主義や政事上のデモクラシーなどに似た思想が既に遠くの昔に見え

てゐる。西洋から新しく輸入されたものでも古代ギリシャの頃既に唱へられた最も舊い意見に基づいたものもある。現代の労働問題の權威として一部に人氣のあるカール・マルクスの説でも、今から七八十年も前に既にその一端は世に公にされたものである。随つて新思想といふのは、多くは思想が新しいのでなく、その世の中に勢力を得た時代が、新しいといふだけのことである。

また、すべての新思想は、これをたゞ議論として聴くと一應もつともな道理を含んでゐないでもないが、これを實行しようとする、その國々の情狀によつて、忽ち危険を感じるものが少くない。西洋で弊害がなしに行はれることでも、我が國に採用することの出来ぬものも多い。どんなに便利な西洋家具でも、日本の家屋におくと、他の物とつりあはぬから、却つてじやまになるやうな例が、新思想に關しても少くない。それを考へないで、たゞ自分にとつて新しいと感ずるところから、何の批評も加へないで、西洋に流行する議論を採用し、しかもこれを強ひて實行しようとするのは、實に詔書に仰せたまうた、佻詭激な言動といはねばならぬ。

我が國のこれまでの風俗・習慣はいふまでもなく道德觀念についても時勢とともに改めねばならぬ點も少くないが、しかし日本人は日本人として發達向上して行く外はないから歴史的に培養された國體に關する忠孝の根本思想などは、益々これを發揚することに努めねばならぬ。さうでないで、日本人の日本人としての獨立はその意義を失ふやうになる。いはゆる新思想によつてその缺陷を補ふのはよいが、西洋の諺でも、戒めてゐるとほり、「うぶ湯とともに赤子を捨てぬ」やうにせねばならぬ。詔書に仰せたまうた「醇厚中正」に歸することが、思想

上に於て我等の最も注意すべき點である。

最後に我等の最も警戒せねばならぬことは、卑猥・淫靡な説を鼓吹して、はては人の心を軟弱に導く類廢的な思想である。人の心が軟弱に流れて緊張を失ふと、あらゆる精神上の病魔はそこに乗ずべき隙を見つけて、その勢を逞しうするものである。しかし人情に富み人を隣むのは軟弱でない。謙遜で争を好まぬのも軟弱でない。軟弱とは劣情に動かされ易く、虚榮に惑はされ易く、すべて克己・自制の力に乏しいことをいふ。山中の敵は破ることが出来ても、心中の敵を破ることの出来ぬのは軟弱である。詔書に戒めたまうた「浮華放縱」の惡弊は、おもに軟弱から起るものである。しかるに、この思想は往々高尙な文藝・美術・科學などの假面を被つて、暗々の裡に人の心を蠱惑するから比較的その弊害を看破することがむづかしい。それだけ、我等はまた一層深く注意して、この思想に對して警戒を加へねばならぬ。どの國の歴史を見ても、大概剛健な精神が興國の本になり、軟弱な心が亡國の因になつてゐる。これがまた詔書に、「國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス」と仰せられて、とりわけ實業・剛健の精神を養成するやうにと諭したまうたゆゑであらう。 湯原元一著(實業修身教本卷五)

五 現代思潮の批判

外來の諸種の思想に對しては、之を探るべきか、之を捨つべきか、若しも前者の態度のみを採つて丸呑みにすれば、國民として從來養ひ來つた自主的批判的良心に背くこととなり、又後者の態度のみを探れば固陋偏狹となつて、到底意義ある現代生活することが出来なく

る。我が國民が從來養ひ來つた採長補短の精神に基づいて、積極的に堅實なる批判力を養ひ、健全なる思想の如何なるものであるかを明にし、意義ある國家生活を爲さなければならぬ。

不健全・不合理なる社會の思想に對しては健全なる思想を以てし、危険思想に代へるには穩健なる思想を以てし、所謂思想を以て思想に當る態度を探るのが最も賢明なる策である。近來我が國には諸種の思想が輸入せられてゐる。若しも是等に對して其の取捨選擇を誤つたらば、實に現代生活に適應することが出来なればかりでなく、我が國體を毀損することにもなる。それ故新來の思想に對しては最も慎重に研究せねばならぬ。

思想が健全であるか否かと云ふことの適當な判斷は我が國民の從來養ひ來つた採長補短の精神に基づいて博い知識と公正な批判力とに俟たねばならぬ。今後社會生活が益々複雑となるにつれて、更に諸種の思潮が輸入せられるであらうが、家族的にも社會的にも國家的にも益々重きをなすべき現代の女子は、特に此の點に考慮する必要がある。リンカーンが「人民の爲に人民に依てなされる人民の政治は地上から滅びないであらう。」と言つたのは、政治上のデモクラシーを言ひ表はしたもので、主權は全體の人民に存するとし、民衆の意志に立脚して連帶責任による自治の政治を實現しようとしたのである。主權は人民に在ると云ふ意味に於ては我が國體とは相容れない。

併し此の意味のデモクラシーの主眼とする精神は、從來外國で屢々あつた。「所謂朕は國家なり。」と云つて人民の意志を無視した君主の政治に對して反抗的に起つたものであつて、主權者と人民との合一の理想を實現せんが爲であつたのである。

元來、民主主義であるから良いとか、君主政治であるから尊いとか云ふことは無意味なことである。民主國では主權者が多數人民の意志の代表であり、君主國では君民一體の理想が實現せられてゐるならば、其の國の政治が道德的であり、價值があることになる。世界の民主國・君主國の中で我が日本帝國のやうに君民一體の理想に則り、皇祖皇宗の遺訓に基いて民本の大本を實現してゐる國は外には求め難い。歴代の天皇は何れも徳治を以て、統治の大本とし、教育勅語の「徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。」と云ふ聖旨を實現し給ひて、民を視給ふこと恰も赤子のやうに、民は天皇を仰いで慈父を慕ひ奉つてゐる。このやうな理想國の國家は實に我が國體の精華と稱すべきである。眞正のデモクラシーは個我を抑へて公我に忠實であると云ふ意味であるとすれば、我が國體の精神はデモクラシーの理想に矛盾しないばかりでなく、最もよくこの精神を發揮してゐるものと云つてよい。教育勅語に「之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス。」とある聖旨は即ちこゝである。

我々はかゝる有難い國家に生れて、厚い國家の恩澤に浴して居るのであるから、よく我が國體の本領を理解し、盡忠報國の赤誠を以て君國に報いなければならぬ。特に女子は國民精神の源泉となるべき家庭の精神を作るのであるからこの覺悟をもつことは最も大切である。

社會的デモクラシーの主張の多くは社會に現存する階級や特權を全廢して、平等一様の社會生活を實現しようとするのである。此の考は一理あるやうに思はれるけれども、實は不合理である。

元來人は精神に於ても身體に於ても夫々異つてゐるもので、全然同一なる者の無いことは前學年に學んだ通りであるが、しかし其の差別

は平等の方面を具へた差別で、恰も人の顔は大體同じであるけれども、その細かい點に於ては萬人皆異つてゐると同じことで、畢竟同中の異と云ふ事が人の真相である。醫者が凡ての胃病患者に對して實も量も同一の藥を一樣に與へたならば、一見平等であるやうでも、此の如き平等は眞の平等ではない。同じく胃病と言つても夫々胃病の性質輕重が異つてゐるから、其の病狀に應じて、違つた藥、違つた分量、違つた養生法を與ふべきものであつて、之が患者に取つての眞の平等である。かの平等の美名に囚はれて無差別の平等が如何にも眞理であるかのやうに誤解するのは、其の人の批判力が足りないが爲である。かゝる社會的デモクラシーに於ては極力自由を唱へて生活の各方面に機會均等を実現しようとするのであるが、それも餘程考へなければならぬ。何となればかゝる社會的デモクラシーの主張する所は、各自の自由發現を尊べと云ふことであるが、自由であればある程平等といふことが社會生活から減殺されて行くからである。此のやうに社會的デモクラシーに於て説く所の自由と平等とは互に矛盾して相一致しないものであるから到底其のまゝに採用することは出来ない。若し互に矛盾しないことを望むならば、既に學んだやうに自由と平等とについて眞の眞味を理解せねばならぬ。

自由と平等とを誤解したデモクラシーで只管自由・平等の美名に囚はれて妄りに階級・特權の廢止を主張し、その主張の實現が困難な場合には多數の力を持って狂熱的に反抗し、不合理なる破壊を手段として思むべき怠業や同盟罷業をも企てる。かゝる破廉恥な態度は飽くまでも排斥せねばならぬ。

眞のデモクラシーと誤つたデモクラシーとの間には、以上述べたや

うに其の主義・主張に甚しい相違があることを知らねばならぬ。産業上のデモクラシーとは資本家を排斥し、賃銀労働を止め、労働階級を解放して労働自治の社會を建設しようとするもので、更に進んで國家を撤廢して國際的に労働社會の建設を実現しようとするものである。

此の主義は労働萬能・生産偏重の弊に陥つてゐるもので、徒に資本家を敵とし、物質主義に陥る短がある。

文化的デモクラシーには教育上のデモクラシーと藝術上のデモクラシーとの二種がある。前者は教育の門戸を開放し、男女の差別撤廢を主張して、只管社會に生活する人々の知識を平等にしたいと云ふのである。後者は藝術の衆民化を主張するもので、藝術として價值あるものを社會一般の人には享受せしめようとするのである。

文化的デモクラシーに於て主張する精神には探るべき點も多いが、これを以て直に社會の人々が知識や趣味の均一を謀ることが出来るかと云へば決してさうではない。科學と云ひ、藝術と云ひ悉く凡人を擯んでゐる天才の産み出す所のもので、差別ある社會であればこそ文化が進むのである。教育は凡ての人々を無差別的の平等にするに云ふのではなくて、各人の特性を夫々の個性に應じて發揮せしめる差別的の活動である。

産業上のデモクラシーが極端に進んで共産主義となつて凡ての私有財産・生活事業までも共有にしようとし、甚しきに至つては女子の共有までも叫ぶことは、現在の露西亞の共産制度に於て見る所である。此の主義は人間を以て全然物質的のもの無差別平等のものと思ひ、無差別平等の共産社會のみに懺がれるのであるが、畢竟之は徒に安佚

のみを求むるものゝ主張する所であつて、眞正なる道德主義と見ることは出来ない。

過激主義に至つては過激な手段を以て共産主義の社會を実現しようとするものであつて、その不合理なるは論を俟たない。過激派の人々が生産業務を以て宗教に代へようとし、教會やバイブルを惡魔のやうに忌み嫌ふことは、彼等の精神生活が如何に低劣であるかと云ふことを示してゐる。無政府主義は絶対の自由・絶対の平等を要求し、國家を以て強制・威壓の機關であるかのやうに連斷して、無干渉・無拘束なる社會を実現しようとするのである。

此の兩主義は王道を實行せざる主君に對して多數人民が其の抑壓に堪へ兼ねて起つて所の反抗の主張であつて、其の極端で且つ不合理であることは、自覺者の戰慄する所である。

國際上のデモクラシーとはウキルソンの民族自決主義に基いて國家共存の理を明にし、永久に平和を実現しようとする主張で此の意味では確に尊重すべき思想である。

マルクス・エンゲルなどの所謂科學的社會主義は、私有財産・私有遺産・相續制度などに反對して共産社會を実現したいと云ふ主張であるけれども、その説には粗漏で偏見な所が多く、而も社會に對する自己感情問題から此のやうな論をなした傾向がある。

佛蘭西のサンデイカリズムはマルクスの説を復活したものであるが、徒に労働中心説を唱へ、暴行を事とし、怠業を其の武器としてゐる。アメリカのI.W.W.は米國でのマルクス説の復活であつて、世界の労働國を建設しようとするのである。同盟罷業の如き或は怠業の如き何れも彼等の武器である。

此のサンデイカリズムとI.W.W.とは何れも非人道的であつて粗暴な行動、下劣な手段など社會改善を名としてゐても、實は社會改惡をしてゐるものと云ふべきである。靜かに批判したならばこれに對して、戰慄を覺えないものはないであらう。人間はそのやうな獸性のものでなく、衝動本能のみのものでない。實に人間は理智を内容とし、意志を力とし、感情の潤ひを以て社會生活に其の光を投じてゐるものである。

我々は以上の諸思潮を比較して其の長短を考ふるに當つて種々の教訓に觸れるのである。かゝる過激にして急激なる思潮が世界的の潮流となつたと云ふことは抑々何が原因であらうか。王者の横暴、資本家の飽くなき貪慾、國家の壓制等一言にて云へば同心一體の協同生活が出来てゐなかつたが爲ではないか。國民的發達の歴史的背景がなかつたが爲ではないか。國民的信念が薄弱であつたが爲ではないか。

我が國は萬世一系の皇統を戴き、歴代の天皇は民本を以て政治の本と爲し、仁徳を施し給ひ、こゝに民本王道の天皇意識に於ても萬世一系なるものを見るに至つた。かくして皇祖皇宗の遺訓を益々發揚し給うたのである。さればこそ急進的なる社會主義や、國家を無視する主義が起り得ないのであつて、「國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」の精神が國民各自から自發的に、而も自然の發露として流れ出るのである。而して下は仁君を現人神と仰ぎ、慈父と慕ひまつり、上は下を見給ふこと赤子の如く、こゝに人道的なる君民一體の理想が發揮されてゐる。此の國體精神を眞に理解することの出来る者は私心に囚れず、自發的精神に立つて公的自我に目醒めたる自覺者でなければならぬ。

今や女子はあらゆる方面に於て國家奉仕・社會奉仕・家族奉仕の精神を發揮することの出来るやうに解放されてゐるが更に女子でなければ盡し得ない幾多の奉仕が存してゐる。女子は國家的責任の如何に重大であるかを自覺せねばならぬ。

横山榮次、伊藤惠共著(女子修身教科書卷五)

六 現代思想の批判

今日の我が日本は思想國難に直面してゐるといはれるほどであつて、いろ／＼の思想が横流してゐます。併し謂はゆる現代思想の主なものは民主主義と社會主義との二であつて、いづれも自由と平等とその基調として居ります。今、左にその梗概を述べて更にこれを批判して見ませう。

民主主義は世界大戦の當時、米國大統領ウィルソンの高唱によつて世界の殆ど凡ての國家に有力となつたデモクラシーの譯語であります。この思想は自由・平等の二觀念の上に立脚して、政治といはず、社會といはず、産業といはず、教育・藝術といはず、或は國際といはず、廣く人生の諸方面に亘つてこの二觀念を實現しようとするものであります。更にこれをいへば、社會の少數者が地位・財産・權力などを獨占し、多數の民衆を不幸に陥れることは不合理であるから、かゝる制度を廢し、輿論の力を以て「民衆の爲に民衆によつて支へられる生活」を實現し、人の生れながら有する自由と平等とを人生のあらゆる方面に働かせて、民衆全體の利益・幸福を招来すべしと主張するのであります。これが政治に向へば、主權は人民に存すると主張する政治的民主主義となり、これが社會に向へば、階級を除き特權を廢さうと

する社會的民主主義となり、産業に向へば資本制度を廢しようとする産業的民主主義となり、教育・藝術に向へば、文化の民衆化を主張する文化的民主主義となります。更に、國境を越えて國際に延長せらるれば、凡そ如何なる民族も、己が國體なり政體なりを選擇する自由を有すると主張する國際的民主主義となります。遠くはフランス革命、近くは弱小民族の自決運動の如き、また今日行はれつゝある婦人問題・労働問題・小作争議などの如き、もろ／＼の社會問題は、多かれ少かれ、このデモクラシーにその源を發してゐます。

民主主義には、幾多の長所があります。左にその大要を述べて見ます。即ち

- 第一は、人格の尊重であります。人は己を一個獨立の人格であると思ふと共に、他人をも亦一個獨立の人格として認めなければなりません。こゝに始めて共存共榮の實を擧げることが出来るのであります。
- 第二は、自治の尊重であります。この主義は何處までも人の自由・平等を重んずるところから、自ら己を治めることを以て道徳上・政治上・經濟上並に社會上、最も必要であるとなし、人は己が義務と責任とを完うすべきことを力説して止まないものであります。
- 第三は、輿論を尊重することであります。國家・社會における各個人の共同生活は輿論の力によつて支配されなければならぬとし、政治上社會上、民衆をして輿論に従ふべきことを主張します。
- 第四は、社會連帯を尊重することであります。この主義は、社會はこれを形造る者の當然支持し發展せしむべきものであるとの見地から、各自は社會に對して連帯責任を有するとなし、相互扶助並に

社會奉仕を以て社會人の主なる道徳としてゐます。

しかし、この民主主義はまた幾多の缺點を有してゐます。まづ、第一は、自由・平等の濫用であります。この主義を信する者は、往々自由・平等を濫用し悪用して利己・放縱無規律・無責任・に墮し、反抗・怠業・争議を事とし、甚だしきに至つては破壊的行爲に出るのであります。西洋の諺に「自由は權利の濫用によつて失はれんとするに止まらず、また自由の濫用によつて失はれる」とあるが、けだし眞であります。

第二は、多數の横暴であります。この主義は餘り民衆の意を迎へ、また餘りに輿論を重んずるところから、ともすれば多數の横暴を馴致します。この事實は民主國の政治界・産業界などにおいて、しばしば見出されます。また、この事が政治界に行はれると、謂はゆる多數黨の横暴となるのであります。

第三は、特に我が國に關していはれることとあります。我が國にあつては主權は長くも上御一人に存し、斷じて人民に存しないから、主權は人民に存するといふこの主義の主張は、全く我が國體及び傳統とは相容れないものであります。

次に、我が國で最も慎重な態度を以て取扱ふべきものは、獨逸のカール・マルクスの主張した社會主義であります。社會主義といふ言葉はいかにも廣汎なものであるが、マルクスのそれは共產主義を含み、世界大戦中、露國に傳はつて過激主義となり遂に帝國ロシアを覆したものであります。この社會主義は、社會上・經濟上並に政治上、人間の絕對平等と絕對自由とを主張するものであつて、現在の社會組織・經濟組織・政治組織などを更めて労働者本位の單一社會を造り、新しい

組織と支配との下に富の生産・分配・消費・所有を行はうとするのであります。更にこれをいへば、この主義は唯物史觀を根據として、獨り人間の經濟生活のみを重んじ、資本家と労働者とは、本來、利害全く相反して、到底、妥協の餘地がないから、労働者は立して從來の私有財産制度を廢して絕對に貧富の懸隔を無くし、更に生産を個人の手から社會の機關に移して自由競争を廢し、すべての人を労働に従事せしめ、富の分配・消費を公正にしようといふのであります。

試みに、この社會主義について批判いたします。まづ、

第一に、如上の社會主義の根據たる唯物史觀は物質偏重の一家言であつて、人間の精神生活を輕視し、人格の尊嚴性を認めず、人はパンのみによつて生き、人生は必然の經過に過ぎずとなし、その中に何ら絕對なもの、神聖なものを認めないのであります。従つてこの主義を信する者は唯物論者・無神論者として理想や宗教を否定し、人間を俗化し、本能の解放までも叫んで、人生を傷つけることの幾何なるやを知らぬのであります。

第二に、社會主義者は單に經濟價值のみを重視してゐるが、しかし經濟價值は人類の實現しようとする価値の一に過ぎず、他に政治・道徳・藝術・宗教などの諸價值があります。然るに、獨り經濟價值のみを飽くまで強調するのは、手段の爲に目的を冒瀆するものであります。

第三に、社會主義者は、個人の絕對自由・絕對平等を主張して私有財産の廢止や、富の分配・消費の公正を主張するのであるが、しかし、絕對自由と絕對平等とは理論上からも、事實上からも、未だ嘗てこの世に存在したことのないものであります。もし、強ひてこれを許すな

らば、他人の生命・財産・権力を奪つてこれを私有することが出来、ただに悪人に存在の理由を與へるばかりでなく、その結果、不自由・悪平等の世界が出現するであらう、また、富と知識との階級は如何なる時代、如何なる社會にも一の例外なく存在したのは事實であり、而もこれあるが爲に、共存共榮の實が擧がり、且つ文化も進展するのであります。更に、私有財産制を廢し、自由競争を廢しようとするのは、人の所有本能の働を無視し、社會の秩序を紊すものであつて、個人の希望と計畫と活動を傷つけ、社會の衰頹を招くのであります。

第四に、社會主義者は、社會構成の單位を資本家と労働者、または有産階級と無産階級との二としてゐるが、しかし、これは階級意識を激成する一手段に過ぎず、社會の實相を無視したものであります。況んや階級闘争に訴へて資本家を倒し、労働者本位の新しい社會を出現しようとするが如きは無謀の甚だしいものであります。

第五に、社會主義者は階級闘争、その他種々の直接行動に訴へて急激に、而も根本的に社會を改造しようとしてゐるが、これは現代文化の基調たる秩序・平和の理想を去る、甚だ遠いものであります。有史以來幾十代・幾百代の人間が努力を重ね、犠牲を拂つて築きあげた社會の慣習や制度を一舉にして變更するが如きは、社會の秩序と平和とを紊し、一世を擧げて修羅の巷に投ずるものであります。

第六に、社會主義者は獨り労働者のみを過重して、資本家を過輕にするのであるが、凡そ一國の生産なるものは、労働者を必要とするが如く、また資本家を必要とするのであります。資本家がなく、従つて工場がなく、機械がなく、原料がなくして、どうして労働者は生産に従事することが出来ませう。勞資協調こそは生産上の理想であります。

第七に、社會主義者は、世界各國の労働者は團結し得るものと信じてゐるやうであるが、しかし地理的・文化的・經濟的に見て我と最も親しかるべき管の支那においてさへ、時に排日・排日貨の勃發する事實は彼等の主張を裏切るものであります。

第八に、社會主義は單に労働者だけの社會を認めて、現存の國家を認めないと主張してゐるが、これは恐るべき暴論であります。人はその社會性に基づいて發達せしめた最高の社會としての國家生活を營むことによつてのみ共同生活の目的を達し得るのであります。況んや世界無比の國體を有する我が國家においてをやであります。

勿論、眼前の社會には種々の缺陷があります。しかし、これを除くには飽くまでも秩序ある合法的手段に訴ふべきであつて、急激なる非合法手段に出づべきではありません。例へば、一方政治家は生産と消費との調節、農産物價の公定、輸出入の調節、奢侈品への課税、中小商工業者の保護、労働時間の短縮、労働保險・失業救済・犯罪防止及び綱紀肅正・政黨淨化などに努力し、更に今日、大資本家が爲替相場の高低を利用して圓及び弗の賣買を行ふことや、無制限に行はれてゐる財産の蓄積や、百貨店の機構・進出や、各種事業の自由競争などに合法的の制限を加へて貧富の差を緩和し、他方、一般社會人は社會連帯の責任に目覺めて、感化・衛生・救済・矯風などの諸事業に盡力して、共存共榮の實を擧げ、更に教育・道徳・宗教・藝術などの力によつて、社會をしてより以上住心地よき場所たらしめ、かくして平和的に、漸進的に社會を改善してその發展と幸福とを圖るべきであります。以上は主として謂はゆる左傾思想を眼中に置いて述べたのであります。併し、右傾思想即ち我が古來の傳統を過重するの餘り、直接行動

に出で、これによつて社會を改善しようとするが如き極端な保守思想も、亦決して正鵠を得たものでありません。眞理は左傾にも右傾にも存しないて至公正な中道に存します。

古來我が國民は如何なる外來思想に對しても、嚴正な批判力と優秀な同化力とを以てこれに臨み、その判斷と取捨とを誤らなかつたのであります。曾て支那の儒教思想、印度の佛教思想、西洋の基督教思想などの傳來を迎へ、これを我が固有の思想に同化して現在の日本文化を建設したのは、全くこれが爲でありました。私達は、この傳統的の批判力と同化力とを以て、民主主義・社會主義その他の外來思想に對し、飽くまでもこれが取捨を誤つてはなりません。この過激な思想に誤られて自由と平等とを曲解し、これを口實として非合法的手段に訴へて我が國體の變革を企て、私有財産制度を覆へさうとするが如きは、もはや日本人たるの資格なき者といふべきであります。

明治天皇の御製に
よきをとりあしきをすてて外國に
おとらぬ國となすよしもがな
とあるが、特に外來思想に對して、私達の忘れてはならない聖訓であると恐察し奉るのであります。 深作安文著(現代女子修身卷五)

第十二課 女子と境遇 (女子修身書)

要領

女子は結婚後境遇の變化殊に甚しきものであるから、兼ねて之に處する覺悟を有たねばならぬことを教へるのが本課の要領である。

注意

- (一) 女子は父母の家を出て、夫の家に嫁げば如何なる人にも必ず甚しい境遇の變化があるのみならず、又往々にして意外不測の運命の浮沈に出會ふことがある。
- (二) 我が國では姑と舅姑との關係は極めて重大視されるからよく傳統を重んじ深き理解を以て之に事へねばならぬ。
- (三) 夫の兄弟姉妹に對しても理解と誠意とが大切である。
- (四) 繼子がある場合には繼母の道を完うする爲に絶大の試練と修養とを要する。
- (五) 寡婦となつては再婚の可否につきて眞面目な考慮を要する。
- (六) 不幸不運に遭遇した場合には特に人格の修養が大切である。

設問

- 一 女子は結婚して後も父母の家にある時と少しも變らぬやうな生活が出来ると油断してゐてもよいものですか。
- 一 我が國では女子が舅姑のある家に嫁するのを忌避することは賞揚すべきこととせうか。
- 一 夫の兄弟姉妹と不義や不和を生ずるのは誰の罪と思ひますか。
- 一 繼子を愛育することは不可能とせうか。
- 一 寡婦となつて遺子の教養に一身を捧げることにはどんな意義がありますか。
- 一 不幸不運は禍とばかり限つたものでせうか。

たもので、我等將來の進運も、亦此くの如くにして開かれねばならぬ。我等の善美なる一生は、之を運命に求めないで、己に求むべきである。且つ、世間で運命と云つて居るものには、其の實運命でなく、我が身の行が招いたものも少なくない。我等は、己の心の持ち方、行ひ方によつて、其の運命であるとか、はらず、善美な生涯を創造することが出来るのであるから、如何なる境遇にも、其の最善を盡くすことを忘れてはならぬ。

三 順境と逆境

人生は自己の能力と、能力以外の運命の力によつて、織り成されつゝ、種々の境遇に轉變する。そして、順境には、得意になつて、道を失ひ易いものであり、逆境には悲觀して、失望自棄するに至り易いものである。けれども、順境に處しては、益、之を善用して、向上發展の道に力を盡くすべき責任がある、決して弛み怠ることがあつてはならぬ。逆境に在つては、萬難を排して、順境に轉進することを力むべきである、貴い人と生れて、艱難に意氣を沮喪せしめるやうな附甲妻のないことがあつてはならぬ。

逆境といつても、いろ／＼であるが、人事の込入つた問題となると、豫め一定の法則を立て、置いて、形式的に解決することの出来ないものもあるから、父母・兄弟・師長・親友など、信頼すべき人々の意見を問ひ、己も亦熟考を積んで、其の境に處し、時に應じて我が身の最善を盡くすべきである。我にして徳を正しうするならば、世の中は必ず望あり力あるものである。又、人生は足るを知り、分に安んずると云ふことが肝要である。我

が身の分を省かないで、徒らに人の幸福を羨むなどは、附甲妻のない心である。『事足れば たるにもなれて 何くれと たるがうちに 猶なげくかな。』

四 平時と變時

平素、身體の攝生と鍛錬とを心がけて居るものは、病にかゝることが少ない、勤儉・貯蓄を力めて居るものは、困窮に陥ることが少ない人に接してよく己の本務を盡くし、敬愛を旨として居るものは、怨を受け、怒を招いて、紛争を生ずることも少ないであらう。すべて、平日の道をよくするときは、災厄・異變を未發に防ぐことが出来易い、又、たとひ、其れが發生しても、之に應じて、其の禍を少なくすることが出来る。かく平日の道を盡くしても、猶不時の異變の生ずることを免れ難いのが世の習ひであるから、其の際に處すべき道も、前以て心がけ置くべきである。智者も急の場合には、なか／＼よい思付の出ないものである。急病・火災・盜難なども、其の時の心得となることを豫め知り置くがよい。『ころばぬ前の杖』とは、此のことである。そして、一旦異變に遭遇したときには、『急がば廻れ』といふ諺のや

うに、力めて沈着に身を持ち、機に臨み、變に應じて、適當の手段を講じ、己の全力を盡くした上は事の成るを自然にまかすべきである。徒らに狼狽し疑惑し憂苦するときは、成るべきことも成らず、小さい災をも、却つて自ら大にすることがあらう。殊に、目前の難を逃れ、己一身を救はうとするに急であつて、重大な責任を有することを顧みず、之が爲に避けることの出来た大災難を引き起して、人を慘禍に陥れるやうなことがあつては、まことに申譯ないことで、修養ある人として、最も恥づべきである。

運命は循環し、境遇は轉變する。災異の突發するは、且夕の間を俟たぬことがある。けれども、我が心の誠を盡くすべき一點に於いては少しも變ることがない。恃むべきは外にあるのでなく、我が心の誠である。境遇の順逆、運命の禍福を問はないで、常に愛の誠を本として、其の道を盡くすべきである、人に愛せられることを求めるよりは、人を愛して其の篤きを致すべきである。凡て、世の中の事は、愈つてもならぬ、あせつてもならぬ、自強して息まぬといふことが最も肝要である。さうするときは、人の妻となり、母となつても、又一個人の子として、身を立てるにも、我が日本の婦人として、よく其の本分を全うする上に、何等の遺憾はないであらう。

訓 言

人遠慮なければ、必ず近憂あり。 孔子
不幸に堪へ得ないほど大なる不幸なことはない。 西 諺
互理章三郎著(新撰女子修身書卷三)

二 不幸と運命

(一) 女子の婚後に起り得べき種々の境遇については、前學年に大略これを述べた。人生は複雑多端で、意外な變に遭ふことが稀でない。處女時代に夢想した楽しい家庭を實現して、生涯を幸福に送るものもとより多いであらう。しかし、喜憂が忽ち轉倒して、所謂幻滅の苦い經驗を嘗め、涙の多い生涯と終始するものも少なくないであらう。

(二) 「幸福な家庭はすべて其の幸福を同じうして居るが、不幸な家庭はそれ／＼其の不幸を異にして居る。」と、トルストイは言つた。これは眞理であつて、不幸の種類には限りがない。人間としては、身體の病弱と智能徳性の低劣なことが、先づ不幸の因となる。願はくは、善い教育と環境とに由つて、遺憾なく身體を鍛錬し、智徳を涵養したものである。

(三) 病氣は恐ろしい不幸を惹き起すものである。天災や戰爭の如きは、大なる不幸を醸すものであるが、常に無い事である。それと異なつて、病氣は平和の裡にあつて、しかも此等にも劣らない暴威を逞しうして、不幸の因となる。一つの不幸な家庭があれば、そこには大抵主人か主婦か、又は愛兒の病氣があり、もしくは病死がある。そして、その病氣や病死の結果が、測り知られぬ不幸を家庭に齎して居る。かうして、人々が病氣ぐらゐと言つて輕んじて居るにも拘らず、識者は人生最大の不幸は病氣であるとの結論をさへ下して居るのである。

(四) 經濟問題もまた不幸の原因となる。經濟思想に疎くて家計を誤つたためか、或は虚榮などに由る分不相應の生活のためか、或は利欲に眼が眩んで不正行爲を敢へてしたためか、或は女子としては身に附く資産のない爲か、各種の家庭悲劇の生み出されることが屢々あ

る。私達は貧に處して安んずる覺悟を要すると共に、常に必ず生活の安定を圖つて、不幸の原因を未然に防ぐことを努めなければならぬ。

(五) 思想問題もまた不幸の一原因となることは言ふまでもない。家族の各員は、表面露々たる和氣に裹まれて居るやうでも、知識經驗の異なるのと、過渡時代の思潮の混亂して居るのとに由つて、思想の障壁は、舅姑と嫁との間を、時には、夫婦を親子を、兄弟姉妹を隔てることがある。私達としてはなるべく人事を善意に解し、他人を理解し、寛恕することに努め、圓滑に衝突を避けなければならぬ。

(六) 愛情の問題もまた不幸の一原因となる。夫婦の親愛が完全でなくて、その何れかに貞操の問題を惹き起す時、家庭は不幸の暗雲に鎖されてしまふ。個人の純潔は、それだけで立派な道徳である上に、家庭の和樂をも、社會の秩序をも、國家の品位をも助成して居るのである。故に、この純潔の價値は、何物にも代へられないと思はなければならぬ。

(七) 誤解もまた不幸の原因となる。一旦受けた誤解は容易に消えない。「李下に冠を整さず、瓜田に履を納れず」とあるのは、當に三省すべき金言である。この心を持つて、自ら警めて、嫌疑の地位に立つことを避けなければならぬ。それでもなほ誤解を招いた場合には、條理のある辯明に由つて赤誠を披瀝し、もしくは信憑すべき證言を藉りて、暗い影を拭ひ去る決心を要する。拙い辯明や感情の言葉は、却つて誤解を深めることがある。また時非にして俄にこれを解き難いと見れば、暫く忍んで時の解決に任すべきである。總じて誤解を受けた者の最も慎むべきは短慮である。

(八) 不幸は防ぎ得られるだけ未然に防ぐのが第一である。しか

力に由つて最善を竭しても、遂に形勢を一變することも出来ず、到底逆境に抗敵し得ない時には、一意隱忍し謹慎すべきである。諺に「七轉び八起き」といふこともある。決して自棄的態度に出てはならぬ。「人事を盡して後天命に委す」といふのが、これである。一時の闇が我が身の上に落ちたと思つて、心靜かに黎明を待つて居ればよい。窮して通ずるのを待つのである。あがき、もがいてはいけない。それは恰も暗黒裡を狂奔するやうなもので、徒らに衝突、破壊を求めるのに外ならぬ。佐藤一齋が「敬」を説いて居るのも此の意味である。かやうな境涯にある人がひたすら敬虔、謹慎を固持する光景は、この上もなく悲壯なものである。

(一一) 皇女和宮の御一代は、涙と終始也られたやうに見られるが、しかし、その猷身的な御精神に於て、これほど悲壯な例もまた稀である。申さなければならぬ。その御幼時に於て既に有栖川宮と御婚約あらせられるにも拘らず、折から圓満を缺かうとしてゐた朝廷と幕府との間を融和させたいとの時論から、遂に將軍家茂に御降嫁あらせられた。運命への雄々しい忍従でなくて何であらう。かうして多事多難の時勢に際會した夫家茂と、好意を寄せない前將軍夫人との間に立つて、「一意家庭の和樂を圖られた宮の御努力は洵に涙ぐましい限りであつた。その和樂も東の間で、宮が二十一歳で夫と死別せられた時の御悲歎は、これを何に譬へよう。しかも、此の不幸の間にも、朝暮の一和を謀ることを夢寐にも忘れ給はず、遂によく朝廷を動かして、徳川氏の未路を安泰にし給うた。重ね々々の逆境に聊かもひるむことがなく、不幸厄難の重荷を負うた御自身を省みず、夫家のため、公事のために、人事の限りを盡し給うた勇猛心は、たゞゞ感歎し奉る外は

し、たとへ不幸に面したからとて、直ちにそれに屈服すべきではない。刀折れ矢盡きるまでも、十分に人事を盡さなければならぬ。こゝに大勇猛心を奮ひ起して、自分の更生を企つべきである。これに由つて、禍を福と轉ずることも出来れば、或程度までは損害を免れることも出来る。不幸は運命であり、運命は不可抗なものであるとばかり極めてしまふには及ばない。

(九) 護良親王は、南都般若寺で、敵軍五百騎に襲撃せられ給うた時、一旦は自害を御決心になつて、既に御肌をも脱がせられたのである。しかし、愈、叶はない時に腹は切れる。匿れられるだけは匿れて見ようと思召し返されて、佛殿に在る三つの唐櫃の中、蓋の開いたのに御身を縮めて伏させ給ひ、その上に經を引つ冠つて居られた。見付かれれば最期と思召し、米のやうな刀を御腹に當てて、敵の言葉に耳を澄してお出でになつた御心の内は、推し量り奉るにも餘りがある。闕入した敵兵は唐櫃に手を掛けた。しかし、それは蓋をしてある二つの唐櫃で、蓋の開いて居るのは見るまでもないと言つて、皆出て行つた。しかし、親王は、敵兵が再び立返つて、委しく搜し立てるに相違ないとの御推察で、前に敵兵の搜した櫃に入り替はせられた。案の通り、敵兵はまた佛殿に来て、前に搜し残した櫃の經を悉く取出して見たが、親王のお姿が見えないので、そのまゝ出て行つて了つた。かうして、親王は、危急存亡の際にも、よく人事を盡して御運を開かせられたのである。

(一〇) 遺憾なく人事を盡すには、忍耐、聰明、沈着、膽力などを要し、事物の暗黒面が自分の眼を遮るやうなところのある場合には、常に其の彼方に光明の方面を見出す習慣が必要である。もしも此等の能

ないのである。
(一一) 人間は一朝如何なる不慮の變に遭ふかも知れない。今までは人の身の上とばかり思つてゐた事も、明日は、我が身の上と降りかゝることがある。かやうな場合にも、千歳の遺憾を残さないやうにして置くのが、私達の平生の用意である。いつでも何か心残りのある人は、最終の刹那までも、すがすがしい眞の安心を得ることが出来ぬ。日常煩瑣な義務や業務を行ふ傍、宇宙觀、人生觀、生死觀の如き問題にも心を寄せて、哲學的もしくは宗教的にも修養を積むやうにしたいものである。固よりこれらは大なる問題であり、議論の多いものであるが、研究すればするほど、自分を深め人生に徹入する譯である。また人目人聞きを憚る物品、事件を、決して持つてゐてはいけない。否、さういふものは最初から持たないやうにする心掛が一番大切である。諸方への義理なども、なるだけ毎日毎日に済まして置きたい。心にかゝる雲霧さへなければ、たとへ病氣になつても、不幸に陥つても、周章狼狽する要もなく、泰然として天命を俟つことが出来るものである。

人一生、有順境有逆境、消長之數、無可怪者。余又自檢、有順中之逆、有逆中之順。宜處其逆、不敢生易心。居其順、不可敢作惰心。惟一敬字以貫逆順可。佐藤一齋
昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、我が生涯言ひ捨てし句々、一句として辭世ならざるはなし。松尾芭蕉
下田次郎著(女子新修身書卷五)

第十三課 産業と道德

一 要領

農工商の執れたるを問はず産業は本来營利を目的とするものであるが、執れも道德を基礎とし且つ終局に於て道德に歸着することを教へるのが本課の要領である。

二 注意

- (一) 利と義とは兩立し得ぬやうに考へる人もあるが本當の營利は道德を基礎とせねばならぬ。
- (二) 富の生産には其の基礎として道德を必要とする。
- (三) 商業には特に信用が大切なるのみならず一國産業の發達には國民道德の基礎が必要である。
- (四) 産業は個人の利益の爲にのみ存するものでなく本来社會の爲に存するものであるから結局社會の共同事業である。
- (五) 産業の終局目的は富を作るにあらず、其の富を以て人類の幸福を増進せんとする人道の理想と一致する。
- (六) 我が國の實業家は産業の振興によつて國家の基礎を固る重大の使命を帯びてゐる。

三 設問

- 一 昔の町人は何故に自ら卑下したか。
- 一 正當の利得に對して何か疚しい所があるか。

- 一 不義の富を得た人は之を誇るに足るか。
- 一 「惡銭身につかず」といふ俚諺は何をいふか。
- 一 不養生や不身持の人に富の生産が出来るか。
- 一 重役が信用の出来ぬやうな銀行に安心して預金が出るか。
- 一 不信用な會社が永續するか。
- 一 海外貿易品に不正な品があればどんな結果を來すか。
- 一 對外の取引に約束を履行せねばどんな結果となるか。
- 一 商工業が發展しても農村が法外に疲弊して農業が衰へたとすればどんな結果になるか。
- 一 農業に構ひなく商業許り發達する事が出来るか。
- 一 實業家は富を作る事だけで本當の満足が出るか。

四 訓言

金錢・貨幣・富・財産

- 錢財を護み用ふることは之を樹藪の中に藏匿せんが爲ならず。又我れに服事する人の爲ならず。只自主自立の光榮の柱を保存せんが爲なり。
- 金錢を持たざる人は翼なき鳥の如し。自ら省みず高飛びせんとせば必ず地上に墜落して惨死すべし。
- 無い袖は振られぬ。
- 無いが意見の總じまひ。
- 金なき健康は半病なり。
- 金なくば門地も美德も共に藻屑の如く價值なし。
- 金を輕蔑する人は最も多く金を要す。

邦 諺
獨 諺
同 上
同 上
邦 諺
邦 諺
羅甸金言
英 諺
キレリス
ジャン・ポール

- 金なき者は金を使ふ。
- 金錢を持たざる人は矢なき弓の如し。
- 財布に金を持たぬ人は市場を走り抜ける。
- 金が無いのは首の無いのに劣る。
- 金錢を誇る者は他に誇るものを見出す能はず。
- 貨幣の裏面は見えにくい。
- 金と名譽とを共に得る工夫をせよ。
- 金を儲ける出来るなら正直に。けれども矢張り金儲せよ。
- 貨幣を得る事を知らざる者は友も名譽も得ることが出来ぬ。
- 貨幣は人間の僕婢にも主人にもなる。
- 貨幣は良き僕婢になつたり悪い主人になつたりする。
- 貨幣は良き軍隊だ。
- 巨富のある所には常に阿諛佞辯が陪從す。
- 金多ければ友多し。
- 最良の朋友は財産の中に居る。
- 金錢は如何なる戸をも開く鍵なり。
- 黄金魔王は大使が至難とする途を難なく進む。
- 貨幣は如何なる國人にも通ずる世界語である。
- 貨幣は人間の生命とも血ともなる。
- 貨幣は人間力の總論である。
- 金は誰に持たれても力である。
- 貨幣は一ダイズの代議士よりも雄辯である。
- 貨幣が能辯になれば世界は沈黙する。

邦 諺
和蘭俚諺
支那俚諺
邦 諺
羅甸金言
ポール
西 諺
英 諺
支那格言
ホレイス
佛 諺
シエークスピア
西 諺
獨 諺
獨 諺
英 諺
バイロン
佛 諺
羅甸俚諺
伊太利俚諺
ジョンソン
英 諺
獨 諺

- 金が物を言ふ。
- 財布の金は憂鬱を追ひ散らす。
- 愛は多能であり金は萬能である。
- 貨幣は最上の主権者なり。
- 貨幣は萬人を額かしむる神なり。
- 金があれば馬鹿且那。
- 今の惡魔は往昔の惡魔より智慧賢く、貧く惱まきず財寶を以て誘惑す。
- 金は人間を釣る最上の餌である。
- 金が出れば正義が引込む。
- 金は常に罪惡の果實である。且つ其の根である。
- 貨幣は貨幣を得ようとする時失はれる。
- 貨幣は悔みと悲しみの源泉である。
- 金は有つても心配、無くては心配。
- 錢財積まざれば貧者は憂ふ。
- 金が共寄する。
- 金が子を生む。
- 金が金を儲ける。
- 子女悪しくば金錢を著ふるも何の用をか爲さむ。子女善ならば何ぞ金錢を要せむ。
- 金あれば讓る子なし。子多ければ錢なし。
- 親子の中でも金は他人。
- 身は兄弟なりとも懐中は姉妹ならず。
- 明るい家には金が溜らぬ。

邦 諺
獨 諺
同 上
同 上
邦 諺
邦 諺
フキルデンダ
フキルデンダ
獨 諺
伊太利俚諺
シソガレス
邦 諺
莊 子
同 上
同 上
英 諺
同 上
英 諺
京都の俗諺

○君子は義にあらざれば生くるなし。義を失へば其の生くる所以を失ふ。故に君子は義を失ふを懼れ、小人は利を失ふを懼る。

淮南子

○利は智をも昏からしむ。

史記

○義の立たざる名の顯れざるは則ち士之を取つ。

韓詩外傳

○眞の功名は道徳便ち是なり。眞の利害、義理即ち是なり。佐藤一齋

○君子も亦利害を説く。利害義理に本づく。小人も亦義理を説く。義理

利害に由る。同上

○利に臨みて後以て信を見るに足るべく、財に臨みて後以て仁を見るべし。

○之に委ぬるに財を以てし、而して其の仁を觀、之に告ぐるに危きを以てし、而して其の節を觀る。

○卒然問うて其の智を觀、急に之に期を與へて其の信を觀る。

○足るを知る者は利を以て自ら累せず。

○財に臨みては苟くもせず。利を見ては義に反す。

○義路閉づれば則ち利門開け、利門開くれば則ち義路閉づ。

○魚の懸るは甘餌に由る。

○好餌の下に必ず死魚あり。重賞の下必ず勇夫あり。

○一兎街に走り萬人之を追ふ。一人之を得れば、萬人復た走らず。

○棺を嚙ぐものは歳の疫せんことを欲す。

○小人罪なし。玉を抱いて罪あり。

○鱷は蛇に似、蠶は蠅に似たり。人蛇を見れば則ち驚愕し蠅を見れば毛起す。而かも婦人蠶を拾ひ、魚者蠶を握る。利の存する所則ち其の惡む

○徳行を崇くすれば、必ず快樂と利益とを伴隨せざるを得ず。
○徳行と利益と其性相合す。二者を分離せんとするは妄なり。

○子罕、利を言ふ。命と與にし、仁と與にす。
○利者は義の和なり。
○君子は財を惜しむ。之を用ふるに道あればなり。
○蓋し義ありて利自ら來らば則ち義に於て害なし。只義を捨て、利を取り、利の爲にして義を行ふは不可なり。苟も義を以て主と爲さば、則ち利も亦義なり。利を以て主と爲さば、則ち義も亦利なり。公私の間に在るのみ。蓋し利は人に施すべくして、己に専らにすべからず。夫子子罕に利を云ふ。利を言はざるに非ざるなり。

○利を興し、害を除き亂を伐ち暴を禁ずれば、則ち功を成せるなり。
○利は業の同じく欲する所なり。専ら己を利せんと欲すれば其の害大なり。之を食ふこと甚しければ昏蔽して理義を忘れ、之を求むること極まれば、争奪して怨を致す。
○雞鳴きて起き學々として善を爲す者は舜の徒なり。雞鳴きて起き學々として利を爲す者は賊の徒なり。舜と賊との分を知らん欲せば、他無し。利と善との間なり。

○利に周なる者は凶年も殺すこと能はず。徳に周なる者は、邪世も亂すこと能はず。

○利を興し、害を除き亂を伐ち暴を禁ずれば、則ち功を成せるなり。
○利は業の同じく欲する所なり。専ら己を利せんと欲すれば其の害大なり。之を食ふこと甚しければ昏蔽して理義を忘れ、之を求むること極まれば、争奪して怨を致す。
○雞鳴きて起き學々として善を爲す者は舜の徒なり。雞鳴きて起き學々として利を爲す者は賊の徒なり。舜と賊との分を知らん欲せば、他無し。利と善との間なり。

生産と道徳

○此の世界に於ては何人も我が勞力によりて得たるよりも皆き物を食ふこと能はず。

○高い辻に賣つた者なし。安い底に買つた者なし。
○大多數の人々に取つては自身のこと以外には眞に興味を興ふるものなし。
○畜生血に迷ふ。人間は慾に迷ふ。
○賄賂には誓紙を忘る。
○己の爲ならず、他人の利益の爲に親切なる行を爲す者は善を爲すなり。
○獨り天國に行かんと欲する者は決して之に達すること能はず。
○利益を打算しての徳行は惡徳である。

○小利を見れば則ち大事成らず。
○小利を追ふ者は大利を逸す。
○小利を去らざれば大利を失ふ。
○小利は大利の敵なり。
○小忠を行ふは大忠の賊なり。小利を行ふは大利の残りなり。

○人多欲すれば則ち義を傷け、多愛なれば、則ち智を害す。
○多く不義を行へば、必ず自ら斃る。
○利身に在らず。之を以て事を謀れば則ち智。之を以て斷ずれば必ず厲し。
○有益なる言葉に惡語なし。
○有益なる言葉が時として詰らぬ者の口から出る。

○健康は一切の力の源、生命の母なり。
○健康を保つは自己に對する義務にして又社會に對する義務なり。
○田畑山林は人民の勤耕にあり。今年の衣食住は昨年の産業にあり。來年の衣食住は今年の艱難にあり。
○天津日の恵み積み置く無盡藏銀で掘り出せ錢で刈り取れ。
○農家は作物の爲めとのみ勤めて、朝夕力を盡し、心を盡す時は、自然願はずして穀物藏に滿つるなり。
○人各、力を其の職に盡せば貨財倉に盈ち、其の屋必ず潤ふ。

○責任に忠實であることは即ち自ら機會を作るものである。
○瀕に臨みて魚を羨むは、歸つて網を結ぶに如かず。
○勤むれば則ち賤しからず。
○勤勉は石から火を得る。
○秩序は凡ての仕事の精神である。
○秩序は力なり。
○熟練は力を凌駕す。
○事業を怠るは事業を失ふなり。
○精神大なれば事業大なり。
○人が成功を誤るは、其の方便の乏しきにあらざして、勉強の乏しきり。

○此の世界に於ては何人も我が勞力によりて得たるよりも皆き物を食ふこと能はず。

○此の世界に於ては何人も我が勞力によりて得たるよりも皆き物を食ふこと能はず。

産業と信用

- 信用は黄金に優る。 獨 諺
- 信用は資本なり。 英 諺
- 信用は無形の財産。 邦 諺
- 信用が黄金を生むは黄金が信用を生むより容易である。 米國俚諺
- 信を人に取れば財足らざるなし。 佐藤一齋
- 信用の破れたのは鏡の壊れたのに等しい。之を修繕する事が出来ぬ。 英 諺
- 信用は一日に得べきにあらず。 羅甸俚諺
- 人間の信用は一本の針で試さるゝこと多し。 フォード
- 自分が他人を信じにくいよりも他人が自分を信じにくいことを忘れてはならぬ。 フランクリン
- 信用の多少は金銭の多少に比例す。 ジュヴエナル
- 商品良好なれば自から顧客を招く。 プロークス
- 同じ釜の飯を食つた後でなければ人を信用するな。 英 諺
- 其の人を信ずるに先ち、共々に多量の食鹽を嘗めよ。 同上
- 何人にも誠實なるべし。然れどもすべてを信用すべからず。 同上
- 信ずるとならば、堅く信ぜよ。然らざれば、全然信ずること勿れ。 同上
- 信頼は信頼を起す。 獨 諺
- 若し信頼が廢棄せられれば人間社會は瓦解すべし。 リヴイ
- 博く人を愛し、少數の人を信じ、何人をも欺く勿れ。

シエークスピア

- 鞭りに約束をなせば信用を減す。 英 諺
- 世人の論ずるや廉潔を貴ぶ。則ち利を賤しまざるはなし。其行ふに及びては、多く廉を捨て、利に甘んず。 潜夫論
- 廉潔らしく見ゆる人には金銭を託すべからず。 西班牙俚諺
- 正直に優る方便なし。 ワシントン
- 正直は最上の知恵なり。 フォールド
- 正直に得たものでなければ眞の所得でない。 英 諺
- 不正に得たる利益は眞實に於て損失なり。 ソフォリス
- 名譽を傷つけて得たる利益は之を損失と言はざるべからず。 サイラス
- 品行端正眞實なるは一種の財産にして金銭よりも重し。 スマイルス
- 正直は最善の政策なり。 羅甸格言
- 正直は最善の政策なり。されどこれを政策として行動する者は正直者にあらず。 フランクリン
- 正直と勤勉とを汝の不斷の伴侶たらしめよ。 フランクリン
- 身を處するに勤勉なる正直の市民は何處にありても己が要する十分の自由を享受す。 ゲーテ
- 眞に由緒ある商人は其の國民中にて最善の紳士なり。 デフォール
- 凡ての經濟上の大なる信用の背後にはいつも人格が潜んでゐる。 フェルスター
- 實業界に於ける青年は會社の首長たるべしとの理想を一刻たりとも念頭より離すことなかれ。而して正直を踐み、正徑に依りて之に達せんことを恐るべき罪惡であることを忘れてはならぬ。 ジョンソン

- とを誓ひ、如何なる誘惑に會しても決して注意を他に轉ずることなからんことを期せよ。 アンドリユー・カーネギー
- 商業は自由を愛す。 リチャードリン
- 敏捷は商業の精神なり。 ファイルド
- 商業は最も正しき交換行爲なり。 アダムスミス
- 商業は手腕の競技にして萬人が皆之に適するにあらず。唯少數の者のみ之を好くす。 エマースン
- 商人は自ら不正を行はざること困難なり。 典外聖書
- 商業國に於ては詐欺師連が各方面に横行調歩す。 プレーク
- 信用なき人は信用を失はず。 英 諺
- 一年於て得るよりも多くの信用を一瞬に於て失ふことあり。 英 諺
- 一本の針を買ふお客と百ダースの上着を買ふお客との間に差別をつけてはならぬ。かゝる差別は自分の店に親切なる部分と不親切なる部分とのある事を差別するやうなものである。 ワナメーカー
- お客の顔を感じる事は自分の顔を感じると同様に大切である。 同上
- 一人のお客は十人二十人のお客を代表してゐると思はねばならぬ。十人二十人のお客は百八十人のお客の代表者だと思はねばならぬ。一日中のお客は一年中に来るお客の代表者だと思はねばならぬ。 同上
- 何人も、惡しき商品の爲には、良き市を開かず。 佛 諺
- 惡しき利益は損に等しい。 羅甸俚諺
- 損をして得を取れ。 邦 諺
- 誠實なるべし。勉強なるべし。賭博をなさいるべし。 アスター

産業と社會

- 廣告によつて自己を世に示すことには何等の躊躇を要しない。然れども、廣告すると同時に、自己の内容を廣告に一致せしむる事を怠るは最も恐るべき罪惡であることを忘れてはならぬ。 ジョンソン
- 農は天下の大本なり。民の恃んで生くる所なり。(日本書紀崇神紀)
- 一夫耕さざれば天下必ず其の飢を受く。一婦織らざれば天下必ず其の寒さを受く。 潜夫論
- 飢は農を賤しむにあり。寒さは織を惰るにあり。 素 書
- アダムは耕しイブは織れり。而して凡ての貴族は皆此の源より來れるなり。 丁抹俚諺
- 人は食を以て命と爲す。人命の繋がる所、たゞ食、たゞ衣、衣食のある所即ち農、即ち桑。 性靈集
- 農夫は文明の建設者なり。 ダニエル、ウエブスター
- 利得を生ずる有らゆる職業のうち農業に優るものなく、之より生産的なるはなく、之より樂しむべきはなく、又自由人に取れて之より適するものはなし。 シセロ
- 自ら生き又人を生かせ。 西 諺
- 樵夫は山に登り漁夫は海に浮ぶ。人各其業を樂しむべし。 中根東里
- 一本の針も百に近き行程を経て作らる。これ分業の理なり。 カダム・スミス
- 他人に損害を與へるな。與ふべき利益を與へずに置くな。 フランクリン

○己れ立たんと欲すれば人を立て、己れ達せんと欲すれば人を達す。
孔子(論語)

○凡て天地の間に生ずるものは未だ相親比せずして能く自ら存する者あらす。
易 經

○私自身の生命を支へ、そして又他人の生命を支へんが爲に、私の全存在を以て以て働け。
トルストイ

○人は己れの爲にのみ作られたるものにあらず。
西 諺

○吾々の隣人の繁榮は結局吾々の繁榮である。
ラスキン

○他人の爲に盡すことは即ち自己の爲に盡すことである。
テラー

○人の金錢に於ける當然の道あり。之を得、之を貯へ、之を使用し、之を人に與へ、之を人は貸し、之を人より借り、之を死後に遺すに各、當然の道あらざるはなし。能く之を酌量審裁して當然の途に合ふものを完全の人と云ふ。
二宮尊徳

○天下の財寶は天下の財寶にして、能く交易利潤して萬物を通用す。故に是を財寶といふ。財ある人、皆費を厭ふことを言うて費を知らず。金玉堂に盈ち、財器府にありて施し用ふることを知らざれば天下の財、一所に滞りて天下の用をなさず。費蔽何事か之に如かんや。人財を好めば、大概之を吝嗇す。故に聖人金玉を以て財となさず。得がたき財を費はず。況んや土器書軸銅鐵の器を藏して之を財とし千金を以て之を易ふ。其の惑甚しいかな。
山鹿素行(武家小學)

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

富と社會奉仕

○世を益する爲に助力を捧ぐることをくば、人は誠實に働きたりと言ふべからず。
ラスキン

○善人は公衆の利益なり。
英 諺

○多く積むは富にあらず。善く用ふるを富と爲す。
英 諺

○富を利用するを得る人にして、始めて富めりと云ふべきなり。
ホレイス

○經濟の意義を學べ。經濟は高貴なる人間の任務にして、その目的が崇大なる時、それが單純なる趣味と深慮に基づく時、それが自由のため、純愛のため、獻身のために實行せらるゝ時には神聖なる一の儀式なり。
エマーソン

○國を經し民を濟す。之れ治道の大本なり。
支那古書

○よく貯蓄する者はよく奉仕する。
伊太利俚諺

○善く之を得、善く之を費やさば富は善なり。
ミルトン

○奉仕は口ばかりで云ふのでは、大したものではない。實行すべきである。
ヴエスパシアン

○富は汚物の如し。積めば悪息を放つと雖も、散せば土壤を肥やす。
ワナメーカー

○富は汚物の如し。積めば悪息を放つと雖も、散せば土壤を肥やす。
英 諺

○凡て商賣は賣つて喜び、買つて喜ぶ様にすべし。賣つて喜び、買つて喜ばざるは道にあらず。買つて喜び、賣つて喜ばざるも道にあらず。貨借の道も亦貸して喜び、借りて喜ばざるは道にあらず。二宮尊徳

○國家の興廢する所以は一にあらずと雖も、産業の關する所また極めて大なるものあり。民産若し富厚ならずんば、たとひ法律は具備し、兵力は充實するとも國勢の振興は得て望むべからず。今や國家は施設すべき事業甚だ多くして、財政頗る膨脹し、またすでに巨額の外債を負担し加ふるに物價騰貴して生活の困難を患ふるを以てす。ゆゑに國民たるもの奮つて力を産業に竭し以て致富の道を講ぜざるべからず。農は人民生活の基なれば日新の學理と實驗とを用ひて耕作を利し、荒蕪を拓き、植林・養蠶・牧畜を勧め水産を養ひ、礦物を採り、以て生産の増收を來すべきなり。植林は治水と相俟ちて、水旱を豫防し生産を保護し、兼ねて氣候を調節し、健康を裨補す。而して又風光絶美なる我が國土の名勝舊跡を保存するは則ち遊人を招來して地方の開発を資け、物産の進歩を促すに足るものなり。

自然を使役するは、人類の特權にして、富源は之によりて開け、文化は之によりて興る。農業は即ち天然を利用して原料を産し、工業は之に加工して其の價値を増益す。工業の要素は人力自然力の應用と技術の精鍊となり。而して農工の生産を交換し有無相通する爲に商業あり、之が發達は水陸交通の便に伴ふ。

そもそも分業と競争とにより、多く生産して多く交換し、すでに内地の需要を充たして更に廣く海外に供給するは、産業經濟の道なり。若し個人の力にして足らざる時は、其の資本を合せ、組合會社等を設けて、生産の増殖に務め、以て民力を盛にし、國富を裕かならしむべきなり。

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

岩崎家の家憲

一 小事に離礙するものは大事成らず。宜しく大事業を經營するの方針を執るべし。

二 一度着手せし事業は必ず成功を期せよ。

三 決して投機的の事業を企つる勿れ。

四 國家的觀念を以て總ての事業に當れ。

五 奉國至誠の赤心は寸時も忘る可からず。

六 勤儉身を持し、慈惠人を待つべし。

七 能く人格技能を鑑別し、適材を適所に用ひよ。

八 部下を優遇し、事業上の利益は成るべく多く彼等に分與すべし。

九 創業は大膽に、守成は小心なれ。

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

○富は費やす爲のもの即ち名譽や善行の爲に消費すべきものなり。
ベーコン

三井家の家訓

一、家族は常に兄弟の情誼を以て相交はりつとめて親密にすべし。同族相争ふは全家破滅の基と知るべし。

一、奢侈を嚴禁し、つとめて節儉を守るべし。これ實に家運長久の基なりと知るべし。

一、商賈は見切りを大切とす。

一、子弟は小僧の事務より細大習熟せしめたる後、支店代勤せしめ、以て業務に通ぜしむべし。

一、賢を擧げ能を擧げてよく其長所を利用せしむべし。

- 一、同族は徒らに其範圍を擴むべからず。
- 一、各支店の勘定はこれを元方に報告せしめ以て其統一を計るべし。
- 一、子女他家へ入嫁する時はこれに相當の分配金を與ふべし。
- 一、やむを得ざる事情のあるにあらざれば、隱居すべからず。
- 一、婚姻に關することは凡て同族の協賛を經むことを要す。
- 一、同族中不都合の行爲をなしたるものある時は同族間に於て速かに之を處分すべし。
- 一、從來の業務の外は他に手を出すべからず。
- 一、同族協議の上にあらざるよりは、決して負債を起すべからず。又負債の保證をなすべからず。
- 一、御所を大切に思ふべし。

鴻池家の家訓

- 一、一家協力して事業に従事すること。
- 一、質素儉約を旨とすること。
- 一、飲酒を慎むべきこと。
- 一、子弟の教育に留心すべきこと。
- 一、才幹ある者を求めて家業を執らしむること。
- 一、公共の事業に力を盡くすこと。
- 一、雇人は親類同様に取扱ふべきこと。

ロスチャイルドの家憲 (英國富豪)

- 一、萬事成功の秘訣は、自家の業務を怠らざること。企業に成功を見るまでは、決して妄りに他言せざることあり。

- 一、正しき原則を守りとし、取引は之を嚴格にし、不注意の爲に狼狽する勿れ。
- 一、自己の逸樂を求めん爲に他人を使用する勿れ。
- 一、爲し得べき事業は自らすべし。
- 一、商業の要は必ず神祕なるにあり。故に我が商略の秘密は深く藏めて他人に洩す勿れ。
- 一、顧客の心狀を知るを第一とし、資力不相應に業を始むべからず。
- 一、危険の少き小利に甘んぜんよりは、危険多き大利を探れ。
- 一、取引上のことは、必ず記憶の部に殘して置くべからず。
- 一、商業上には法廷の争と保證人になるは成るべく避くべきこと。

ワナメーカー翁の店員訓

- 一、店員は紳士の品格を備ふること。
- 一、店員は社會の幸福を増進することを忘るべからず。
- 一、商店の利益よりも、客の便利を先にすべし。
- 一、共同の義務を重んじ、規律を尊び、秩序を保ち、規則を嚴守すること。
- 一、相互に禮儀を守り、信義を盡し、長上を尊敬し、幼少を愛撫すること。
- 一、克己の精神を以て、飲酒喫煙を慎しみ言動を優雅にして快活なるを要す。
- 一、常に身分相應の服装を爲し、瀟洒なる態度を持ち、決して奢侈にわたらざること。
- 一、客に對しては丁寧親切を旨とし、苟も不遜の振舞あるべからず。

ジョン・ワナメーカーの商店規約

- 一、店員は紳士の品格を備ふことを要す。
- 一、店員は社會の幸運を増進するの任務を有することを自覺するを要す。
- 一、店員は商店の利益よりも、客の便利を先にするを要す。
- 一、店員は文明事業の精神たる共同義務を重んじ、規律を尊び、秩序を保ち規則を嚴守することを要す。
- 一、店員は相互の禮義を守り、信義を盡し、長上を尊敬し、幼少を扶掖し、苟めにも紳士らしからざる舉動を慎むことを要す。
- 一、店員は決して美服を着せず、又華美なる裝飾を爲さず。唯だ身分相應の服装を爲し、殊に瀟洒なる態度を持つることを要す。
- 一、客に對しては、公明正大、清廉、潔白、丁寧、親切決して人を欺くが如きことなきを要す。

ブリア・リチャード商業金言四十六則

- 一、智者には一言にて足れり。
- 二、世上最も貴重なる問題は、「余は世間に如何なる利益を爲し得るか」と言ふことなり。
- 三、天は自ら助くる者を扶く。

- 四、懶惰は銹の如し。其身體を腐蝕すること勞働が之を披瀝せしよりも速かなり。之に反して常に用ゆる鍵は常に輝く。
- 五、汝生命を愛するか。然らば時間を浪費すること勿れ。時間は生命を作る所の材料なればなり。
- 六、眠れる狐は鳥を捕へず。
- 七、時間若し萬物中の最も貴重なるものならんには時間を浪費するは最大の奢侈と云はざるべからず。何となれば、一たび失ひたる時間は決して再び得べからず。而して吾人が充分なる時間と云ふも其實不十分なるを證すべければなり。
- 八、懶惰の道を行くや遅し、忽ち、貧困の道及する所となる。
- 九、汝の事業を追へ事業に追はるゝ勿れ。
- 十、早臥早起は健康、富裕、賢明の元。
- 十一、勉強家は希望を要せず、徒らに希望を抱く者は斷食して死せよ。
- 十二、苦痛なければ利益なし。
- 十三、勉強は負債を拂ひ失望は之を増す。
- 十四、林中の猫は鼠を捕えず。
- 十五、假令汝は偶然に財貨を得ず。又富裕なる親戚より遺産を得ざればとて何の憂ふることあらん。何となれば勉強は幸運の兄弟にして上帝は勉強の人に萬物を與ふればなり。
- 十六、懶惰人が眠れる間に深耕易耨せよ。然らば汝は賣るべき將た貯ふべき物を得るならん。
- 十七、今日勞働せよ。何となれば明日は如何なる妨碍あるやも知るべからざればなり。
- 十八、一の今日は二の明日と價值を均しくす。

十九、水滴も間断なく落つれば石を減らし、鼠も勉強と忍耐とに由りて
錯鎖を兩斷し、少打も屢々すれば大なる樹樹を倒す。
廿、閑暇を得んと欲せば時間を善く用ひよ。
廿一、汝の店を守れ。然らば店は汝を守らん。
廿二、用事を辨せんと思はば自ら行け。辨せざるも可ならば他人を遣
れ。
廿三、汝が好める忠僕を得んと欲せば自ら務めよ。
廿四、些少の怠慢より大害を生ずることあり、例へば馬の鐵蹄の釘を失
ひたるが爲めに鐵蹄を失ひ、鐵蹄を失ひたるが爲めに馬を失ひ、馬を
失ひたるが爲めに騎者敵に追及せられて生命を失ふが如し。而して此
禍源を尋ねれば鐵蹄の釘に關して僅に注意を缺けるより起れるなり。

廿五、不用物を買はば間もなく有用の物を賣るに至るべし。
廿六、僅に數錢の物と雖も暫く之を買ふを猶豫せよ。何となれば僅に數
錢の物を買ひしがため産を破りたる者もあればなり。
廿七、汝もし、金錢の價値を知らんと欲せば試みに往きて人に借れ、何
となれば、借る者は悲みを招くものなればなり。債務を負ふときは、
如何に成行すべきかを思考せよ。即ち己れの自由を人に奪はるゝもの
にして若し返済期限來るも返すこと能はざる時は債主に違うて耻づべ
く、之と語る時は之を恐るべく其都度憐むべき卑屈なる言譯を爲すの
みか漸く實直なる心を失ひ賤しむべき辻褄の合はざる虚言を吐くに至
らん。何となれば負債は惡事の第一にして虚言は其第二なればなり。
虚言は負債の背に乗るものなればなり。抑も自由の人は何人たりとも
之を見若くは之と語るを耻ぢ恐るゝ等の事あるべからず。然るに貧困
は凡ての氣力と善徳とを奪ふものにして例へば猶空囊の直立し難きが

如きなり。
廿八、生命保險は十中八九の場合に於て能く不確實を確實にし、心配を
消散するに適せる遠大の工夫なり。
廿九、懶惰は萬事を困難ならしめ勉強は萬事を容易ならしむ。
三十、汝賣買の約定を爲すに當りては恐らく支拂金の事を左まで心に掛
けざらん。されど債權者は債務者より強記なることを忘るべからざる
なり。
卅一、二兎を逐ふ者は一兎を獲ず。
卅二、汝若し本心を欺かば本心は汝に復讐すべし。
卅三、朋友の惡事を聞くべからず。讐敵の噂を爲すべからず。
卅四、負債を償還せよ。然らば汝は己れの所有を知らん。
卅五、禮儀、忠告、溫顔の如き寸毫の損失を蒙らしめざるものは之を吝
むべからず。
卅六、應報を目的にして善を行はば、一の應報もなからん。
卅七、人より恩誼を蒙らば之を記憶し、人に恩誼を施さば之を忘却せよ。
卅八、汝の取り得るものは之を取り、既に取りたるものは之を保て。是
れ則ち汝のすべての鉛を黄金に變ずる石たるなり。
卅九、汝が知る事、汝が負える事、汝が有せざる事、汝が能ふ事はすべ
て他人に語るべからず。
四十、あゝ、懶惰なる骨格よ、汝は神が汝に用ひざるを許して汝の手足
を與えたりと思考するか。
四十一、生命保險を約するは家族の爲めに扶助料を備ふべき最も低價に
且つ安全なる方法なり。今や世人が此方法を理會し之を實行する前日
の比にあらず。多くの寡婦孤兒たるものは其夫父が此利益を理會し之

を實行したるを感謝すべきなり。
四十二、一の過ちを改むるは二の過ちを知るよりも尊し。一の過ちを知
るは二の過ちを行ふに優れり。
四十三、若し他人が汝を失望せしめたるを怒るか。然る時は汝は己を恃
む能はざる者なり。
四十四、小利に屈せず小費を省け。
四十五、毎年一の惡習を根絶せば惡人も遂に善人となるべし。

商業金言二十九則

- 一、理想を高尚にせよ、決して思想及び行爲の低き標準に甘んずべから
ず。
二、改良の餘地は常に存す。然れども之に達する途は銳意努力するにあ
り。
三、虚偽の道に履み迷ふこと勿れ、一度虚言を吐き一度詭計不直を行ふは
皆其身を亡ぼすべきなり。
四、安全は疑はしきものに近づかざるに有り。
五、悪行は快樂と利益とを伴はん。然れども耻辱と損失とは必ず之に次
ぐべきものなり。
六、不直、不實、不誠は、或は得べき成功を失はしめ、輕卒・懶惰、怠
慢は常に進歩の妨碍たるべし。汝の主人の利益を謀ること恰かも自身
の利益の如くにせよ。
七、精密なれ。精密を缺くときは、誤謬に陥るのみならず、又煩累と損
失とを招かん。
八、小事にも注意せよ、流水の方向を示すものは藁にあらずや。

九、汝が今養成する所の習慣は將來の所業の基礎にして、一生の品行の模
型なり。
十、令名は無量の價値を有する貴重なる財寶なれば決して之を汚すこと
勿れ。
十一、眞正の價値は早晩必ず顯はるゝものなり。之を得んと欲せば成功
すべきの價値ありて成功せざるべからず。
十二、何事に拘らず之を爲すに當りて瑣事なりと賤しむべからず。汝の
事業の一部たりとも之を輕ずべからず。萬事萬端悉く力有らん限りを
竭せ。凡て爲すべき價値ある事は善く爲すべき價値あるなり。
十三、事業に注意せよ。事務を執るに當りては思想を一にせよ。常に習
知せんと準備し、上達せんと勉めよ。且つ熱心なれ。
十四、懇懇恭敬なる習慣を養ひ、笑顔を示すべし。常に禮儀を學べ。
十五、時間を嚴守せよ。否らずんば事務の整理を妨げ、光陰を空しうす
るの惡例を他人に與ふべし。
十六、清楚なれ。混亂の間に仕事をすることの習慣を避けよ。かゝる習慣は
最も不利益なるものにして、決して時間と煩雜とを省くことなく却つ
て之を増すものなり。
十七、何物に就ても場所を定め其場所に其物を置け。
十八、事務の滑かに且つ正しく行はるゝは只整頓、方法、順序の三者に
由る。
十九、事務の細目を熟知せんと勉めよ。若し知るべき必要ありて知らざ
る事あらば之を知らんと求めよ。
二十、舉動を敏捷活潑にせよ。緩慢は萬事を困難ならしむるなり。
廿一、勉強は繁榮の母なり。注意は其從者なり。

廿二、練習と忍耐とは熟達の基なり。大なる勞苦なくんば大なる利益なし。

廿三、事務を行ふに當りて誠心誠實なれ。主人の面前を装ふが如き事あるべからず。

廿四、言行共に眞實なれ。眞正の成功は決して虚偽の基礎の上に立つものにあらざり。

廿五、汝の事業は如何に賤しきにもせよ之を行ふの精神と態度とに依り之を尊からしめよ。罪障の他世に耻べきものはなし。

廿六、時間を浪費するはあらゆる浪費中の最も悪しきものなり。

廿七、汝の品行を眞正ならしめよ。日々不正は將來の苦樂の基となるものなり。

廿八、上帝を恐るゝは智慧の濫觴なることを記憶せよ。何事を爲すに當りても上帝あるを認めよ。然らば上帝は汝に其方向を示すべし。

廿九、最も瑣末の物と雖も、之を浪費するを避けよ。浪費は不正なるものなればなり。節儉の慣習は瑣末の事より養ふべし。

渡邊華山の商人訓

一、先づ朝は召使よりも早く起きよ。

一、十兩の客よりも、百文の客を大切にせよ。

一、買人が氣に入らずして返しに來たならば、賣る時よりも丁寧なせよ。

一、繁昌するに従つて儉約せよ。

一、小遣は一文より記せ。

一、開店の時を忘るゝな。

一、同商賈が近所に出來たら、懇意を厚うし、互に勵めよ。

は萬物の根元にて、國家の至寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み、妻子の如く育くみ、寸地をも捨てず、何處にても、鐵先の天下泰平、五穀成就を願ふより外更になし。

松浦宗安の勤農の詞

田夫も三徳(智仁勇)を備へざれば叶はず。時に時節を考へ前作相應の出來を知り、兼ねて水旱の歳を相し其の覺悟あるは智なり。下人牛馬を養ひ諸作を育て相應の肥もして水旱風損を繕ひ、作に障る蟲鳥獸を退け、痛み損ずるを直すは仁なり。風雨を厭はず、寒暑を嫌はず、耕作に精を出すは勇なり。此等を助辨すれば、又樂しむ所多し。先づ寒暑を経て碎けたる葉の春立歸りて、雪霜薄らぎ野山錦立つに隨ひて、春風に色めく面白きは、嵯峨吉野の山櫻友をかたらひ興を添ふらん。歌人の長閑けき心にも劣るべきかは。種子蒔きて見渡せば夏の夜の霜かと詠せし月の光に異ならず。小田鋤かへし、水打湛へたるは五湖の景にも勝り、菜圃の花咲き揃ひたるは洞庭の趣にも劣るまじ。堰に掛かる井戸の下は水門の流かと疑はれ、風にこぼるゝ稻葉の露は玉を亂すかと覺ゆ。色づく稻に引く鳴子、刈穂の巷の風情まで心言葉も及ばず。彼を見此を眺むるに、一として樂しみならずといふことなし。人々斯る勘辨して農業を營まば、辛苦を忘れ、自ら精勵する心起り、従ひて作物の出來も良からん。

報徳訓

一、父母の根元は天地の命令にあり。身體の根元は父母の生育に在り。

一、出店を開いたら、三個月は食料を送れ。

俳人一茶の勤農の詞

風流を樂しむ花園ならて、後の畑、前の田の作物に志し、自ら鋤をとりて耕し、先祖の賜と命の親に懇を盡し、吉野の櫻、更科の月よりも己が業こそ樂しけれ。朝夕心を留めて打ちかふ菜種の花は井手の山吹よりも好ましく、麥の穂の色は牡丹芍薬より腹こたへありと覺ゆ。朝鏡より夕鏡こそよけれ。萩桔梗よりも芋牛蒡に味あり。渾べて花紅紫より栗柿は實の植木なり。稻の穂並の賑はしく、菊の花より腹滿つる心地して粟穂に馴るゝ鶉、野邊の蟲の音聞くが面白く、遠き名所舊跡より、近き田圃の見廻りが他かず。松島鹽竈の美景より飯釜の下肝要なり。上作の名劍より鎌鋤は重寶なり。書畫の掛物より掛けて見る作物の肥を油斷せず、投入立花の工より茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶の湯、蹴鞠の遊びより、濃茶を飲んで昔語りこそ樂しけれ。玉の臺より茅葺の家居が心易く、高きに居らねば落つるあぶなみななく、迷はねば、悟らず。念佛の代りに、業を怠らず、實業を盡くすは神詣に比し、仁者にならふて山には木を植ゑ、智者の心を汲むて田の水加減を専らにし、珍肴鮮肉の料理より、錢いらすの雑炊が後腹病める氣遣なし。すべて世の中は飛鳥の川の流れ、昨日の淵は今日の瀬となるごとし。唐の咸陽宮、萬里の長城も遂に亡び、平相國の驕も一世のみ。鎌倉の將軍も三代をすぎず、北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も終に一代なり。時過ぎ世替れば、誠に夢の如し。世に稀なる珍珠も舌の上にあるうち、伽羅蘭麝の薫りもかく内のみ。樂は苦の基、財寶は後世の障、遊興はしばしの夢、他の富を羨まらず、身の貧を嘆かず、唯慎むべきは貪慾、恐るべきは驕なり。抑も田地

- 一、子孫の相續は夫婦の丹精に在り。
- 一、父母の富貴は祖先の勤功に在り。
- 一、吾身の富貴は父母の積善に在り。
- 一、身命の長養は衣食住の三に在り。
- 一、衣食住の三は田畑山林に在り。
- 一、田畑山林は人民の勤耕に在り。
- 一、今年の衣食住は今年の産業に在り。
- 一、來年の衣食住は今年の艱難に在り。

五例話

一 徳孤ならず (服部金太郎の信用)

その頃、ふと彼(服部金太郎)の心に浮んだのは横濱居留地にゐる時計輸入商アイザック・コロンの事であつた。東京の時計問屋は、多くはこの人から信用借りて時計を引き出して來て、これを小賣商人に卸すのであつた。問屋から仕入れずに、直接、輸入商から仕入れたら利益も多い譯だ。かう氣がつくと、すぐに横濱へ出かけていつてコロンに直接取引を頼んだ。コロンも初めて逢つたこの青年を心許なくは思つたが、だん／＼に話してゐる中に、實直さうな彼を見てとつて取引を承諾してくれ、他の問屋と同じやうに三十日延といふ約束で品を送つてくれた。三十日延といふのは、品を渡してから三十日以内に代金を支拂ふといふので、當時の問屋は皆かうして借りて居たのであつたが、益と暮れの二期に清算する習慣になつてゐた日本商人は、なか／＼此

の契約を履行しないので、コロンも困つてゐたから、特にその點については金太郎に念を押した。他の人は兎に角、私だけは斷じて契約は破りません。斯う堅く誓つた彼は、品物が賣れても賣れないでも、どんな苦しい思ひをして都合しても約束の日限内にはキチンと代金を支拂ふので、コロンからは益々信用されるやうになつた。初めは三百圓位の品しか融通してくれなかつたのが、やがて五百圓となり、千圓となるやうになつた。或る時、例の通り金太郎は横濱のコロンの店へ金を支拂ひに出かけていつた。服部さん、貴下は相變らずよく約束の日限を守つてくれますなア。貴下の品物を借りて金儲けをさせて頂くのですもの、御厚意に背いてなるものですか。いや貴下は日本人には珍らしい堅い人です。約束を守るといふことは西洋人には當然の事ですが、どう云ふものか日本人は守つてくれないで困ります。貴下ばかりは信用できる人です。イヤ、日本人が皆約束を守らないといふのではありませんが、日本では昔から二期に清算する商業上の習慣があるから、なか／＼其の習慣から脱けられない事情があるんでせう。幸ひに私は新店ですから、さうした事情もないので、どうやら約束が履行出来るのです。然し、約束を守るといふことは紳士としては最も大切な事ですからア……時に今日は如何ですか……、横濱には甘い支那料理がありますよ。北京の本場にも負けないやうなのがねハツハ、」「いゝえ、私は……。實はお恥しい話ですが、今日は小遣もありませんから……。」「元……元談いつてはいけませんよ。私は何も貴下に拂はせようとは思ひませんよ。」「いゝえ、その……私はい、體人様から恵んで頂きたいと思つてゐますので?」「それでは半分づつ出し合ひませう。」「それが、金がないんです。」「え、つ?」「嘘

業は旭の昇るやうな勢で盛になつた。

(修養全集)

二 信用貸借

チャールズ・ジェームス・フォックスは英國の自由黨員で有名な雄辯家であつた。或商人に證文を入れて三十磅(約三百圓)の金を借りた。期日が来て催促を受けると、「元金の方はもう暫らく待つて下さい」と云つて、フォックスは傍に積み上げてある四五十磅の金貨の中から、利息だけを支拂はうとした。見てゐた商人は、「そんなにお金がお有りになるのに何故拂つて下さらないのですか、不都合ぢやありませんか」と詰つた。するとフォックスは、「待つて下さい! これは友人シエリダンに遣らねばならぬのです。君の方は證書があるが、シエリダンの方は信用借りであるから、これを聞いた商人はいたく感動し「失禮しました。私も信用貸しに致しますせう」と云ふや否や、證書を破つてしまつた。「どうも困つたね」と、フォックスは微笑を浮かべながら云つた。「然らばこの金は君に上げずばなるまいで。シエリダンより君の方が先口だからね」

(修養全集)

三 信用と盜難

松本重太郎は又信用を重んずること極めて厚い人であつた。彼が既に關西の財界で頭角を現してからの話であるが、或時所用の爲一人だけ店員をつれて上京し日本橋のさる旅館に投宿した事があつた。當面の用事を終へたので、愈々明日は歸阪しようといふ其の夜のこ

と、賊が彼の室に忍び込んで、其の所持品數點を盗んで逃げた。

でない證據を御覽に入れませう」と懐から取り出した財布の中を見せた。中には五十錢しかなかつた。「コロンさん。お恥しい次第ですが、これが私の今日持つてゐる金額です。賣つた金は思ふやうに 回收出来ず、と云つて貴下にお支拂の日は迫る、漸く先刻お支拂しただけの金を手にして參つたので、あとに残つたのがこれだけなのです。」「フム、實に貴下は見上げた方だ、正直な方だ立派な紳士です。懐中無一物に等しいまでにしても此の、コロンとの約束を守つて支拂ひに来て下さつた貴下の誠意の程、私は深く尊敬しないうは居られません。私は貴下のやうな立派な紳士と取引するのは實に愉快です。嬉しいです。」「コロンは彼の誠意に感激した。そして、グツと彼の手を握つて言つた。「服部さん、私は貴下に、絶対の信用をかけることが出来ます。品物は幾何でも遠慮なく持つていつて下さい。一萬圓でも、二萬圓でも私の取引出来る力の限り貴下の御便宜を計りませう」大きなコロンの手に握られた金太郎の手は云ひやうのない感激にをのゝいてゐた。言葉こそ違へ、人種こそ異なれ、人間共通の誠意は二人の胸と胸とを堅く結びつけたのであつた。コロンといふ大きな背景を持つた金太郎は、素晴らしい勢で發展して來た。品物も、手紙一本で一萬圓、五萬圓、十萬圓と、どしどしと貸してくれた。精巧な時計や、最新流行型の時計や格安の時計など、凡て他の時計商が争つて欲しがるやうな荷が着くと、コロンは眞先に金太郎の許へ知らせた。かうした彼に對する信用は、ひとりアイザック商會のみでなく、居留地において彼の名を知る程の外商は、競つて彼との取引を希望するやうになつた。斯くして彼の店は日増しに繁昌し「正直な時計店」「正確な時計店」「狂はない時計店」として評判が高くなり、客足は引きも切らぬ程に殺到し、警

翌朝、隨行の店員がそれと知つて、大いに驚き調べてみると、値數百圓のものが無くなつてゐたのであつた。そこで店員は重太郎に向つて、

「且那樣、これから、早速警察に届けて參りませう」と今にも出ようとするのを、重太郎はこれを止めて、

「まあ、待て。私は明朝大阪の宅で面會を約束してゐる人がある。今これを警察署へ訴へて出れば、其筋の人がこゝへ來て、いろ／＼と取調べをすると、私も立會つてゐなければならぬまい。さうなると、明朝までに歸阪することはむづかしくなる。従つて面會の約を破ることになる。今三百圓や四百圓、失つたところが、何でも無い。人の信用は金で買へるものではない。警察に訴へ出るのはあともおそくはありまい」

さう云つて、直ちに汽車に乗つて歸阪を急いだといふことである。(修養全集)

四 禁酒店員

千七百九十年頃のこと、米國マサチューセツツ州グロンドン市の或雜貨店に五人の店員が働いてゐた。當時店の景氣がよかつたので、毎夜十一時頃に店を閉めると同時に慰安の意味で主人は酒を振舞うた。店員達はこれを無上の楽しみにして毎日元氣を出して働いてゐた。

其頃雇はれた小僧の中にアモス・ローレンスといふ少年があつた。彼は他の青年と同じやうに勤められるが儘に盃を手にしてゐたが初めは不味い苦いものと思つてゐたのが、一ヶ月すると次第に味が出來た。そこで彼は酒といふものゝいかに恐いものであるかを悟り、斷

然禁酒を誓った。

「僕はもう酒類は一滴も口にしないよ」

彼がかういふのを聞いて他の店員は一笑に附して顧みなかつた。

今迄、酒の味を覚えてから禁酒出来た者の例がない、ローレンスも今に飲み始めるだらうと思つてゐたからだつた。

けれども彼は決して自分の決心を離さなかつた。遂には奇人變人の渾名を立てられながらも、彼は酒も煙草も飲まず、只管商賣の道に精勵した。

かくして五十歳の時には彼はボストン市の一流商人の仲間入りをし、慈善家博愛家として全米にその美名を謳はれるに至つたのであつた。(修養全集)

五眞の富豪

赤手空拳から身を起して、拮据三十年、遂に米國屈指の大富豪となつたグールドも、流石に病には勝てなかつた。彼は愈々其の臨終の時、一人娘のエレンを呼び、次の如く遺言した。

「私は、お前に一億二千萬弗の財産を遺産として與へる。しかし、お前は之れを最も有益な方法で使はねばならない」

かくして、エレン・グールドは一億二千萬弗の富豪の女主人になつたが、大金を惜しげもなく社會事業に投出して、多くの不幸な人々を救つてやつたのであつた。

「社會事業のためとは云へさう無暗に御使ひになつては、亡くなられたお父さんはどうお思ひでせうか」

と周囲の者で忠告する者が出来たが、エレンの答へは次のやうであつた。

「でも、それに従事する人間が誠實であり、几帳面であれば、少しも恥づる所がないと私は信じます」満堂の聴衆に深い感動を與へ、其の聲望はいよいよ高まつた。(修養全集)

六

備者

一 事業と信用

人間萬事問違ひの世の中にて過誤・失念・杜撰・横着・無心・有心の間に齟齬して之が爲に時を空しうして財を失ふことの多きこそ是非なき次第なれ。政治の公務にても民間の事業にても又或は一家の生計にても單に事物の數理に従つて正味の要用を達するは誠に容易なることにて、差したる人數を要するに非ず。随つて費用も少なくて速に辨ずる筈なれども、實際は然らずして萬般の施設其の面倒なること筆紙に盡し難し。過誤失念は改めて事を再びせざる可からず。杜撰横着は傍より監督して之を豫防せざる可からず。之が爲に餘儀なく人數を増せば又其の人數を始末するが爲に更に人數を増さざる可からず。大家に多數の人を雇うて爲に數人の飯炊を置けば飯炊も亦飯を食ふが故に今度は飯炊の飯炊を雇ふの必要に迫るが如し。彼の政府又は諸會社等にて検査調査・取締參事立會など云ふは何れも右の要用に生じたることとして、其煩雜浪費推して知る可し。左れば人民一個の事業に於ても矢張り同様の始末にして、正味の事業その事よりも實は萬般の取締向きに忙しき次第なれば、事業上に最第一の要は信用すべき人物を得て取締の手を省くの一事に在るのみ。番頭手代が商賣しながら自ら取締の事をも兼帯すること大工と普請奉行と二役を勤むるが如き有様なれば、假令給料を豊かにするも、主人に利する所は却つて多く結局變

つた。

「いゝえ、これが父の遺志です。富んで金の徳を知らない者は、醜い物質の幽霊に過ぎません。妾は幽霊にはなりたくありません。」(修養全集)

六 安田善次郎翁の營業方針

一代の巨商安田善次郎は彼の二十六歳の時、秘藏の煙草入を賣つた金、二十五兩を資本として、東京日本橋人形町通乗物町に堅節屋を開業した。その時の營業方針は自分の利益よりも、客の利益を重んずるといふにあつた。

だから、商品は出来るだけ良いものを選び、値段を安くし、而も一言の偽りを用ひない。これより先き、氏は立身の第一日に於て三ヶ條の誓を立てた。第一に千兩分限になること、第二、獨立の商人になること、第三に決して嘘を言はぬことであつた。

彼の富を致した最大なる原因は、正直の徳を失はなかつたことにある。諺に「正直の頭に神宿る」(修養全集)

七 仕立屋から大統領

一介の仕立屋から身を起して、米國大統領となつたジョンソン、或時政談演說最中に反對黨の側から「よう、仕立屋！」と彌次られた。するとジョンソンは謹嚴な態度で「只今どなたか知らんが、私を仕立屋と呼ばれましたが、私は聊かも不名譽とは思ひませぬ。何となれば、私は仕立屋として自分の天職を盡したおかげで、私の作つた品物は確かだといふ評判を取りました。たとひ、その仕事が如何に賤しく

方の利益なるべし。世間の事業家を見るに親子兄弟睦しくして互に隔意なく思ふ儘に働く者に限りて大抵皆上首尾なるは他なし。取締の面倒を免れて、無益の手續と費用とを省くが故なり。無縁の他人を雇うて骨肉の親子兄弟の如くならしめんとするは、無益なる所望なれども、徳義人情の談は姑く措き、利益の一方より見ても人の信用こそ商賣上の利源なれば人に雇はるゝ者は自利の爲の要用なりと思つて正直に働き、主人も亦其の正直の代價として報酬を厚くすべし。商工の事務所に役員を以て辨ずるの事情もあらんなれども、又一方より見れば事務所全體に信用の空氣薄くして監督取締の必要に促さるゝものと云ふべし。(福澤諭吉(福翁百話))

二 道德と經濟

經濟は人の欲望の満足、富を生産し利用する人の活動である。人は種々の欲望をもつて居て常に之を満足せしめようと努力して止まぬ。人類の欲望は初は極めて簡單なものから、次第に複雑に赴くと共に、人智の發達に隨つて欲望を満足せしめる爲の方法も、次第に巧妙となつて來るのである。要するに、成るだけ小さな努力を以て、成るだけ大きな欲望を満足せしめようとするのが經濟である。人類の文化は自然のものを、人類がそれより高い目的の爲に作りかへることであるが、この意味に於て文化は經濟的活動であるといふことが出来よう。併し今經濟を狭く普通の意味に解して富の生産と利用に限るとして、なほ經濟は人類の生活に根本的に必要であることが明らかである。

即ち自然の上に我等の智力を加へてこれを作りかへ、新な価値を作り出すからである。然るに人生を以て絶対価値とし、この生命を存続し、発展することは道徳の目的である。この生命の爲に種々の価値を作り出すのが人類の一切の活動、努力であるから、経済的活動は當然人類の道徳的活動の一つである。人類は自然の物質を作りかへて其の目的の爲めに役立たしめるのであるから、人生の目的が主であつて、個々の活動は従であることはいふまでもない。

然るに目的と手段とを間違つて経済を以て人生活動の主要目的のやうに考へるものゝあるのは大きな謬である。人生の爲の経済であつて、経済の爲の人生ではないのである。故に経済的活動は、人生活動の全體の中で相當の位置を保たなければならぬ。従つて経済を賤しむのも謬であると共に、それを過重するものも正しくないのである。たとひ如何に多く物質的価値を作り出す方法があつたにしても、それが自分または他人の人格を無視したり、または他の人の生存を害するやうなことがあつたならば、我等はこれを道徳上非難せねばならぬ。そこで人を無暗に酷使するのは悪い事であり、牛馬でも同様である。他人を許つて自分の利益を圖ることは固より悪い。

我等がなす社會生活に於ては相互の協同が最も重要な條件である。産業は絶対の自由競争の下に最もよく發達するやうに主張した學者もあつたが、現今の産業組織では協同といふことを重視するやうになつた。文明は分業によつて進む。そして分業を最も有効にするには協同が必要であることは明らかである。

現今労働の問題に於て資本と労働との關係が常に紛争を極めて互に敵視して居る状態にあることは、最もこの協同の精神を無視したものである。

である。

三 現代の經濟組織

友枝高彦著(中學修身卷五)

現在の經濟組織は資本主義組織であります。資本主義組織とは多額の資本を以て精巧な機械を設備し、多數の労働者を使つて大規模に商品製造する組織をいひます。

この組織は多額の資本を必要としますから、個人の單獨經營では十分にその目的を達することが出来ません。これ今日多くの事業が二人以上の合同經營となり、また株式によつて一般から資本を募集する所でありあります。またこの組織は精巧な機械を必要としますから技術の進歩、學理の應用をその生命とします。そして新しい優良な機械を得るために莫大な代金を支拂はなくてはならず、しかもその機械も數年經過しない内に新鋭な機械と取替へなくてはならないこともありあります。これ今日各國が、競つて器具機械の工夫・發明を奨励し、その特許権を保護してゐる所以であります。

またこの組織は大規模に商品を生産しますから、その賣却が事業の死命を制します。そこで、出来るだけ販路を擴張するために同種類の他の商品と、競争する必要が起ります。そして、その當然の結果として、交通を促進し、廣告を利用するのはいふまでもなく、同種類の事業を合同して、競争に伴ふ危険を避けることが必要になります。これ今日商工業の隆盛な國に於て交通運輸業が發達し、事業の合同が盛に行はれる所以であります。

またこの組織は多數の労働者を使ひますから、人口を一所に集中します。そして、多數の労働者が、終日工場などで働く結果は社會の衛

である。労働と資本はその一方ばかりで存立し得るものではない。資本がなくては産業の興隆は決して望むことは出来ぬと同時に、労働を重く考へなければ産業は成立しない。この兩者は互に協調して、始めてその用を全うすることが出来るのである。若し互に相争ひ、人格の尊重といふ考を捨てたならば、本来物質を自分の用に供しようとする活動が却つて物質をして人を支配せしめることになるといはねばならぬ。

また社會生活は協同によつて成立つのであるから、相互の信用は社會組織を完全にし、活動を圓滿ならしむるに最も必要なことである。若し産業に従事する各員の間、商人と顧客の間などに相互の信用がなかつたならば、安心して取引することは出来なうであらう。例へば、商業上の取引に於て、一枚の紙片が數十萬圓、數百萬圓にも、代用されて、經濟上の運轉を敏活にし得るのは全く信用の爲である。製品を商標によつて信用するのも同様である。

要するに、欲望の満足を求めるのは自然であり、それ自身は悪ではない。併し、それが人類生活の根本に反し社會の正義に背き人類愛の精神に悖るに至つて、茲に惡となるのである。我等は物を役して自分の用に供するところに我等の生活の豊富と文化の進歩を求めることが出来るのであるが、我等が物に役せられて經濟を人生の最大目的と考へるやうになれば、人格の尊嚴は失はれ、道徳と經濟は相反することとなるのである。我等は經濟活動に對し人生生活の全體の活動中に於て最も正しき位置を與へ、その機能を營ましめるやうにせねばならぬ。かやうにして始めて經濟活動は人格の實現、文化の發達に貢獻し人類一般の善の爲に盡すことが出来るであらう。これが經濟の道徳化

生風紀に影響を及ぼし、一旦不景氣が襲来すると、多數の失業者を生じて、社會生活に重大な影響を及ぼします。また都市集中の傾向とともに、農業の衰退を來して、田園が荒廢し、主要食糧品の生産が不足するやうになります。これ今日各國で勞資問題や失業問題が研究される所以であります。

さてこのやうにして生産された商品は競争のために廉價で賣られることもあり、獨占のために高價で賣られることもありあります。また商品を出來るだけ安く賣つて販路を獨占するために労働者に支拂ふ賃金を安くし、また幼少年や婦人を使ふやうにもなります。これ今日各國に於て勞資や幼少年労働者婦人労働者について盛に論議される所以であります。

現代の經濟組織はまた交換經濟組織であります。交換經濟組織とは自分の消費する財貨を自分で生産しないで何物かを提供して他人の生産した財貨と取替へて自分の生活を完うする組織をいひます。

生活に必要な物資を得るためには何物かを提供してこれと交換したくはなりませんから、自然に職業が分化され、勤勞が凡ての人の義務とされるやうになります。勤勞が凡ての人の義務となる結果として、契約自由の制限が必要となり、職業が分化する結果として知能が圓滿に發達せず萬事が専門化するやうになります。

交換の仲介として貨幣が發達し、そして、信用の進歩に伴うて貨幣は凡ての價値の尺度となり、切手、手形の流通を取扱ふ銀行業は凡ての産業の中樞となり、財貨の賣買を仲介する商業は財貨分配の勢力を制するやうになります。これ社會に時として拜金思想が瀰漫し、物資買占等が行はれて物價に變動を來し流通貨幣の多寡が物價を左右す

るなどの現象が起る所以であります。

以上述べたやうな經濟組織によつて、現代の社會には資本對労働の問題、労働者保護の問題、産業利益分配の問題、幼年、婦人労働者の問題、労働時間と労働賃との問題などが起つて來てゐます。そして、此等の問題は社會と頗る重大な關係を有し謂はゆる階級闘争の徴候をも現し、延いては社會組織の根本にまで脅威を與へようとしてゐます。また此等の問題は皆近世に於ける自我の發見、即ち自覺の發達に伴ふ倫理的の根柢の上に立つてゐます。以上の外、更に一般社會生活に重大な關係のある物價の問題があり、生産統制の問題があり、消費節約の問題があり、經濟上の國際的正義の問題があります。私達は社會生活をする以上、そして經濟上の消長が直接急激に私達の生活に關係する以上此等諸問題の性質と根本の主眼とにつき正確公正な見解を持して、社會情態の推移を觀察しなくてはなりません。

藤井健治郎著(新時代女子修身書上級用)

四 實業一種の創業

何の事業でも、それが健全に發展するには、これに従事する人の魂のこもることが必要である、それにはまづ人と事業が殆ど一つであつて二つではないといふほどの密接な關係にならねばならぬ。事業を何かの手段にする間は、人はその事業以外で事業を見てゐるから、事業と人がまだ別になつてゐる。事業を目的とするやうになると、始めてこれに全力を注ぐから、隨つて事業と人が一つになつて事業は根強く發展するものである。

それゆゑ、眞の實業家にならうと思ふものは、恰も小説家が小説を

らうが、一つには、事業をするのに、金銭を重んずるほどに人を重んぜぬからである。それゆゑ、今後はなるだけ金銭が事業の主とならないうて、人が事業の主となるやうにせねばならぬ。天才の創作にも比すべき大小の事業が競ひ起つてこそ、始めて我が國の實業もその根柢が固くなるのである。事業と人が融合せず、實業家は實業をたゞ金銭を得る手段に外ならぬと見る間は、實業は堅實にまた偉大に發達するものではない。

實業をたゞ金銭を得る手段と見て、これをその人格を完成する目的と見ぬ結果は、人をして實業を輕視させるやうになる。實業が世の中に必要であることは、少しも政事や教育などと異なるところはない。そして、その本来の性質はやはり道徳的のものであつて、これによつて人格も修養され、また公利・公益も圖ることが出来るものがある。實業を投機・賭博の類でもあるやうに思ふのは極めて舊式な、しかも幼稚な考である。社會のため、國家のために、最も理想的に財貨を生産し、またこれを分配するにはどうすればよいか。この問題に答へることが即ち實業家の任務である。この任務を果すには、知識・技能ばかりでなく、また特に人格の力を以てせねばならぬ。その上この任務は、人がその畢生の精力を打ちこんでこれを果さうとしても、まだ足らぬところがあるほど重大なものである。それゆゑ、實業に従事するものはよくこの性質を知り、これによつて己の人格を修養すると同時に、また己の人格をその事業の上にあらはすやうに努めねばならぬ。實業をたゞ金銭を得る手段と見るからこそ、人格はなるだけそれと關係のない、それ以外のことについて修養せねばならぬといふやうな意見が今日まだ世の一部に行はれるのである。實業は高尚な一種の

書き、畫家が畫を描き、建築家が家を建てるやうな心持で、實業に従事せねばならぬ。つまり實業家も一種の創作者であることを覺悟せねばならぬ。創作には多少なりとも必ず何か新しい工夫が認められる外、とりわけ作者の魂が十分にその中にこもつてゐなければならぬやうに、實業にも、これに従事する人の人格までも想像されるほどに、よくその苦心經營の迹がその中にあらはれてゐなければならぬ。かやうに、仕事と人の關係が密接になると、事業はもはやその人の手段でなくて、目的となるのである。事業が目的となると、その成敗は事業の成敗であると同時に、またその人の成敗であるから詳しくいふと、金銭上の損得以上に、その人の成功にも失敗にもなるから、隨つて失敗した場合の苦痛も大きい代りに成功した場合の愉快はとりわけ大きいものである、たゞ資本を投じて、それから生ずる利益を収めようとするだけなら、事業の成敗は少しもその人の人格などに關係がないから、かやうな人は、たとひ金銭上で、成功しても、平生の宿志を達成したといふ樂を樂しむことは出来ぬ。かやうに實業は一種の創作に比すべきものであるから、作者たる實業家にその人を得ると、その事業は恰も藝術が天才を得た場合のやうに、發展して已まぬものである。しかるに、我が國の實業界では、その規模の大きいものは、二三を除くと、大概合作に似た合資事業であつて、一代の偉人が永い間の苦辛を費して、その身の行によつて書いた大創作ともいふべきほどの偉大な個人的事業は、まだ多く起つてゐない。カーネギーの事業はカーネギーの人格そのものであるといはれてゐるが、かやうに、一人の魂が隅々まで徹底してゐる大事業は、まだ我が國では多く見ることが出来ぬ。これは、我が國ではまだ一般の時勢がそこまで進まぬからであ

創作である。我等はこの覺悟でそれら己の擇んだ實業に全力を擧げて従事せねばならぬ。 湯原元一著(實業修身教本巻四)

第十三課 女子と職業(女子修身書)

一 要領

女子の職業に對する理解を與へるのが本課の要領である。なるべく天職を捨てず女子に適する職業を選んで生活の資となすことが望ましい。女子に取つては天職が第一であり職業は第二の補助である。

二 注意

- (一) 女子の職業は先づ歐米に於て問題となり歐洲大戰後は非常な勢で普及した。
- (二) 我が國中流以上の婦人は勤勞を賤み職業を厭ひ又は恥づる風もあつたが最近に至り職業婦人は俄かに激増した。
- (三) 職業婦人となる人は女子に適する職業を選ぶがよい。
- (四) 職業は自活の道を開くのみならず、其の人の個性を發揮し且つ人格價値を創造する。
- (五) 女子の職業はなるべく天職と矛盾せぬがよい。

三 設問

- 一 歐米の婦人には如何にして職業が開放されましたか。
- 一 我が國の職業婦人はどんな状態ですか。
- 一 女子に適する職業とはどんなものですか。

- 一 職業にはどんな価値がありますか。
- 一 女子は天職を捨て、職業に従事するのが本體でせうか。

四 訓言

生活問題

- 人生婦人の身と作ること勿れ。百年の苦樂他人に由る。 白樂天
- 獨身の女子は基礎なき家屋の如し。 獨 諺
- 富家の女は嫁ぎ易く貧家の女は嫁ぎ難し。 白樂天
- 一日作さざれば一日食はず。 傳燈錄
- 汝の手を勞して獲たる一切の物をもて汝の神の前に快樂を取るべし。 舊約書
- 爾は爾の額に汗して爾のパンを得ざるべからず。 トルストイ
- 勤勞する者に食を與へよ。 英 諺
- 働くことを欲せざるものは食ふべからず。 セント・ポール
- 自ら勞して自ら食ふは人生獨立の本源なり。 獨立自尊の人は自勞自活の人たらざるべからず。 福澤諭吉
- 地球上人間は固より凡ての生物は自ら食物を求めねばならぬ。 己れが巢に食物を運んでくれる他人を待つてはならぬ。 ワナメーカー
- 吾は働くべく生れたものである。 吾は働かざるものであると自ら知る者は幸福である。 ワナメーカー
- 生計の必要は老婦を疾走せしむ。 英 諺
- 女は家庭の救助たらずんば破滅なり。 アミール

勤勞・仕事

職業

- 勤勞は吾人より三大害惡を退かしむ。 曰く倦怠。 曰く罪惡。 曰く缺乏是なり。 西 諺
- 仕事をすれば少々の苦痛位は驅逐してしまふ。 その快味は到底怠惰の人の知り得ないことである。 ワナメーカー
- 仕事は人生を愉快にす。 アルマン
- 己の業を得る者は幸なり。 カイライル
- 仕事のないのはつらい仕事。 英 諺
- 閑散の人は溜水の如し。 遂に腐敗すべし。 西 諺
- 閑散は勤勞よりも早く體力を弱らしむ。 西 諺
- 無事の苦は繁忙の苦より大なり。 伊太利俚諺
- 自尊的の勞働は獨立の誇りを生み、未來の希望に充ち、而して人間が爲し得る力の確認を得ることになる。 ワナメーカー
- 勤勞なければ、慰安もなく、休息もなし。 カイライル
- 逸居して勤勞せざるものより憐むべきはなし。 天與の至美なるものも彼に取りては厭ふべきものなり。 ゲーテ
- 不斷の勤勞は誘惑を防ぐ。 伊太利俚諺
- 己れに適する職業を選べ。 エビクロス
- 天性と職業との相符合する者は幸福なり。 ベーコン
- 人間には或る職業を嗜好する性癖あり。 此の職業に従事すれば必ず世上に用ひられ幸福を受くべし。 之を立身すべき天運と云ふ。 エマースン
- その食を食へば其の事に死す。 韓詩外傳

- 職業に努力せよ。 然らば汝は安全なるべし。 オウイット
- アダムは耕しイブは織れり。 而して凡ての貴族は皆此源より來れるなり。 丁抹俚諺
- 婦人は益々其の顔に注意するに従つて其の家を等閑にす。 ペン・ジョンソン
- 屢鏡に對する婦人は紡ぐこと極めて稀なり。 佛 諺
- 眞率にして且つ大膽なる婦人は事を爲すに當りて、柔弱なる男子に優れり。 シエイクスピア
- 婦人が此の世に在りて爲すべき事務は、息女・姉妹・妻・母の義務中に悉く包含せり。 スチール
- 賢婦は家道を昌ならしめ愚婦は自ら其の家名を辱かしむ。 舊約書
- 家貧なれば良妻を思ひ、國亂れば良相を思ふ。 史 記
- 一家族を維持養育せんには、最下級の勞働者と雖も其の夫妻の得る所を合せて、彼等自身の生活を維持するに必要なる額よりも幾分か多からざる可からざる事のみは否む可からざる眞理なりとす。 アダム・スミス(富國論)
- 勞銀は其の生活を維持するに充分なるのみならず、多少餘裕なかるべからず。 然らざれば、彼等は其の子女を養育すること能はずして勞働者階級は其後繼者を失ふに至ればなり。 同上
- 食なき者は職を選ばず。 邦 諺

天職と職業

○女學者は女としての義務を輕蔑し、常に自ら男たらんとす。

五 備考

一 女子と職業

(一) 世界大戰は、かの國々の女子をして、男子の執つてかたすべの職業に従事させることとなつた。 最初は戦時だけのつもりであつたのもあらうが、女子でも十分出來るといふことが分つて來て、今日では、單に男子の一時的の代理でなく、永久的に女子の職業とならうとするものが少くない。 米國の如きは、戦前でも、戦争と消防との外は、男子の職業はまた女子の職業でもあつた。 教員は大部分女子の職

- 女の仕事は果つることなし。 ルソー
- 予は學問ある女子を憎む。 わが家の中の女には皆女子の本分以上に知らしむる勿れ。 ユーリビデス
- 如何なる婦人も良好なる家政に適せざれば無教育者なり。 パーナツ
- 婦人喫を好み、坐を好めば、男子寒を忍び餓を受く。 教女遺規
- 勤勞する家は飢饉これを窺ふこと能はず。 フランクリン
- 勤勞は石からパンを作り出す。 獨 諺
- 民生は勤むるに在り。 勤むれば乏しからず。 左 傳
- 稼ぐに追つて貧乏なし。 邦 諺
- 稼げば身立つ。 邦 諺
- 雞鳴に起きざれば日暮に悔あり。 楠公家訓
- 勞せずして得るものは唯貧のみ。 西 諺
- 田ありと雖も耕さざれば倉粟空し。 白樂天

業であり、銀行、會社の事務員、美術家、建築家、醫師、その他種々の職業に女子が従事してゐた。歐洲に於ては米國ほどはなかつたが戦後は、米國の女子に劣らないほど、或はそれ以上に、職業の範圍が廣くなつて來た。電話交換が女子を適任とするのは固より、計算なども女子の方が迅速正確であり、タイプライターなども女子の方が速いレコードを持つて居る。

(二) 我が國に於ても、近來女子の職業を求め、者が激増して來た。即ち女子の職業が、たゞ少數者の物好きなどではなく、緊急な女子當面の問題として考へられて來た證左ともいへよう。固より女子の理想は、家庭の人として幸福な生活を送ることであるが、それにしても、此と彼とは必ずしも兩立しないものではない。家政を怠せにしない限り、育児を疎かにしない限り、餘力を以て職業に従事することは、妨がないことであるばかりでなく、女子が社會的に強い地盤を獲得することにもなる。否現在に於けるよりも、一層合理的に、科學的に、家政、育児を處理し得るやうになれば、現時のそれらは、もつと短い時間内に出来る筈である。そして、剩した時間を以て職業の時間に充てることは、必ずしも難事ではあるまい。

(三) 一體我が國では労働を尊重する心が薄い。特に中流以上の女子に、その傾向を見受けることが多いやうである。正當な職業にも、内職などといふ名を附けたり、自分の職業と共に、他人の職業をも輕蔑したり、何れも無くては叶はぬ職業に尊卑高下の差等を附けたりする。これはまさしく我が國の陋習の一つである。特に女子がかやうな心を持つて居ることは、子女の感化の上にも好くない影響を與へるのである。職業を恥ぢるため、どんなに生計が苦しくても、やはり遊

んでゐて、その苦しい境涯を突破しようとの考を起さない者もある。況や中流以上に於ては、飽食暖衣、逸居することを無上の誇とする者さへもある。しかし、今日はもはや、華美な衣服を着て遊び暮すのを女子の能とすべき時代でなく、有階級といふやうな名は、決して好ましい名稱ではない。「労働せざるものは食ふべからず。」とは、生活上の原則として認めらるべきものである。

(四) 戦争中、歐洲の富裕な女子で、盛に何等かの職業を求めて、その得た金を公共事業に寄附した者が少なくなつた。そして、始めて自分で金を儲けて、「私は自分の最初の一週間の給料を受取つた時ほど、自分の一生で誇らしい思をしたことはない。」と言つた女子もあつた。甞に戦時ばかりでなく、平時でも、米國などでは、男子の學生には料理屋の皿洗ひをしたり、女子の學生にはホテルのメイドとなつたりして、學費を作る者が多くある。所謂労働神聖の觀念の徹底して居るものと見るべきであらう。

(五) 養蠶、養蠶、園藝、手藝、裁縫などの手近い物から、學校、官衙、會社、銀行、工場、病院の勤務、その他の諸事業に至るまで、すべてそれが正しい仕事である限り、何れも女子の活動欲を満足させ、經濟上だけでなく、道徳上にも人を向上させるものである。これを個人の方面からいへば、自分の生活價値を増大させ、個性發揮の方便となることは測られないほどである。また他の方面からいへば、一人でも仕事を持つ者の多いほど、家庭も、國家も、社會も、それだけ福利が増進させられるのである。その上、世間には種々の事情から、一身一家を支へなければならぬ女子もあり、寡婦となる者もあるから、今日養つて置く職業的能力が、他日そのまゝ役立つことも稀では

ない。

(六) 最近、中央職業紹介事務局で、東京、大阪兩市に於ける官公署、銀行、會社勤務の女事務員四千二百六十五名について、その就業の理由を調査したのに、家計補助千八百三十九名、自活四百八十四名、趣味修養三百八十名、業務修養二百六十八名、不時の準備二百五十七名、嫁入支度二百十三名、扶養八十七名、別に理由のないもの六百二十四名、不明のもの百十三名の統計を得た。單にこれだけの數字によつて見ても、或は經濟的獨立を冀圖し、もしくは他日のために有形無形の財産を準備して置かうといふ青年女子の意志は、歴々と讀み取ることが出来るのである。

(七) また同じ調査に於ける勤続年數を見るに、總人員中、二千七百三名、即ち六割三分以上は一箇年乃至三箇年以内のもので、四箇年乃至六箇年以内のものは九百六十四名に減じ、それ以上のものは少數である。年齢も二十歳以下のものが二千八百九十九名、即ち總數の六割八分であり、二十一歳乃至二十五歳のものが千十五名(總數の二割四分)である。また未婚のものが三千七百九十一名、配偶を有するものが百七十三名である。これによつて見れば、この二都市に於ける女事務員の大多數は、結婚を界線として、二三年間勤務するだけであるから、長く職業に従事することが少い。固よりこの一つの調査を以てすべての場合を斷定することは出来ないけれども、もしも今言つたやうな場合が多いとするならば、近來職業婦人の激増する傾向があるにも拘らず、女子の職業はなほ一般に補助的地位にあると言つてよいであらう。

(八) 女子には第一の使命が別にあつて、職業は大體に於て補助的

であることを免れないとしても、それでも、私達はなるべく其の能率の増進に努めなければならぬ。更に進んでは、女子が主動的地位に立ち得る職業の領域をも開拓して、能率的活動を續けたいものである。

下田次郎著(女子新修身書卷五)

第十四課 政治と道徳

要領

政治と道徳とは其の根源と歸着點を同じうするものであるから政治も法律も善の理想に従屬すべきことを教へるのが本課の要領である。

注意

- 一 (一) 政治の本質は道徳の精神と一致すべきものである。
- 二 (二) 法律と道徳との間に本末の別を立つれば道徳は本で法律は末である。
- 三 (三) 政黨員は節操を守ることが大切である。
- 四 (四) 日本國民はよく立憲自治の精神を理解して國民の權利義務を完うすべきである。
- 五 (五) 我が國の政治は族長政治より今日立憲政治に進んでゐるが立憲有終の美を濟すには道徳の基礎を要する。
- 六 (六) 今日の青年は一通り政治を理解する必要がある。

設問

一 政治と道徳とはどこに一致點があるか。

- 一 政治と道徳とはどこに違ひがあるか。
- 一 法律と道徳とは如何に關係するか。
- 一 政黨員の任務は何か。
- 一 政見とは何か。
- 一 國民の政治思想は一國の政治にどんな價値を有つか。
- 一 我が國の政體は何か。
- 一 文化國とは何を言ふか。
- 一 政治に對して青年は如何に心得ればよいか。

四 訓音

政治と道徳

- 正直は最善の政策なり。 羅旬僂諺
- 正直なる政治家なるもの世に在りしことありや。 ユーゴー
- 予は罪と同様に失策を憎む。別けても政治的失策は特に然り。蓋し幾百萬の人民を不幸慘害に呻吟せしむればなり。 グーテ
- 事件が政策を支配せずして、政策が事件を支配せざるべからず。 ナボレオン
- 最高の政治標語は自由にも平等にも同胞主義にも將又共同一致にもあらずして奉仕なり。 クロー
- 總ての眞政治及眞經濟の目的は各與へられたる地域内に最大限の良民を住ましむるにあり。 ラスキン
- 我國の政治家連の心意は人の眼の瞳の如く強き光の方へと引付けらる。 エドワード・ムーア
- 政治家は國民の性格及び進歩に隨從すべき者にして嚮導すべきものに

- 政治家は漂流に甘んずれど經世家は操縦せんと欲す。 エマースン
- 眞の經綸は國家を其のあるがまゝより有らざる可らざるものに變ずる術なり。(現實を打破して理想に進むにあり) アルガー
- 國家は一日も信なかるべからず。 アリストテレス
- 國道なく敗徳の政權を掌握するときは則ち名譽は民間にあり。 アチソン
- 家内の愛情はあらゆる良政府の最も有益なる基礎なり。 ビーコンスフィールド侯
- 最良政府は特に一人を害せず。 ソロン
- 如何なる政府も政府なきに優れり。 小ケート
- 國家の價値は畢竟國家を組織する人民の價値なり。 ミル
- 政府は禍害の爲に養成せられたる制度なり。 スペンサー
- 宗教・正義・協議・財政は政府の四維なり。其の一若し弛むときは、人民は好天氣を祈らざるを得ざるに至るべし。 ベーコン
- 舊政府を顛覆し、新政府を建設するは、恰も老朽せる樅樹を伐倒して新樹を植うるが如し。子孫或は其の庇蔭と其の良材とを得べし。然れども、之を植ゑたる人は想像の愉快を受くるの外他に利する所なきなり。 サール・ウイリアム・テムブル
- 政府も一個人と同じく眞に尊敬せらるべきの價値なくんば、永く尊敬せらるゝこと能はざらん。 アチソン
- 政府の生存する理由は強者が弱者の財産を掠奪するを防ぐに在り。 ジエームス・ミル
- 帝王は正義の靈牌なり。 キゾー

- 王侯の爲めに最も確實なる護衛は人民の愛情なり。 アルターク
- 盜賊は嚴密に據りて以て自ら安んず。帝王の據守すべきは威儀仁惠の二者あるのみ。 アラタス
- 帝王は星の如く朝暮に出沒し又世間に崇拜せらるゝも休息すること能はず。 シェリー
- 帝王は天體の如し。世間に尊敬せらるゝも決して休息すること能はず。 ベーコン
- 凡そ善法良律を無効とする王を虐主と謂ふ。虐主は民の爲めに服従せらるゝ權利を失ひたるものなり。 パトリック・ヘンリー
- 予があらゆる動作を嚮導する源は自國の利益なり。 小ケート
- 吾が身の爲め、吾が國家の爲めの最重要に冷淡なるは罪惡と謂はざるべからず。 アチソン
- 國家の爲に死するは光榮なり。 ホーアー
- 國家の危急存亡の秋に臨みて、中立の地位に立つ者は同胞の利害を顧みざる人なり。 アチソン
- 巨人の力を得るは譽むべし。然れども巨人の如く之を用ふるは壓制と謂はざるべからず。 シエークスピア
- 自家を管理すること能はざる者は、國家を管理すること能はず。 タミル俚諺
- 私人は己れの爲めに勞せざるべからず。然れども政治家は人の爲めに勞せざるべからず。 ベロビダス
- 民の聲は神の聲なり。 西 諺
- 天の聰明は我が民によりて聰明なり。天の明威は我が民によりて明威なり。 書 經

- 天には耳目なし。人民を以て耳目とす。故に人民の上に對する態度は皆天意なり。聰は耳に屬し、明は目に屬す。明威は明かなる威力にして、猶ほ顯罰といふがごとし。 書 經
- 天の視るは我が民によりて視、天の聴くは我が民によりて聴く。 書 經
- 民の仁に歸するや、猶ほ水の下きに就き獸の壙きに走るがごとし。 孟子
- 民は別けて聴けば愚、合はして聴けば聖なり。 管子
- 解 人民は個々別々にして其の言をきけば、取るに足らざれども、多數を集合して其の言をきけば聖人の言として聴くべきものあり所謂輿論を重んずべしとの意。
- 民は惟れ國の本なり。本固なれば邦寧し。 孔子(論語)
- 君子徳を懷へば、小人土を懷ふ。 孔子(論語)
- 君子常に徳を民に施さん事を心がくれば民は其の土に安んじて他邦に去らん心を起さず。即ち愛郷心愛國心の生ずる本となるべし。 後漢書
- 有徳の君は樂しむ所を以て人を樂しませ、無徳の君は樂しむ所を以て身を樂します。 大 學
- 一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興り、一人貪戾なれば一國亂を作す。 大 學
- 未だ上仁を好みて下義を好まざる者あらず。未だ義を好みて其の事終へざる者有らず。 管子
- 下情の上通せざる之を塞といふ。 管子
- 號を發し令を出して民悦ぶ。之を和と謂ふ。上下親しむ。之を仁と謂ふ。 禮 記

を錯かば民服せず。
○民を道びくに徳を以てすれば則ち民厚きに歸す。民に示すに利を以てすれば民俗薄し。
○太上は徳を以て民を教へ禮を以て之を齊ふ。其の次は政事を以て民を道びき、刑を以て之を禁す。
○善を爲す同じからざれども、同じく治に歸す。惡を爲す同じからざれども、同じく亂に歸す。

孔子家語 書 經

○吾等の創建せんとする國家の目的は單に或る一階級の人々の不平等なる幸福に非ずして人民全體の最大幸福にありと爲す。思ふに國民全體の善を目的として統治する國家に在りては吾等は最も著しく正義の存するを見るに雖も、亂邦に在りては之に反して不正義の存するを見るべし。是に於て吾等は此二種の國家に於て何れが果して幸福なるかを判断するを得べし。余は目下少數の幸福なる國家の爲めに斷片的國家を作らんとするに非ずして、國家全體の幸福なる國家を形成して次第に其の反對性質の國家を考究せんとする者なりと信ず。

プラトン(理想國)

左 傳

○能く善人を用ふるは民の主なり。
○社會は政府なくして存在すること能はず。
○民を導くの本は教化にあり。
○最大多數の最大幸福は道德及び立法の根本なり。
○徳は博く人を愛するより高きは莫く、政は博く人を利するより大なるは莫し。

日本書記(崇神紀)

西 傳

新 書

運

○政治家となりて偉勳を奏せんと欲せば權力に伴ふに謹慎を以てし、運命に伴ふに徳行を以てせざるべからず。
○天下の務は當に天下と之れを共にすべし。豈一人の智の獨りする所

プラトン

左 傳

ならんや。
○衆と好を同じうすれば成らざること雖も、衆と惡を同じうすれば傾かざることを識し。
○聖なる神を謙遜に模倣するにあらざれば國家は幸福なる能はず。
○政は恒あるを貴ぶ。
○上、天の時を得、下、地の利を得、中、人の和を得れば財貨渾々として泉源の如く汭々として河海の如く、暴々として丘山の如し。
○上下和せざれば安しと雖も必ず危し。
○天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。
○樂は上下之を同じくせん。上、其の樂を樂しめば、下、その費を傷む是れ獨り樂しむの不可なり。
○天下の平なる所以の者は政平なればなり。政平なる所以の者は人平なればなり。人の平なる所以の者は心平なればなり。夫れ平は猶ほ權衡の如く然り。銖兩を加ふれば則ち移る。
○唯一人に爲されたる不正不義も凡べての人を危ふくす。
○之を道くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば民免れて恥無し。之を道くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば恥有りて且つ格す。
○天下は一人の天下に非ず。乃ち天下の天下なり。天下の利を同じくする者則ち天下を得、天下の利を擅にする者は則ち天下を失ふ。
○聖人衆と欲を同じくす。是を以て事を濟す。

宋書(顏延之傳)

三 略

ワシントン

書 經

荀 子

孟 子

孟 子

說 苑

子 華

西 傳

六 籍

左 傳

○聖王は先づ民を成して而る後力を神に致す。
○天下の禍は人を殺すより甚しきは無し。陰徳を爲す者、亦人を活かすより大なるは無し。
○國は民を以て基とす。
○民の爲に君を立てるは之を養ふ所以なり。民を養ふの道其力を愛するにあり。民力足れば則ち生養遂げ、生養遂げるときは則ち教化行はれ、而して風俗美なり。故に政をなす民力を以て重きと爲すなり。近思錄
○民の樂を樂しむ者は、民亦其樂を樂しみ、民の憂を憂ふる者は民亦其の憂を憂ふ。樂は天下を以てし憂は天下を以てす。然り而して王たらざる者未だ之れあらざるなり。

左 傳

燕 夢 得

潛 夫 論

說 苑

孟 子

陸 贄

書 經

荀 子

管 子

左 傳

唐 太宗

天 照 大 神

○民の欲する所は天必ず之に従ふ。
○衆を得れば天を動かす。
○民と一體たれば則ち是れ國を以て國を守り、民を以て民を守るなり。
○國家の立つや、本大にして末小なり。是を以て能く固し。左 傳
○國の將に亡びんとするや、本必ず先づ顛れて而る後枝葉之に従ふ。
○王者は至公にして私無し。故に能く天下の心を服す。唐 太宗
○凡そ政道といふ事は正直慈悲を本として決斷の力あるべきなり。これ天照大神の明なる御教なり。決斷といふにとりてあまたの道あり。一にはその人を選びて官に任ず。官に其の人ある時は君は垂拱してまします

されば本朝にも異朝にもこれを治世の本とす。二には國郡を私にせず。分つ所必ずその理のまゝにす。三には功あるをば必ず賞し罪あるをば必ず罰す。これ治を勧め惡を懲らす道なり。これに一も違ふを亂世といへり。
○國家を爲むる者は惡を見ること農夫の務めて草を去るが如くす。
○治は君子より生じ、亂は小人より生ず。
○世治まれば即ち義を以て身を衛り、世亂れば即ち身を以て義を衛る。
○治と道を同じくすれば興らざる罔く、亂と事を同じくすれば亡びざる罔し。
○治世の音は安んじて以て樂しむ。世の政和すればなり。亂世の音は怨みて怒る。其の政乖けばなり。亡國の音は哀しみて以て思ふ。其の民困しめばなり。聲音の道は政と通ず。
○治國の端は正名に在り。
○神は民の怨言を聞いて震怒を發し給へり。
○人民の爲に惡まれたる政府は永續すること能はず。
○天下道あれば學は上に在り。天下道なければ學は下に在り。天下道あれば君子位に在り、小人黜けらる。故に學は上に在り。天下道なければ小人位に在り、君子身を奉じて退く。故に學は下に在り。學は上に在れば治まり、學は下に在れば亂る。
伊藤仁齋(仁齋日札)

法律と道德

西 傳

○一國の法律は其の歴史中の最要部を組成す。
○法律は習俗に従ひたるものなり。
○法律は特殊な場合の爲に設定されしものにあらず。一般人の爲に作られたるものなり。
○法律は常にたゞ一聲もつて萬人に通ずるやうに仕組みられてあり。

○法文は無學者にも容易に理解し得せしむる爲に簡明ならざるべからず。
○法律が確立せず又は知られざる所に於ては其の遵守は困難なり。
○法律の設定は何人にも危害を加へず。
○法律は何人にも不可能を強ひず。
○法律は將來に及び既往に遡らず。
○同意は法律を作る。
○良法律は悪行より生ず。
○法律なき國民は主義なき人の如し。
○正義は法律の法律なり。
○法令の命令には服せざるべからず。
○不法の命令は無効なり。
○法律が若し恒久正義の原則を冒瀆するならば、それは既に法律にあらず。

- ギボン
- ブラウタス
- ジョンソン
- シセロ
- セネカ
- 羅旬俚諺
- 同 上
- 同 上
- 英法格言
- マクロブ
- ツアハリエー
- 英 諺
- 法律格言
- 同 上
- チヤイルド
- 淮南子
- 淮南子

○公道は世界の正當なる君主なり。
○信は萬國公法の精神たるべし。
○法律は人民の爲めに設く。
○法律の目的は社會に一部分たりとも、倫理的秩序の實觀を來すにあり。
○公正を脅かす法律は理性の執逆者なり。
○最大多數の最大幸福は道德及び立法の根本なり。
○法律は神の無言の陪席判事なり。
○法律は神の制定し給ふものなり。
○法律は帝王の上の帝王なり。
○裁判官は物言ふ法律にして、法律は物言はざる裁判官なり。
○道德を無視せる法律はまた何の役にか立たん。
○法律を改正するよりも道德を進歩させる方が重要だ。
○民草の賑ひこそ最高法律なれ。
○法律は一般人民の意思を表出したるものなり。
○童謡を纂めて國法を作れ。其の立法者の誰たるは敢て問ふ所にあらず。
○人爲法若し神爲法に反するときは法律にあらず。

- ビンダー
- 同 上
- 法律格言
- 西 諺
- ヒル
- ベンサム
- アルチャイ
- 法律格言
- ルイ十四世
- シセロ
- ホレイス
- ロイド・ジョージ
- 羅旬俚諺
- ルソー
- 英 諺
- ブラツクストーン
- 天下又法外の自由あることなし。
- 我等に自由を與へ得るものは唯法律あるのみ。
- オースチン
- ゲーテ

○自由とは法律が認許する範圍の事を爲す權利なり。

○法律は眠ることあるも決して死せず。
○法律と公正の二つは神之を結びたるに人之を分離せり。
○法律は刑罰を執行し能はざる時は説得することを得ず。
○法律と權利とは頑固なる遺傳病の如くに傳はる。
○立法者は法律の破壊者たるべからず。
○法を作る者は法を破るべからず。
○法律は我々が何時非違を行ひ何時其の罰を受くるかを教示す。
○法律は自ら之を以て防護するの勇氣と手段とを持たざる者の爲には有りて無きが如し。
○吾人は法律を知る義務を有す。
○公平は寛大を以て裁き、法律は嚴格を以て裁く。
○法律の性質は人のそれより強く且つ力あり。
○法律は唯一人をも容赦せざる點に於て死の如くあらざるべからず。
○法律は之を厲行せざれば寧ろ無きに若かず。
○法律は眠ることあるも決して死せず。
○法律は恰も蜘蛛の巢の如し。小さい蠅を捕ふれども胡蝶や大黃蜂は突過するまゝにして置く。
○法網は蠅を捕ふれども、蜂をして横行せしむ。
○法の適用は嚴に失せんよりは寧ろ寛に失せよ。
○法には皆逃路あり。

- モンテスキュー
- 羅馬法格言
- コルトン
- 古 諺
- ゲーテ
- 古 諺
- 英 諺
- ジョンソン
- マコーレー
- 法律格言
- スコット
- 羅馬法格言
- モンテスキュー
- 丁採俚諺
- 羅馬法格言
- スウィフト
- 法律金言
- 英 諺

○網吞舟の魚を漏らす。
○法律が作らるゝや否や拔道は見出さる。
○法律家と畫家とは瞬く間に黒を白に化し得。
○良法律家は隣人として厄介なり。
○法學者は悪いクリスチャンである。
○法衣は訴訟者の剛復を以て裏付されてゐる。
○善き法律家は自ら法律に訴ふることなし。
○法律を修得するの如何に怖るべきことを汝はよく解せず。
○領頭な法律は大犯罪を扶育す。
○新しい法律に伴なつて新しい犯罪が出る。
○法令滋々彰かにして盜賊多くあり。
○法律は多きに從つて正義を減ず。
○禮煩はしければ亂る。
○令苛なれば則ち聽かず。禁多ければ則ち行はれず。
○法律は底なしの淵なれば遠ざかるべし。
○何よりも訴訟を避けよ。訴訟は良心を曲げ健康を損じ、財産を浪費す。
○妥協せよ。法律は高價なり。
○肥えた訴訟よりも瘦せた示談がよい。
○硬性の法律は大不正を爲すこと少からず。
○法律は貧乏人を挫ぎ、富者之を支配す。
○法律は無頼漢の爲めに作られたるもの。
○良き法律は悪行爲より生出す。
○法律は富籤の如し。

- 史 記
- 伊太利俚諺
- 古 諺
- 英 諺
- 獨 諺
- 老 子
- 獨 諺
- 書 經
- 呂氏春秋
- 古 諺
- ラ・ブルイヤイ
- 英 諺
- 獨 諺
- シセロ
- ゴールドスミス
- 伊太利俚諺
- 羅旬古諺
- 英 諺

○法律は公明なる行爲のみを罰せんとす。
○最も名高き聖賢等は法を犯して而かも最も眞實に其の法律を履行した

モンテスキュー

ミルトン

英 諺

羅何俚諺

マツシンジャー

シーザー

シセロ

英 諺

邦 諺

英 諺

セネカ

ワイド・ビーチヤ

英 諺

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

マツシンジャー

○善人は訴訟に勝つ。
○出来上つてゐる不正を認めることが現代では正義の一である。
○罪も成功すれば徳と稱せらる。
○人民は小盗を絞するも大盗の前には帽を脱す。
○小罪は罰せらるゝも大罪は賞せられる。
○無罪の人は雄辯を要せず。
○心に罪を思ふ者は罪を犯し易し。
○罪によりて利益を得るものは之を犯す。
○裁判所に違ざれば心配を免る。
○裁判所は無頼漢の爲めに建設せられたるものなり。
○罪人は我が受くる罪の當然なるやを疑ふ。
○罪人は己れによりて他人を判す。
○法令は罪を摘發し得るも、これを除去し得ず。
○法令は悪を誅する所以にして善を勸する所以にあらず。
○法令は治の具にして、治を制し濁を清むるの源にあらず。
○刑は刑無きを期す。
○國に道あれば刑を加ふと雖も刑無し。國に道無ければ之を殺すと雖も勝つ可からず。
○夫れ法令は暴を抑へ、弱を扶くる所以なり。其の犯し難くして避け易きを欲するなり。
○刑は邪を正す。
○巧者能く規矩を生ずるも、規矩を廢して方圓を正す能はず。聖人能く

オウイッド

西 諺

アナトール・フランス

ベン・ジョンソン

獨 諺

セネカ

ベン・ジョンソン

ドライデン

ドレイデン

セネカ

英 諺

バーンス

ベン・ジョンソン

マツシンジャー

ミルトン

新 語

司馬遷

書 經

春秋繁露

漢 書

左 傳

聖人能く

○法律は吾人の罪惡を防ぐを得るも、己れの罪惡を防ぐこと能はず。
○法律の終りは壓制の始なり。
○人に命令を與ふる者は法律に命令を與ふべからず。法律に命令を與ふる者は人に命令を與ふべからず。
○法律が破壊せらるゝや否や、凡ての人の自由は失はれ、相互に他の領域に侵入して相互の權利を破壊し。相互の分野を侵略するに至る。
○腕力は法律の敵なり。
○法律の備はらざる所は格言之を補ふ。
○惡を爲さざるを以て足れりとせず、更に力の及ぶ限り善を行ふべし。
○法律の目する所は將來にあり。裁判官の關する所は既往にあり。

ウイリアム・ピット

ルソ

ホルランド

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

法律格言

○藥石は病を治むる所以にして人をして病なからしむること能はず。
○國の法を仰ぐこと猶ほ魚の水を仰ぐが如し。水清ければ則ち靜なり。濁れば則ち擾る。擾るれば其の居に安んぜず。靜なれば則ち其業を樂しむ其業を樂しめば則ち富む。富めば則ち仁生ず。贈れば則ち争ひ止む。
○政を爲すに禮を以てせざれば、政行はれず。
○禮は未だ然らざるの前に禁じ、法は已に然るの後に施す。史 記
○智者法を作り愚者焉に制せらる。賢者禮を更め不肖者之に拘はる。史 記
○黨派とは意見の構成せられたるものを云ふ。
○一定の主義を有せず、他の旗色を見て之に従ふは、眞に不良の舉動と謂ふべきなり。
○人の議論は時の風潮に従ふ。
○何人も協力戮力して運動を爲すに非ざれば決して功を奏すること能はず。
○一個人たり議會たるに論なく己れ權力を有するに當りて共に謀るべき

管子

鹽鐵論

荀 子

方孝孺

荀 子

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

史 記

○黨派とは意見の構成せられたるものを云ふ。
○一定の主義を有せず、他の旗色を見て之に従ふは、眞に不良の舉動と謂ふべきなり。
○人の議論は時の風潮に従ふ。
○何人も協力戮力して運動を爲すに非ざれば決して功を奏すること能はず。
○一個人たり議會たるに論なく己れ權力を有するに當りて共に謀るべき

ものは只己れのみと思ふときは其の心裏に惡結果を生ずるものなり。
○政黨とは僅少の人の利益の爲に多數の狂するを云ふ。 ミル ボーブ
○黨操は黨利なり。 リクイーヴランド

○政黨關係の人々は各自の意見を黨の爲に犠牲にして又は犠牲にするだけの價值ある意見を有せず。随つて政黨政治の實果は常に抗争と虚偽とを開發し、理想を没却するにあり。 エマースン

○ホイッグ黨トリ黨 皆夫れ々に血を湧かす暴風の時もあらばあれ。さはれ或る赤誠の福利の爲めには有らゆる黨派一に合して行動す。 デニス
○根本政綱よりも、宿怨を後生大事に固守するのが即ち政黨である。 マコーレー

立憲自治

○自由國に於ては喧鬧多くして苦痛少く擅制國に於ては苦痛多くして喧鬧少し。 カルノー

○自由國に於ては少許の不便にも不服を唱へ 壓制國に於ては數多の不便にも不服を唱ふることなし。 ザイル

○自由ならずんば決して安寧秩序あるべからず。 ミルトン

○自由は法律の許す所のものを爲すの力より成る。 シセロ

○自由を失へる人を見るに非ざれば決して自由の意義を知ることはせず。 ブラツク・ワード・エヂンバラ

○出版の自由を禁止するに非れば專制政治を行ふこと能はず。之を譬ふれば猶太陽の沒せざる間は夜となすこと能はざるが如し。 コルトン

○今の代議士は眞正の代議士なり。 詳かに言へば愚蒙の選舉人に選ばれたる愚蒙の代表者なり。 スペインサー

○輿論は無量の勢力を有するを以て決して抵抗すること能はざるものなり。 ナポレオン

○輿論は私見に比すれば懦弱なる暴君なり。 ソロオ

○輿論は時雨の如く高處にて發生すれど必然的に低處に降下す。 コルトン

○行政官は其の人員の寡きを厭はず。 立法官は其の人員多きを厭はずと云へる言は政治上の金言と爲すを得べし。 スウイフト

○黄金の爲に自由を賣る者は、永く奴隷の境遇に陥らざるを得ず。 ホーアー

○腐敗したる自由は奴隷の最も惡しき者なり。 ゲーリッツ

○俘囚の王たらんよりは自由の鳥たれ。 丁抹俚諺

○正しき自由を得て一日若くば一時間生くるは、 出囚の身となりて永久に生くると同價値を有す。 マヂソン

○民の聲は神の職なり。 西 諺

○國家は何より成るか。曰く、常に我が義務を知るのみならず。又我が權利を知りて之を保全する所の人々より成る。 ウイリアム・ジョーンズ

○有徳なる人民には腐敗せる代議士を出すことなく、卑劣懶惰無分別な

○壓制は謀反の最も甚しきものなり。 バイロン
○不得止といふは壓制者の辭柄なり。 ミルトン
○我邦は自由なくんば存立するを得ず。 自由は德行なくんば生存するを得ず。 ルソ

○自由の棲息する所是れ我が郷里なり。 フランクリン
○予に自由を與へよ。否らずんば予に死を與へよ。 パトリック・ヘンリー

○奴隷の境遇に在る人若し其の聰明善良と爲るを待ちて始めて自由を得べしとならば、實に永久之を得ること能はざるべし。 マコーレー
○自由の爲めに劍を抜くは勇者に取りて眞正の名譽なり。 フリットン人ガルガカス

○世襲の奴隷も自由を望まざるに非ず。 然れども一撃を試むべきを知らざるなり。 バイロン
○民権を奪はれざらんと欲せば、政權を抵當品に取らざるべからず。 ビット

○自由若し放肆に失するときは 擅制權の其の處に乗ずるや最も容易なり。 ワシントン

○自由は權力の濫用の爲に失はれんとするに止まらず。 自由の濫用の爲めにも亦失はれんとするなり。 マヂソン

○萬人悉く自由を愛す。而して之を壞滅するを好めるが如し。 ヴオルテール

○人は自由を得たる後若干の歲月を経過するに非ざれば 自由を用ふる方法を知らず。 マコーレー

○自由人一朝、壓制者の恩恵を蒙れば忽ち其の勇氣の半を失ふ。

○人民には善良なる政府を有せざることは是れ古今の通則なり。 エドマンド・バーク

○自由國に於ては、國民悉く總べての公事に關係を有すと考へ、又公事に就きて意見を有し、之を開陳する權利を有すると考ふ。彼等は一意専心公事を調査し、之を論究し、寸毫の不正不便の存することを許さず。而して此等の事項を日常の思考及び研究の題目に供するを以て、衆人益々公事に通じ或る人士は頗る之に熟達するに至る。是れ自由國に於ては、其の他位職業の如何に拘らず、其の才能者の多き所以なり。之れに反して專制國に於ては、當路者に非ざれば公事に留意せず。之を思考せず、相互の間に我が意見の力を試み肯んずる者なきを以て、貴賤貧富に論なく政治上の才能を有する者極めて稀なり。 エドマンド・バーク

○委員選舉集會・演說會・寺會・州會の如き公務は何も別に面白きものにあらず、敢て想像を幻惑せしむるにもあらず。又心神を激昂せしむるにもあらず。然れども、平時に於ける投票は戦時に於ける奮闘の如し。其の平和にして血を流すことなきの故を以て効力少しと謂ふ勿れ。投票は權利にあらずして義務なり。投票の準備を爲すも亦同じく義務なり。 ジョン・ラボツク

○政治は公論の反響なり。 國民にして憲法の運用に熟するにあらずんば、豈能く憲政の美を濟すを得んや。その人各其の身を修め家を齊ふの道は私徳なり。蓋し政治の善惡、國運の隆替は主として公徳の消長に因る。若し民徳盛にして公徳の力となるにあらずんば憲法も法律も遂に空文に歸すべし。抑々議會は公論を代表し大政を協賛すべき立法の府なれば議員たる者は常に私見を去り公議を執りて國民の選良たるに愧づること勿れ。而して議員選舉の權を有する者は各々知識道徳を磨きて國家に

對する責任を自覺し、深く選舉權の神聖を尊重して、眞に國民を代表するに足るべき人材を選舉すべきなり。然るに若し利慾に馳せ權威に畏れ、主義を枉げ節操を棄て、賤劣貪慾の議員を選出し之に委ぬるに國政を審議する權を以てするあらんか、斯の如きは憲政の大義に反り、之を小にしては自己を害し之を大にしては國家を誤るものなり。故に議員の入選は最も慎まざるべからず。

大隈重信(國民讀本)

○立憲政治とは、憲法に本づきて、國家を統治する政體なり。立憲帝國の憲法は君主統治の大權を明確にし、臣民の自由と權利とを保障し、また其の義務を規定し、之に參政權を與ふ。故に憲政にありては、民意を重んじ公論を採り、上下共に國事に任ずるものなり。臣民の參政權は議會を通じて行はる。君主は議會の協賛を経たる法律と、政府の責を負へる命令とを以て國家を統べ、臣民は法律に服従して、自由を享有し權利を保全し、以て國民たるの分を盡くす。立憲國の行政は其の責の歸する所に一に國務大臣に在り、累を君主に及ぼすことなし。國務大臣たるもの、若し其の施設宜しきを失ひ、議會に於ける多數の贊同を得ずして輔弼の任を盡す能はざるときは乃ち君主に對して責を引きて辭職し、更に衆望に適へる才幹を擧げられんことを奏請するものとす。而して人民は議會によりて政府を監視しまた法律の良否、行政の善惡を批評するの自由あり、以て輿論の進歩、政治の刷新を促すものなり。されば憲政は專制獨裁と異なり、一二の權臣國政を擅にし、私利を圖るを得ず。隨ひて寡頭政治に見るが如き禍害を生ずるの虞なし。

大隈重信(國民讀本)

五 例話

一 海舟と鑄物師

明治になる前、大名から鐵砲大砲の鑄立てを仰せつけられると、鑄物師は大變に儲かるので大喜びをして、注文主にペコペコして、いろんなものを持つて行つて居た。或る時、勝海舟が幕府の命をうけ大砲の鑄立てを頼んだら、鑄物師がやつて来て、「これは御造酒代で御座います。今あなたから御用を仰付かりまして鐵砲を拵へますに就いて、仕事が無事に終りますやう、お祝ひのためお神酒を差上げるので御座います。外の先生方も、私共に御用を御申付になつた方は、皆貰つて下さいますので、どうか先生もおとり下さい」といつて、金五百兩を差出した。ところが海舟は、決してそれを受取らないで、大層鑄物師を叱りつけ、「お前はさういふものをよこしてはいかぬ。私にそんな金をくれないで、此の金で鐵砲の外の分量を澤山にして重味を増し、そつうしてよい大砲を造つてくれ。勝がつくつた大砲で御座るといつて、頼まれた主人に出した大砲が役に立たないことになると、おれの名が折れるから、どうか、俺の名を落さないやうにしてくれ。こんなものはいらぬ」ときびしく申し付けたものであるから、鑄物師も開口して引込んでしまつたとの事である。

小原國芳著(眞人の生活)

二 寧ろ從道に命せよ

南洲翁はその職に盡すに公平無私、唯國家あるのみであつて、素より自他の異、親疎の別を立てなかつた。兵部大輔大村益次郎が兇手に殞れてしまつた時、その職の重任である爲、閣員等は一時其後任の人選に苦しんでゐた。この時に一人が大山綱良を推さうとした。然るに南洲は斷然之を斥け、自ら前原一誠を推した。果して前原その職に任じてからはよくその任を果たし全うしたのであつた、又曾て、陸軍少

將に缺員があつた。然かもその人選に苦しんでゐた。この時、南洲は「他に適任者なくば家弟從道をそれに任ぜよ、必ずその任を全うするならん」と自ら弟を推した。果して從道は國家のために盡し遂に昇り陞つて海軍大將となつた。

小原國芳著(眞人の生活)

六 備考

一 政治と法律

國家は私達人類が社會生活をして、その職分を完成するのに最も重要な一の組織體であります。それですから、現代の國家に於ては、完全な主權があつて、その國民を政治的統一體として支配してゐます。そして、國家は重要事項を遂行して、その安寧秩序を維持し、その進歩發達を企圖するために種々の行動をしなければなりません。政治と法律とはこの必要から當然生まれたものであります。即ち政治は軍事外交、内政、司法、財政の諸部門に互つて組織のある永續的活動をするものであり、法律は實にその重要事項の遂行、調節に規律を與へるものであります。私達は社會生活をする以上は必ず國家に依屬して生存し發達するものでありますから、政治と法律とは私達の社會生活の一方面として、私達と密接な關係を有してゐます。

社會の發達については既に説明しましたが、國家もまた、社會の一形態として次第に發達したものであります。族長的、貴族的、封建的、都市的、君主的、民主的など各種の國家は歴史的に種々の變遷を示してゐます。現在に於ても、土地の情況、人民の文野、歴史的習慣などによつて、國家の態様に種々の區別があります。

しかし、國家學者や法律學者の説く所に従ふと、國家といふ概念は

二方面から考へて作ることが出来ます。即ち一は國際法上の國家であります。國際法上の國家は、(一)必ず一定の土地をその版圖としてゐること(二)人民をその國民としてゐること(三)その土地に於てその國民を統治するに政治組織を形成してゐること、この三つを必要條件とします。國法上の國家は、社會發達の結果、一定の國土に居住する人民の心に自然に形成されたもので、國家の主權に服し、その統制力に従ふ義務があるといふ自覺の上に立てられた統一體であります。前者は對外的に考へたもので、他の多數の國家と併存し、それからの國家と對立の關係があり、且獨立の權利を有してゐるといふ見方であり、後者は對内的に考へたもので、國民精神の歴史的に發達した結晶である文化の發展を目的とし、主權を中心として結合した強力な組織統一團體であるといふ見方であります。

國家の概念が右に述べたやうでありますと、國家は當然次の事項を最高理想とします。即ち對外的には、相對國家との競争の必要上、武力と財力との豊富を理想とし、對内的には統一の必要上統制力または支配力の強固を理想とし、國民に對して、主權を中心として強固に協同することを望み、秩序の維持を強ひることになります。

以上述べましたやうに、國家の期するところは、國民が一致團結して主權に服従することでありますから國家の政治、法律は常にこの目的から離れることはありません。即ち國家の統一を保持し、安寧を企圖し秩序を維持するために、中央に、内閣があり、地方には自治體があつて、行政機關の職權も遂行され、司法機關の活動も行はれ、私達の日常生活も凡べて政治法律に結びつけられてゐます。租税を納めるのは國家の重要事項の遂行を助ける當然の義務であり、市町村會府縣

會の議員を選挙するのは、國家の行政・司法・立法の諸活動を促進させて、國家の進運に貢獻するための當然の權利であります。また法律の規定に従ふのは自分の權利を錯誤なく行使し、義務を遺憾なく遂行する所以であります。私達は生れるときから死ぬまで、否生れない前から死んで後までも法律によつて取締られ保護されるのであります。

このやうに國家萬般の制度は悉く法規によつて定められ、國家も國民も常にこれによつて行動し、行政機關は濫に國民の財産や身體の自由を侵害することの出來ない行政組織になつてゐる國を法治國といひます。そして、國家が國民に對して命令權を行使するに當つて準據すべき法規を行政法規といひます。憲法は實に行政法規の根本を定めてゐるものでありますから、現代の法治國は多くは憲法國であり、統治の作用も凡べて法規によつて行ふ立憲政治體であります。

法治國に生活する私達は政治・法律がどんなものであり、それが私達とどんな關係を有するかをよく會得するやうに心懸なくてはなりません。我が國にも普通選挙が近く實施され、陪審制度もまた遠からず行はれようとしてゐまして、私達は益々政治法律に關する知識をもたなくてはならない時代になつて來ました。それですから、私達は女子としても法治國民であるのに恥ぢないだけの用意をしなくてはなりません。

二 國民と政事

藤井健治郎著(新時代女子修身書上級用)

昔は「民は由らしむべく、知らしむべからず」といつて、政事は政府の仕事として、國民には之を知らせぬ主義であつたが、今日はその反對に、「民は知らしむべく由らしむべからず」といふ方針になつた。隨

つて我等は國家から政事についていろいろ重大な責任を荷はされるやうになつた。もつとも現代の法律上では、この責任はすべての國民に課せられて、年齢・財産などによつて制限された一定の資格を有するいはゆる公民である男子だけに限られてゐる。しかるに、この資格は時勢の進歩に應じてだんだん擴張され、遠からずいはゆる普通選挙法さへ實行されるやうにならうとしてゐる。さうなると、政事に關する責任は、殆ど一般國民がこれを荷ふやうになる。たとひさうなくてもすべての國民が公民と同じ心掛でゐることは寧ろ國民としての徳義にかなふことである。

しからば、我等は以上の意味の國民として、平生どう心得てゐなければならぬか、我等はまづ第一に國民としても獨立自治する事が出來ねばならぬ。將來は市町村制に於て許されてゐる自治の責任や、憲法によつて與へられてゐる参政の責任を盡す外に從來國家的事業と視られてゐたものでも、國民がこれを引受けねばならぬものが益々多くなる。その上すべて國民の運命は國民が自が開拓して行かねばならぬやうになる。今日の國民はもはやたゞ當局者の指導のまゝに行動するばかりでなく、自ら進んで國家といふ大機關の運用に参加して、その責任を完うする覚悟をしなければならぬ。

次に、公共心に富むことが國民としての心得に缺くことの出來ぬものである。個人として働く時には己のためにするのであるけれども、國民として立つ時には、己のためにするばかりでなく、同時に他とともに他のためにするのであるから、ぜひとも公共心がなければならぬ。随つて國民の責任を盡すに當つて最も妨害をなすものは利己主義や獨善主義などである。

また特に今日の國民に必要なことは、すべてのことを立憲的に考へることである。詳しくいふと、立憲政體の本旨に合ふやうな思想をもつてゐることである。今日では政事は國民の協力によつてなされ随つて何事も輿論を重んずるから、誰でもまづよく衆意の向ふところを察し、且衆とともに利害を分かち、これと盛衰を共にするといふ廣い心がなければならぬ。そしてなほその上に、階級の觀念に囚はれないでよく他人の權利を尊重し、またなるだけ秘密・隱蔽の風を改めて一般に公明正大の氣風を起すやうに努めることが肝要である。

國民としての責任、とりわけ政事に關する責任を盡すには、また特にこれにつきて相當な知識・經驗をもつてゐることが必要である。國家や自治體がどんなものであるかを知り、これに關する各種の法令などもひととほりその要旨を覚え、且つ多少でもその實際の事情に通じてゐなければならぬ。我等が學校で公民の心得として法制經濟などの一斑を學ぶのは、實にこの必要に應ずるためである。

しかし、政事は元來最も高尚でまた極めて複雑なものであるから、僅かばかりこれについての教を受けただけで、直にその真相までわかるのでない。政事をよく理解するには、學問ばかりでなく、世の中の實際の經驗も積まねばならぬ。西洋では學校生活を自治體のやうに組

織し、青年に對して政事上の訓練を施してゐるところも少くない。また青年の議會、官廳裁判所などの見學も普通に行はれてゐる。最も小規模で隨つてまた最も解し易い町村役場の見學は極めて結果が多い。町村役場は各省に分れてゐる中央政府の縮寫のやうなものであるから、これを見ると、ほゞ國家の政事の大體が想像される。且こゝには町村會もあるから、これによつて兼ねて議會がどんなものであるかも知ることが出來る。政事は外部から見ると、各種の黨派が對峙して、たゞ政權争奪ばかりを事としてゐるやうに思はれるけれども、その實は國民の生活と密接な關係をもつ極めて眞面目なものである。そしてこの事情は町村役場のやうな政事を小規模で取扱ふ所でもよく窺はれる。それゆゑ、我等は平生からかやうな方面にも興味をもつて實地に

湯原元一著(實業修身教本卷五)

三 立憲政治

字義からいへば、憲法を制定し、それに準據して行ふ政治を意味する。しかし實際に於ては、憲法を有すると否とは立憲政治か否かを決定する條件をなすものではない。何となれば普通に憲法を有たないといふことは、たゞ成文の憲法を有たないといふ事に過ぎず、しかも成文の憲法ばかりで憲法ではない。苟くも國家が存立する以上、政治の大本をなす基本法、即ち不文の憲法を有たないものはないからである。立憲政治か否かを實際に決定するものは、政治が或一部の專斷に歸しない制度を有つか否かである。總じて今日の立憲政治と呼ばれるものは、先づその制度を祖國イギリスの例に倣つて、所謂三權分立となし

立法・行政・司法の三作用を、それ、分、立、せ、し、め、て、互、ひ、に、相、侵、犯、す、ることなからしめてゐる。加ふるにこれらの三作用を營む機關のうち、少くとも立法機關には、國民をして参加せしめる制度を採つて、所謂國民の自治の實を擧げようとしてゐる。これらの二つの制度の併用によつて、政治は或一部の專斷に歸することから防止されてゐる。謂ふところの立憲政治とは即ちこれである。

四 政黨

政黨の何たるかに就いては、三つの代表的な見解がある。その一は、エドモンド・パークの説で政黨とは或る主義を同じうする者が、その主義に基づく共同の努力によつて、國民的利益を増進せんが爲に結合した團體であるとするもの、その二はこれに反し、政黨とは階級の部分で、其の利害を最もよく表はす頭腦であるといふブハーリンの見解、その三はマキイヴァアのそれ、政黨とはある主義又は政策を支持せがんで組織された結社で、立憲的手段によつて、政治の決定力を握らうと努力するものとなすものである。併し現代デモクラシーの政治に於ては、政黨とは一部少數者の集團が一定の主義政策及理論の下に比較的多數者の支持を得て、一社會の政治決定權を把握若くは左右しようとするもので、従つてそれは政權を中心として互に闘争し、

(社會科學辭典)

五 議會政治

議會殊に第一院我が國では衆議院に於ける多數黨の領袖若しくはその多數黨の支持を受けつゝある者が、政府を組織して議會に對し責任を負うて政治を行ひ従つて政治が議會に於ける多數派の意志によつて完全に動かされる。かゝる機構の政治を指して議會政治といふ。此の議會政治は議會に於て多數を占むる政黨の領袖の組織する政府によつて行はるゝものであるから、また一名政黨政治と呼ばれてゐる。これに對して議會に何等の支持を有することなく、専ら君主の信任によつてのみ政府を組織し、議會に責任を負ふことなく、大權を笠に政治

(社會科學辭典)

を行ふ政治機構を指して大權政治又は大權内閣政治と言ひ、かゝる政府を指して超然内閣と呼ぶ。然し今日の立憲政治に於ては大權政治は既に廢れて議會政治若くは政黨政治が其理想的形態と見られてゐる。我が國に於ても、曾て第一次山縣内閣の如き大權内閣政治の典型であり又寺内内閣の如き自ら超然内閣たることを公言したのが例であつたが第一、二次大隈内閣、原内閣等に於て政黨政治の具現を見、今日に於ては全く議會政治、政黨政治の時代となつた。(社會科學辭典)

第十四課 女子と文化 (女子修身書)

一 要領

男女兩性の特質に立脚して社會文化(殊に女性文化)の創造に於ける女子独自の使命を會得自覺せしめるのが本課の要領である。

二 注意

- (一)女子は家庭生活を以て其の本領とし、良妻賢母たることを以て其の天職とする。
(二)女子は一家の主婦たることによつて家庭文化を創造する。家庭文化には物質、精神の兩方面がある。
(三)女子は家庭生活を營むと共に、一方に社會生活を營んでゐる。
(四)社會生活に於て女子は独自の女性文化を創造してゐる。

三 設問

一 女子が一生獨身生活を營むことは自然の途と言へますか。

四 訓言

家庭文化

- 一 女子の創造する家庭文化とはどんなものですか。
一 女子は社會生活に對して如何なる任務を有つてゐますか。
一 女子の創造する独自の社會文化(女性文化)とはどんなものですか。
○其の國を治めんと欲する者は先づ其の家を齊ふ。 大學
○家は人の城郭である。 英 語
○家は中に住む爲にして、外より見る爲には造られず。 ベーコン
○平和の場所、凡ての侵害、恐怖、疑惑、差別の入り來らざる隱家にし、始めて眞の家庭といふことを得べし。 ラスキン
○技術及び知識上の教育は之を公共の學校に委託するも、道德教育のみは元來家族に於て之を施さるべからず。 パウルセン
○家の美風その簡樸は様々なる中にも、最も大切なるは家族團圓相互に隱すことなきの一事なり。 福澤諭吉(新女大學)
○家を營むの女惟れ儉惟れ勤。勤むれば則ち家起り、懶なれば則ち家傾き、儉なれば則ち家富み、奢なれば則ち家貧し。 宋若照(女論語)
○婦人が此の世に在りて爲すべき事務は息女、姉妹、妻、母の義務中に悉く包含せり。 スチール
○家の亂れは女から。 邦 語
○汝の家と快き妻。 羅 倫 語
○我が家の笑は眞に秀美なり。互に和合するは眞に愉快なり。
○快樂の世界は要するに妻に存す。 リーバー
ノールス

○各旅人は各々己が家庭を有す。而して其の放浪によつて家庭の有難きを學ぶこと愈々切なり。

○大功を天下に建つる者は先づ閨門の内を修む。

○家庭から遠ざかる程災に近づく。

○我が家に休息せざる人は世上の地獄に在り。

○夕暮の家庭は樂園なり。

○家庭は人生の彩りなり。

○家内和合の張符には貧乏神がよりつけぬ。

○太陽は健全なる家庭の上に輝かし。

○家に女房の無きは梁の無きと同じ。

○獨身たる通常の原因は自由にある。

○獨身者は床なき家の如し。

○家貧しくして良妻を思ふ。

○謹慎なる人は節儉なる妻を選ぶ。

○賢婦は家道を昌ならしめ、愚婦は自ら其の家名を辱かしむ。

○破産は臺所の隅より至る。

○母のみ愛と幸福との何物なるかを知る。

○母の愛は最善の愛。神の愛は最高の愛。

○人は其の母の造り爲せるがまゝなり。

○その母によりてその娘を養へよ。

○圓滿完備の婦人は氣高き用意をもて諫め、慰め、命令す。

○有徳なる婦人の助言を輕んずる勿れ。

○婦人は昔々男子の配偶者たるのみならず、亦精神上の伴侶とならねばならぬ。

○女子その良人の心魂となる。これを妻と云ふ。

○よき家政の爲に心を致し、夫のよき仕事を助長することは婦人の最も大なる美點なり。

○貞操なる細君は良人をして純潔秀美なる愉快を感じしむ。彼女の容貌は最も美麗なる花園の如く、彼女の精神は最も有益なる書籍の如し。

○如何なる裝飾も優しい婦人の顔のやうに室内を美ならしめる物はない。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

新語

和蘭俚諺

土耳其俚諺

ゲーテ

邦諺

邦諺

邦諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

獨諺

ヒトバテザ

ラ、フォンテーヌ

カウレー

ミルトン

ゲーテ

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

邦諺

○婦人の最も肝要な性質は温和である。

○柔しい返事は怒の特效薬である。

○優しい言葉、静かなる言葉は結局最も強き言葉なり。

○しとやかな温容は美の冠なり。

○優しい言葉は邪慳な心に打勝つ。

○柔能く剛を制す。

○柔は剛に勝ち、弱は強に勝つ。

○柔は能く剛を制す。

○婦人の裝飾は其の禮讓にあり。

○謙遜の缺如は何物にても補ひ難く、是れなくば美も優雅ならず、才氣も嫌味を有つ。

○婦人は善ならんと求めよ。大ならんと求むる勿れ。婦人の美德は謙遜にあり。

○人は凡ての人に善を爲し能はざるも、凡ての人に温情を注ぎ得べし。

○困苦の中にある者を見れば彼も人の子なりと常に想へ。

○人間精神に同情なくんば更に高き精神に對する同情も亦あり能はず。

○憐むは愛するに類似す。

○他人を災難より救ふものは親切なり。

佛諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

英諺

○男子は意志にして、女子は情操なり。

○男子の使命は廣くして多様なり。女子の使命は一律にして稍狭く而して更に深し。

○辯舌は婦女て行爲は男子。

○女子の魔力は其の舌にあり。

○綺麗、裝飾、著物、此等は女の特徴なり。此等の中にありて彼女等は喜び樂しむ。

○婦人は敬虔ならんよりも、優雅ならんことを欲す。

○婦人に於ける優雅は美よりも更に有力なり。

○如何なる家具も優しき婦人の如く室内を美ならしむるものなし。

○世界に於て最も美麗なるものは窈窕たる美人これなり。

○女子をして神聖ならしむるものは其の禮容なり。

○優雅は人道の華なり。

○我に取りては如何なる技巧の華美よりも、天真爛漫の愛嬌こそ嬉しけれ。

○愛嬌は醜惡を打破するどころか物質その物を打壞す。これのほんの一角は室内に於ても、街路に於ても、また戸を敲く人にすらも一種の精神的威力である。

○柔和は總て我等の態度の無禮なる點を正す。

○柔和は殘酷の解毒劑なり。

○柔和は暴力以上の事を爲す。

柔和は柔弱にあらず。

柔和は暴力以上の事を爲す。

柔和は殘酷の解毒劑なり。

柔和は總て我等の態度の無禮なる點を正す。

柔和は暴力以上の事を爲す。

柔和は柔弱にあらず。

柔和は暴力以上の事を爲す。

柔和は殘酷の解毒劑なり。

柔和は總て我等の態度の無禮なる點を正す。

柔和は暴力以上の事を爲す。

柔和は柔弱にあらず。

柔和は暴力以上の事を爲す。

柔和は殘酷の解毒劑なり。

柔和は總て我等の態度の無禮なる點を正す。

柔和は暴力以上の事を爲す。

柔和は柔弱にあらず。

社會文化・女性文化

○男子は法律を作り、女子は風俗を作る。

○男子は自由の爲に奮闘し女子は良習の爲に努力す。

○女子は不幸者の天使といはる。能く弱者を助け、失敗者を勵まし、苦しめる者を慰むるを以てなり。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○己が爐邊と良妻とは黄金と眞珠の價値あり。

○己れの良人や子等を幸福ならしめ、一を不品行より救ひ、他を有徳に育て上ぐる婦人は小説中に描かれたる貴女才媛よりも偉大なる性格なり。蓋し其等の貴婦人の仕事は各自の箭筒より即ち各自の眼より出づる征矢にて人間を殺すにあればなり。

○婦人の純愛によりて淨められ、其の勇氣によりて勵まされ、其の智慧によつて導かれざりし男子は未だ嘗て眞の正しき生活を送りしことなし。

○愛は最善なる者を更に善くす。この下界に於て然り。まして天上に於てをや。

○愛は常に惠與なり。自我の犠牲なり。 ワイツワース

○愛は心霊を全人類と結合せしむる不可測なる實在の異名である。 キヤノン・リツドン

○愛は最大の矛盾を融和し、天地を統合する道を知る。 シムズ

○愛の光なき人生は無價なり。 ゲーテ

○太陽は悪人の上をも照らす。 シルレル

○汝の隣人を愛せよ。されど垣根を打壊す勿れ。 セネカ

○慈なるが故によく勇なり。 老子

○慈愛は女子にふさひ、復讐は男子にふさふ。 ボーデンステット

○汝の敵を愛し、汝を呪ふ者を祝し、汝を憎む者に善を施し、而して汝を冷遇し、汝を迫害する者の爲に祈れ。 基督(聖書)

○神々は常に人間の手段に依つて救済す。 ゲーテ

○地上最も貴きものは完成せられたる婦人なり。 ロオエル

○快活なる人へのみ生命の樹は花吹き、無邪氣な人には年老いてまでも青春の泉湧き續く。 アルント

○嬉々哈々たる快活は人生のあらゆる道に日の光を投ず。 悲歎は眩曇よりも甚しく混亂錯覺せしむ。

○快活なる精神に悪なし。 ジャン・ポール

○絶間なき快活の坦流は力を與ふれど、大なる激動は吾人を恐るべき速度に押し流して破滅せしむ。 ノフアリス

○女子の魔力は其の舌にあり。 ワイド、ピーチャー

○美人の抗辯は總ての雄辯家をして沈黙せしむ。 英 誌

○美人の抗辯は總ての雄辯家をして沈黙せしむ。 シエークスピア

争、正義は終に勝を制して、黒人も白人と同等の公民とはなりぬ。此戦争を促したるものには、詩人ロング・フエロの奴隷の詩の如き與がつて力多きに居りしも、文學上のものとしては誰か先づ指を涙の小説アンクル・トム・ス・ケビンに屈せざらんや本章説く所の女傑は此小説の作者ハリエツト・ピーチャー・ストウなり。

生誕 ハリエツトは一八一一年六月十四日を以てコーネチカツト州リチフィールドに生れぬ、生れし時、兄弟は已に六人あり、而も最長子は僅に十一歳狭き家の内はいと賑かなりけり。

父と母 父ライマン・アボツトは有名なる神學者又説教家、智あり情ある人物にして、此時已に五百弗の年俸にてリチフィールド及び、近村の傳道に従事したり。母ロキザナも心は強い情も厚く、當時にありては比較的高尙の教育を受け、其家庭生活は一個の模範として好評噴々たりき。

手製の敷物 少女ロキザナ婚禮を了して新郎の家に來り見れば、いづれの室も床はきたなき板のみにて、敷物としては敷きあらず、新婦は即ち客間に木綿のきれを張り、自から油繪具もて模様を描きたれば、薔薇の花模様などいと美しくかりき。折しも教會の執事の一人來り訪へば、新郎は「サア御はいり下さい」と挨拶しぬ、執事は「ヤア此上は踐めませぬな」と語りつゝ、尙舌を巻いて嘆賞しつゝ「あなたこんな結構なことの上に、又天國も持ちなさるの」と叫びたり。

内職と教育 家族は増して収入は多からず、ロキザナ即ち夫に勤めて學校を開かせ、自から諸種の學術を教ふるのみならず、佛語や圖畫や刺繍をも授け、聊か家計を助けしかど、尙も寸暇を偷んでは、子供の教育を怠らず、後に説教家として雷名を輝かしたるヘンリー・ワイド

が、尙幼くて其首筋に縫りつき遊び戯れるを操りながら小さきハリエツトの爲めには人形を作り、又スコツトやアイダ・イングなどを子供等に讀み聞かせたり、されど教師は母の外にもあり、リチフィールドの優美な天然これなり、林檎や苺、葦や白頭翁、春は花を摘み秋は實を拾ひ、牧場に遊び森をあさり、幾多の教訓を天然より學びたり。

好逸話 茲にハリエツトの活動の精神と母の温順の性質を併寫する好逸話あり、彼女の言を假りて之を寫さんに。

「母は熱心な園藝家として、貧しき家計の許す限り、少し許り培養して之を樂まれたが、ニューヨーク在の其兄弟ジョンから、よき鬱金香の株を一袋送り越したことがあつた、今尙眼に見る心地するが、母の留守中、室の隅から之を探し、出しこれは噴べておしいものぞと信じたので、私が主唱者となり、これは葱に相違ない、嗚おしいでせうよと、兄弟たちを説きつけた、一同早速料理に取掛り、悉く食べて了つたが、妹が妙なものには聊か失望し、之は思つた程上等ではないと考へて居ると、母の姿が室の戸の所に現はれた、一同駆けつけて異口同音に葱の發見と處分の顛末を語ると、母は少しも怒を帯ぶる模様もなく、席に就いて徐に口を開き「コレは大變残念な事をおしてしたね。あれは葱の球ではなく、奇麗な花の咲く根ですのよ。お前等が見た事のないやうな赤や黄や大きい美しい花が花園に咲くのでしたよ。」そこで一同は頭を垂れて大に失望し空の袋を見て残念がつたことは、今にも忘れられせん。」

一家暗黒 ハリエツトが五歳の時、暗き窓の霧は此幸なる家庭を蔽ひたり。今しも母が危篤として十六を頭に八人の子供はその枕邊を擁せり。一同たゞ泣き咽ぶのみ。母はいと神々しき面色にて「神様はお母

○婦人同志の交際は速かに親密を増す。 ビーコンスフィールド侯

○人間萬事婦人に由る。 同上

○婦人は愛造物中の最も美なるものなり。 最も後に造られ且つ最も善く造られたるものなり。

○山海の珍味ありと雖も、婦人なくんば如何せんや。 ホワートン

○美人は我等を一本の毛にて引き寄せる。 ボーブ

○熱帯の太陽の下にも、兩極の寒冷の地にも婦人あれば、亦必ず幸福あり。 ムーア

五 例話

一名婦ハリエツト・ピーチャー・ストウ (仁愛の小説家)

黒奴賣買 此處は亞弗利加の西北海岸、椰子の樹蔭に無邪氣に遊び戯むる幾群の黒人、忽ち白人の黒船が押寄せて、逃ぐる黒人を引捕へ、年若くして骨送しきを選びつゝ幾人となぐ之を縛りて無理無體に船内に積み込めり、嗚呼憐れ彼等の内には新婦をもてる夫もあらむ、愛子をもぐる父もあらむ、やがて船は大西洋を横斷して米國の東岸に着すれば、牛馬を屠所に驅る如く、鞭を加へて驅り行かるゝ先は、眼はしき市場、ズラリと前に並べられ「サア買ひなされ、若いのがお廉いですよ」「こいつは屈強な上等のもの、三弗で手を叩きます」と、頓て賣買の約が済めば、日夜烈しくこき使はれ、一生涯又浮ぶ瀬なく、老いて弱れば逐出して、生死はわれ關せず焉。

黑白同等 白も人なれば、黒も人なり、人道上棄て置き難しとて、甲論乙駁の結果は、かの一八六一年より四年間に亘れる有名なる南北戦

さんのする以上のことをして下されるよ。神様を信ぜねばなりません」と語りつ、尙六人の男の子の悉く福音の宣傳者たらんことを希望したり。父は斷腸の思ひにて「お前は今シオンの山、活ける神の市。天のエルサレム、天の使の群れ居る所、總てのものをさばき給ふ神と義人の靈と、新約の仲介者なるイエスの許に來て居るぞの句を繰り返せしに、母は美はしき微笑を以て夫の顔を仰ぎ、限りなく其眼を閉ぢたり、嗚呼此微笑はこれライマン・ビーチャが臨終の夕まで忘る能はざりしものなりしなり。

闇の涙 燈光忽ち消えて一家は眞に闇黒なり。後日名をなせるハリソン・ワードは年僅に三歳母の地下に葬むられしこと、其天に行きしことを聞き、一日紅葉のやうなる手に鋏を握り、全心全力を籠めて窓の下を掘りかへしたり。何をすると問へば「天にまていてお母様を見つづけるのですよ。」

良人の悲嘆 健全なる忠告と善良なる判斷とを併せ失うて、良人ビーチャの悲嘆は又一方ならず。唯見る、獨坐沈黙全心全靈を傾倒して、頻りに長文の書翰を認むるを。「たれへと問へば妻へと答へわが守護の天の使なる妻は死すとも見てくれるかも知れませんよ。」一年後彼が一友に寄せたる書中に左の言あり。

「損亡の感は何物も除かず寂寞の情は慰むる所なく候。子供等の微笑と、啼々と同情の女の親切の中にも、尙余は無聊を感じ候。嗚呼ロキザナは茲に居らず候。彼女は又わが喜びを一も分たず、わが悲みを慰めず候。余は眩きは致さず候。唯日々絶えず益、深く、持ちしもの、謝すべきこと、失へるもの、大なりしことを感じ候のみ……彼女死後の全一年間は、大々無力の年に候て、世界の何物も余を動かさし申

さず候「余常に熱心に神に向ひ余を取り去り給へ、然らざれば昔の如き元氣に復さしめ給へ」と祈り申し候。

ビーチャ一日彼女の亡せし室に眠りしに、ロキザナ來りて其傍に立ち、天よりの微笑を以て之に對したり。「此微笑と共に私のあらゆる悲みは消去り覺めての後はいと喜ばしく其後數週間は快活であつた」とはビーチャの自白なり。

後妻と娘 母の死後ハリエツトは暫く伯母と祖母の許に預けられしが間もなく寂しき家に歸り來れり。父は終に後妻を迎ふるの己むなきを感じて之を實行せしが、新夫人又賢明なる女子にして、一家の敬と愛とを、買ひぬ。初めの程はハリエツトも「あなたは來てお父さまと御結婚になつたから、私も大きくなつたら、往つてあなたの御父様と結婚しますよ。」と語りて和らざりしが、其後二人の間は全く同化したり。讀書と嗜好 ハリエツト生れて強記、七歳の時讚美歌二十七篇と聖歌の長さ二章を暗誦したり。讀書の嗜好盛なりしも、貧しき教役者の文庫には、子供の注意を引くに足るものなく、亂推せる小冊子の間を幾時間も探索して僅に得しは離れく／＼のドン・キホーテ(西班牙の有名な小説)のみ。「かゝる斷片を翻せば恰も泥の海より神仙の鳥の現はるゝ心地せり。」終にスコットの小説アイヴアンホも手に入り、ハリエツトはジョージと共に七回も之を通讀したり。

作文の嗜好 十二歳の時、有名な教師ジョン・アレイハスの學校に入りしが、ハリエツトは此處にて大に作文の嗜好を養ひたり。同校の慣例として、年の暮には父兄を招待して、生徒自作の文章を讀み聞かせしが、其中に「靈魂の不滅は自然の光に由つて論證し得るや」の一文あり。其讀み上げらるゝや、列席のビーチャは感嘆の容子にて之を聽

きたりしが、アレイハスに向ひ、其何人の作なるやを尋ねしに、あなたのお娘ののですよ」の答を得て、父の顔は非常の喜びを表はし、之を見たるハリエツトの喜びは又一入なりき。

絶望の淵 ハリエツトが唯一の妹のカザリンは仲々伶俐なりしが、兼て婚約中のエール大學のフイツシャー教授が歐洲より歸朝するを待ち結婚式を擧ぐる筈なりしに、嗚呼何等の不幸ぞや、其乗込めるアルピオン號は暗礁に乗上げ、一人の外悉く海底の藻屑となり、教授の消息も亦永しへに終りを告げたり。爾來數ヶ月間カザリンは殆ど絶望の淵に沈み更に生氣はなかりしが、終に精神を振起し其好める數學の研究とラテン語の勉強を始めた。時に年二十三。

女學院 次にかザリンは斷然決意、兄エドワードの教鞭を執れるコト、ネチカツト州のハイトホルドに趣き、數千金を費してハイトホルド女學院を建設したり。大學の門戸は男子にのみ開放せられて女子に閉鎖せらるゝは奇なりとは彼女の意見なりき。世は尙女子がラテン語や倫理學を學ぶべき必要を認めざりしかど、カザリンの優美にして高尚なる人格は、多くの女生を引寄せ、學院は間もなく満員を告げぬ。救の舟 されば十二歳のハリエツトも、チファイルドより來りて、カザリンの學院に入校せしが、間もなく教授をも助け、父の負擔を輕からしめぬ。されどビーチャの一家の口數は益々増加し、八百弗の年俸にては非常に苦しかりき。ヘンリーとチャールスの大學在校中の事なりしが、一日家計窮迫を告げ、新夫人は泣きの涙にて寢床に入りしを父は之を慰めて「神様はいつも私を保護して下されたから屹度こん度も棄てはなさないだらう」と語りつゝ眠に就きしが、不思議や翌朝百弗封入の無名の一封は着したり。これ子供の改心を喜び其謝意を表

はす爲めに送り來りしものなりき。

破衣の譽 一日新夫人は兼て節約の結果として貯へ得たりし二十五弗を出し、夫に上衣新調の事を勧めしに、夫も之を諾し、洋服店を志して出て行きたりしが途中に宣教師會議あるを見て闕らず之に出席せしが、漸くして心は熱し來り、終に寄附箱の廻り來りし時、我懐の二十五金を布哇傳道の爲めに義捐し去り、破衣の儘にて家に歸りし事あり。

父の盛名 三年後父ビーチャが説教家、又信仰復興家としての名聲漸く全國に響き渡り、ボストン市より招聘を受け、六年間此處に留りしが彼が前後六回の禁酒演説は大に全國を撼動したり。

結婚 ビーチャ、ボストンを愛せざるにあらざれど、心は尙西部にあり西部青年の救済にあり。さればオハイオ州シンシナチのハイン神學校より校長にと招聘せられし時には、直に之を欣諾したり。父は娘等と離るゝを好まずして、カザリンもハリエツトも同行の事となりしが、當時山路の險難なるは非常なりき。シンシナチにては郊外の栗ヶ岡に住ひしが、此處に二人の娘は、一個の學校を開きたり。四年後二十五歳のハリエツトは、レイン神學校の聖書批評と東洋文學の教授なるカルヴァイン・イー・ストウと結婚せしが、新郎は學あり力ある好人物なりき。

奴隸問題 已にして奴隸問題は基督信徒の心を刺撃したり。シンシナチはケンタッキー州に近かりければ、自づと甲乙論駁、頗る激烈を極めたり。奴隸は頻りに此州に逃れ來り、所謂「地下鐵道」にて英領カナダに運ばれぬ。「地下鐵道」とは十哩毎に黒人の保護所を設け、晝間は隠して夜間荷車にて次のステーションに運送するをいひしなり。レ

ン神學校も、黒奴の解放論盛にして、南部より來れる學生すら或は黒奴を解雇し、或は黒人の兒童の爲めに小學校を設け、爲めに父兄より勘當せられたる者も少なからず。ドクトル・ペーリーの如き、其發行に係る新聞紙に於て頻りに自由論を鼓吹せしかば、二度まで印刷機械を破壊され、河中に投入せられたり。かくて神學校も危険の境に陥リストウ一家も毎夜火器を抱いて眠りし程なるが終に神學校の理事は奴隸問題の議論を嚴禁せしかば、爲めに此校を退きし青年も少なからざりき。

黒人の教育 是より先、ピーチャーは神學校の基金募集の爲め、東部諸州を巡廻せしが、歸りて學校の痛く荒廢せるを見、大に失望せしかど、尙數年間は此處に留りたり。此間ストウ夫人ハリエットは、黒人の兒童の爲めに己が家に學校を開き、自ら之を教へしが、或時其一男兒のケンタツキにて捕へられ競賣に附せられたる事あり、ストウ夫人即ち知友間に之に要する費用を募り、終に之を贖ひ返したり。

移轉と内職 一八五〇年、終に堪忍袋の緒は斷れて、ピーチャー一家はストウ一家と共に北部メーン州に移り、ストウはプランスウイツクのボードウイレ大學の教授となりぬ、收入乏しかりければ、家に數名の學生を置いて、幾分の家計を助け、ストウ夫人も亦時々短文を新聞に投じて原稿料を得しが、或時物語の懸賞に應じて五十弗を得し事もありき。其六人の兄弟は、亡母の遺言を無にせずして、皆悉く福音の宣傳に従事せしが、ストウ夫人も己に四十路の坂に達し、一兒を抱へ、學校に教へて劇忙、亦寸暇なかりき。

涙の物語 されどストウ夫人の心の底には野心尙勃々たり。當時脱走奴隸條例發布せられて、數多の黒奴は殘酷なる取扱を受けしが北部

の人民は之に對して極めて冷淡なりき。夫人は以爲らく、一枝の筆を以て彼等が心を動かす術もがなと、或日曜に、小さきフランスウイツク教會の晩餐禮に列せしとき、かのアンクル・トムの趣向ふと心に浮び、情感湧くが如くに熱し來りしかば、急ぎ家に歸りてその死の章をものしぬ、書き終りて之を十歳と十二歳の二人の子息に讀み聞かすれば、いづれも啜り泣きして止まず、嗚呼お母さま、奴隸といふものは、世界第一の氣の毒なものですな」と語りたり。

小説の終結 尙二三章綴り終りし時、之を當時ワシントン市在のドクトル・ペーリーに送り、其刊行せるナショナルイラ新聞に掲載せんことを求めて、承諾を得たり。毎週一回、一篇を綴るの必要あり、即ちボストンに赴き、非奴隸會にて數冊の圖書を借り、材料の豊富を計りつゝ、燃ゆるが如き滿腔の感想を筆端に迸り出しぬ。稍々終りに近づきし時、ボストンのゼウエツトは其妻の勧めに従ひ、アンクル・トムの出版を掛合ひ來りてなほ今よりも長からんには、失敗に終るべきことを注意せしかど、ストウ夫人は書くべきだけの事は書くべき旨を申し送りたり。

傑作の刊行 一八五二年三月二十日夫人が四十一歳の春、アンクル・トム・ケビンに世に出でぬ。題目は面白からず、誰か之を讀むべきやと、一時は疑の雲に包まれしかど、成るべく之が弘布を計らんと、先づ第一に一部を英國の皇婿アルベルトに獻じたり。これ皇婿も女皇ヴィクトリヤも、此種の問題に興味を有せらるゝを知りたればなり。又マコーレー、ヂッケンズ、キングスリー等にも一部宛を送りたり。かくて結果如何にと夫人はメーンの閑窓に片唾を呑んで待ちつゝありき。

大々成功 成功も成功も大々成功よ、十日の間に、一萬部は賣れ盡し、八個の印刷機械は日夜運轉して、需要に逐はれ六ヶ月間に三十の異なる印刷はロンドンに行はれ、六個の劇場は同時に之を演じ、未だ一年ならずして、三十萬部は賣れ行きたり。

稱讚の聲 已にして此新著作に對する稱讚の聲は世界の所々方々より飛び來りぬ。ヂッケンズは曰く「想あり情あり、圖書の内にも價値ある者」キングスリーは曰く「完全なり」慈善を以て有名なるシャフツベリー侯は曰く「基督教を信する者にあらずしては、貴著の如きを著す能はず、實に全世界を驚倒したり……余は此奴隸制度の已に終りに近づきしを信す。恰も主は其道を備へん爲めに前驅として此著を出さしめたるが如し」又侯爵は「英國の婦人より米國婦人へ」と題する一文を章し、五十六萬二千四百四十八名の署名を得て之を大判の二十六卷に纏め表紙には米國の鷲を描き、櫻の箱に入れて、之をストウ夫人に寄贈したり。

喜びと感謝 嗚呼此驚くべき成功を見て、父ライマン・ピーチャーは如何に其胸を躍らせしよ、母ロキザナ・ピーチャーは天國より之を見下ろし、如何にその忘れ難き微笑を洩らせしよ。而してハリエット・ピーチャー・ストウも亦想ひ設けざる成功に對して、如何に神に感謝せしよ。かくて幾千弗は其實行きより入り來り、又昔日の如く貧苦に悩まざりしが、こは久しく喘ぎに喘ぎ苦しみに苦しみし女子に取り如何ばかりの慰藉なりしぞや。

一萬金 翌一八五三年には、教授ストウと今や名聲赫々たる其妻は歐洲を歴遊して休養を計りたり。英のリヴァプールに、蘇のグラスゴウに、同じくエデンバラに、其他到る處に豫想外の歓迎を受け、人々

は其馬車を引留めて花をこれに投げ入れ、子供は「あれがそれよ」と駆け集まれり。英國にては委員を設け、ストウ夫人の爲めに一人より一ペンス(日本の約四錢)の寄附を集むる計畫をなせしに、殆ど一萬金の巨額に終り集まりたり。始め委員の或貧しき小舎を巡廻りし時、唯盲目の婦人一人あるを見れば「お前は此小説を讀むことが出來まいから寄附の志はなからうね」と語りしに、其婦人は「私は讀めませぬが、子息が讀んで聴かせました。一ペンスは寄附の積りて貯へて居ります」と答へたり。

紀念の腕環 美人の名あるサザランド女公は、其家にストウ夫人を招じ、パーマー・ストン卿、アーガイル伯、マコーレー、グラッドストーン等時の名士を之に引合はせたり。女公は又奴隸の手錠の形したる金の腕環を送りしが、「將に斷たれんとする鎖の紀念」と彫られ、環の一には英國に於ける同奴隸廢止の日附一八〇七年三月二十五日、及び英國屬領に於ける同廢止の日附一八三四年八月一日などが刻せられたり。嗚呼アンクル・トム・ケビン、ヒゲンの發行後僅に十數年にして、合衆國內又奴隸賣買の片影を認めざるに至りしは豈それ驚くべきの至りにあらずや。

漫遊の土産 ストウ夫人の歐洲より歸り來るや、「外つ國の面影」といふ一書を公けにせしが、これ又大に賣れたり。已にして其夫人のアンクル・トム・ケビンが神學校の聖書文學教授となりしや伴はれてマサチューセツ州のアンドヴァーに居を移し、其學生に良感化を興へたり。

筆の力 夫人は又「グレット」といふ奴隸廢止の物語や、「牧師の戀」といふ小説や數多の著書を公けにせしかど、その賣行きはアンクル・トム・ケビンに及ぶべくもあざりき。アンクル・トム・ケビンの賣

高は大英國に於て、百五十萬部に上り、米國のそれは又之に勝るも劣らず。佛語譯は十二種、獨語は六種、その他露語、匈牙利語、希臘語、アルメニア語、フィンランド語、等無慮十九種の國語に翻譯せられたり。英領印度のベンガルに於ても、亦此書の人望一方ならず。暹羅の宮廷の一貴女は、此書を読んで大に感じ「私もハリエツト・ペーチャー・ストウのやうに、いゝ人となつて人身の賣買をしたくない」と叫びつゝ、直に雇用の奴隷百三十人を解放せり。又佛國に於てはアンクル・トムが愛讀したりしものとて、聖書の賣口忽ち激増したりといふ。

黒奴教會 奴隷戦争の終結後、ストウ夫人は合衆國東南の半島州フロリダの蜜柑園の間に邸宅を購ひ、毎年家族を伴ひ此處に冬を過ごしたり。夫人が奴隷を助けしや、常に筆端のみにあらず、之が爲めに教會を建て、其良人に説教を願ひしが如く、種々の方法を以て奴隷の爲めに盡したり。

戀しの天國 今は、はやビーチャー一家の者も多くは逝きぬ。父ライマンは八十三、姉カザリスは七十八にて、それ／＼他界し、己が子供も亦天國に入りしものあり。夫人曰く「ヨルダン河のこなたの岸邊には、尙樂みはあれど、私は向ふの岸を戀しく思ふ」と。園遊會 夫人が第七十一回の誕辰に、ハフトン・ミフリン出版會社は、夫人の爲めにマサチューセツ州ニュートルの知事クラフリンの邸宅に於て、一大園遊會を催ふしたり。詩人も美術家も社會改良家も皆集り、新作の詩は朗吟せられ、演説は高調せられぬ。一大幕屋の壇上に坐せる夫人の姿を伺へば、かの蒼色の髪は全く白髪と化し、娘時代の麗らかなる眼は一入深きを加へぬ。而も其風采の眞にして飾らざる態度の懇慫にして親切なるはありし昔に變らざりき。

貴女等が自己の貯財を捨て、リンネルを買ひ、喜て自ら裁縫せしものなれば、品毎に製主の名を記したり。其数は二千二百の多きに居れりとぞ。その後マボイと云ふもの書をフランクリンに寄せて曰く。倘し歐洲に住みて家計及び國家に對するの義務を竭さんと欲するもの、その師表を要めば、予は、ペーチャー夫人を以て之に充んともへり。夫人は先年數月の間に、ペンシルバニヤの諸貴女を従適し、之をして愛國の心を起さしむるに従事、其能辯を以て遂に財と勞とを厭はず、多くの膚衫を製して米國軍人の過半に給する如き偉功を遂げたり。此の如き非常の目的を達するが爲に忍耐勇敢なりしはクエカー宗徒（耶蘇教の宗派の名）も、尙之には及ばざるべしといへり。ペーチャー夫人の艱苦に耐へて、許多の仁惠を施し、又好く時機に投じて目的を誤らざりしは、實に稀有の行にて、永く米國婦人の模範となれり。一千八百八年齡六十四にて身まかれり。 (婦女鑑)

三 曹世齊の妻大家 (女誠の著者)

漢の扶風といふところの曹世齊が妻は、同郡の班彪が女なり。名を昭とよべり。さへありて學の道に博かりき。不幸にして世齊はやく身まかりしも、貞節の聞えありて、その行いと正し。昭が兄の固といへるもの、漢書を著し、其八表及び天文志は稿を脱せずして死せりしかば、昭、和帝の詔を奉け兄の志を踵ぎてことごとく成功せり。かばかり學文の道に長けたれば、數、後宮にめしられて、皇后その他諸嬪の侍讀たらしめ、號して大家といへり。永初年中に、太后の兄の大將軍鄧騭といへるが、母の喪にあひて、上書して仕へを致さんことを乞ひしに、この事いかゞすべきと、昭に下問ありしかば、之をしも

安き臨終 一八九六年七月一日の正午に、此絶代の閨秀文學家は、八十五歳の高齡を以て、コーネチカットのハートフォードに於て、麻痺病の爲めに逝きたり。其臨終は其子牧師チャールズ・エドワードと其娘エリザとハリエツトとに擁せられて眠るが如くいと安らかなりき。蓋し夫人は一八八六年に其良人亡ひしより、心も體も次第に弱りて終にこの結果を見るに至りしなり。七月三日アンドヴァ神學校の墓地の良人と其子ヘンリーの墳墓の間に葬むられたり。此ヘンリーは一八五七年七月ダートモス大學在學中コーネチカット河に溺死せし者なりとす。 (近世名婦傳)

二 フランクリンの女ペーチェエ夫人

サラ・ペーチェエは米國フィラデルフィアの商人リチャード・ペーチェエの妻にして、ペンジャミン・フランクリンの女なり。父のフランクリンは獨立戦争の時、國の爲めに大勳を立てし人なりければ、其女も常に之を見聞して、自ら愛國の義務に當るに慣れけり。一千七百八十年の冬は寒氣殊に酷しかりければ、爲に兵士の戎衣を製する事に力を竭しけり。此時シヤステル侯親らペーチェエを訪ひて、其の訪問の事どもを委曲かに記ししものあり。曰く、ペーチェエ夫人は、實にフランクリンの女たるに恥ぢず。予かつて夫人に見えてその德行を知らんとおもへりし望むなからず。果して態様は簡易にて虚飾なく、よくその父に似て慈善のこゝろいと深し。夫人、予を誘ひて一室に至るに、此室はフィラデルフィアの諸貴女等が、新たに調製せし物品を陳列するの所なれば、定めて刺繍錦綺等の華美を盡せるものならん、とおもひのほかに、みなペンシルバニヤの兵士の着るべき膚衫にて、これみな諸

許されざるは、盛徳に虧くるよしを詳論したる疎を上りしに、遂にこふが如く許されぬ。昭また女誠七篇を作りて、女子の教としけり。年七十をこえて身まかりしときは、皇太后素服して哀を擧ぐるの禮をなし、使者をつかはして葬の事どもを監護なましめられき。その著はす所の書は、昭が子の婦の後に輯むるところにて、賦頌、銘誄、問注、哀辭、書論、上疏、遺令、等の書凡て十六篇あり。 (婦女鑑)

四 紫式部

むらさき式部は、式部丞藤原爲時の子にて、右衛門權助藤原宣孝が妻なり。幼なきより才智世に聞えて、詠歌をよくし、博く和漢の舊記にわたたり、かねて朝廷の典故に通ぜり。時の中宮上東門院の宮人には、才智絶れしもの多かりけるに、式部もめされてみやづかへしけり。門院、白氏文集といふ書よませたまふ時、その中の樂府二卷の句讀を授け、又源氏物語五十四帖を著はして、これを奉れるなど、その才學世に比類なかりければ、うへの御おぼえもことに深かりけり。あるとき帝、式部が源氏物語をよく、いたくおどろかせたまひて、みことのりありけるは、式部はよく日本紀をよみえたるものなり。さらばこの物語かばかりはあらじ、とぞのたまひける。これより後、よの人、式部をよびて、日本紀の局といへり。かくのごとく才學ともに世に絶れ身をつゝしみて人にほこらず、よく婦女たるの徳を修めしにより、後の世までも人これを賞揚せり。その履歴の詳かなるは、自著の日記にあり。これについてみるべくこそ。 (婦女鑑)

註 紫式部と並んで清少納言、和泉式部、赤染衛門、小野小町等も國文學史に女性作品を貢獻した。

六 備考

一 女性文化

一 世界文化の大合奏のうち、女性文化が高調に達している、今まで偏つてきた男性文化を和らげて、文明の未開などといはれてきたもの、上に、より美しい、より善い音調を添へるであらうと、期待されてゐます。ですから私達女性の行くべき道は男性と敵対し、それと争ふことではなしに、分業協力の法則を益々精練して、女性としての内部分化をどこまでも促し進め、それを男性の内部分化と調和せしめるところにあるのです。

二 女性と男性との分業は、原始の漁獵牧農の時代から始まつてゐます。男子はおもに動物質の食料を獲ることに當り、女子は植物質の食料を収めることになりました。その後は、男性の内部分化だけが非常に促されました。まづ、農奴その他の奴隷と、手工業者とに分れたのです。最も古代のローマの手工業でも吹笛、金物細工、大物鍛冶、晒布、染物、製陶、木工、製靴などに分化してゐました。日本の上古でもやはり色々の分化が既に行はれてゐたのであります。近世になつて大規模の産業時代にはいると男性の職業分化は非常なものです。千八百八十二年のドイツの職業統計によると六千七百七十九種に分れてゐますが、それから後十三年目の千八百九十五年には一萬三千九百七十七種に分化してゐるのです。

三 ところで、女性の分化は久しく滞つてゐました。中世ヨーロッパでは尼になることや、賃仕事をすることや、十字軍以後は莊園の働手となることや、家庭の手藝に従事することなどが、女性分化のあら

はれてきた。近世に入つて産業が非常な速力で興るにつれて、女性分業も著しく促がされて、それが、いろいろの自由職業や、商業經營やその補助や、小動力による家内工業などに現れ、殊に大規模の紡績工場での夥しい女工使用にあらはれて來ました。ドイツの職業婦人の總數は、千八百八十二年に四百二十五萬人であつたのが、千九百七七年には八百二十四萬人になつてゐるのを見ても、女性分化の進みゆきを推し測ることが出来ます。

四 さて將來は益々女性の内部分化が有形無形の學術技術業務などの上に行はれるにちがひないので、それと結婚とを調和させてゆく爲には、こゝに大組織の家政組合といふやうなものを成り立たせ發達させねばなりません。それには、女性の協力方法が進歩することを必要とするのです。その大家政組合の組織は、解りやすくいへば今日の消費組合、購買組合、生産組合といふやうなものを家政的に完成してゆけばそれでよいのです。併しこれを成し遂げるためには、女性の弱點として數へられてゐるところの階級に囚はれた感情や、稍大きな組織體の一員としての社會性の不足や、自家の利害と協同の理想との調和點を見つづけるのに不得手なことなどが女性も自らの力で改善せられねばなりません。しかし、男性もまた女性の分化の發達を促すために、政治、經濟、教育などの方面から應援を與へて、人種改良、家庭教育、宗教、慈善、藝術など、所謂女性文化の純眞な發達を遂げさせ男女兩性文化の協同からなる大管絃樂を完成せしめたものであります。

小西重直、大石利太郎共著(最新女子修身書)

二 女子の文化的・社會的使命

に平和と幸福とを來すことになる。理想問題社會問題が複雑になつた今日は、男女の特性による分業的努力は更に重大な意味を加へたと云はねばならぬ。

女子は家庭の平和と幸福とに心掛け、社會の良風美俗を發揚し、女性の本分を發揮しなければならぬ。温良・貞淑・堅忍等は我が國婦人の特色であり、美風であつた。近世、文化の眞義を解せず、漫りに新を逐ふ輕佻者流が、此等の美風を屈辱であるとして徒らに男性と同様の權利を求めるところを能事とするは女性天賦の特色を没却するものでその弊は角を矯めて牛を殺すと同様である。女性は我が國婦人の美德を發揮すると同時に、從來社會的精神に缺けて居つた方面を涵養し兩者相俟つて益々その徳を完成しなければならぬ。

家庭生活・社會生活・國家生活・人類生活の四種は同時に人格生活の四方面であつて、相容れないものではない。健全な家庭生活は、同時に社會生活にも國家生活にも人類生活にも健全な影響がある。婦人の使命が文化的にも社會的にも、昔と今と其の輕重を異にするのはこの點に存する。

從來は主として男性文化の時代であつたとすれば、今後は男女各々其の特性の協同に俟つ健全な文化を建設しなければならぬ時代である。而して文化の向上は直に國家の向上であると共に、國民の人格の向上である。男女觀の進歩した今日、女子は自主的公的・精神を自覺して、社會的位置を確立しなければならぬ。女子の自覺と社會・國家の向上とは離るべからざるものであるから、この點に於て一層女子の自覺を高めねばならぬ。 横山榮次、伊藤惠共著(女子修身教科書卷五)

近世、文化、修養と云ふ語が多く使用せられるが兩者は同一事について異つた方面から附けた名稱で、違つたものではない。文化は人格の社會的發展の方面に附けた語であり、修養は個人的努力の方面に附けた語で、一方を離れて他は存することが出来ない。儒教では修身齊家とか治國平天下などと説くが、前者は修養の方面を、後者は文化の方面を云ふのである。修養と云へば固陋のやうに、文化と云へば虚飾のやうに思ふ者もあるが、これは謬見である。人生は己が理想を個人的にも、社會的にも實現せんとして終生止まないもので、これが、即ち自己實現の道程であり、この道程こそ文化・修養と云ふ名稱が附けられるのであるから、固陋でも虚飾でもない。これより外に人生の道程はないのである。

從來哲學や倫理學では、理想は實際生活に没交渉のもの、絶對的のもの、やうに考へた傾向があつたが、これは誤である。理想は公的自我的標的として實生活を指導し、絶えず向上せしめるもので、社會生活、國家生活によつて漸次に其の内容が豊富になる。各人の理想を實現すれば、社會的理想は實現せられ、社會的理想を實現すれば、各人の理想は愈々向上發展するので、兩者は同一事の二方面である。個人の理想を個人が實現すること、社會的理想を社會的に實現することとは離れることが出来ない。前者が自己改造であるとすれば、後者は社會改造である。前者は修養であり、後者は文化である。

男女各々其の分を守り、各々其の特性を發揮して、社會に協力することによつて文化は益々向上する。女子は娘・妻・母として一貫した生活をするのが自然で、その家庭生活に於て、平和と幸福とを圖るのが主要な任務と云ふことが出来る。この家庭精神が社會生活・國家生活

三 兩性の特質

一世には男女兩性の特質を了解しないで、直ちに其の間に優劣の差をつけようとする者があるが、さういふ見方は決して妥當なものではない。男女は各その特質を異にして、互に長短がある。兩者互に其の特質長短を補ふことによつて、人類の生活は始めて全きを得るのである。故に、兩者が各々異なる職能を以て、補角的に扶助し合ふことを、兩性生活上の理想としなければならぬ。

二 一般に、男子は活動的、進歩的である。その智力は、精密な思考作用及び發明、創作に適し、その精力は、冒險又は闘争に適する。女子は平和、愛情の生活に適して、戦闘、防禦に適しない。發明、創作よりも、整理、保存、利用の方に其の特長を發揮する。これだけで觀ても、男子と女子とが、異なる立場から人類の文化に寄與する様を考へることが出来る。

三 女子は善美なるものを賞讃して、これを行つた者に満足し、又これを行ふ勇氣を與へ、論争もしくは争闘を敢へてしないので、よくこれを鑑賞するなどの點で、社會を益することが極めて多い。そして、女子は、その女子であること、かういふ特長を有することによつて、常に危険の外に保護され、その圏外に超然として居られる。

四 これに反して、男子は激烈な社會の競争場裡に突入して、種々の危険と試煉とに遭つて奮闘しなければならぬ。従つて、過失を生じ、失敗を招き、屈從を忍び、心身の上に創痕を負ふことは、避け難い所である。そして屢たび獨り人生の行路に迷ひ、温情の枯涸に悩むのである。しかし、男子はかうしてまでも、挺然社會の激浪と戦ひ、

女子をしてその餘沫にさへも當らせないで、靜かに之を家庭の内に保護しようと努めるのである。

五 女子もまた、その家庭を、力の限り、平和の神殿、愛情の樂土となし、その夫を家庭以外に於ける誘惑と危険とから完全にすることゝ努めて、男子の職能と對立する。もしも家庭が亂雜、不和、冷酷、疑懼に鎖されて、荒野の一部分を劃したのに過ぎないやうなものであつたならば、それは既に家庭といふ清く温かい名稱を以て呼ばれるのに相應しないばかりでなく、その主宰者たる女子に如何なる長所があつても、所謂曠職の誅を免れることは出来ないのである。

六 近代文化は、一面、女子を男子のやうにする傾向がある。それは主として、世界大戰と婦人解放運動との影響から來たことで、要するに變態的現象である。女子の人格が男子と同等に尊貴なものであり、また女子の解放運動の理由が正當なものであつても、男女の性別、職別を無視することは第一、性の原理が許さないばかりでなく、生物の歴史、人類の歴史が許さないのである。

七 事物に反對の兩極のあることは、宇宙の原理と見られ、兩性の別も茲に存すると考へられる。男女のポラリチー、即ち人類に於ける陽性と陰性とは、一時的の原因によつて混亂されることがあつても、それは到底永續するものでない。女子が完全な人間の典型ではないやうに、男子もまた完全な典型ではない。男女が各々その特質を以て相補ふ時に、始めて人としての完全な典型が現れるのである。故に、男女各々の特質が鮮明であればあるほど、この典型は完全の度を増すことになるのである。また東西の歴史を通觀するに、社會、國家が衰滅

するのは、大抵女子が男子の領域に侵入して居る時である。この反對に、女子が其の本性と職能とに忠實であつて、社會、國家の危かつた例は曾てないのである。

八 男子が女性化するといつても、女子の長所は決して男子に傳はらないやうに、女子が男性化する場合にもまた、男子の長所は決して女子に移らない。女子が男性化する場合には、多くは、女子本來の短所を残して其の長所を失ひ、男子の長所を取らないで、その短所を學ぶだけである。結局、男性化した女子の特徴は、放縱、粗暴、偏固、陰險で、嫉妬深い感傷的なものになつてしまふばかりである。これでは、平和の神殿を家庭に築き成すことも、社會、國家を柔かな母性愛で包むことも、到底思ひも寄らぬことである。

九 男女兩性が各、その本質的特長によつて協同するのは、まさしく高音部と低音部との唱歌者が、各、自分の分擔に向つて最善な効果を呈するやうに、男性の業績と相並んで、女性の業績が始めて其の意義を全うするのではないか。男性文化と女性文化とが相並んで進展することを圖からなければ、人生は遂に單調平板か不調和騷雜に堪へがたいものとなるであらう。一時的な變態現象はどうであらうとも、女子が妄りに自分の藩籬を越えることは、不自然であり不利益である。

下田次郎著(女子新修身書卷五)

四 女子の最高使命

一 空想に憧れ、幻影を趁ふのは、青春時代の人にありがちな事である。その上、現時婦人解放思想が盛に宣傳され、又更に、その間に

乗じて、女子に阿諛または煽動を試みる者が少くない。私達は、それらの原因の外、種々の動機から、私達の最も幸福とすべき道から離れて行かうとすることがある。しかし、所謂常軌を逸するのは、たとへ一時の事としても、決して願はしいことではない。

二 或は獨身の係累のないのを喜ぶ者、或は家庭の雜務を厭ふ者、或は研究、職業などに没頭して他を顧みない者、或は空想に描いた境涯だけを憧憬する者、或は一度結婚生活に失敗して永久に家庭を呪ふ者などは、その動機如何に拘らず、何れも眞面目な家庭生活以外に、眞に自分を生かす道のあるべきを信ずる者である。そして、眞面目な家庭に入つて、人の妻、母となり、家庭の勞役に従ふ事を以て個性を満足させる所以でなく、價值生活を充實させる所以でもなく、文化の理想を實現させる所以でもなく、況や今日の社會人としての使命に忠實である所以でもないと思ひ込んで居るのである。

三 假に、家庭の仕事に、しがひのないやうに見えるものがあるとしても、生活上の必要であつて見れば、せすには置けないばかりでなく、自分の人格を打込んですれば、如何なる些事でも、意義のあるものとならないものはない。そして、この仕事こそは、實に女子の勞働の第一義のものなのである。考へ方によれば、私達は、幾日かの間、書籍なしに、藝術なしに、また哲學、宗教なしに生活することが出来ることではない。しかし、一日でも衣食を廢することは出来ぬ。この人間の必需を供給處理することが、果して無意味であらうか。またた々單にしがひがないといつて了ふならば、男子には、女子の仕事以上にしがひのない心身の勞働に従事して居る者が幾らあるか知れない。私達も、他日私達より以上に、自己を没してかゝらなければならぬや

うな仕事を持つ夫に配することがあるかも知れない。自然は決して、さういふ意味での個性的な仕事をだけ選び得るやうな人を、たゞ一人でも造つては置かなかつたのである。

四 かやうな中にも、すべての母である人に限つて賦與された偉大な、所謂個性的な、しかも社会的に重大な意義を有する仕事がある。それは子供を生み、育てることである。これは如何なる藝術家、創作家の分野にも見出すことの出来ないものであつて、女子の雑多な勞役の中に、かやうな、しがひのある大仕事の一つはいつて居るといふことは、眞に驚かされるばかりである。そして、この仕事に忠實であることが、私達の最高の任務として定められてゐるのである。

五 男子の生活は、生理的にいへば、高低のない平坦な道を行くのに似て居るけれども、女子の生活は決してさうでない。妊娠、分娩、哺乳は、女子だけに課せられた職能で、男子には之に相當する賦役がない。妊娠中は、心臓、肺臓その他の諸臓器は、平素の活動を倍加し、また出産と共に身體物質の消失の甚しいにも拘らず、直ちに補充されて、却つて以前よりも健康を増す。乳房は乳汁を分泌して、子を養ふための外に意味はない。之を使はなければ、男子の乳房のやうに退化するばかりである。身體の諸機關はそれ／＼生活上の意味と職能とを有するので、これを適度に働かせることは自然の本意である。即ち普通健康の女子に對して、分娩は一般に身體に有利であり、哺乳、育児は女子を眞に女子とする所以である。要するに、女子の身體は、子を生むための身體としてより外には、解釋の仕方がないのである。女子は女子であるが故に、子を産んで母とならなければならぬのである。

六 更に心理の方面から考へるならば、母の最大の愛も、理解も、奉仕も、すべて子に對して行はれないものはない。これと同時に、母の最大の喜悅も、満足も、自負も、すべて子から來ないものはない。子が心配を掛ければ掛けるほど、犠牲を拂はせれば拂はせるほど、母の愛情は燃え盛る。子は母を快活にし、若々しくし、健全にし、聰明にし、勇敢にする。母に取つては、子ほど合性のものはないのである。故に、教養のない女子も、たゞ母となつただけで、一種練れた所が出來て來る。従つて、彼女は母だといふ一言を聞けば、その女子には或程度の價値と信頼とを置いて差支はない。女子は、その幼時から、潛んだ母である。成年の女子は、この潛んで居る母性を發揮して母の榮光に居ることを欲しないのであるか。要するに、女子には年頃に結婚して、子を生み育てる事より、自然で正常な道はないのである。女子が母となることを、その最高の任務であるとするのは、人間の定めた掟ではなくて、女子の生理、心理に基づいた自然の無上命令である。

七 同じく妻といひ母といつても、これまでのやうに教育を制限され、殆ど個性を認められず、國家的にも社會的にもあまり重要視されなかつた時代の妻や母と、現代の妻や母とは、その生き方に大きな相違がある。この意味の妻、母として、この上もない個性的、社會的の仕事である育児のことを、その最高任務として引受けることについて私達は何の不満があらう。

八 男子の活動する世界に出て、事毎に男子と拮抗し角逐した所で、女子が男子と肩を比べることが出來ないのは明白である。女子独自の活動に由つて、今後の文化に女性的貢獻をなし、兩性の特長を發

揮いた文化が現出されるならば、その時こそ始めて眞に男子と比肩することが出來るであらう。しかし、今の所、社會上の地位や、法律上の権利や、職業からの報酬などについて、男子に拮抗しようとしても從來來て來た社會の狀態が男子を主とする以上は、男子に對して裏面的境遇を脱することは出來ぬ。固より、かやうな文化進展の階段として、男子に伍して、相當の地歩を其の社會に占めることは、決して無意義のことではなく、かの婦人問題の各項について、公正な解決を促し、正當な權利を獲得することは、勿論望ましいことではあるけれども、それだけを終局の目的とするのは、自ら永久に裏面的地位に甘んずるものであるといふ外はない。婦人の最高使命を明かに認知し、そして、右の婦人問題が齎すところの利益、權利を其の使命の達成に充て得る時、私達の裏面的地位は自ら相對的地位に變じ、且その婦人問題は眞に女子にとつて有意義なものとなることが出來るのである。

九 女子は女子の世界に於て、その使命に忠實である時に、その功績は男子と優劣がないやうになり、かの人間の完全な典型の一半を見事に補足することとなり、女子自身も男も共に幸福を得、社會改善の基礎も立つのである。女子は「ファウスト」を創作することが出來なくとも、ゲーテを生むことが出來る。無線電信を發明することが出來なくとも、マルコニを生むことが出來る。従つて、育児のことが、婦人の王國に在つては、一層光輝のある仕事であることは言ふまでもない。世上一切の事は人が本である。その本である人を、人類社會全體のために造り上げることほど、大なる事業はない筈である。してみれば、女子の努力を影の舞などと思ふのは、言ひやうもない淺薄な考であることが分るのである。婦人運動者の所謂女子の解放は、かゝる男子

と對抗する意味に於て唱道されるのであるけれども、如上の所説に甲つて觀れば、却つて男子との協同を意味するものであつた事が、會得されるであらう。 下田次郎著(女子新修身書卷五)

第十五課 新附の同胞

(女子修身書 第十六課)

要 領

新附の同胞と融和同化すべきことを教へるのが本課の要領である。

注 意

- (一) 新附の同胞は陛下の赤子として内地人と何等の隔てはないから宜しく大和民族の一部として待遇すべきである。
- (二) 人格尊重と公正の觀念を徹底して内地人との差別待遇を廢せねばならぬ。
- (三) 新附の同胞と感情の融和を圖り友愛の情を以て親しむやうにしたる。
- (四) 租借地の住民も新附同胞と同様に待遇すべきである。
- (五) 委任統治地の住民に對しては先進國として統治の任務を果すべきである。
- (六) 國內に住む過去の異民族が全く大和民族と同化したやうに新附の同胞も舊同胞と融和同化せねばならぬ。

設 問

- 一 陛下の赤子たる上に於て新附同胞は舊同胞と異なる所があるか。
- 一 新附の同胞に對して内地人と分け隔てをしてもよいか。
- 一 新附同胞に對する天皇の大御心はどうであるか。
- 一 租借地の住民に對して何と心得ればよいか。
- 一 委任統治地の住民に對して何と心得ればよいか。
- 一 どうすれば新舊同胞の同化が出来るか。

四 訓言

四海同胞

○萬物は皆大本より生ずれば四海の人悉く連れる枝なり。 中江藤樹
 ○民は皆我が同胞なり。 張橫渠(近思錄)
 ○死生命あり、富貴天にあり、君子は敬して失ふことなく、人と共に恭つて、禮あらば四海の内みな兄弟なり。 君子何ぞ兄弟なきを患へん。

○我に眞ある時は諸人皆兄弟なり。 我眞を失へば兄弟親子の間も仇敵なり。 孔子(論語)

那康節

○天下の人皆同胞たり。 我れ當に兄弟の相を著くべし。 天下の人皆賓客たり。 我れ當に主人の相を著くべし。 兄弟相愛し、主人相敬するなり。 佐藤一齋

○地球上立國の數少なからずして各々宗教、言語、習俗を異にすといへども其の國人は等しく同人類の人間なれば、之と交はるには苟くも輕重厚薄の別あるべからず。 自ら尊大にして他國人を蔑視するは獨立自尊の旨に反するものなり。 福澤諭吉

○他國の人、汝等の國に居住して汝等と偕に在らば、之を虐ぐることを勿

れ。汝等と偕に居る他國の人をば汝等の中間に生れたる者の如くし、己れの如く之を愛すべし。 舊約書

○汝等常に兄弟相愛の心を存すべし。 又旅人を接待することを忘るゝ勿れ。 或人々は斯く行ひて、知らず識らず、天使等を宿したり。 新約書

○四海は兄弟なり。 凡そ宇内の生民は人種の如何に關せず、宗教の異同を問はず、皆これ同胞なり。 人類の義務は人と人と相愛し、國と國と相睦びて、世界の平和を全うし、幸福を遂ぐるに在り。 此の義務を名づけて人道と稱す。……そも、世界の平和を指導し、人道を擁護するは、我が日本帝國の天職なり。我が日本國民の理想なり。此の理想を實現し、此の天職を遂行するを以て、國民の本務とせんか。乃ち我が日本の國光は宇内に發揚し、我が皇の仁徳は萬邦に光被するに至らん。 大隈重信(國民讀本)

○凡そ何れの地たるに論なく、孤獨主義大に行はれて、人々たい自己の事のみを圖り、その思想、自己の外に及ばざる時は、その社會は殆んど成立すること能はず。 キゾー

○骨肉枝葉に繋る。 交を結ぶことまた相因る。 四海皆兄弟。 誰か行路の人たらん。 況んや。 我が連枝の樹一身を同じうするをや。 文 選

人格尊重・公正・正義

○道德的習慣としてこの正義は自ら人の生命及び利益の侵害を制御し、又他人の之れを爲すを防衛する意志の方向、行爲の習慣をいふ。 其の淵源は他人の生命及利益をば自己のものと同じに見做し、自己の目的として之を尊敬する所にあり。 各人の利益の範圍を指定すれば、身體及び生

活を擴張する意味の家族、行動の方法の總體としての資産、理想的存在としての名譽、生活を自己の目的たらしむる可能性としての自由等は是れなり。 法律は是等の利益範圍を保護して之れに適應する權利の範圍を生ぜしめ、權利の範圍は禁止によりて保護せらる。 例へば殺すべからず。 姦通すべからず。 窃盜すべからず。 偽證して他人の名譽を毀損すべからず。 他人の自由を侵害すべからず等の如し。 他人の權利を害し、利益の範圍を侵すは是れ不正なり。 總べての不正は即ち他人の生活が自己の生活と同一價值を有する自己目的なることを否定する行爲に本づきて他人の生活に干渉するものなり。 正義の本務の一般なる公準に曰く。 不正を爲さしむべからず。 他人をして己に對して不正を爲さしむべからず。 之れを積極的に云へば權利を尊重して之を保護すべしと。

○公平なる大地は賤夫の子にも帝王の子にも同様に路を開く。 パウルセン(倫理學大系)

○公は明を生じ、偏は闇を生じ、端懿は通を生じ、詐僞は塞を生じ、誠信は神を生じ、誇誕は惑を生ず。 ホラチウス

○人を籠絡して陰に事を謀るは、好し其の事を成し得るとも、慧眼より之を見れば、醜狀著しきものぞ。 人を推するに公平至誠を以てせよ。 公平ならざれば英雄の心は決して攪られぬものなり。 荀子

○公なれば則ち一、私なれば則ち萬殊、人心の同じからざるは面の如し。 西郷隆盛

○公なれば則ち一、私なれば則ち萬殊、人心の同じからざるは面の如し。 程伊川

○他の權利を尊重するを正義といふので、どんな權利でも侵害すれば、皆是を不義といふのである。 即ち凡て彼の人格を成す所以のものを尊重するは正義であつて、是れ實に人に對する最初の道である。 クーザン

○犯すことが不義なる如く、爲さないことが、不義なることも亦、屢々である。 マークス・アウレリウス

○自から反して縮みからずんば、楊寬博と雖も吾れ憐れざらんや。 自から反して縮くんば千萬人と雖も吾れ往かん。 孔子(論語)

○正しき事を爲せ、而して人を恐るゝな。 獨 諺

○正義によつて立て。 汝の力は二倍せん。 プラウニング

○何人が戦ひ何人が倒るゝも、正義は永に勝ちて變ることなし。 正義の味方に戦ふ者は假令十度百度居らるゝと雖も神之に勝利の桂冠を與へ給はん。 エマースン

○正義と共に生活する人は、何れの處に居るも安全なり。 エビクテトス

○正義ほど崇高偉大なる美德なし。 アヂソン

○人は動物としては單に尋常の價值を有するもので、他の動物よりも特に貴い所あるを見ない。 其の効用と價值とは、一の賣買品たるに過ぎない。 けれども、人格ある者として、人は無限の價值を有する。 彼はすべて他の理性ある者の尊敬を要求し、自ら此れ等の者と同等の地位を取り得る資格を有する。 併し他の尊敬を要求し得る權利を有する者は、先づ自ら己の資格を失墜するやうな事があつてはならぬ。 カント

○社會共存の道は人々權利を護り幸福を求むると同時に、他人の權利を尊重して苟も之を犯すことなく、以て、自他の獨立を傷けざるにあり。 福澤諭吉

○今若し正義に由りて進歩し、不正に由りて退歩する所の人間より、高尚なる部分を奪取せば豈に生活するの價值ありと爲すべきか。 ソクラテス

友愛・敬愛・寛容

○愛敬を致し、愛敬を盡せ。順境何ぞ云ふに足らん。逆境は性を鍊る可し。親をして頑器に非ざらしめば、何ぞ舜徳の盛なるを見ん。君をして殷紂に非ざらしめば、何ぞ見ん三仁の行を。西哲ソクラテス其妻、性頑硬にして、意に拂ひ、動もすれば、輒ち怒り萬事命令に悖る。他人、若婦を娶らば其れ必ず再嫁を謀らん。ソクラテス謂ひけらく。此れ乃ち福なり幸を此の横暴に受く。理學根脚堅く、試験は風勁を要すと。妻の氣百度變動すれば、ソクラテスの性一たび泰定し、妻の躁ぎて情火の如くなれば、ソクラテス靜にして心鏡の如し。祇、愛敬の深きに因り、後世稱して聖となす。吁嗟、此の二字勢力百勝を存し、鐵籠巨廠に愈り、千軍萬乘に超ゆ。況んや且つ鍵鎖に似、合一の柄を操執し、能く搦貳を懷柔し、能く梟獍を馴化し、兵を構へ秦楚を息め、交惡は周鄭を和す。四海は一家たる可く、六合は同性たる可し。嗟々今世の人、子弟温情を缺き、夫婦相反目し、朋友互に詬病し、邦國の交際に至りては尙ら兵力を以て競ひ、妖氣神州に滿ち、何の時か洗淨を得ん。愛敬親に事ふるを盡せば、徳教四海互にして千年口徒誦せん。今日未だ應ずるを見ず。愛敬を致し、愛敬を盡せ。一人の徳は兆民の慶、小家の法は大國の政にして、怠忽する勿れ。宜しく敬聽すべし。此の二字は神の命する攸なり。

吾人は奴隸も亦同胞なることを忘るべからず。
愛は凡ての人を平等ならしむ。
窮鳥懐に入れば獵師も之を捕らず。
愛ある所には常に樂園あり。

中村敬宇(愛敬錄)
カト 1
西 諺
邦 諺
ジャン・ポール

○至善にして至貴なる人は最も同情に富む。
○七恕して以て善を勤め、九思して以て惡を防ぐ。
○誰もみな我が身をつみて思ふべし、命は惜しきものと知らずや。
○仁者に敵なし。
○仁に親しみ、隣に善くするは國の寶なり。
○己の薄命なる隣人の爲に盡すは人の義務なり。
○汝が親切の舉動を以て人に與へる愉快は汝に歸り且つ屢、利子を附して歸らん。
○言語の秘密は同情の秘密なり。其の十分なる魔力は柔和なり。人にのみ可能なり。
○徳孤ならず、必ず隣あり。
○親切は穀物のやうに蒔くことによつてふえる。
○親切なる言葉は惱める心の醫者のやうなものである。
○寛は以て猛を濟ひ、猛は以て寛を濟ふ。
○川は委蛇を以ての故に能く遠く、山は峻遷を以ての故に能く高く、道は優遊を以ての故に能く化し、徳は純厚を以ての故に能く豪なり。
○海は水を辭せず。故に能く其の大を爲す。山は土を辭せず。故に能く其の高を爲す。明主は人を厭はず。故に能く其の衆を成す。

管子
レ、ハント
ジョセフ・フルクス
孔子(論語)
西 諺
西 諺
左 傳
ラスキン

人を容るゝ能はざる者は人を責むる能はず。人も亦其の責を受けず。
寛大ならんには先づ正しかれ。
慈善は婦人の徳。寛大は男子の徳。
己れを容赦するな。而して人には寛大なれ。
友情は理解を有てる愛なり。
友情は親切に優ること無限なり。
友情は魂の結婚なり。
自由と平等とは吾人の権利にして、友愛は吾人の義務なり。
友情は人生のセメントなり。
互に端末の過失を恕するに非ずんば、友情は深きに達するを得ず。
泰山は土壤を譲らず。故に能く其の大を成せり。河海は細流を擇ばず。故に能く其の深を就せり。
河深ければ其の水滑く流る。
己を修めて人を責めざれば難を免る。
爾曹もし人の罪を免さば天に在す爾曹の父も亦爾曹を免し給はん。
過失を宥すは人の榮譽なり。
女と馬鹿は他人の罪を許さず。
寛大は正義の花なり。
仁徳は正義を土臺としたる殿堂なり。この根柢なければ此の頂上を有する能はず。

佐藤一齋
英 諺
アダム・スミス
獨 諺
同 上
シセロ
ヴォルテール
同 上
佛 諺
ラ・フォンテーヌ
戰國策
シエークスピア
左 傳
聖 書
同 上
佛 諺
ホーソルン
ラスキン

融和・協同・同化

○汝何故に兄弟を審判するや。何故に兄弟を輕蔑するや。保羅(聖書)
○人至愚と雖も人を責むれば明、聰明なりと雖も己れを恕すれば昏し。苟も能く人を責むるの心を以て己を責め、己を恕するの心を以て人を恕すれば、聖賢の地位に至らざるを患へず。
○吾人の寛大は吾人の能力を超ゆべからず。
○平和は人間の幸福なる自然状態にして、戦争は人間の墮落また恥辱なり。
○汝何故に兄弟を審判するや。何故に兄弟を輕蔑するや。保羅(聖書)
○人至愚と雖も人を責むれば明、聰明なりと雖も己れを恕すれば昏し。苟も能く人を責むるの心を以て己を責め、己を恕するの心を以て人を恕すれば、聖賢の地位に至らざるを患へず。
○吾人の寛大は吾人の能力を超ゆべからず。
○平和は人間の幸福なる自然状態にして、戦争は人間の墮落また恥辱なり。
○和を以て貴しと爲す。上和ぎて下睦ぶ。
○協同は力を生ず。
○彼等も自分と同じく人である。
○天下の務は常に天下と之を共にすべし。豈に一人の智の獨了する所ならんや。
○神が人間を多數に分けたるは相互に援助せしめんが爲なり。
○地の利は人の和に若かず。
○仁者に敵なし。
○和氣祥を致す。
○和氣容好の聲は人を動かす。而して和氣之に應ず。粗厲孟賁の聲は人を動かす。而して怒氣之に應ず。
○兄弟等よ。汝等喜び且つ完全にして、相慰め、心を同じうして平和を保つべし、然らば平和と愛との神は汝等と共に在さん。保羅(聖書)
○溫和又は自制の缺如は要するに宗教、道德價値の缺如なり。

聖徳太子
獨 諺
トルストイ
宋 書
セネカ
孟子
同 上
劉 佃
說 苑

カールライル
英 諺
同上
獨 諺
古 語
邦 諺
左 傳
邦 諺
邦 諺
孔子(論語)
ホレイス
蘇格蘭俚諺
レツシング

○共同の敵に對しては相互の小争を捨てよ。
○合すれば立ち、離れば倒る。
○一の環を毀せば全體の鎖が切れる。
○船を同じくしては吳越も相救ふ。
○船は帆でもつ。帆は船でもつ。
○輔車相依る。
○車の兩輪、鳥の兩翼。
○雖は片手でもめぬ。
○己立たんと欲すれば人を立て、己達せんと欲すれば人を達す。

五 備 考

一 新附の人民

新に自國の領有に歸した土地に住むものを新附の人民といふ。我が國では朝鮮や臺灣の住民がそれである。我が國が臺灣を領有し、朝鮮を併合するに至つたのは東洋の平和と自國の獨立を確保する爲であつた。一旦自國の一部とした以上はその領土の人民も同一國家の主權によつて支配されるのであるから、その國內に於ても、他の國家に對しても、すべての利害は共通となり、また共通とならねばならぬ。從來の我が國民も新附の人民も新に大きな我が國民の一部となつて、皆我

が皇室の恩澤に浴するやうになつたのであるから、かめて相近づき、互に相親しみ、同國民同胞として協同、和合の實を擧げねばならぬ。それでは、我等は如何なる態度を以て、これ等の人民に對すべきであらうか。

第一に正義と博愛の精神を以て接せねばならぬ。我等は今共に同胞である。陛下の赤子である。互に和合協同して生活せねばならぬ。歴史を異にし、風俗を別にする人民の間には、とかく思ひがけぬ行違が生じがちである。かやうな偶然的誤解のないやうに努めねばならぬと共に、まづ根本の精神に於て、同胞の親愛と正義とを保つことが肝要である。征服者とか被征服者とかいふやうな考は絶対に除かねばならぬ。我等は國民として同胞である計りでなく、人格者として平等であるといふ考を要する。正義も博愛も人格を基礎としなければならぬ。人格者として互に接する所に社會の秩序も保たれ國民の幸福も得られるのであらう。

第二に感情上の融和接近を圖らねばならぬ。たとひ表面の制度の上、法律の上では同等であるやうに見えても、感情上の反對があつては、到底協同することは出来ない。我が國が臺灣朝鮮を領有してから政治、經濟上の組織、教育制度上の施設など、次第に完備して來て、新附の人民の文化的進歩は大なるものがある。しかもなほ彼等の不平を買ふのは、内地人が、彼等の感情生活を無視する所から來る事が多いやうである。信仰、風俗、言語などは殊に感情の伴なふもので、同化といふことは甚だ必要ではあるが、その歴史を顧みず、理解を求めず、強迫的に外部的に親密を圖らうとしても不可能のことである。猜疑は肉身の兄弟をも離れしめるものであるから母國民は新附の人民と

の間に於ては最もこれを注意せねばならぬ。
第三に右の精神、態度により實際上の統治制度の上に改善を計り、その人民の安寧幸福を目的として盡くさねばならぬ。人には生命の存続、財産の安全など有形上の要求と共に精神上の要求がある。それは名譽となり、諸種の權利の要求となり、文化的生活の權利となる。我が政府はこれ等の點に鑑み、法律制度の完備を計り、教育、産業の發展に多大の力を盡してゐるのである。これは固より上、皇室の御仁慈を奉體してゐるのであつて、我等もよく御趣旨に遵つて、努めて新領土の同胞に對し、精神的にも物質的にも満足と與へるやうに心掛けねばならぬ。

然るに今こゝに最近の事件に就いて注意すべきは、南洋諸島に對する委任統治のことである。委任統治とは世界戦争の結果として、従前支配した國の統治を離れた植民地や領土に對し或先進國が國際聯盟に代り後見の任務を行ふことである。その理由はそれ等の土地の居住者は近代世界の激しい生存競争の下に自立することが出来ないから該人民の福祉と發達を計るには文明の神聖な使命であると考へられたのである。委任せられる國は資源、經驗または地理的位置により、最もこの責任を引受けるに適當なものとせられるのであつて我が國が南洋のトラック其の他の諸島を統治するものも、この理由によるのである。これ等の委任統治の領土は、他の新領土とは趣を異にする所のあるはいふまでもないが、我が國民は聯盟規約に謂はゆる先進國としてその尊き義務を果すことに努めねばならぬ。

我が國は由來人道主義を以て國是として居り、世界各國は我等の一舉一動を注視して居るのであるから一層相誠め相努めて内地の人民も

新附の人民も等しく同胞國民として協同一致の實を示さねばならぬ。
友枝高彦著(中學修身書卷四)

二 委任統治

國際聯盟が、歐洲大戰迄ドイツ及びトルコの植民地または領土だつた土地の施政について創設した制度で、同聯盟規約第二十二條に規定するところである。即ちそれによれば、歐洲大戰の結果、從來の統治國の主權から離れて而も未だ獨立し得ない人民の住居する植民地及び領土に對しては、彼等人民の安寧と發展のため、國際聯盟はその教導に適當な先進國に囑託して、國際聯盟に代つてそれを委任統治せしめることとなつてゐる。而してこれに三つの種類がある。第一、從來トルコ帝國に屬した或る部族國は、獨立國として假承諾を受ける程度に發達してゐるから、その自立し得るまで受任國は施政上の助言と援助を與へる。第二、中央アフリカの人民に對しては受任國がその地域の施政の責任を負ふ。第三、西南アフリカ及び南太平洋諸島のやうな地域は、いろいろの理由で、受任國は自己の領土の構成部分としてその國法の下に施政することを最善とする。尙ほ委任統治の振當についてはパリ講和會議及び大正九年十二月の聯盟理事會で決定され、その結果、日本は第三種により、カロリン、マーシャル、マリアナ三島の委任統治權を得た。
(社會科學辭典)

第十五課 女子と誘惑(女子修身書)

要 領

青年女子に取りて異性の誘惑の危険なることを説き堅固の道念を以て克く之に抵抗し貞操を保全すべきことを教へるのが本課の要領である。

二 注意

- (一) 女子に種々の誘惑ある中に最も陥り易く而かも危険なものは異性の誘惑である。
- (二) 近年處女の自由外出を狙つて不良少年の巧妙な誘惑が跋扈する。
- (三) 女子には誰にも自ら誘惑にかゝり易い弱點がある。
- (四) 誘惑に對しては油断なき警戒を要する。
- (五) 貞操の保全には堅固の道念と克己自制が必要である。

三 試問

- 一 女子に取つて異性の誘惑は何故に危険ですか。
- 一 近年不良少年はどんな誘惑をしますか。
- 一 誘惑に對して女子はどんな弱點を有つておますか。
- 一 女子はどうすれば誘惑に遠ざかることが出来ますか。
- 一 女子はどうすれば貞操を保全することが出来ますか。

四 訓言

男女・異性

- 男は火にいて女は麻屑なり。悪魔來りて、一緒に炎上せしむ。 英 諺
- 男は私慾によりて道を誤り、女は弱きが故に道を誤る。 ド・ステル夫人

- 女は極端に溺愛す。されば常に男よりも更に甚しく善きか悪しきかなり。 ラ・ブルーヤール
- 男子の使命は廣くして多様なり。女子の使命は一律にして稍狭く而して更に深い。 トルストイ
- 男子第一の名譽は勇氣にあり。女子第一の名譽は貞操にあり。 スペリテーター
- 男は度胸、女は愛嬌。 邦 諺
- 男子は意志にして女子は情操なり。 エマースン
- 婦人なくんば男子は馴なき頭の如く、男子なくんば婦人は頭なき馴の如し。 獨 諺

魅力

- 愛らしき魅力には無意識に參らぬ者少し。 ホキツティア
- 人生には嘗て知られざりし魅力あり。 シルレル
- 處女の一髪は十雙の牡牛よりも牽くこと強い。 英 諺
- 女子の魔力は其の舌にあり。 漢 諺
- 美女は生を斷つ斧。 邦 諺
- 女の髪は毛には大衆もつながらる。 ボーブ
- 美人は我等を一本の毛にて惹き寄せる。 シエークスピア
- 美は妖嬈なり。その魔力に遭へば信仰は溶けて血となる。 シエークスピア
- 悪魔は人の氣に入る形を取る力を有つ。 シエークスピア
- 悪魔は男を釣らんとする時には其の釣に美女をつける。 古 諺
- 甘い歌がこれ迄多くの鳥を欺いた。 獨 諺

- 鬼も十八番茶も出端。 邦 諺
- 女の鬻には城を傾く。 漢 諺
- その艶美を心に戀ること勿れ。その眼臉に捕へらるゝこと勿れ。 聖 書

- 女は地獄の使。 華嚴經
- 大蛇を見るときも女を見るな。 寶積經
- 湯上がりに伯父坊主が惚れる。 俗 言
- 小娘と炒豆前があると手が出る。 邦 諺
- 花多ければ實少し。 邦 諺
- 窓の女は道ばたの葡萄の房である。 伊太利俚諺
- 美しくて、善良で、金持ちで、おまけに賢明な女は四階建ての高き。 佛 諺

○音樂の魅力はしばしば、悪を善と爲し善をして害を爲さしむ。 シエークスピア

○神は我等に機智と情趣とを與へ、快活と笑ひと香氣とを與へたり。こは人間の巡歴の日を愉快にし、燃え立つ泥灰を踏み分くる人間の痛ましき歩々に魅力をもたせんが爲なり。 シドニー・スミス

誘惑

- 快樂は惡に導く最大の誘因なり。 プラトン
- 歡樂は有らゆる刑罰の恐怖よりも有力なり。 ゲーテ
- 悪魔は基督が一人で居る時誘惑せり。 獨 諺
- 悪魔の正體はそれが来るまで判明せず。來たる後は如何なる助言も無かなり。智慧は常に早きに過ぎ、また晚きに失して間に合はず。

- 悪魔は十字架の後にかくれる。 リユツケルト
- 多くの危険な誘惑は表面だけ頗る花やかに着飾つて來る。 古 諺
- 人生の各期毎に夫れれ、獨得の誘惑と危険とを有す。 ヘンリ
- 慾には目がくらむ。 ホウス
- 婦人の心は些少の進物に感動せらる。 邦 諺
- 聖者を捕へるに聖者の餌をつつけし釣針を以てするとは狡智に長けし敵なり。 シエークスピア
- 悪魔は我々を誘惑しない。彼を誘惑するものは我々である。 ジョージ・エリオット
- 誘惑に堪ふ者は幸福なり。 聖ヤコルブ
- 不斷の勤勞は誘惑を防ぐ。 伊太利俚諺
- 神は型にはまつた澤山の祈禱よりも惡の誘惑を斥けることを嘉し給ふ。 ウイルリアム・ペン
- 鯨節を猫に預ける。 邦 諺
- 狐も目のなき人はだまされず。 邦 諺
- 穴は泥棒を誘惑する。 西 諺
- 如何なる餌にても食む魚は速かに捕へらる。 英 諺
- 美人若し貧しくば、之に二様の注意を加へざるべからず。何となれば美麗は他人を誘惑すべく、貧困は己を誘惑すべければなり。 コルトン
- 獨居すれば女の思は不善に就く。 羅句古諺
- 小人間居して不善をなす。 大 學

少年世途を行くに、誘惑の人、兩傍に並び、列を成して立てり。其中を通行する可なれば、惡に誘かれざるやう常に心を注ぐべきなり。一たび之に従ふときは、遂に必ず下流に沈没すべし。スマイルス
快樂の爲めに惑はされ、利益の爲に迷はされ、功名の爲に腐らされ、先例の爲に支配せられ、誘惑の爲に感動せられて、害と知りつゝ其の事を爲すが如きことあること勿れ。アーアリチャード
兄弟等よ。人若し誘惑せられて過つことありとも、汝等は靈に導かるる者なれば、己れも亦誘惑せらるべきを思ひて、柔和なる精神を以て之を改善せしめよ。汝等互の荷を負へ。然らば基督の律法を完うすべし。保羅(聖書)

墮落

最善の者墮落せば最惡となる。
墮落は雪玉の如し。一度轉げ始むる時は次第に大きくなる。
人は懸してゐる間は墮落し切ることなし。
其の徳を犠牲にせる婦人は速に自餘の人倫を抛棄す。
婦人一たび貞操を失せば何の惡事か爲さざらん。
一度失はれたる貞操は喚び戻すことを得ず。それは唯一度通用するのみなり。
流に従ひ下りて反るを忘る。これを流と謂ふ。流に従ひ上りて反るを忘る。これを連と謂ふ。獸に従ひ厭ふこと無きを荒と謂ふ。酒を樂みて厭ふこと無きを亡と謂ふ。先王には流連の樂荒亡の行なし。孟子
情に觸れ欲に従ふ之を禽獸と謂ふ。アモン
コルトン
ラム
タンタス
英 誌
オヴイド

少き時は血氣未だ定まらず。之を戒む色に在り。

孔子(論語)

貞操

婦人一度貞操を失せば何の惡事か爲さざらん。
一度失はれたる貞操は喚び戻すことを得ず。それはたゞ一度通用するのみなり。
貞操は水柱の如し、一度溶くればそれが最後。
婦人は貞を以て行と爲す者なり。
寡婦の門前是非多し。
十八の後家は立つが四十後家は立たぬ。
色欲は世の枷なり。鎖なり。凡夫は戀着して抜くこと能はず。色欲は世の重患なり。凡夫困苦して死する迄免れず。色欲は世の禍なり。凡夫之に遭へば厄として受けざるものなし。佛法の行者既に之を捨つることを得るも、又之を顧み思はじ、獄舎より、出でたる者の又入らんと欲するが如く、病の癒えたる者復病を得んことを欲するが如し。故に智者は之を呵してその狂へるを正す。日明菩薩經
弟子よ。邪なる姪を離れ、自ら妻室にして足るを知り、他の女人に於て一念だも慕ふ情を生ぜざれ。自の妻にて足れりとせず、好みて他の婦女を淫す。是人慚愧あることなく、苦を受けて常に樂なく、現世と未來世に苦の爲に縛られん。華嚴經
古の人に告げて姦淫すること勿れと言へることあるは爾曹の聞きし所なり。然れど、我なんぢらに告げん。凡そ婦を見て色情を起す者は中心すてに姦淫したるなり。もし石の眼なんぢを罪に陥さば、抉出して之を捨てよ。蓋し五體の一を失ふは全身を地獄に投げ入るゝよりは勝れり。

警戒・抵抗・克己・自制

警戒は安全の親なり。
之を戒めよ。之を戒めよ。爾に出づる者は爾に反る。孟子
人生の一步步々は何に多大の警戒を要するかを證示す。
凡てに好意を表する人を警戒せよ。又凡てに惡意を持つ人を警戒せよ。ゲイテ
更に尙ほ凡てに冷淡なる人を警戒せよ。佛 誌
人は心正しく眼明にして物に惑はされざるを要すべし。心は物に牽かれて移るものなり、されば天地不易を心とし書籍異端に欺かれざるを要す。中井昌忠
剛毅果斷以て善を擇び、不屈不撓以て誘惑に抵抗し、好んで重責を負擔し、危難に遭うて泰然たる者之を大人と謂ふ。セネカ
人道は一日怠れば忽ち廢す。されば人道を勤むるを以て尊しとし、自然に任ずるを尊ばず、夫れ人道の勤むべきは己に克つての教なり。己は私欲なり。私欲は田畑に譬ふれば草なり。克つとは此の田畑に生ずる草を取捨つるを云ふ。己に克つは我が心の田畑に生ずる草をけり取り捨てて我が心の米麥を繁茂さすの勤なり。是を人道といふ。論語に己に克ちて禮に復るとあるは此の勤なり。二宮尊徳
肉に従ふ者は肉の事を好み、靈に従ふ者は靈の事を好む。肉の好は死となり、靈の好は生命及平安となる。聖 書
吾人は人生の大海上に漂ふ。道理は之が羅針盤たり。情慾は之が大風漚たり。ボーブ
嗜欲は性の累なり。淮南子

五 備考

一 誘惑

また曰へることあり。凡そ人その妻を出さんとせば之に離縁狀を與ふべしと。然れど、我爾曹に告げん。姦淫の故ならで其の妻を出す者は之に姦淫をなさしむるなり。又出されたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり。聖 書
一 東洋では昔から男女七歳にして席を同じうせず、食を共にせずといふ格言がある。これを文字通り守るべきものとすれば如何にも窮屈至極のやうに感じられるので、今日かゝる格言を持出すと、一部の人は大いに舊弊であると言つて譏るやうな有様であるが、この格言の精神は今日猶生きて居る。
昔と違つて今日は女子も色々の必要から外出する事が昔より多くなつた。それに連れて他人同士の男女が交際する機会も必要も多くなつた。これは時勢の進運上やむをえない事でもあり、當然の事でもある。それに伴ふ利益は少くない。第一に昔の女は依頼心が強かつたし、意志も體質も弱かつたが、今日はこの缺點を餘程改善することが出来た。第二に昔の女は教育が低く、且、見聞が狭いので、學問上の知識も常識も乏しかつたが、今日の女は昔と違つて高い程度の學校教育を受け見聞が廣いから、學識も常識も發達してゐる。逆に弊害として第一に今日の女は昔よりも從順・溫良の徳が缺けてゐるやうであり、第二に誘惑にかゝる機會が増したやうである。
二 昔風の考をする人は男女が交際すればすぐ間違が起るやうに考へるけれども、それは固より誤解である。昔の男女はさういふ傾向が

多かつたのかも知れないが、今の男女はさうではない。それほど弱いものではないが、男女の交際に間違が生じないとは断言は出来ない。しかし交際によつて男女相互の理解を高め、結婚生活を完全にさせる原因となることもある。

それならどういふ時に誘惑に負けてしまふのであらうか。誘惑する方が悪いには違がないが、同時に誘惑される方にも大いに弱點があるからである。誘惑される者にも大いに責任がある。誘惑されるだけの素地がある。例へば奢侈を好むとか、外出を好むとか、遊樂をほしきまゝにしたとか、美貌を誇るとか、依頼心が強いとか、交際を妄りに結ぶとかいふ者は稍もすれば危険な遊び友達が出来来る。段々同じ遊び仲間が増し、危険な男子の友達も出来て、遂に誘惑に引つかゝるやうになる。たとひ弱點ではなくても、人は好む事には耽りやすい。カルタを好む者は、他人に誘はれて他家へカルタ遊をしに度々行くやうになる。何回も行く中には不良な遊び仲間が加はつて来ないとは限らない。殊に夜の外出は良くない。なるべく之を避けるのがよい。どうしても必要があれば父母兄弟と必ず伴つて出るやうにすべきものである。

最も誘惑にかゝりやすいのは自尊心のない者、女子の貞操について明確な自覚のない者、勇氣のない者である。女子特有の天職に省みず將來の幸福を考へずに、一時的快樂を求めから遂に邪道に迷ひ込むのである。社交や遊樂の樂しみが進行すると、遂に誘惑されても氣がつかず、墮落の淵に沈んでしまふ。道でものろ／＼と歩いて、前後左右を見廻したりする女は不良少年の的になりやすい。姿勢を正しくし、傍目をふらず、さつさと歩くやうな女を如何なる不良少年も誘惑する。

少年は實はこの青年の手下であつて、青年が令嬢を誘惑する爲に芝居を打つたのであつた。普通なら一人の男子で四五人を對手に戦ふことが不可能である。早くこれに疑を持つべきであるのに、たゞわけもなく、輕々しく人を信ずるから一生取返しつかぬ禍を受けなければならぬ。

父一人、娘一人で暮してゐる人があつた。父は或會社に勤めてゐたが、在勤中に死んだので、會社から同僚が来て色々葬式萬端の世話をしてくれた。娘は杖とも柱とも頼む父に後れて泣きの涙で暮してゐたが葬式の後毎日、その會社の社員と稱する一青年が来て親切に慰めて行つた。一週間程毎日彼れは會社の引ける頃に來て懇ろに慰めたが、段々長く話し込むやうになり、遂に娘は一週間ほど後に貞操を破られた。青年はその翌日から來なくなつた。あとで調べると勿論その青年はその會社員ではなかつた。

四 廣く誘惑といへば貞操に關るだけではない。自分が自分で欲望の捕虜になることを凡て併せ言ふものである。例へば甲から大金を借りてあつた。甲が自分を信じて證書を作つて置かなかつた所が、甲は突然に死んだ。甲の妻子は甲が自分に大金を貸した事を知らない。この時自分さへ甲の妻子に事情を明さなかつたら、大金を返却しなくても済むのである。つまり大金を丸儲けした事になるから、かゝる場合に欲望の捕虜になつて、沈黙してしまふものが往々無いことがない。支拂はない物を支拂つたと言つてごまかしたり、役人が賄賂を受けたり、金錢の爲に主義を曲げて變節したりするのも皆類似の事件である。かゝる誘惑に陥る者は、收賄・變節・虚言を惡と知らないのではない。知りつゝ行ふのは自己の道心が自己の欲望に敗れたのである。

することが出来ない。

三 誘惑の手は非常に巧妙であつて、世間を餘りよく知らない女は誘惑されてゐても氣がつかない事が多い。又社交を求め男子が悉く誘惑しようとか、つてゐるのではなからうが、交を結んでゐる間に知らず識らずの間に一生をあやまる事が少くないのである。かゝる場合どこまでも正しい心を以て、前後左右をよく省察し、正邪善惡を誤つてはならぬ。

もし少しでも怪しいと見たら、断然交を断ち、自らも欲望の動くまゝに動き、感情の走るまゝに走るやうな愚を行つてはならぬ。

一時的の快樂は長くは續かぬ。歡樂は早く盡きて哀愁が長く残るものである。快樂は短く、悲痛は長い。長い悲痛を避けるものは、鏡のやうな正しい明るい心と劍のやうな強い勇氣と自尊心とである。若い者の中には往々にして自由を喜び、開放を尊び、男女の自由なる交際を結ぶ事を良い事のやうに信じてゐる者もあるが、これは惡ではないにしても程度問題である。相互に人格を尊重して私欲に流れない範圍に自制・克己の徳がなければ有害無益であらう。

父子・兄弟・親友・親族でないのに、特別に親愛の情を示すものは疑はしいものと見てよい。しかし時と場合によつて適當な判断を下すべきであつて、妄りに疑へない事は勿論である。故に正しい判断を下し得る常識を養つておくことが必要である。或令嬢と女中とが避暑地の海岸を夕方散歩してゐた。突然四五人の不良少年が現れて亂暴をしかけた。その時、一人の學生服の青年が出て來て不良少年を追拂つて令嬢を宿まで送つてくれた。一家は皆、青年の親切に感謝した。令嬢は親の許しにより交際したが遂に青年に貞操を破られた。最初の不良

る。

小西重直著(昭和女子修身訓卷四)

二 若い男女の交際

昔は「男女七歳にして席を同じうせず」といふ儒教の訓言が行はれ、とりわけ若い男女の交際は嚴禁されてゐたが、今日では、小學校に於ては既に男女の兒童が席を並べて學び、その他一般に若い男女の互に接觸する機會は、全くこれを避けることができぬやうになつたが、まだ西洋のやうに、中等教育及びそれ以上の學校に於ては、男女共學の制を許すまでにはならず、従つて成年の男女の交際もまだ西洋ほど自由ではない。しかし、これまでの經過を推して考へると、將來は若い男女の交際もおひ／＼盛に行はれるやうになるだらう。これについては、まづ雙方、とりわけ女子の自覺と自重の念との發達することが最も必要な準備である。

男女の交際の必要なわけは、第一には、おの／＼、相異なる特質を以て互によい感化を與へあふ點にある。だから、若い男女が互に交際するのには、まづ雙方にそのよい特質が十分養成されてゐなければならぬ。とりわけ女子に於ては、その特質を自覺して、ます／＼これを伸ばしてゆくことをその誇とするまでに、自重の念が養はれてゐなければならぬ。さうでないで、元來物に動かされ易い女子の軟かな心は男子の粗野亂暴な言動に對して抵抗することが出来ぬから、知らず識らずの間にその特質を失ふ恐がある。これはその兄弟がたゞ男の子ばかりである女子の言動が、とかく荒々しくなるのを見てもよくわかる。ところが、女子に女子としての修養が相當にできてゐると、どんなに無頓着な男子でも、その前では自然に言動をつゝいむから、男子

の言動から悪い影響を受けることはない。かうしてまた一方では、なるたけ男子の多くの長所を學ぶことができる。男女の交際は、若い女子にとつても少しも危険などがないばかりでなく、却つてそのために受ける利益が少くない。

これに反して、たゞ一時のおもしろ半分若い男女が交際すると、こんな場合には、時としては世人の恐れてゐるやうな危険が伴ふことを免れぬ。何の思慮もなく、若い男女がその相手を擇ばずにとともに遊び戯れると、互に野性のありのままをあらはして、禮儀も作法も忘れてしまふから、とりわけ女子は男子の粗野亂暴な言語をまねて、いつの間にか自分の女らしさを傷つけ、その上、世人からあらぬ疑までも受けるやうになる。

若い男女の交際は、他日適當な配偶を得るために必要だといふ人もあるが、これはたゞ男子も女子も互によく自重し、潔い考を以ておもむるに相手の人となりを見断することのできる場合に限る。交際する男女に前もつて相當な修養ができてゐないで、互にその短所を伴ふ悪い影響を與へあふと、その結果、一方は他方に悪化されてしまふから、それでは男子はよい女子を、女子はよい男子を得ようとする求婚の趣旨にかなはないやうになる。男女が互に尊敬しあふのは、男子は男子、女子は女子として各その特質を十分に具へてゐるからである。自分に悪化されたと思ふものに對しては、男子でも、女子でも、これに對して輕侮の念は起つても、尊敬の念は起らぬものである。尊敬の念が起らないと、まじめな結婚の成立はつはずはない。

また女子の特質は柔弱に過ぎて、世の風波に抵抗することができぬから、廣く世間に出て男子とも交際するがよいといふ説もある。この

説にも一理はあるが、しかし、女子の強きは、男子の表面にあらはれる言動をそのまま學んだからといつて得られるものではない。たとひ男女の交際によつて、女子が幾分か男子の勇壯活潑なところをまねることができるとしても、それはつまり借物に過ぎないから、永く女子の身を飾つて、その品位を高めるには足らぬ。女子の眞の強きは、深くその天性の中にひそんでゐる女子としての特質を、自分の反省の力で涵養し發揮することによつて得られるものである。言葉をかへていふと、かるくしく他の領分に立入らず、退いてちつと自分の本城を守ることによつて得られるものである。そして、かうして得られた強きによつてだけ、女子は男子に對立し、またよく世の風波にも抵抗することができるとのである。

以上のやうなわけで、若い男女の交際は、たい女子の自覺と自重の念とが十分に起つた後に於て、始めてよい結果の見られるものだから、これをみだりにしてはならぬ。西洋のやうに、男女の交際の自由なところでも、若い男女の交際はたゞ父母の監督の下に許されるといふのを社交上の原則と認めてゐる。 湯原元一著(女子修身訓卷四)

第十六課 海外發展(女子修身書第十七課)

要領

我が國人口劇増の現状は海外への發展を必要とすることを教へるのが本課の要領である。

注意

(一)我が國人口年々の増加は天然資源の缺乏と相待つて海外發展を焦

眉の急務とする。

(二)海外發展は武力の侵略によらず、平和の手段によつて人類の共存共榮を目標とせねばならぬ。

(三)内地にもまだ幾分移住開拓の餘地がある。

(四)海外發展は北米よりも滿洲・支那・南洋・南米等の方が有望である。

(五)海外發展は主として實業家の任務である。

設問

- 一 人口激増は何故に海外發展を必要とするか。
- 一 今後の海外發展は何を目標とすべきか。
- 一 内地には植民の餘地はないか。
- 一 海外發展は主として誰の任務であるか。

備考

一 海外發展

一 我が日本は今後一層大なる日本とならなければならぬ。現在よりも、更に一層進んだ日本となるため、積極的方針を採つて活動するには、國內に於ける百般の事業を進展させるのは勿論、更に海外への雄飛を圖らなければならぬ。女子もまた國民の半分として、この實現に與るべきは言ふまでもないことである。

二 これについて、我が國今後の女子は、先づ世界の大事に通じなければならぬ。世界に於ける日本の地位、世界列強の意圖と努力、それと我が國との交渉、各國の我が民族に對する觀念及び態度、從來の

我が移民の功過、此等の事に關する一斑の知識を有し、また我が國の人口の増加と資源との關係、その領土、植民地の現在及び將來の形勢をも知らなければならぬ。たゞ家庭に籠居して、一郷の地理の外は知らないやうな女子は、今後には不適當である。これからの女子は此等の知識見解を具へ、女子の特長によつて、どこまでも目的を達することを努めなければならぬ。

三 元來女子は適應性に富んで居るから、早く新しい境遇に應化する。男子は失敗などに由つて、從來の生活状態が破壊されると、新しい境遇に馴染むことは容易に出来ないが、女子はさうでない。變つた土地に移住しても、風俗言語などについては、男子よりも遙かに速く應化する。この特長が、變つた境遇の下に、男子を慰安したり、激勵したり、援助したりするのである。特に家庭をそこに替む時には、仕事も落着いて出来るから、移民、植民は、女子と共に在る方が、男子が單獨の場合よりも成功が著しい。アメリカの建國も植民から成つたので、その時代の女子の奮闘は目ざましいものであつた。今日でも由緒の古い米國の女子には、どことなく嚴肅な面持が残つて居るのは、即ち其の頃の名残であるといふ者もある。また數十年前、トランスヴァールが英領に歸して、此處に植民を迎へた時、數萬の英國婦人をも共に送ることが、新聞によつて要求された。海外への移住に女子が同行することの必要と利益とは、これによつても明かである。

四 この點に於てイギリス人は模範的である。英國では、親の遺産は主に長子が承けるので、次子以下は自分で運命を開拓しなければならぬ。その中には、海外に渡航して奮闘生活に入る者も少くない。これに反して、フランスは親がすべての子の爲に財産を準備し、女子の

第十七課 民族主義と人道主義

一 要領

民族主義と人道主義即ち國家主義と國際主義との調和を説くのが本課の要領である。

二 注意

- (一)我が民族主義では國家の生命を民族の生命に求め民族の繁榮と國家の興隆とを全然同一體と見る。
- (二)我が民族主義は國家興隆の本は父祖傳來の剛健な國民精神であると考へる。
- (三)國家興隆の本たる國民精神の作興は國民各自の人格内容を向上充實することに歸着する。
- (四)人類文化の進歩を來すべき國際精神の涵養も同じく國民各自の人格内容を向上充實するより外はない。
- (五)民族主義は次第に發達して國際主義となり人道を理想とする。
- (六)我が教育勸語の精神は人道主義と一致する。
- (七)民族主義に基づく國民文化は其の特色によつて人類文化を豊富にし人道主義の理想の實現を助ける。

三 設問

- 一 國家の生命は何によつて存続して行くか。
- 一 國家興隆の本は何か。
- 一 國民精神作興の方法は何か。

- 一 國際精神は國民精神と相容れるか。
- 一 我が國民道徳は人道の理想と相容れるか。
- 一 國民文化の特色は益々之を發揮すべきか將又其の必要なきか。

四 訓言

國家・國民・民族

- 國家の價値は畢竟國家を組織する人民の價値なり。 ミル
- 偉大なる國とは偉大なる人を産する國なり。 ヂスレリ
- 民情・風教は國家安危の本なり。 文選
- 一國家を形成するには一千年も尙足れりとせず。しかも一時間にてこれを塵土に委し得べし。 バイロン
- 國民の大きさの其の數によりて量るべからざることは、猶ほ人の大きさの長さによりて量るべからざるが如し。唯一の量は智と徳との分量なり。 ヴィクトル・ユーゴー
- 國家の爲に盡くすは本分の一半にして、人道に盡くすは他の一半なり。 ヴィクトル・ユーゴー
- 國家は忠死者の灰を以て建てらる。 佛誌
- 祖國の爲に死するは光榮にして愉快なり。 ホレーヌ
- 自分の國の煙は外國の火より明かるい。 羅旬俚諺
- その面目の爲に喜んで一切を賭せざる國民は談するに足らず。 シルレル
- 恰も個人が其の品性を守護せざる可からざるが如く、國民も亦其の國の品性を守護せざる可からず。而して立憲政體の下にありては、總べての階級は皆な多少政治的大權を行ふべき責任を分擔せり。故に其の國

民の品性は必然の勢として少数人よりも多數人の道徳的性質に依據するものなり。而して個人の品性を決定する所以の性質は即ち亦國民の品性を決定する所以のものなり。一國民の心が高尚、誠實、正直、方正、勇猛ならざる時は、必ず他國民の輕視する所となりて、世界に重きを爲さざるべし。品性を有たんには、敬虔にして自ら修省し己に克ち職分に忠實ならざる可からず。快樂ありて他あるを知らざる國民は最も惘然たるものなり。

○總て大國民は保守的なり。

カールライル

○一國の國民性はその國の選良によりて知るべからず。

スコット

○身は父母の遺體なり。父母の遺體を行ふて取て敬せざらんや。

禮記

○祖考と自家とは只だ其れ一條連綿の精神たり。謂ゆる自家の精神とは即ち祖考の精神是なり。

三宅尙齋(狼齋錄)

○自己の徳性は乃ち父母遺體の天真なり。是を以つて吾が性を養ふは親を養ふ所以なり。吾が性を尊ぶ所以なり。此れ則ち大孝の精髓にして膝下に在ると否とを論ぜず。

中江藤樹

○父母の本は之れを推せば始祖に至る。始祖の本は天地なり。天地の本は太虚なり。一祖を擧ぐれば父母、先祖、天地、太虚を包む。

中江藤樹

○代々の祖の御かげ忘るな。代々の親はおのが氏神おのが家の神。

本居宣長

○愛國の情は愛なく、己が血族を見るはいとほし。

オヴィド

○各國民は各自身の資性を有すると共に各自の國語を有す。

ヴルテール

○自力にて立ち他國の意志に左右せられざる國民は自由を享受しあり。

リヴィー

皇國・神國

明治天皇御製

天つ神定め賜ひし國なれば我が國ながら尊かりけり
人も我も道を守りて變らずば此の數島の國は動かじ
千早振神のかためし我が國を民と共に守らざらめや
千早振神の心にかなふべく始めてしがな葦原の國
千早振神の心を心に我が國民を治めてしがな
千早振神の教をうけつぎて人の心ぞ正しかりける
千早振神ぞ知るらむ民の爲世を安かれと祈る心は
我が知れる野にも山にも繁らせよ神ながらなる道草
廣くなり狭くなりつゝ神代より絶えせぬものは數島の道
神つ代の御代のおきてを違へじと思ふぞおのが願なりける
數島の大和島根の教草神代の種の残るなりけり
一筋をふみて思へば千早振神代の道も遠からぬかな
踏む事など難からむ早くより神の開きし數島の道
暇あらばふみ分けて見よ千早振神代ながらの數島の道
踏み分くる人なかりせば末終にわからずやならむ千代のふる道
國民は一つ心に守りけり遠つみ祖の神の教を
千早振神の御代より一筋の道をふむこそ嬉しかりけれ
千早振神の心にかなふらむ我が國民の盡す誠は
目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ

國民の一つごころに仕ふるもみおやの神のみ恵にして
なりはひはよしかはるとも國民の同じ心に世を守るらむ
○大日本は神國なり。太祖始て基をひらき日神長く統を傳へたまふ。我
國のみ此事あり。異朝にはその類なし。この故に神國と云ふなり。

北畠親房(神皇正統記)

○天津日嗣の高御座は天つ地のむたときはにかきはに動く世なきぞ。此
の道の靈しく奇しく、あだし國の萬の道にすぐれて正しき高き貴き微な
りける。そも此の道は、如何なる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからな
る道にもあらず、人の作れる道にもあらず。此の道はしも、可畏きや、
高御産巢日神の御靈によりて、神祖伊弉那岐大神伊弉那美大神の始めた
まひて天照大御神の受けたまひたまひ傳へ賜ふ道なり。故に是を
以て神の道とは申すぞかし。

本居宣長(直毘靈)

○古への大御代には下が下まで。たい、天皇の大御心を心としてひたぶる
に大命をかしこみやまひまつるひて、おほみうつくしみの御蔭にかく
るひておのおの祖神を齋き祭りつゝ、程程にあるべき限りのわざをし
て、穩ひしく樂しく世を渡らう外無かりしかば、今はた其の道といひて別
に教を受けて、行ふべきわざありなむや。

本居宣長(直毘靈)

○夫れ我皇國は大神宮の都にして上御意人より下萬民に至る迄、皆是の
神の御末にて神代より嫡々御相承の御國柄故異國よりも神國と崇め、動
きなき天の御柱、立貫ける大御神の御蔭によりてこそ、斯の如く、御繁
昌もなし給へる儀なるに遠津御祖の御國道をそれとも思召さず、捨置か
せられ候義は、御不幸にも相當るべき哉(中略) 神國の人誰しも先祖を
神に崇め度と思はぬ者は無之候。

賀茂規清(道反玉)

○天地の開け初めぬる神代より絶えぬ日繼の末ぞ久しき。藤原家平

○本朝は天照大神の御苗裔として神代より今日まで、其正統一代も遺候事
無之云々民やすく國平に萬代の規模立て上下の道明かなるは是れ聰明聖
知の天徳を奉ぜざるにあらずや。況んや勇武の道を以ていはば三韓を平げ
て本朝へ貢物をあげしめ、高麗をせめて其王城をおとし入れ、日本の府
を異朝に設けて武威を四海にかざす、上代より近代まで然り。本朝
の武勇は異朝までも恐れ候得共終に外國より本朝を攻取候事はさて置、
一ヶ所も彼處へ奪はるゝ事なし。されば武器馬具劍戟の類、兵法軍法、
戰略の品々、彼國の非所及。是れ武勇の四海にまされるにあらずや。
然れば智仁勇の三は聖人の三徳なり。此三徳もかけては聖人の道にあ
らず、今此三徳を以て本朝と異朝とを一々其しるしを立て校量せしむる
に、本朝ははるかに優れり。誠にまさしく中國といふべき所分明なり。
是れ更に私に云ふにあらず。天下の公論なり。

山鹿素行

○有宋の晦菴小學を述作して人生れて八歳より十四歳は追ふまで教ふる
に灑掃應對進退の節、親を愛し長を敬し友に親しむの倫を以てし、且つ
嘉言善行を以て終篇となす。其功偉なるかな。盛なるかな。然れども俗
殊に時變じ俗の士用ふる所尤も泥着して闔國に居て異域の俗を慕ひ、
我は禮義を學ぶに異風を用ひ、或は祭禮を爲すに異様を用ふ。皆是れ理
を究めざるの誤りなり。學は物に格り知を致さん爲にして異國の俗に
效はんが爲にあらざるなり。況んや、士たるの道、其俗殆んど異俗を用
ふるに足らんや。

山鹿素行(武家小學序)

○我等事以前より異朝の書物を好み、日夜勤候て近年新渡の書物は不存
候十ヶ年前迄異朝より渡り候書物大方不殘令一覽候、依之不覺異朝の事
を諸事宜しく存候。本朝は小國故異朝には何事も不及聖人も異朝にこそ
出來候へと存候。此段は我等許に不限、古今の學者皆左様に心得候て異

朝をしたひ學び候。近頃此存入甚誤なりと知候。信耳而不信目、葉近
而取遠候事不_レ及_レ是非、誠は學者の通病に候。詳に中朝事實に記入候得
共、大綱を爰に記置候。

山鹿義行(配所殘筆)

○抑々人の最も重しとする所は君臣の義なり。國の最も大となす所は華
夷の辨なり。今天下は如何なる時ぞや。君臣の義、講ぜざること六百餘
年近時に至つて華夷の辨を併せて又之を失ふ。然るに天下の人才且安然
として計を得たりとなす。神州の地に生まれて皇朝の恩を蒙りながら内
君臣の義を失ひ外、華夷の辨を遺れなば、學の學たる所以、人の人たる
所以夫れ安くありや。

吉田松陰(松下村塾記)

○世の人はよしあし事を言はゞいへ賤が誠は神ぞ知るらん。
○斯くすれば斯くなるものと知りながら已むに已まれぬ大和魂。
○身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留め置かまし大和魂。

吉田松陰

○立ちならぶ山こそなけれ秋津洲我が日の本の富士の高嶺に。

徳川光圀

○筑波根のこのもかにもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし。

讀人知らず

○踏み分けよ大和にはあらぬから鳥の跡を見るのみ人の道かは。

荷田東滿

○もろこしの人に見せばやみ吉野の吉野の山の山櫻花。

加茂眞滿

○さし出づる此の日の本の光より高麗唐土も春を知るらむ。

本居宣長

帝道・王道・仁政

今上天皇陛下御即位式勅語中の一節

皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家ト爲シ民ヲ視ルコト子ノ如シ
列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗ニ奉シ上下感
孚シ君民體ヲ一ニスレ我カ國體ノ精華ニシテ當ニ天地ト竝ヒ存スヘ
キ所ナリ

同上

朕内ハ則チ教化ヲ醇厚ニシ愈民心ノ和會ヲ致シ益國運ノ隆昌ヲ進メム
コトヲ念ヒ外ハ則チ國交ヲ親善ニシ永ク世界ノ平和ヲ保チ普ク人類ノ
福祉ヲ益サムコトヲ冀フ

明治天皇御製

照るにつけ曇るにつけて思ふかな我が國民の上はいかにと
千早振神ぞ知るらむ民の爲世を安かれと思ふ心は
國民の上安かれと思ふのみ我が世にたえぬ思なりけり

天地の神にぞ祈る民の爲雨風時に順ひぬべく
我が身世に立つかひありて千萬の民の心を安めてしがな
賤がすむわらやのさまを見てぞ思ふ雨風あらし時はいかにと

民草の上に心をそぐかな雨静なる夜半の寢覺に
千萬の民の心を治むるもいつくしみこそ基なりけれ
治め知る國のはてまで知らせばや民安かれと思ふ心を
進む世を見るにつけても思ふかな我が國民の上はいかにと

明治天皇維新の御宸翰中の一節
今般朝政一新ノ時ニ膺リ天下億兆一人モ其處ヲ得サル時ハ皆朕カ罪ナ
レハ今日ノ事朕自ラ身骨ヲ勞シ心志ヲ苦シメ艱難ノ先ニ立チ古列祖ノ
盡サセ給ヒシ蹤ヲ履ミ治蹟ヲ努メテコソ始テ天職ヲ奉シテ億兆ノ君タ